てゐた。

岩井家の子供たちが、父の入獄について、兄や姉に、いろいろ問ひ質さずには置かない、知識慾を持つてゐるやうに、その別莊番、長田の子供たちも生長したいといふ本能的な食慾を持つてゐた。

が、岩井家の場合でも、別莊番の場合でも、親たちは、子供に確實な回答も、解決も與へ得なかつた。

四

昨夜は、奥樣はお歸りにならなかつた。

いつ、お歸りになるか分らないのではる子は一晩中女中部屋で起きてゐた。

妹たちを話相手にほしかつたのであつたが、妹たちは、朝が早かつた。

幼い弟や妹は、早くから寢てしまつた。

はる子は、十二時ごろ、勝手口から出た。

自分たちの住んでる家は、錢苔のやうに、大地にしがみついてゐた。

別莊は、數萬噸の旅客船のやうに、月の光に浮いてゐた。冷え冷した風が、彼女を慰めやうとでもするやうに、穩かに撫でゝくれた。

はる子は、裏口から自分たちの家へ入つた。母は、裏戸がガタピシ遠慮勝に鳴るので、そちらへ眼をやつた。

はる子の派出な姿が浮いた。

はる子が、枕元に坐るのを待つて、母は手を延ばした。

はる子は、耳掻きの柄のやうに痩せ細つた母の手を握つた。

四人の妹弟は、空腹を抱へて眠つてゐた。

「はる子、妹や弟たちを賴むよ。ね、もう私は生きてゐたつて邪魔になるばかりだから、早くお迎への來るのを待つてるんだよ。

まだ子供たちは小さいんだからね。そして皆で大きくなつて、助け合つて樂しく暮らしてくれるのが、私の望みなんだよ。だからね、奥樣大切に、よく仕へておくれよ。奥樣のお氣にさへ入れば、きつと面倒を見て下さるに違ひないからね。御親切な方だからね」

さとは、これだけ口を利くと、もうゼイ〳〵息を切らしてゐた。

「いゝわ、母さん、心配することはないわ。私きつと、妹や弟を立派に育て上げて見せる、私にはね、母さん。もうちやんと目論見が出來てるのよ。それに、母さんだつて、お藥を飲まなけや駄目だわ。母さんがお藥を飲んだり、妹たちが學校に行つたり、チヤーンと、私が立派にして見せるわ。私にはねもう目論見があるのよ。一生懸命になれば、何だつて出來ないことはないわ。ね。だから母さん、心配しないでね。

そして早く病氣をなほさなけやいやよ、でなきや私張合が無いんだもの」

はる子は、かういつて、母の手をチョツと力を入れて握つた。

子供たちは、亂雜に投げ捨てられた薪かなんぞのやうに、各々、勝手な方に頭を向けて眠つてゐた。

はる子は、それを見ると、自分の「目論見」にも拘はらず、涙が目から溢れさうになつて來た。

「ありがたう。わたしも、お前がしつかりして呉るので、どんなに心強いか知れないんだよ。くれ〳〵も賴むよ。ね。」

さとは、眼を閉ぢた。

はる子は、母の顏に死の影を見逃すことが出來なかつた。

父の死んだ時も、こんな表情があつた。

四十年の生涯を、苦しむため、子供を育てるため、飢るため、死ぬために慌しく送つて來た、父にも、母にも死の苦しみの間に、冷たい、然し安易な休みの表情があつた。はつきりと、自分を見詰めてゐる時、父にも母にも休息はなかつた。父母が意識を持つてゐる間には、安心はなかつた。樂しみもなかつた。いつも險しい氣持、險しい顏付が彫り刻まれてあつた。

けれども、死の刹那には、父は、安樂な相好に變つた。

「あゝ、これですつかり仕事が片附いた」

とでもいふやうに、最後の一息を樂に吐いた。

はる子は、たつた一人になると、父の臨終の息を眞似て見ることがある。

——あんなに、樂に息をついて死ねるんだつたら、死ぬことはどんなに樂しみなことだらう。生きてゐたつて、何の樂しみもありやしない。父さんも母さんも「死んだ後は、妹や弟を育ててくれ」と、口を揃へて賴んで行かれる。けれど、生きてゐても、いくらかの樂しみがなければ、生きてる甲斐がないやうに思はれるけれど。——

母は、はる子に手を握られたまゝ、眠つてゐた。死と脊中合せになつて、眠つてゐた。

はる子は、靜に母の手を布團の中に入れて立ち上つた。

そして女中部屋に歸つて、夜通し、奥樣のお歸りを、母や妹たちのことなどで、胸を一杯にしながら待つたのであつた。

けれども、奥樣は、昨夜はお歸りにならなかつた。

折角立てた風呂も、奥樣のお歸りにならなかつたゝめに、妹や弟たちに内密で貰つてやることも出來なかつた。

硝子窓から朝の光が射込んだ。

溫室のやうに、室は暖かゝつた。海は凪いでゐたし、植込の木々は優しく戀を囁いた。

はる子は眠り不足のために、部屋の中でくの字になつて、居眠つてゐた。

慾も得もなく、歩きながら眠る兵士のやうに、はる子の眠りはだん〳〵深くなつた。

岩井薫三は、未決監で非常な苦痛を舐めた。彼は、明るい、甘い、春の光が、彼とは關係なしで、窓の外に一杯贅澤にバラ撒かれてゐるのを見てゐた。

鐵棒の嵌つた窓から、梅の枝が一本五つの半分開いた蕾を見せつけた。

どこを走るとも知れない、自動車の威勢のいゝ警笛が聞えた。

子供たちが、鳩のやうに胸を張つて歌つてゐるのであらう、卒業唱歌の合唱が、時々、夢の國からでも流れて來るやうに、窓から忍び込んだ。

彼は、昨日の面會以後、坩堝の中の液體のやうに、胸を煮えたぎらせねばならなかつた。

今まで彼にとつて、第一義的なものはその名勢であり、地位であり、富であつた。が、今、第一義的なものは子供であり、妻であり、平凡な彼自身の、私的生活になつてしまつた。

——何だつて俺は今まで、詰らないことで骨を折つたり、夢中になつたりしてゐたんだらう。自分から求めて、心配したり、驅けずり廻つたり、必要もないのに、欺したり、欺されたりしてゐたんだ。

子供たちが、どんな面白い、しぐさをしたり、どんなに面白い片言をいつて、大きくなつて行くか、なんてことに、どうして今まで俺は興味を持てなかつたんだらう。

妻が、どうして、俺の愛を獨占しようかとして、いろんな手段で、俺を慰めたり、甘へたりしたのに、何だつて俺は無關心だつたんだらう。

人生五十年だといふのに、俺はもう半月もこんな處へ入れられてゐる。よしんば、たつた今、俺が社會へ出られるにした處で、五十年の中から、半月だけ返し引かれたことを、どうして俺は取り返すといふのだ。

この短い、この貴重な、俺の生命、俺の自由を、誰が、たとひ半月の間でも、俺から奪つたんだ。俺は、國家の立法部の一員ではなかつたか！、投り込むのは俺で、投り込まれるのは俺ではなかつたはずだ。

然も、泥棒や、掏摸や、强姦や、社會主義者などと、同じ設備の牢獄に入れる！

此烙印、此大きな傷を、どうして俺は消すことが出來る。それはよし、消し得るにしても、此俺のやつたことが犯罪にならなかつたら、どうなるんだ！

誰かの、チヨツとした考へ違ひか、又は惡戯で、掩の生命から、半月か一ケ月かを抹殺する！

そんなことはあり得ることだらうか？

その現實を俺は經驗してるぢやないか！

此便所はどうだ。此食器はどうだ。此扉はどうだ。運動の時間の短いことはどうだ。代議士に向つて、あの看守達の態度はどうだ。

俺は間違つてゐる。

今度俺は出たら、もう家庭から一歩も足を踏み出すまい。妻を愛し、子供を愛することだけでも、俺は忙しすぎる位であることを、俺は知らなかつたんだ。

何といふ、間違つた俺だつたんだらう！

だが、今、子供たちや、妻はどうしてゐるだらう。

彼は、頭を抱へて、薄暗い、眼の前三尺に切り立つてゐる、監房の壁を射拔くやうな眼付で睨んだ。

看守は、コソ泥や、社會主義者とは何だかんだと話をしたが、彼の處では決して袴を脱がなかつた。

彼は、餘りに多過ぎる考へる時間のために、自分自身で拷問にかゝつた。

考へても、考へても、精密に、あらゆる條件を盡して、考へ拔き、想像し盡した事柄も、たゞ、考へ、想像するだけであつて、解決の鍵になる事實が「塀の外にある」ことは、彼を物狂はしく苛んだ。

「子供が一人位死んだかも知れない」

「妻が姦通したかも知れない」

「家が燒けたかも知れない」

そんなことがあるべきはずがないことを、彼は、條理を盡して信じようとした。そして條理を盡せば盡すほど、掘り下げれば下げるほど「事實が塀の外にあつた。」

彼は塀を呪つた。

頑丈な扉を呪つた。

風に煽られる凧のやうだつた自分の過去を呪つた。

一切のものを呪つた。

呪ひの後には、捨てられた子供のやうな、淋しさが心を食つた。

誇りも、意地も、張りも、何もかも、地位や名譽と一緒にかなぐり捨てゝ、それでも許して貰へないだらうか、と思つた。

彼は大聲で怒鳴りたかつた。次には大聲で泣きたかつた。が、沈默と、冷酷と、無感情と、規則と金庫のやうな建物とが、それを押へつけた。

「あゝ、狂ふ、狂ふ、狂ふ俺は氣が狂ひさうだ」

彼は、何千人かの中の一人の未決囚であつた。

五

はる子が、くの字型になつて眠り、岩井代議士が、體中を苦しみの坩堝にし、別莊番の病人は死に瀕し、子供たちは飢

ゐてをり、春の光は、地球の半面に遍く光りを投げてゐる時、午後一時ごろであつた。

岩井氏夫人は、深い深い、死にも近い歡びの眠りから眼を見開いた。

アブサンの醉は、夫人から一切の記憶を奪つてしまつてゐた。

夫人は生きてゐた。殊に生き生きとして、若く、生命に燃えて活きてゐたけれどもアブサンの魔醉は夫人から一切の習慣の衣類を剝いで、本能的な獸だけを殘した。

「一切忘れることはいい！

生活の出來ることの上に、一切を忘れることはいい。」

ものうげに、夫人はかう思つた。

「私は、昨夜のことなんか、些も知りやしないんだ。だけど、知つてたらどうしたつていふんだらう。今まで、二十年の間、私は岩井夫人といふ名前でだけ生きてゐて、私といふものは生れて來ないものも同樣ぢやなかつたか。私が今、私になつてゐたらどうしたつていふんだらう。私だつて、男の持つ自由だけ位は、持つて悪いだらうか。構やしないわ、もう、私が今、こんなことを考へるのは、手遲れだわ、けど手遲れだつて構やしないわ、トルストイは八十幾つにもなつて、家を捨てたんだもの。」

夫人は、やうやく頭を上げた。

運轉手は幸福さうに、鼾をかいて、未だ深い深い、歡びの眠りの中に遊んでゐた。

夫人は、そうつと起き上つた。

未だ血管の中を、絲色の酒が流れてゐるやうに、いくらか頭が重かつた。

夫人は、テーブルの上のレターペーパーに、次のやうに書いた。

——私は先に歸りますよ。勘定は拂つて行きます。それからね。私が呼ぶ時以外に私に呼びかけたり、私の邸へ來たりしてはいけません。

私に、ほんとに決心がつくまではお互ひに路傍の人ですよ。

私があなたを、路傍の人だと思はれないやうになる時を、待つていらつしやいね。

ぢや、さようなら——

夫人は、それを封筒に入れた。

そして机の上に、それを置いた。

夫人は、化粧室に入つた。

鏡に映つた顏を見て、彼女は少からず慌てた。

——いつの間に、こんなに年をとつたのだらう。いつの間に、こんなに若若しさを失つたのだらう。この、眼尻の皮膚！、私は、もう餘り大きな口は叩けないのだわ。私にお金や地位がなかつたら、私はどんなに惨めだか分りやしないわ。矢つ

張り私は、祕密にしか戀が出來ないのだ。

お婆さん！、おゝ、いやだ。

私はお婆さんと紙一枚だけなのよ。あゝいやだ。——

夫人は、トルコ風呂へ、湯を入れた。

ボーイにだつて、顏を、生地のまゝで見られたくなかつたのだ。

夫人が、トルコ風呂へ快よく首まで浸して、甘苦い追想や、苦々しい年齡のことなど、考へてゐるころ、若い燕は眼を覺ました。

彼は夫人がゐないのに驚いた。

自動車は、ガレージに電話をかけて取りに寄越させたから、その點では彼は苦しまなかつた。

が、もしかすると、俺はペテンを食つたんぢやないかな。自動車賃は勿論宿料まで拂はされるんぢやないかな？事によると飛んでもない高いものについたかも知れねえぞ！」

彼は、ベッドから、鞠のやうに跳ね上つた。

机の上に手紙があつた。

「畜生！、さては一杯やられたな。」

彼は、咽喉に詰つた餅でも飲み込む時のやうに、急ぐことに夢中になりながら、手紙を讀んだ。

「やられた！」

彼は、その手紙に火をつけられた揮發油のやうに、燃え上つた。

ベルを押した。

ボーイが入つて來た。

「連れの婦人はもう歸つただらう？」

「いゝえ、まだお歸りにはなりません」

「だつてゐないぢやないか」

「お化粧室では御座いませんか、御用はそれだけで御座いますか？」

「何だ！、化粧室だ！　そんな馬鹿なことがあるものか！」

燕は、身を飜して、化粧室のドアーを開けた。

夫人は身體を洗つてゐた。

「いゝよ。もう行つてもいゝよ。用事はそれだけなんだ。」

ボーイは、鼻の頭に、歩くのに邪魔になるほどの、大きな嘲笑を、犬の尻尾見たいに振り廻はしながら出て行つた。

若い燕は、化粧室に飛び込んだ。

「どうしたのですか？、奥樣驚くぢやありませんか」

「いゝことよ。あんたも顏を洗つたらどう」

彼は、ベッドの上へ、寢間着を脫ぎながら考へた。

——大丈夫だ。逃げられちや堪らないが、捕まへりや大丈夫だ。一體、何だ？、あの女は。何を考へてゐるんだい。狐を馬に載せたやうな話でさあ。まあいゝ。損にさへならなきやあ、悪くはないさ。——

夫人も化粧がすみ、運轉手も入浴後は、身氣爽快を覺えた。

二人は宿醉の救け船に、各々一杯のブドー酒を飲み、腹を上等な料理で拵へて、ホテルの入口に立つた。

ボーイの呼んであつた。高級タクシーが、ボーイの合圖によつて、玄關に横附になつた。

夫人は花模樣の、フエルト草履を自動車の中へ、尻と一緒に持ち込んだ。

若い燕も乘つた。

彼は、昨日運轉手として、ドライブした道を、今日は客としてドライブする、その皮肉について擽られてゐた。

「私の家へ行つたら、あんたは、私の弟だといふ氣持でゐなけれや駄目ですよ。女中が一人つ切りしかゐないんだけどね。でも、覺られない方がいゝでせう」

夫人の口が、彼の耳で囁いた。

「よござんすとも。のみこんでゐますよ。」

海岸の松並木が、自動車の高速力の煽りを食つて後ろへ仆れるやうに飛び除いた。

春の、甘い潮風が、僅かに開けた窓から、車室をかき廻して、唆るやうな芳香を撒き散らした。

勿論、香水や化粧水の甘い匂ひだけではなく、甘い、ちよつと澁味がかつたキスも、幾度か繰かへされた。

六

はる子が、くの字型に甘い眠りに陷つてゐる時、門に當つて、威勢よく警笛が響いた。

はる子はびつくりして眼を覺ました。

自動車が、快よく砂利を嚙んで玄關へついた。

夫人に續いて、見馴れない青年が降りた。

「お歸り遊ばせ」

はる子は、敷台へ這ふやうに、頭を下げた。

「今日は弟を連れて來たからね、電話でうんと御馳走を取つて上げるんだよ、日本料理の方がいゝでせう、ね」

夫人は終ひの一句を、眼まぜと共に燕に與へた。

「日本料理もいゝけれど、いゝかな、義兄さんが苦しんでるのに、御馳走になんかなつて」

「仕方ないぢやないの、食へるものは食べなけや。あんたも、義兄さん思ひになつたのね。」

二人は、夫人の居間に入らないで、一番奥まつた、書院へと行つた。

はる子は附いて行つて、座布團を出したり、お茶を出したり、するのだらうか、しないのだらうかと、躊躇つてゐた。

その中に、二人の姿は長い廊下の端から、書院の中へ消え

た。

ベルが鳴つた。

はる子は驅けるやうにして書院へ行つた。

「あのね。夕方までに、こゝに書いてあるお料理を持つて來るやうに、電話をかけるんだよ。それ」

紙に書いた獻立を夫人は、そこに置いた。

「畏まりました。」

「あ、それから、コーヒーを熟く入れて持つといで」

「畏まりました」

はる子は引き下つた。

が、はる子は廊下を歩きながら、足が全て宙に浮いてゐるやうに感じた。

コーヒーとは、どんなものであるか?

コーヒーは、如何にして入れるか?

必要な、主要食糧でさへも、決して十分には攝らないで育つて來た彼女であつた。都會の郊外に住みながら、コーヒーの入れ方も彼女は知らなかつた。

角砂糖の中に入つた黑い粉が、コーヒーといふものであらうと彼女は汙みどろに苦心した末考へついた。

そして、戸棚から、食器棚から、流しまでも探したが、黑い粉の入つた角砂糖はなかつた、あつたのは、心から白いほんものゝ角砂糖のみであつた。

ベルが鳴つた。

はる子の耳が鳴るのと同じやうに、長く長く鳴り續いた。

はる子は驅けて行つた。そして、恭しく平伏してる頭の上に、夫人の聲が、斬るやうに鋭く響いた。

「早く持つて來るんだよ。コーヒーを」

「はい。あのう」

はる子は、コーヒーといふものも、コーヒーを入れる方法も、知らないといひたかつたのだが、中々口まで出なかつた。

「どうしたの、はるや」

「はい。あの、コーヒーを出すことを知りませんので」

泣き出しさうに恥かしいのを忍んではる子はいつた。

「まあ。コーヒーも出せないの。それでお嫁に行く積り?、ホホホ、、、」

夫人は寛大さうに笑つた。

けれども。はるは頭を上げ得なかつた。

涙が、止め度もなく流れた。

「もういいから、あつちへ行つといで、用事があれば呼ぶから。」

はる子は、「畏まりました」が、どうしても口へ出なかつた。

默つて、涙を見られないやうに、俯向いたまゝ後ろへさがつて障子を締めた。

はる子は、そのまゝ家へ歸つた。

母がひどく悪いので、妹たちもみな工場を休んで、今日は家にゐた。

涙をかくしたはる子は、母の枕下に行ってバツタリと坐つた。そして、あまりひどく坐つたのに自分で驚いた。

母の痩せ衰へた手を握ると、はる子は押へてゐた涙が、再び堰を切つて溢れ出た。

「母さん。どうなの？、少しはいゝの」

はる子は、母がます〳〵悪いのを知つてゐた。

五人の子供たちの母、さとは、もう口も利けなくなつてゐた。しづかに眼を見開いて、微かな息をつくのみであつた。

「しいちやん。あの、お前、別莊の方へちよつと行つておくれ。ね、わたし奥様のお使ひで買物に行かなきやならないんだから。ね、さあすぐに行つて頂戴な。私誓らくすると歸つて來るからね、いゝこと」

「ぢや、早く歸つてね。母さんが心配だから。よし子だけぢや、どうもならないんですもの」

「ぢや、頼んでよ。直ぐ歸つて來ますからね」

はる子は母のすつかり血の氣の失せた額へ、心を籠めて接吻した。そして靜かに立ち上つた。

「ぢや、しいちやん頼んでよ」

かうしてはる子は、出て行つた。

十五になつた許りの、しず子は、別莊の勝手へ入つて、そこに長いこと放心したやうに突つ立つてゐた。

直ぐ歸るといつた姉は、一時間經つても二時間經つても歸らなかつた。

やがて、海の上に赤い雲の陰が映るやうになつた。

「どうも、毎度ありがたう存じます」

料理屋から、出前が屆いた。

けれども、しず子は、料理をそこへ並べられたまゝ、動かうとはしなかつた。

母はひどく悪かつた。或は、もう死んでゐるかも知れない。姉は歸つて來ない。

しず子は、板の間につゝ伏して、すすり泣くだけであつた。

ベルが、叩きつけるやうに鳴つた。

けれども、しず子は起きなかつた。涙が板の間に流れるほど溜つた。

ベルは、二度、三度と鳴り響いた。

一町も離れてる隣の女中までも、驚かさうとするほど、甲高く鳴りわたつた。

やがて、夫人は、眞つ青に憤りながら、勝手へ出て來た。

「どうしたんだえ！、あれほど呼んでゐるのに！、それにもうお料理はちやんと來てるぢやないか、なんて」

だが夫人は、しず子の泣き腫らした顔が上げられた時、や

うやく氣がついた。

「はるやはどうしたの。お前は妹ぢやないの？」

「姉さんは、奥さんのお使ひで、ちよつと出かけて來る、といつて行きましたの」

「私の使ひ？、私、はるやに使ひなんぞ吩咐やしないよ。」

「えーお吩咐にならなかつたのですか、だつて姉さんは、さういひましたよ。」

「何もいひ附けはしないよ。ほんとに仕様のない子だね。あの子は、まあ、仕方がない。それを運んでおくれ。」

「はい。」

しず子は唇を固く嚙んだ。

さうして、料理を運んでしまふと、直ぐに家へ歸つた。

母はもう、息を引き取つてゐるやうに見えた。たゞ時々、ハーツ、ハーツと、淋しい息を吐いた。

その夜は、殆ど食べるものは無かつた。

たゞ米だけが、二升ばかりあつた。

しず子は、いつになく、二升炊きの釜に一杯「御飯」を炊いた。

妹や弟たちは、お粥でないので、鹽だけがお副菜であつたけれど非常に喜んだ。

「もつと食べたいなあ」と、光夫が姉の顔を見ながら、氣がねしいしいいつた。

「今夜はね。どつさりあるから、お腹一杯食べてもいゝのよ。」

この氣前のいゝ、姉の言葉に、十二になる、よし子も、六つになつた光夫も、三つのまさ子まで、元氣づけられて、「喉まで」食つた。

腹が張ると、妹や弟たちは眠たかつた。

しず子は、全て、一家の主婦のやうに、世話をして、寢させてやつた。

子供たちが寢てしまふと、しず子はよし子が學校へ通つてゐる時分の、使ひ殘しのノートと、鉛筆とを出して來た。

しず子は、鉛筆を舐め舐め、ノートの切れつ端に何か書いた。

そして、それを封筒に入れた。

それがすむと、しず子は母の枕元へ行つて、母の額に押しつけた。母の落ち凹んだ頰へ自分の頰をつけた。

母はもう生きてゐないやうだつた。冷たくなりかけてゐた。

しず子は、袂から紙に包んだ藥を出して、湯呑で一息に飲み乾した。

七

はる子は、しづ子に留守を頼んで、海にでも飛び込みたい衝動を、齒を食ひ縛つて押へながら大阪へ出た。

はる子は、最初目に入つた口入屋へ入るといきなり「前借

の出來る勤め口」を頼んだ。

「急ぐの、姐さん」

と口入屋の番頭がいつたが、

「えゝ、明日中に要るんですの」

そこで、はる子は、ある料理屋へ連れて行かれた。

料理屋へつくと直ぐ、はる子は手紙を書いて、ポストに放り込んだ。

岩井氏は、餘り長い睡眠時間を、眠り切るわけに行かなかつた。で、もう、五時間も前から眼を覺ましてゐた。そして、高い窓に、水桶を踏臺にして摑まりながら、娑婆に憧れてゐた。

夫人は、まだ深い眠りに、若い燕と共にあつた。

はる子は、早く金を借りて送らねばならないので、昨夜遲かつたにも拘はらず、もう起きて拭掃除をしてゐた。

櫻の花は、今にも一度に開かうと、勢ひ込んでゐた。

甘い、快よく冷えた風が海を渡つて吹いて來た。

郵便配達夫は、第一便を持つて、長田しずを訪ねた。

日は高く上つてゐるのに別莊番の家の戸は未だどこも開いてゐなかつた。

けれども、子供たちが泣き叫んでゐた。

それも一人や二人の子供ではなかつた。十人も一度に泣いてゐるやうだつた。

「長田さん郵便」

配達夫は、力一杯怒鳴つたけれども戸は開かれなかつた。

彼は表戸を開けた。錠は下りてゐなかつた。戸が開くと、子供たちの泣き聲は、ラツパに耳をつけたやうに、彼の耳を衝いた。

郵便配達は、疊一枚半先の、次の間に、慘酷な畫を見た。

警官や、醫者が來た。

六疊の間には、木の葉のやうな布團の間に、マツチの棒のやうに痩せた、四十格好の母親らしいのが、死んでゐた。

十四か五位の、肩揚げをした娘が、そのために母を殺してもしたやうに、母親の首に抱きついて死んでゐた。

その周圍に、未だ自殺の方法さへ知らない、十二になる娘と六つになる男の子と、三つになつたばかりの、女の兒とが、死ぬまで泣かうとでも決心したやうに、命限り泣いてゐた。

死體の側には遺書があつた。

母さんは長らく、心臟病にかゝつてゐましたけれど、とう〳〵、今死んでしまひました。私は、母さんのお伴をしてまゐります。

しずより

姉上様

次ぎに、今、配達されたばかりの手紙があつた。

私はね、決して決して、母様の看護や、女中勤めがいやで、家出したのではなくつてよ。今は、恥かしいながら、港區市岡町、六七八ノ一、私十二號の、ある料理屋へ奉公してをります。私どものヤセ腕では、とても、お母さまに藥を上げることも出來ません。覺悟を決めて酌婦になりました。明日、取り敢ず、五十圓だけ前借をして送ります。すぐにお醫者を呼んで上げて下さい。これからは、藥代をかせぎます。安心して看護して上げて下さい。

はる子より

しず子様

櫻の花は咲いた。

寒かつたり、暖かゝつたりした。

大地の呻くやうな響きが、全大阪の民衆の肺腑をついてその空を蔽ふた。

殘された三人の子供たちは、死ぬまで泣き續けるであらう。

浚渫船

私は行李を一つ擔いでゐた。

その行李の中には。死んだ人間の臓腑のやうに、「もう役に立たない」ものが、詰つてゐた。

ゴム長靴の脛だけの部分、アラビアンナイトの粟粒のやうな活字で埋まつた、表紙と本文の半分以上取れた英譯本。坊主の除れたフランスのセーラーの被る毛絲帽子。印度の何とか稱する貴族で、デツキパツセンジヤーとして、アメリカに哲學を研究に行くと云ふ、青年に貰つた、ゴンドラの形と金色を持つた、私の足に合はない靴。刃のない安全剃刀。ブリキのやうに固くなつたオーバオールが、三着。

「畜生！　どこへ俺は行かうつてんだ」

樫の盆見たいな顔を持つた。セコンドメイトは、私と並んで、少し後れようと試みながら歩いてゐた。

「ヘツ、俺より一足だつて先にや行かねえや。後ろ頭か、首筋に寒氣でもするんかい」

私は又、實際、セコントメイトが、私の眼の前に、眼の横ではいけない、眼の前に、奴のローラー見たいな首筋を見せたら、私の擔いでゐた行李で、その上に載つかつてゐる、だらしのないマツト見たいな、「どあたま」を、地面まで叩きつけてやらう！　と考へてゐたのだ。

「で、お前はどこまでも海事局で頑張らうと云ふ積りかい？」

と、セコンドメイトは、私に訊いた。

「箆棒奴。愚圖々々泣言を云ふない。俺にや覺悟が出來てるんだ。手前の方から喧嘩を吹つかけたんぢやねえか」

私は、實は歩くのが堪へられない苦しみであつた。私の左の足は、踝の處で、釘の抜けた蝶番見たいになつてゐたのだ。

「お前は、そんな事を云ふから治療費だつて貰へないんだぞ。それに俺に食つてかかつたつて、仕方がないぢやないか、な、ちやんと嘆願さへすれば、船長だつて涙金位寄越さないものでもないんだ。それを、お前が無茶云ふから、船長だつて憤るんだ。」

セコンドメイトは、栗のきんとん見たいな調子で云つた。

そのきんとんには、サツカリンが多分に入つてゐることを私は知つてゐた。その上、猫入らずまで混ぜてあつたのだが

兎に角私は、滅茶苦茶に甘いものに飢ゑてゐた。だものだから、ついうつかり、奴さんの云ふ事を飲み込まうとした。

涎でも垂らすやうに、私の眼は涙を催しかけた。

「馬鹿野郎！」

私は、力一杯怒鳴つた。セコンドメイトの猫入らずを防ぐと同時に、私の欺され易いセンチメンタリズムを怒鳴りつけた。

倉庫は、街路に沿うて、並んで甲羅を乾してゐた。未だ、人通りは餘り無かつた。新聞や牛乳の配達や、船員の朝歸りが、時々、私たちと行き違つた。

何かの、パンだとか、魚の切身だとか、巴燒だとかの包み紙の、古新聞が、風に捲かれて、人氣の薄い街を駈け拔けた。

雨が來さうであつた。

私の胸の中では、毒蛇が鎌首を投げた。一歩々々の足の痛みと、「今日からの生活の惱み」が、毒蛇をつツついたのだ。

「おい、今んになつて、口先で誤魔化さう、つたつて駄目だよ。剝製の獸ぢやあるめえし、傷口に、たゞの綿だけ押し込んどいて、それで傷が癒りや、醫者なんぞ食ひ上げだ！　いいか、覺えてろ！　萬壽丸は室濱の航海だ。月に三回はいやでも濱に入つて來らあ。海事局だつて、俺の言ひ分なんか聞かねえ事あ、手前や船長が御託を並べるまでも無えこつちで知つてらあ。愈々どん詰りまで行きやあ、俺だつて蟲けらた違ふんだからな。さうなりや裸と裸だ。五分と五分だ。松葉杖ついたつて、折つ衝つて見せるからな、」

松葉杖！　私はその時だつてほんたうは、松葉杖を突いてでなければ、歩けないほどに足が痛く、傷の内部は化膿してゐたのだ。

私は、その役にも立たない、腐つた古行李をもう擔いで歩くのが、迚も重くて、足に對して堪へられない拷問になつて來た。

道は、上げ潮の運河の上の橋にかゝつてゐた。私は橋の上に、行李を下してその上に腰をかけた。

運河には浚渫船が腰を据ゑてゐた。浚渫船のデツキには、石油罐の七輪から石炭の煙が、いきなり風に吹き飛ばされて下の方の穴からペロペロ、赤い焰が舌なめずりをして、飯の炊かれるのを待つてゐた。

團扇のやうな胴船が、浚渫船の横つ腹へ、眠りこけてゐた。

私は兩手で顎をつゝかつて、運河の水を眺めてゐた。木の切れつ端や、古俵などが潮に乘つて海から川の方へ逆流して行つた。

セコンドメイトは、私と並んで、私が何を眺めてゐるか檢査でもするやうに、私の視線を追つかけてゐた。

私は左の股に手をやつて、傷から來た淋巴線の腫れをそう

つと撫てた。まるで横痃でゝもあるかのやうに、そいつは痛かつた。

――横痃かも知れねえ。弱り目に祟り目だ。悪い時や何もかも悪いんだ。どうなつたつて構やしない。――

「その代りなあ、淋しい死に方はしやしないからな。」

私は、ほつれた行李の柳を引き千切つて、運河へ放り込みながら、さう云つた。

「おい！　そんな自棄を云ふもんぢやないよ。それよりも、おとなしく「合意雇止め」にしてやるから、ボーレンで一ケ月も休んで、傷を癒してから後の事は、又俺でも世話をしてやるからな。お前見たいな風に出ちや損だよ。長いものには巻かれろつてことがあるだらう。な、お前がいくら頑張つたつて、船長も云つたやうに、一億圓の船會社にや、勝てつこないんだから。」

セコンドメイトは、デツキの上とでは、レコードの兩面見たいに、あべこべの事を云ひ始めた。詰らない事を云つて、自分が癇癪玉の目標になつては、浮ばれないと思ひついたのだ。

「セキメイツ。長いものが、長いものゝ癖をして、巻かねえんだよ。巻かれた奴あ。ギュツと巻き締められて、息の根を止められちまはあな。ボーイ長（水夫見習）を見な奴あ泣寢入りと云ひたいんだが、泣寢入り處ぢやねえや、泣き死にに死んぢやつたぢやねえか。ヘツ、毛も生えないやうな、雛つ子ぢやあるめえし、未だ、おいら泣き死にはしねえよ。淋しい死に方なんざしたくねえや。」

「フン。強い事あ、もつと早くか、もつと遲く言つたらどうだい。ま、足でも癒つてからな。第一、お前の船長に云ふ事を俺に云つたつて、追つつかない話だぜ。」

「いゝとも。船長だつてお前だつて、麋木葉なんだよ。」

私は、立ち上つた。

腰を下してゐた行李を擔ぎ上げた。

セコンドメイトは、私が行李を擔ぎ上げたので、二足許り歩いた。

私は、行李を運河の中へ、力一杯放り込んだ。

「ヘツ、俺等なあ。行李まで痞せてやがらあ。ボシヤツてやがらあ。ドブンとも云はねえや。お前だつて俺だつて此行李と違やしないんだぜ。セキメイツ！」

行李は、へうきんな恰好で、水を吸つて沈むまでを、浮いてごみ屑と一緒に流れた。

「どうしたんだい。一體、お前氣でも狂つたんぢやないか。」

セコンドメイトは、ポシヤツと云つた水音で振りかへつてさう云つた。

「首なし死體を投り込んだんだよ。ありや腐つた臓腑だけつか入つてねえんだ。お前だつて、あの行李ん中へ入つてるんだよ。俺だつて、自分の行李がいらなくなりや、雇止めを食はさあな、ヘツ。さやうなら、御機嫌よう。首なしさん。だよ。ハツハツハハ。」

私は、齒を食ひしばつた。そして上瞼を上の方へまくし上げた。行李は、私のやうにフラフラしながら流れて行つた。

セコンドメイトは、私が、どんなに非常識な事をいつても「憤つてはならない」と心の中で決めてゐるらしかつた。

――若し、今、こいつに火をつけたら、ダイナマイト見たいに、爆發するに決つてる。俺が海事局へ行つてから、十分に思ひ知らしてやればいゝんだ。それまでは、豆腐ん中に頭を突つ込んだ鰯見たいに、暴れられる丈け暴れさせとくんだ。―

セコンドメイトが、油を塗つた猛見たいに顏を赤く光らせたのから、私は、彼の考へを見てとつた。

私とても、言葉の上の皮肉や、自分の行李を放り込む腹癒せ位で、此事件の結末に滿足や諦めを得ようとは思つてゐなかつた。

――一生涯！　一生涯、俺は呪つてやる、たとひどんなに此先の俺の生涯が慘めでも、又短かくても、俺は呪つてやる。やつゝけてやる、俺だけの苦しみぢやない、何十、何百、何萬、何億の苦しみだ。「たとへ、お前が裁判所に持ち出したつて、こつちは一億圓の資本を擁する大會社だ。それに、裁判はこちらの都合で、五年でも十年でも引つ張れる。その間、お前はどうして食ふ。裁判費用をどこから出す。」

「ヘツヘツヘツ」と、吉武有と云ふ、鑄込まれたキャプスタン見たいな、あの船長奴、拔かしやがつた。拔かしやがつた畜生！「どうして食ふ？どうして食ふ？」と奴はこきやがつた。

私は橋板の上へ、坐り込んでしまつた。

足と、頭の痛さとが、私を、私と同じ量の血にして橋板へ流したやうに、そこへ、べつたりへたばらしてしまつた。

――畜生！――

「セキメイツ！　人間の足が痛んでるんだ。分らねえか、此ぼけ茄子野郎！　人間の足が、地についてる處が疼いてるんだ。血を噴いてるんだ！」

私は、頭を抱へながら怒鳴つた。

セコンドメイトは、私が頭を抱へて濡れた海苔見たいに、橋板にへばりついてゐるのを見て、「いくらか心配になつて」覗き込みに來るだらう。「どうしたんだ、オイ、しつかりしろよ。ほんとに歩けないのかい」と、私の顏を覗き込みに來るだらう。そして、私の頭に手をかけるだらう。オイ。

――手だけは、未だ俺は丈夫なんだからな。ポカツ！と、俺は、奴の鼻に行かなくちやいけない。口ではいけない眼ならいくらかいゝ。だが鼻が一等きゝ目があるからな。ざまあ見やがれ、鼻血なんぞだらしなく垂らしやがつて、――

私は、本船から、艀から、棧橋から、こゝまでの間で、正直の處全く足を痛めてしまつた。一週間、全一週間、そのために寢たつきり呻いてゐた、足の傷の上にこの體を載せて、歩いたので、患部に夥しい充血を招いたのに違ひなかつた。

——どこにゐるんだか、生きてゐるんだか死んでるんだか知らないが、親たちが此態を見たら——

と、私は何故ともなく兩親の事を思ひ出した。

私の親が私にして吳れたのと、私の親ほどな年輩の世間の他人野郎とは、何と云ふひどい違ひ方だらう。

私は、頭を抱へながら、減茶苦茶に澤山な考を、搔き廻してゐた。そして、私の手か頭かに、セコンドメイトの手の觸れるのを待つてゐた。

私は、おそらく、五分間もさうしてゐた。だが、手は私に觸れなかつた。

私は顏を上げた。

私を通りすがりに、自動車に援け乘せて、その邸宅に連れて行つてくれる、小說の美しいヒロインも、そこには立つてゐなかつた。おまけにセコンドメイトまでも、待ち切れなくなつたと見えて、消え失せてしまつてゐた。

浚渫船の胴の腹にくつゝいてゐた胴船の、船頭夫婦が、デツキの上で、朝飯を食つてゐるのが見えた。運轉手と火夫とが、船頭に何か冗談を云つて、朗かに笑つた。

私は靜に立ち上つた。

そして橋の手すりに肘をついて浚渫船をボンヤリ眺めた。

夜明け方の風がうすら寒く、爽かに吹いて來た。潮の匂ひが清々しかつた。次には、浚渫船で蒸汽を上げるのに、ウント放り込んだ石炭が、そのまゝ熔けたやうな濃い烟になつて私の鼻つ面を掠めた。

それは、總て健康な、清々しい情景であり、且つ「朝」の潑溂さを持つてゐた。

船體の動搖の刹那まで、私の足の踝にジヤツクナイフの、突き通るまでは、私にも早朝の爽快さと、潑溂さとがあつた。けれども船體の一と搖れの後では、私の足の踝から先に神經は失くなり、多くの血管は斷ち切られた。そして、その後では、新鮮な潑溂たる疼痛だけが殘された。

「オーイ、昨夜はもてたかい？」

フアンネルの烟を追つてゐた火夫が、烟の先に私を見付けて、デツキから怒鳴つた。

「持てたよ。地獄の鬼に！」

私は怒鳴りかへした。

「何て鬼だ。」

「船長つてえ鬼だつたよ。」

「大笑ひさすなよ。源氏名は何てんだ？」

「源氏名も船長さ。」

「早く歸れよ。ほんとの船長に目玉を食ふぜ。」

「歸る所なんかねえんだよ。ペイドオフ（馘首）の食ひたてなんだ。」

浚渫船のデツキから、八つの目が私に向いた。

「何丸だ？」

「萬壽丸よ！」

「あんな泥船ならペイドオフの方が、よつ程サツパリしてらあ。いゝ事をしたよ。」

彼等は、朝の潮に洗はれた空氣に相應しく快活に笑つた。

それは、負傷さへしてゐなければ、火夫の云ふ通りであつた。だが、今は私は、一錢の傷害手當もなく、おまけに懲戒下船の手續をとられたのだ。

もう、セコンドメイトは、海事局に行つてゐるに違ひない。

浚渫船は蒸汽を上げた。セーフチーバルヴが、慌てゝ呻り出した。

運轉手がハンドルを握つた。靜寂が破れて轟音が朝を搔き裂いた。運轉手も火夫も、鋭い表情になつて、機械に吸ひ込まれてしまつた。

——遊んでちや食へないんだ。だから働くんだ。働いて怪我をしても、働けなくなりや食へないんだ！——

私は一つの重い計畫を、行李の代りに背負つて、折れた齒のやうに疼く足で、棧橋へ引つ返した。——一六二六、七、一〇——

印度の靴

印度人ミスター、ラム・サラツプは、デツキパセンヂヤーとしてカルカツタから上海まで、日本郵船會社S丸に身を託した。

S丸甲板部の水夫見習、羽生民夫は、沈没するのに大して手間も取るまいほど年を取つてゐて、錆びてしまつたS丸が年増の妾が藝者に逆戻りするやうに、も一度客を乗せると云ふ事に此上もない喜を感じた。

「幾人位乗るんだね」

羽生民夫は、デツキに（どう云ふ風に作れば吹き飛ばされないか）骨折りながらデツキパセンヂヤー用の便所を拵へてゐるカムネ（カーペンター・船大工の訛）に聞いた。

「五百人位だらうよ」

――五百人！　犬だつたら五百位は載れるだらうよ。が人間では、チエツ、又からかつてやがるんだ――

「五百人なんて、乗れる譯がねえぢやねえか。」

羽生は呟くやうに云つた。うつかり何か取り落したやうな調子であつた。

「乗れる譯がねえつて！　馬鹿野郎！　俺だつてさう思はあ、五百人もゴタ〳〵乗り込んで見ろ。頭か尻尾を踏んづけなけや、歩けやしねえや。だが、會社ぢや儲かるんだからな。ヘツ、暴化でも來て見ろ、どんなものだか。御難だぜ」

大工が便所を造り、水夫がデツキ一面に、日蔽をかけた。

そして、どや〳〵つと乗り込んで來た。デツキパセンヂヤーは小さな風呂敷包みをブラ下げたまゝ、どこへ潜り込むかに銘々あつけに取られてゐた。

ミスター、ラム・サラツプは、後部甲板のハツチの上に、小さな水甕と、その風呂敷包みとを置いた。

デツキパセンヂヤーは、支那人、印度人などの無産者であつて、多くは移民であつた。支那人は、鐵デツキにぢかに寢轉んで阿片を吸つた。印度人は、素燒の水甕で上手にお茶を出した。

鑵に入つたまゝ、いゝ色に淺草海苔が燒けるだらうほど、太陽は汽船を一掴みにした。そこでは、昇る太陽は呪はしい惡魔のやうに思はれた。その太陽を、印度人たちは、立つた

り、長く寢たりしながら、恐ろしく手間のかゝるやり方で三拜九拜した。

「そんなに暑く照りつけないで下さい。」

と印度人たちが、揃つて頼んでゐるやうであつた。

日が沈む時も、禮拜は行はれた。

「あなたが、餘りひどくしなかつたお蔭で私たちは助かりました。」

と、彼等は揃つて感謝してゐるやうであつた。

印度人の體格は、見事なものであつた。そんなに見事な偉大な體軀の上に、氣の弱さうな、おとなしい一方のくたびれ切つた顏が載つかつて居た。

セーラーや、火夫たちは、彼等がお客樣であるにも拘らず「戰勝國民の誇」を以て、彼等の頭や尻尾を通路で踏んづけた。

羽生は、「踏みつけるのは、餘りにひどい」と思つた。

何故かなら、彼等は、おとなしい、深切な人種であつた。

ラム・サラツプの如きは羽生を見る毎に、お茶を飲めと云つて、小さな甕を差し出した。

What's you name ?

と、片言でラム・サラツプが、羽生に聞くのであつた。

Me name Hau

と、羽生は答へるのであつた。

How! How! How? what's the mean ?

と、ラム・サラツプが驚いて訊ねた。

Me name is Hau.

羽生は、これも驚いて、いつまでもハウ、ハウ、ハウ、と繰りかへした。

二人の言葉は、それ以上餘り深くは通じなかつた。

羽生は、眼を瞑つて、思ひ切つてお茶を飲み乾した。

お茶は臭くはなかつた。それ處か、非常に香りがよくて美味かつた。

羽生は、片栗粉でも混ぜたのではあるまいかと思はれるほど、どろ〳〵した、青い海を眺めながら考へた。

（こいつ等が、お茶を飲む甕で、尻を洗ふつてのは、たゞの惡口ぢやあるまいか？でも些も臭くねえや。それに何もくつついてやしねえな。右の手は尻を洗ふため、左の手は食ふための用、と云ふのは、嘘に違ひない。でなきやこんなに香りがよくてうまい筈がない。）

ラム・サラツプは、二つの掌で拵へた、メリケン粉の丸板にカレーを挾んだ食料を、羽生に食へと云つた。

それは、云はゞ、それだけの量のものが食道を通つて、胃の腑へ入つて行く、と云つた風な食物であつた。羽生に云はせれば、それは氣休めの食物であつた。（だからこれ等は、たきつけのやうに拵せてゐる）のであつた。

羽生は、水夫達の食ひ殘しの、ライスカレーをバケツに半

分ほど取つて置いて、それをだるさうな夕闇がノロ〳〵、海の上に這ひ廻る時分に、後部甲板に持つて行つた。

彼は、ラム・サラツプと、その仲間たちに怒られはしないかと、ビク〳〵しながら「やり度い」と申し出た。

牛杯のバケツの中のライスカレーは、怒られる處か、異常な感謝の反響を呼起した。

ラム・サラツプは、ボーイ長羽生と知り合ひである。と云ふ事で、彼等の間に大きな信用をさへ贏ち得た。

羽生が、澤庵を四五本ブラ下げて、又骨付きの牛肉の一固まりを抱へて、上着とパンツとの間に、臍の上下一寸位の環狀の皮膚を剝き出しにして、倉庫からおもてのコツク部屋に通ふ、珍妙な、たとへば、零落したロビンソン・クルーソーのやうな姿は、デツキパセンヂヤーには、渇仰の的に見えた。

「ハウ、ハウ」

彼等は、羽生を呼んだ。が、何故、彼がハウであるかは誰も知らなかつた。

ラム・サラツプは、羽生に、錆びた刃の一枚ついた、安全剃刀を呉れた。

羽生は、それを貰つて、頬に當てゝ剃る眞似をして見せた。ラム・サラツプは、非常に慌てゝ首を横に振つた。羽生が呆氣にとられてガンヂーに似たラム・サラツプの顔を眺めてゐると、ラム・サラツプは、大きな聲で笑ひ出した。その笑ひ聲はライオンや虎などと森林の中で、一緒に戯れるやうな、朗かな、原始的な笑であつた。

Then,

羽生は、さう云つて、頭に持つて行つて見せた。

ラム・サラツプは、笑ひを止めた。その顔には困り切つた表情が浮んだ。

（ぢや、何だな、〇〇でも剃るんだな、この人たちの宗教的な儀禮でゝもあるんだらう。）

羽生は、苦笑して、それをポケツトに入れた。ラム・サラツプは安心したやうに微笑んだ。

支那人は暗い石炭庫に陣取つてゐた。そこにも、デツキにも入り切れない者は、船尾のダンブルに蠢いてゐた。そして阿片を吸ふか、賭博をやるかしてゐた。

羽生は、一日の締めつけられるやうな勞働と、油でゝも揚げられるやうな暑熱とから、又、蒸されるやうな、水夫室に眠るために入る時に、水夫室の三尺幅の通路に鰊でも積み重ねたやうな、デツキパセンヂヤーを、踏みつけないでは通る事が出來なかつた。

「駄目だ、こんな處に眠ちやあ。」

と、彼は日本語で怒鳴つた。が、彼等は錆びた鐵デツキに溶けて流れついた、コールター見たいに、眠りこけてゐて、足位踏まれても起きようとはしなかつた。

——何故、こいつ等は起きようとしないんだ。何故こいつ等は、この嚴丈な腕を振はうとはしないんだ。こんなにも澤山追ひ出されて行くんぢやないか。何故揃つて起たないのだ。直ぐにも摑めるのに、何故摑まうとしないんだ。

羽生は、だるくて、殆んど感覺を失つた足で、入口を跨ぎながら、振りかへつて見た。

（だが、印度人や、支那人を罵る譯には行かない。俺たちはどうだ、俺たちは何故起たないんだ、何故、こんな強い腕を仲間同志の喧嘩だけに振つてゐるんだ。）

彼は、齒噛みをして、どんなにも慰さめられる事の出來ない、憤怒に囚はれた。

プロレタリア同志の、世界的な感情や交通や生活態度の共通やが、彼を慰さめる時もあつた、が、その多くの人たち、地球上に有り餘る程の多い仲間、自滅を餘儀なくされてゐる多くの仲間たち、それが、何にも爲ないで、クヨ〳〵しながら殺されて行く。何と云ふだらしのなさだ！　彼は、憎惡を以てデツキの上の鰊共を、睨めなければゐられなかつた。だがそれならば、今、彼が歸つて行かうとしてゐる彼の故國はどうであつたか。そこでは、一人殘らずのプロレタリアが眼を覺して、その巨腕に力瘤を入れ始めたか？　又は此汚ならしいデツキパセンヂヤーを、嫌惡と焦燥とでじり〳〵しながら眺めやる發作を起す、彼自身及び同乘の下級海員はどうであつたか。

それ等の事を考へる時、彼の胸の中から、體に入れ切れない程の、大きな腫物が、見る間に太るやうに、彼を息詰らせるのであつた。

海は風いでゐた。ぬる〳〵してゐる肥えた南瓜の葉のやうに、厚みのある青さであつた。

左舷に陽が沈みかけてゐた。

水夫たちが、デツキに整列してゐた。

船長と船醫とが何か云つた。

二本の樫の棒の一端が、水夫によつて持ち上げられた。その上の白木の箱が、スル〳〵と辷り始めた。そして、直ぐ海の中へドブンと落つこちた。

落ちると直ぐ、その箱の波紋は、船尾の方に流れて、やがてスクルーの搔き廻した、踊る砂のやうな泡の中に消えてしまつた。

又、次の白木の箱が辷つた。その波紋もすぐ消えて、船の殘した足跡だけが、煙と共に長く殘つた。

その白木の箱の中には、船尾のダンブルで死んだ、二人の支那人が入つてゐた。彼等については、仲間の支那人さへも何も知らなかつた。

棺には、錆鐵が重りにつけてあつた。だから、ブカ〳〵浮いて歩くことはなかつた。

棺の沈んだと思はれる邊に、冗談見たいにまん丸い團子のやうな雲が一つ浮いてゐた。日が沈むにつれて、雲が七面鳥のやうに憤つたり、恥しがつたり、嘆いたりした。

陽が落ちて暗くなつた。

水夫たちの食事が濟んで了ふと、羽生は、船首につゝ立つて、海面を眺めた。

(俺は、日本を抜け出さうと思つて、船に乘つたんだが、今、もう歸りかけてゐる)

彼は海面を見詰めながら、一人で考へに耽つてゐた。

晝に書いたやうに、小魚が、船に追はれて追ひつかれさうになると、パツ〳〵と、傍へ逃げた。飛の魚は、切羽詰ると思ひ切つて二十間も先へ風を切つて飛んだ。

(俺は、一生涯歸らない積りで來たんぢやないか。それに、脫船しようと試みもしないで、グズ〳〵に歸航してゐる。だが、搾るか、搾られるか、どちらかより外に俺の着いた處ぢや外に道が無かつた。それにどうだい、セーラー達は? どいつもこいつもボースンの鼻息を、うかゞつてやがる! いゝ加減搾られた上、月二割で又搾られてやがる、ヘツ、さう云ふ俺は無月給で搾られてやがる。)

印度洋は暑かつた。支那海は涼しかつた。日本海は寒かつた。けれども、どこも、息は詰るのであつた。寢臺は足が閊へた。頭が閊へた。まるで、彼が行く先々へ、ベト〳〵した息苦しいガスが追つかけて來るやうに思はれた。

(あれ等は、殺されたんぢやないのか。病氣で死んだのか。阿片で參つちまつたのか。だから、みんな知らない顏をしてゐるんだ。ヘツ明日も又、二つ位死骸が身投げするだらうよ。)

羽生は、不思議に思つた。彼は自分が暢氣さうに、水夫見習などしてゐる事が、自分でも不思議であつた。

(外の奴が暢氣さうに默つて死んだり、生きたまゝ腐つたりするのを、俺は憤慨してゐる。だが、その外の奴が、俺を見たらどうだ。俺は暢氣さうに、白ばつくれて水夫見習なんか爲てゐる。俺の母は自殺した、妻はふツ飛んだ、たんぽゝの花見たいにどこかへ消えてしまつた。子供たちは病死した。その原因は何だ? 皆、皆、飢からではなかつたか。それほど俺は引つぱたかれても、未だ眠つてゐるぢやないか。他人の事が云へるか。だが、俺は初めたいんだ、ぢつとしてゐられないんだ。だが、それは一人では出來ない事なんだ。畜生! 手前たちや、癪にや障らねえのか!)

彼は、いきなり足で、デツキを蹴つた。それは、餘り夢中に、餘り力を入れすぎたゝめに殆んど彼を昏倒させる程、頭に響いた。フオツクスル(船主樓)の下ではセーラーたちは、暑中のキヤラメルのやうにグニヤ〳〵になつて、眠りこけてゐた。

闇と明りとの入れ交る、夕暮は忌々しい時間であつた。眠

らねば、明日の未明からの勞働に、鐵の鎧を着たやうに重い體で打ち衝らねばならなかつた。眠るには暑過ぎた。しかし(眠い)ことは、どんな暑さにも拘らずセーラーたちを攻めつけた。

ウイスキーの空瓶を利用した水瓶は、一夜の中に無我夢中に二本も空けられた。その水は湯のやうにぬるんでゐた。死んだやうな眠りであつた。が、暑さと闘ふために淺い眠りであつた。

羽生は、そんな晝と夜とを、譯も無く送り迎へる事に堪へられなかつた。

(何か、目的があるのか? その目的は、確に摑み得る事なのか? 氣休めではないのか? 船に目的があるやうに、だが、船は着いた處から、又出發するんだ。沈沒するか廢船になるまでは絕えず引き摺り廻されるのだ。俺はそれでいゝのか?)

青い海は、黑く暮れた。

船首の嚙み碎く泡だけが、山間に流れる小河の飛沫のやうに、チラ〳〵白く見えた。

羽生は、船館を離れた。タラツプを降りて船尾のハツチへ行つた。

「ラム・サラツプ」

「ハウ。」

ラム・サラツプは、禪僧がするやうに、ハツチの上に端坐してゐた。

羽生は、デリツクに背を凭せて、上からラム・サラツプを見下しながら、云つた。

「君はどこへ行く?」

「アメリカへ」

「フーム、アメリカへ? 何を爲に?」

「哲學を研究しに。」

「哲學を? さうしてどうするんだ?」

「フイラデルヒヤ大學の哲學科に、入る積りだ。」

「いや、何のために哲學を研究するんだ、と聞いてるんだ。」

「何のために? それは未だ分らない。多分哲學がそれを敎へてくれるだらう。」

「哲學を研究しなければ、何を爲て良いか何を爲なければならないか、君にも分らないかい。」

「さうだよ。何故人間が苦しむのか、何故人間が平等でないか、その答へが解らないんだ。それは、哲學が答へて呉れるだらう。」

「フイラデルヒヤの大學には、その答へが置いてあるのかい?」

「それは知らないよ。」

「人間が苦しむのは貧乏だからだ。搾られるからだ。搾る側

になりさへすれば、その人間には變つた世界が在る、と云ふ事が君には分つてゐるんだらう。勳章を取るやうに、肩書を取るために、フイラデルヒヤに行くのとは、違ふかい？」

「印度では、搾つてゐると思はれてゐる、階級の人でも、幸福ではないよ。」

「その人も搾られてはゐないかい？」

「さうでもないよ。」

「君は貧乏かい？」

「僕は貴族だよ。だけども富豪ではないんだ。」

ラム・サラツプはさう云つて、風呂敷包みを解いた、そして、一足の靴を出した。

「この靴は、貴族以外には履けないんだよ。見て御覽、尖が渦を卷いて、甲の方に密着いてゐるだらう。そこは金色だらう。これは貴族以外には履いてならない、事になつてゐるのだよ。」

羽生は、靴を手に取つて眺めた。

「ぢや、何故君は此靴を履かないんだ？」

「普段は裸足の方が樂だよ。」

「ぢや、アメリカで履く積りかい？」

「いゝや。」

「ぢや、どこで履くんだね？」

「もう、實用には立たないんだよ。」

「ふうむ、では何だね。今まで此黃金色の貴族靴で民衆を履みつけて來た、と云ふ尊い記念なんだね。」

「君は皮肉屋だよ。僕は、たゞ持つて來たゞけなのだよ。」

「靴にまで、印度では差別があるのかい？」

「日本では無いかね？」

「うん、日本では：：」

羽生は、ハツとした。日本では、靴にまで差別がないだらうか！　神主だけが、祭の時に履くおそろしく不便な靴。自動車から大理石の玄關まで、玄關から舞踏室、それ等を目的として作られた靴、その靴の履みつける絨毯は、彼の本國では無かつたか！

「日本では、矢つ張り、あるにはあるよ。」

「あるだらう、どんな形だね。」

「それは見た事がないよ。俺たちの足には合はねえんだ、頭の上にあるんだ。」

羽生は、片方の足で、コツコツと、ハツチを踏んだ。

「ハツハツハ。そんなのぢやないだらう。」

羽生は、自分の靴を見た。

彼の靴は、右足にでも左足にでも履けるやうに出來た、木靴であつた。

「こんなのは、勿論、履かないよ、だが、何だつて君は、大切さうに（貴族だけの靴）なんぞ、アメリカまで持つて行く

んだい。」

「これかい、これは君に進呈するよ。」

「貰つても、先に貰つた切れない刃の剃刀と同じだよ。役に立ちやしないよ。落ちぶれた印度の貴族と知り合ひになつたつて事は勞働者の自慢にはならないからね。」

「だけどね、ハウ。印度でも、貴族の靴が實際履くのには馬鹿げて見えるつて事を、君に思ひ出させる種にはなるだらう」

羽生は、木靴を脱いで、貴族の靴を履きにかゝつた。が、それは半時も小さくて迚も汗をかいた足には嵌らなかつた。

「此靴は、僕の足を削らなきや履けないよ。」

「ハウ。靴にも變移があるんだね。今、日本に旅行してる——旅行してると云つた——佛敎は、印度を救はなかつたよ：：」

ラム・サラツプはガンヂス河畔で、マラリヤの蚊と戰ひながら、坐禪してゐたであらう佛徒のやうな態度で、羽生には難かし過ぎて解らない、術語で、おそろしく雄辯に何か語り始めた。

「ラム・サラツプ。僕には哲學的な言葉は解らないよ。印度では宗敎的信念から絶食するのがあるつてね。」

「あるよ。」

「僕たちの國ではね。動物的本能に從つて、何か食ひたくても、食へない人間が澤山あるんだよ。」

「それは、どこにでもあるよ。」

「アメリカまで、探しに行かなくても君には分りはしないかい？」

「僕は戰ふのが厭なんだよ。ハウ。僕の祖先はもう十分に戰つたからね。」

「ラム・サラツプ。アメリカには、闘はねばならぬと云ふ事以外には、何も書いてはないだらうよ、君たちを踏みつけてるのは英國人だけぢやあるまいよ、僕はね、僕もほんたうに、日本がいやになつたから、どこかへ行かうと思つて船に乘つたんだよ。だけど、他人の拵へたうまい料理を、何も爲ないで食べようと云ふのは、誰も料理を拵へないと云ふのと同じだよ。でなければ、奪ふと云ふ事になるんだからね。」

羽生は、金色の靴を兩方の手にブラ下げてブラ〳〵動かしながら言つた。

「ハウ。僕はマルキストではないんだよ。」

「ラム・サラツプ。お休み。僕は働かなけやならないんだ。明日又、お目にかゝらうよ。」

「お休み。その靴は記念品だよ。」

「お休み。」

羽生は、サロンデツキへ上つて、おもての方へ消えた。

ラム・サラツプは、穴に墮ちた夜盗蟲のやうに、ゴロ〳〵寢てゐる同鄕人越しに、海の上一杯の果しもない、廣い、深い闇に、何かを求めるやうな眼を注いでゐた。そこにはどんな

小さな微な光もチラついてはゐなかつた。

羽生はサロンデツキを下りながら吐き出すやうに思つた。

（どいつもこいつも、いぎたなく寢てやがる。ヘツ！　他愛はねえや。自分の一番勝手を知つた處から逃げ出して、勝手の分らねえ處へ、出來上つたユートピアを掴みに行かうつて！　骨も折らねえで、スツカリ貰はうなんてそんな泥坊見てえな氣持ぢや、世は來ねえや）

船は、風ぎ切つた印度洋上を、惡寒でもするやうに身震ひしながら走つてゐた。

一九二六・九・二日

註　デツキパセンヂヤーとは、貨物船などに、食糧携帶でデツキの上にゴロゴロして旅行する、船客の事である。印度や支那のひどい無產者が多く、移民が主となつてゐる。

貨物船では、デツキパセンヂヤーに對しては、荷物と同樣に心得てゐて殆んど、何等の設備もしないと云つてもいゝ。

乳色の霧

四十年來の暑さだ、と、中央氣象臺では發表した。四十年に一度の暑さの中を政界の巨星連が右往左往した。

スペインや、イタリーでは、ナポレオンの方を向いて、政界が退進した。

赤石山の、てつぺんへ、寢臺へ寢たまゝ持ち上げられた、胃袋の形をしたフエツトがあつた。

時代は賑かであつた。新聞は眩しいほど、それ等の事を竝べたてた。

それは、富士山の頂上を、ケシ飛んで行く雲の行き來であつた。

麓の方、巷や、農村では、四十年來の暑さの中に、人々は死んだり、殺したり、殺されたりした。

空氣はムンムンして、人々は、天ぷらの油煙を吸ひ込んでゐた。

一方には、一方の事は、全で無關係であつた。勝手に雲が飛び、勝手に油蟲どもが、這ひ廻つてゐるやうであつた。

人々は、眼を上げて、世界の出來事を見ると、地獄と極樂との繪を重ねて見るやうな、混沌さを覺えた。が、眼を、自分の生活に向けると、何しろ暑くて、生活が苦しくて、やり切れなかつた。

その、四十年目の暑さに、地球がうだつて、鮒共が總て目を白くして浮び上つたと思ふことは、それは間違ひであつた。どこにでも避暑地と云ふものがあつた。日本には輕井澤があり、印度にはダージーリンがあり、アメリカには、ロツキーがあつた。

「人間どもは、何だつて、暑い暑いとぬかしながら、暑い處にコビリついてゐるんだ。みんな足をとられてやがる。女房子に足をとられたり、ガツガツした胃袋に足をとられたり、さう云ふ、俺だつて、ざまあねえや、今まで足をとられてゐたぢやねえか。俺のは、鎖がひつからまつて！、動きがとれなかつたんだ。そこへ持つて來て、手を縛つて、梁へ吊しやがつたな。おまけに竹刀でバシバシと、すこたんを遠慮なしに打ん毆りやがつたつけ。あゝなると意氣地のねえもんだて、息がつけねえんだからな。フー、だが、全く暑いよ。」

彼は、待合室から、驛前の廣場を眺めた。

陽光がやけに鋭く、砂利を焙つた。その上を自動車や、電車や、人間などが、焙烙の上の黒豆のやうに、パチパチと轉げ廻つた。

「堪らねえなあ。」

彼は、窓から外を見續けてゐた。

「キヨロキヨロしちやいけない。後ろ頭だけなら、誰つて怪しみはしないさ。キヨロキヨロしてはいけねえ。眼が打つ突る！　眼が打つ突ると、直ぐに次へ眼を移す。いけねえ、ひとりでにキヨロキヨロするやうになる。五六人は、旦那衆がゐるからな。ヘン。俺には分つてるんだよ。お前さんたちがどんなに田舍者見てえな恰好をしてたつて、番頭に化けたつて、腰辨に化けて居たつて、第一、おめえさんなんぞ、上はアルパカだが、ズボンがいけねえよ。晒しでもねえ、木綿の官品のズボンぢやねえか。第一、今時、腰辨だつて、黒の深ゴムを履きやしねえよ。そりや刑務所出來の靴さ。それからな、お前さんは、番頭さんにや見えねえよ。金張りの素通しの眼鏡なんか、留置場でエンコの連中をおどかすだけの向だよ。今時、番頭さんだつて、どうして、皆度のある眼鏡で、ロイド縁だよ。おいらあ、一月娑婆に居りあ、お前さんなんかゞ、十年暮してるよりか、もつと、世間に通じちまふんだからね。何てつたつて、化けるのは俺の方が本職だよ。尻尾なんかブラ下げて歩きやしねえからな。駄目だよ。そんなに俺の後ろ頭ばかり見てたつて。ホラ、二人で何か相談してる。ヘツ、そんなに鼻ばかりピクピクさせる事あないよ。いけねえ。こんなことを考へる時や碌な事あねえんだ。サテ。」

「下り、下の關行うゝゝき。下り、下の關行うゝゝき。」

驛手が朗かな聲で、三等待合室を鳴り渡らせた。待合室はざわめき始めた。

ニヨキニヨキと人々は立ち上つた。

彼は瞬間、ベンチの凭れ越しに振りかへつた。誰も、彼を覗つてはゐなかつた。それと思はれるのが二人、入口の處でゾロゾロ改札口の方へ動いて行く、群集を眼で拾つてゐた。

彼は、立ち上つて、三つばかり先のベンチへ行つて、横目で、一渡り待合室を見廻した。幸、眼は光つてゐなかつた。

「もつとも、俺の顔を知つてる者はゐないんだからな。それに、俺だけが怪しく見えもしないんだからね。何しろ奴等にやどいつもこいつも泥坊に見えるんだからね。」

彼は、ベンチへ横になつた。そして自分の寢てゐるベンチと並んでゐる、外のベンチを檢べて見た。頭を掻くやうな恰好をした。と、彼はもう帽子を被つてゐた。麥藁帽であつた。彼の手が、ブルツと顔を撫でると、口髭が生えた。さて、彼は、夏羽織に手を通しながら、入口の處で押し合つてゐる、人混みの中へ紛れ込んだ。

且那の眼四つは、彼を見たけれど、それは別な人間を見た。彼ではなかつた。

「顔ばかり見てやがらあ。足や手を忘れちや駄目だよ。手にはバスケツト足には下駄とな。チヤンと此通り前のと同じなんだよ。いや、御無禮。」

列車は、食堂車を中に挾んで、二等と三等とに振り分けられてゐた。

彼は食堂車の次の三等車に入つた。都合の良い事には、三等車は、やけに混雜してゐた。それは、網棚にでも上りたいほど、乘り込んでゐた。

その時はもう、彼の顔は無髯になつてゐた。

彼は、座席へバスケツトを置くと、そのまゝ食堂車に入つた。

ビールを飲みながら、懐から新聞紙を出して讀み始めた。新聞紙は、五六種あつた。彼は、その五つ六つの新聞から一つの記事を拾ひ出した。

「フン、棍棒强盗としてあるな。どれにも棍棒としてある。だが、汽車にまで棒切れを持ち込みやしないぜ、附近の山林に潜んだ形跡がある。か。ヘツヘツ、消防組、青年團、警官隊總出には、兎共は迷惑をしたこつたらうな。犯人は未だ縛につかない、か。若し捕つてりや僞物だよ。僞物でも何でも捕へようと思つて慌てゝるこつたらう。可哀相に、何も知らねえ奴が、棍棒を飲み込みでもしたやうに、叩き出されかけてゐるこつたらう。蛙を呑んだ蛇見たいにな。」

彼は、拷問の事に考へ及んだ時、頭の中が急に火熱るのを覺えた。

そのために、彼が土龍のやうに陽の光を避けて生きなければならなくなつた、最初の拷問！　その時には、彼は食つてゐない泥を、無理やりに吐き出さゝれた。彼の吐いたものは泥の代りに血ににじんだ臓腑であつた。

汚ない姿をして、公園に寢てゐた、(それより外にどうする事が出來たのだ！)ために、半年の間、ビツクリ箱の中に放り込まれた。出るとすぐ跟け廻され、浮浪罪で留置された。それが彼の生活の基調に習慣づけられた。

(どうせ、さうなる運命なら、それに相當した事をしなけりや損だ！　俺も打ん殴つてやれ！)

さうなるためには、留置場や、監房は立派な教材に滿ちてゐた。間違つて捕つても、彼の入る所は、云はゞ彼の家であつた。そこには多くの知り合ひがゐた。白日の下には、彼を知るものは悉くが、敵であつた。が、歸つて行けばゝふん、そいつはまづかつた」と云つて呉れる(友)がゐた。

だん〳〵(仕事)は大きく、大膽になつて行つた。

汽車は滑かに、速に辷つた。氣持よく食堂車は搖れ、快く醉は廻つた。

山があり、林があり、海は黄金色に波打つてゐた。到る處に（生活）があつた。どの生活も彼にとつては縁のないものであつた。

彼の反抗は、未だ組織づけられてゐなかつた。彼の眼は牢獄の壁で近視になつてゐた。彼が、そのまゝ、天國のやうに眺める、山や海の上の生活にも、絶えざる闘爭があり、絶えざる拷問があつたが、彼はそれを見ることが出來なかつた。彼は彼一流の方法で、やつゝけるだけであつた。

夜の二時頃であつた。寢苦しい夏の夜も、森と川の面から撫でるやうに吹いて來る、輕い風で涼しくなつた。

本田家は、それが大正年間の邸宅であらうとは思はれないほどな、豪壯な建物とそれを繞る大庭園と、塀とで隱して靜に眠つてゐるやうに見えた。

邸宅の後ろは常磐木の密林へ塀一つで、庭の續きになつてゐた。前は、秋になると、大倉庫五棟に入り切れないほどの、小作米になる青田に向つてゐた。

邸後の森からは、小川が一度邸内の泉水を潜つて、前の田へと灑がれてゐた。

消防組の赤い半纏を着た人たちや、青年會の連中が邸内のあちこちに眠さうな手で蚊を叩いてゐた。

本田家の當主は、家族の者と主治醫とに守られて、陶製のものゝやうに、何も考へることも感じることも出來なくなつた頭を、氷枕と氷嚢との間に挾んでゐた。

家族の人たち、當主の妻と、その子供である、二人の息子と三人の娘とは、何かを待つやうな氣持を、どうしても追つ拂ふことが出來なかつた。

當主は、寢てゐる處を、いきなり丸太ん棒、それも樫の木の、潜り門用の閂でドサツとやられたので、遺言を書かうにも書くまいにも、眼の覺める暇がなかつたのであつた。

で、家族のものは、泣きながら食卓の前に坐らされてゐる、腹の空いた子供のやうな氣持を、抱かない譯には行かなかつた。

陰氣であつた。が、何だか險惡であつた。線香をいぶすのにも、お經を讀むのにも早過ぎた。第一、室が廣すぎた。餘り片附きすぎてとりつき端がなかつた。退屈凌ぎに飲食することは、前祝ひのやうで都合が悪かつた。

不思議な事には、子供たちは誰一人、眼を泣きはらしてゐなかつた。

本田富次郎の頭腦が、兎に角物を言ふ事の出來た間中は、彼は此地方切つての辣腕家であつた。

他の地主たちも、彼に倣つて立入禁止を斷行した。そして、累卵の危きにある（地主の權利）を辛うじて護る事が出來た。

小作人どもは、ワイワイ云つてるだけで、何とも手の下しや

うがなかつた。大抵目ぼしい、小作人組合の主だつた、（ならず者ども）は、殘らず町の刑務所へ抛り込まれてしまつた。

「これで、當分は枕を高くして寢られる」と、地主たちが安心しかけた處であつた。

枕を高くした本田富次郎氏は、樫の木の閂でいきなり腦天をガンとやられた。

青年團や、消防組が、山を遠巻きにして、犯人を狩り出してゐた。が、青年團や消防組員は、殆んど小作人許りであつた！

勿論、當局が小作人組合に眼を光らさぬ筈がない。けれども、監獄に抛り込んである首謀者共が、深夜そうつと拔け出して來て、ブン毆つておいて、またこつそり監房へ歸つて、狸寢入りをしてゐる、と云ふ考は穿ちすぎてゐた。けれども、前々からさう云ふ計畫が立てられてあつたゞらう、とは考へられない事でもなかつた。

從つて、收監されてゐた首魁共は、裁判所へ引つ張り出された。その結果は、彼等は、「誰か痛快におつ初めたものだな！」と云ふ事を知つた。彼等は志氣を振ひ起した。

殘つてゐた連中も、亂つぶしに引つ張られた。本田家の邸内を護衛してゐた、小作人組合に入つてゐない、青年團の青年たちや、消防組員までも、一應は取調べを受けた。

これは一つの暗示であつた。

地主共は、誰を信じてよいか？

消防組、青年團は、何のために護衛し、非常線を張り、且つ（調べられる）か？

家族の者とても、取調を受けない譯には行かなかつた。片つ端から母を異にする兄弟姉妹の間に、何かありはしないか？　最近の犯罪傾向が暗示する、骨肉相殺がないか？

人々は信ずる處を失つてしまつた。滅茶苦茶であつた。虚無時代であつた。恐怖時代であつた。

棍棒は、劍よりもピルトルよりも怖れられた。

生活は、農民の側では飢饉であつた。檢擧に次ぐに檢擧であつた。だが、赤痢でもあるやうに、いくら掃除しても未だ何か氣持の惡いものが後に殘つた。

「こんな調子だと、善良な人民を監獄に入れて、罪人共を外に出さなけりや、取締りの法がつかない」と、「天神樣」たちは思はない譯には行かなかつた。

だが、青年團、消防組の應援による、縣警察部の活動も、足跡ほどの證據をも上げることが出來なかつた。

富豪であり、大地主であり、縣政界の大立物である本田氏の、頭蓋骨にひゞが入つたと云ふ、大きな事實に對して、證據は夢であつた。全て毆つたのは現實の誰かではなくて、人魂でゝもあるやうだつた。

生靈や死靈に憑かれることは、昔からの云ひ慣はしであつ

た。そして、怨靈のために、一家が死滅したことは珍しくなかつた。だが、どんな怨靈も、樫の木の門で形を以つて打ん毆つたものはなかつた。で、無形のものであるべき怨靈が、有形の棍棒を振ふことは、これは穩かでない話であつた。だが、困つた事には、怨靈の手段としての、言論や文字や、棍棒は禁壓が出來たが、怨靈そのものについては？　こいつは全て空氣と同じく、あらゆる地面を蔽つてはゐたが、捕へるのに往生した。

下の關行きの、二三等直通列車が走つた。

彼は、長い時間を食堂車でつぶして、ビールの汗で體中を飴湯でも打つかけられたやうに、ネチヤつかせながら、彼の座席へ歸つた。處が、彼が座席の上に置いてあつたバスケットは、そこに無かつた。

そこには、網棚から兵兒帶を吊して、首でも縊る時のやうに、輪の中へ顎を引つかけて、グウグウ眠つてゐる男があつた。

車室はやけに混んでゐた。デツキには新聞紙を敷いて、三四人も寢てゐた。通路にさへ三十人も立つたり、蟠つたりしてゐた。眼ばかりパチパチさせて、心は眠つてるのもあつた。東京の空氣を下の關までそつくり運ばうとでもするやうに車室內の空氣はムンムン沈澱してゐた。

「圖太え野郎だ。ハツハツハ、變つてやがらあ。首つ吊りしてやがらあ。はてな、俺のバスケットをどこへ持つて行きやがつたんだらう。おや、踏んづけてやがら、畜生！　叶はねえなあ、こんな手合にかゝつちや。だが、この野郎白つぱくれて、網を張つてやがるんぢやねえかな。バスケットの中味を覗いたのたあ違ふかい？　冗談ぢやあねえぜ、餘りやり方がしぶといや。薄つ氣味が惡いや。何だい、馬鹿にしてやがら、未だ小僧つ子ぢやないか。十七かな、八かな。可愛い顏をしてらあ、ホラ、口ん中に汗が流れ込まあ。」

彼は、暫く凭れによりかゝつて、少年を觀察してゐた。

少年は疲れた顏を、帶の輪の間に突つ込んで、深い眠りに眠りこけてゐた。

「兄さん。おい、兄さん。冗談ぢやないぜ息が詰つちまふぜ。」

彼は、暫くして少年を搖り起した、少年は鈍く眼を開いた。そして兩手をウーンと張り上げた。隣の人の耳を小突きながら、隣の人は小突かれると、反對の通路の方へガツクリと首を傾けた。

「どうしたんだい。兄さん、首つ吊りをするつて譯ぢやねえだらうな。」

「うん。」

少年は再び眼を瞑らうとした。

「おい、兄さん。そりやお前のバスケットかい？」

彼は少年の踏んでゐるバスケットを顎でしやくつて見せた。

「ぢや、お前のかい？」

少年は眼を瞑つたまゝ、聞きかへした。

彼は度膽を拔かれた。てれかくしに袂から敷島を出して火をつけた。

（何てえ奴だ！　途方もねえ野郎だ。え、「ぢや、お前のかい？」つてやがる。それぢや一體あのバスケットは、誰のものなんだい？　尤もさう云やあ、此小僧つ子の云ふ事がほんとには、ほんとなんだがな。それや、俺のものでもねえし、又此小僧つ子のでもねえんだ、だが、そいつを此小僧奴知つてやがるんだらうか。知つてなきや、そんな無茶苦茶な事が云へる筈がなからうぢやないか。え、都合によると、こりや危いかも知れねえぞ。）

だが、彼はそこでへまを蹈むわけには行かなかつた。それが誰のものだらうが、そのバスケットは自分のものでなければ此場合を收拾する事が出來なかつた。

「だつて兄さん。そりや俺んだよ。蹈んづけちや困るね。」

「そんな大切なものなら。打つ捨らかしとかなけやいゝぢやないか。」

少年は眼を瞑つたまゝ、バスケットから足をとつた。

生々しい眉間の傷のやうな月が、薄雲の間にひつかゝつてゐた。汽車は驀然と闇を切り裂いて飛んだ。

「冗談云ふない。俺だつて一晩中立ち通したかねえからな。」

「冗談云ふない。俺だつてバスケットを坐らせといて立つてゐたくねえや。」

「チヨツ、喧嘩にもならねえや。」

「當り前さ。」

少年は眼を開いた。そして彼をレンズにでも收めるやうに、一瞬にしてとり入れた。

「喧嘩にやならねえよ。だが、お前なんか向うの二等車に行けよ。その方が樂に寢られるぜ。寒くもねえのに羽織なんか着てる位だから。その羽織だつて、十圓位はかゝるだらう。それよりや、二等に行つて、少しでも三等を樂にしろよ。此三等を見ろよ。塵溜だつてこれよりや隙があらあ。腐らねえで行く先まで着きや不思議な位だ。俺たちや、明日から忙しいから、汽車ん中で寢て行き度えんだよ。」

「どこへ行くんだい？」

「お前はスパイかい？」

「え？」

「分らねえか、警察の旦那かつて聞いてるんだよ。」

彼は喫驚すると同時に安心した。

（こいつは、仲間かも知れねえぞ！）

「俺は商人だよ。」
「さうかい？　何しろ、此車にやスパイが二十人も乘つてるんだからな。俺はまたお前もさうかと思つたよ。」
「どうしてだい？」
だが彼は今度は愈々びつくりした。
（おどかしやがる。二十人！　穩かぢやねえや。だが、どうして此小僧がそれを知つてゐるんだ。どこまで此小僧は人を食つてやがるんだらう。）
「ナアに、俺たちに一人づゝ跟いて來たんだよ。餘り數が多いから一々顏が覺えてられねえんだよ。向うだつて引繼ぎの時にや、間誤つくだらうよ。ほら、」
少年は通路に立つてゐる乘客の方を、顎でしやくつて見せた。
「あれが、御連中だよ。」
（だが、何だつて此小僧奴は子供らしくねえんだらう。まるで四十になる俺と同年配でゝもあるやうな、口の利き方をしやがる。それに云ふ事だつて、理窟許り云つてやがる。顏付きにも似合はねえ野郎だ！　だが、待てよ。「俺たちに一人づつ附いてる、つてやがつたな。然らば何だ？　こいつ等は？
――彼は、然らばと云ふ言葉を、刑務所で覺えたのであつた。
――然らばこの小僧は一體何だ？」一人連れてゐてその癖、網棚から首なんぞ吊るしやがつて、横柄な顏をして大厨で寢てやがる。何を爲たんだ、何を。何者だ？）
「それで何かい。その、お前は一體何をやらかしたんだね？」
「何もやらかしやしねえよ。これからやりに行く處なんだ。だが、お前さん、何だぜ。俺と話しをしてるとお前さんの迷惑になるかも知れねえぜ。」
（此野郎。俺の言ふ事を先に言つてやがらあ。だが、どうだい、危ねえ處に乘り込んだもんぢやねえか。いけねえ。）
「そりや又どう云ふ譯でかい？」
「譯なんぞあるもんかい。俺たちと話ししてりや片つ端から跟けられるに決つてらあね。」
「だから、お前は一體何だ、と聞いてるんだよ。」
「俺かい？　俺は勞働者だよ。」
「勞働者？　ぢやあ堅氣だね？　それに又何だつて跟けられてるんだい？」
「勞働爭議をやつてるからさ。食へねえ兄弟たちが鬪つてるんだよ。」
「フーン。俺にや分らねえよ。だが、お前と口を利いてると、ほんとに危なさうだから俺は向うへ行くよ。そらバスケットを取つてくんなよ。」
「ほら。氣をつけなよ。」
「お前の方が、氣をつけろよ。飛んでもねえ話だ。」
彼は、針でも踏みつけたやうに驚いた。

（氣をつけろつてやがる。奴は俺を見拔いてやがるんだ。物騷な話だ。）
彼はバスケットを提げて、食堂車を拔けて二等車に入つた。二等車では、誰も坐つてもゐない座席に向つて、煽風機が熱くなつて唸つてゐた。
彼は煽風機の風下に腰を下した。空氣と座席とが、そこには十分にあつた。
焙られるやうな苦熱からは解放されたが、見當のつかない小僧は、彼に大きな衝擊を與へた。
（あの小僧奴、俺の子供位雛っ子の癖にしてやがつてー）それでゐて、その小僧っ子の見てゐ、感じてゐ、思つてゐ、言ふ言葉が、（親位な俺に解らねえなんて。）
彼は車室を見廻した。人は稀であつた。彼の後から跟いて入つて來た者もなかつた。
（どうにも疑もかけられなかつた。危え瀨戸際だつたよ、だが、小癪な小僧だよ。あいつは。）
彼と、彼を愕かした少年との間には、言葉の異ふ二つの國民位の、距離があつた。彼には、その少年は、云はゞ怪物であつた。警察や、町などで、彼の知つてゐた少年とは似てもつかない、妙な譯の分らないものであつた。それは、何か知ら追つかけられるやうな、切迫した感じで彼をつゝ突いた。彼は、その本能的な、その上、いつまでも人生の裏道を通らねばならないことから來る、鋭い直感で、大抵一切のことを了解した。今度はどの位だな、と思つてゐると、大抵刑期はそれより一年とは違はなかつた。――一年の人間の生活は短くない。だが、無賴漢共を量る時には、一年は概念的な數字に過ぎなかつた。その一年の間に、人間の生活が含まれてゐると云ふ事は考へられなかつた。それは自分には關係のない一年であつた。その一年の間に、他人の生活の何千年かを、蛹にしてしまふ職業に携つてゐる、その人間の一年では絕對にないのであつた。その人は、社會的に尊敬され、家庭的に幸福でありながら、他の人の一生を棒に振ることも出來た。彼には三百六十五日の生活がある！　彼には、三百六十五日の死がある。――
今度は、三ケ月は、婆婆で暮したいな、と思ふと、凡そ百日間は、彼には婆婆の風が吹いた。家の構へで、その家がどんな暮し向きであるかを知つた。顏や、帶の締め工合で、そいつが何であるかを見て取つた。
だが、あの不敵な少年は、全て解らなかつた。
（あいつは、二つのメリケン袋の中に足を突つ込んでゐた。輪になつた帶の間から根性に似合はない優しい顏が、眠つてゐた。何を考へてゐるんだか、あの眼の光は俺には解らなかつた。旦那衆のやうに冷たくは光らなかつた。憤つて許りゐるやうな光でもなかつた。涙を溜めてもゐなかつた。だが、俺

を一度でおどかしやがつた。フン、俺も大分燒が廻つたな。あんな小僧つ子の事で、何だ、グズグズ氣をとられてゐるなんて、他事ぢやねえや、こちとらの事だ。間誤ついてゐると、細く短くなつちやふぞ。)

汽車が、速度をゆるめた。彼は、眠つた風をして、プラツトフオームに眼を配つた。プラツトフオームは、彼を再び絶望に近い恐愕に投げ込んだ。

白い制服、又は私服の警官、四五十人もそこに網を張つてゐた。

汽車はピタツと止つた。

だるい、ものうい、眠い、眞夜中のうだるやうな暑さの中に、それと似てもつかない渦卷が起つた。

警官が、十數輛の列車に、一時に飛び込んで來た。

彼は全身に惡寒を覺えた。

(畜生! 大袈裟に來やがつたな。よし、かうなりややけくそだ。)

恐愕の惡寒が、激怒の緊張に變つた。七首が彼の懷で蛇のやうに鎌首を擡げた。が、彼の姿は、すつかり眠りほうけてゐるやうに見えた。

制服、私服の警官隊が四人、前後からドカドカツと入つて來た。便所の扉を開いた。洗面所を覗いた。が、そこには誰も居なかつた。

「この車にや居ない!」

「これは二等だ、三等に行け!」

「發車まで出口を見張つてろ!」

二人の制服巡査が、兩方の乘降口に殘つて他のは出て行つた。

プラツトフオームは、混亂した。叫び聲、毆る音、蹴る音、が仄暗いプラツトフオームの上に擴げられた。

彼は、懷の七首から未だ手を離さなかつた。そして、兩方の巡査に注意しながらも、ホームを見た。

改札口でなしに、小荷物口の方に向つて、三四十人の人の群が、口々に喚き、罵り、毆り、髮の毛を引つ摑みながら、搖ぎ出した岩のやうにノロノロと動いて行つた。

その中に、(見當のつかなかつた小僧)が小荷物受渡臺の上に彼自身でさへ驚くやうな敏捷さで、飛び上つた。そして顏中が口になるほど、鋭く大きい聲で叫んだ。帽子を引き千切るやうにとつて、そいつを下に叩きつけた。メリケン粉の袋のやうなズボンの一方が、九十度だけ前方へ撥ね上つた。その足の先にあつた、木魚頭がグラツと搖れると、そこに一人分だけの棒を引き拔いた後のやうな穴が出來た。

「同志! 突破しろ……」

少年が鋭く叫んだ。と同時に彼の足は小荷物受臺から擾はれて、尻や背中でゴツンゴツンと調子をとりながら、コンク

リートの上へ引きずり下された。

汽車は靜に動き出した。兩方の乘降口に立つてゐた制服巡査は飛び下りた。

(畜生! 辨當も買へやしない。何だ、あれは、一體。)

思はず、彼は深い吐息をついた。そして、自分の吐息の大きさに慌てゝ、車室を見廻した。乘客は汽車が動き出すと一緒に、長くなつたり、凭れに頭を押しつけたりして、眠りを續けた。

(何者だらう? あいつ等は一體、護送されてゐるのなら、捕縛をかけられてゐなけりやならないんだのに。奴等は手ぶらでゐやがつた。解らねえ。俺にや分らねえよ。(突破しろつ!)と、あの小僧奴怒鳴りやがつた。何だつて突破しろなんて云ふんだ。(遁げろ)つて何故云はねえんだ。何が何だかさつぱり譯が分らねえ。何分、いゝ度胸だよ。蹴飛ばしやがつたな。ボコツと頭が鳴つたぐらうな。氣持ちは惡くねえさ。いゝ氣味だよ。ところで俺は、えゝつと、どうしたらいゝかな。この附近で一仕事爲た方がよかないかな。何しろ、あんなにあそこに集つてる處を見りやあ、外の處が手薄になつてるに決つてる。それに、決つてる「それに近くてやりやあ、あいつ等が目星をつけられらあな。さうだ。何でも構はねえ。此次に止つた處で降りてやる。だがあいつ等たあ一體何だ? 途方もねえ大仕掛な野郎だちだ。二十人も一塊りになつて、乘り込んで行きやがる。全て滅茶苦茶だよ。捕るのを覺悟で行きやがるんだもんな。俺はそんなへまはやらねえよ。一人でなきや駄目さ。それにしても、奴等は俺とは仕事が違ふらしいや。でなけや、一人が一人づつ連れて歩いて仕事が出來る譯はないからな。)

汽車は沿岸に沿うて走つた。傷口のやうな月は沈んだ。海は黑く眠つてゐた。

彼の、先天的に鋭い理智と、感情とは、小僧つ子の事で一杯になつてゐた。

四十年間、絶えず彼を毆りつゞけて來た官憲に對する、復讐の方法は、彼には唯一つしかないと信じてゐた。そして、その唯一つの道を勇敢に突進した彼であつた。

その職術は、彼の(家)に歸れば、どの仲間もその方法に據つた、唯一の道であつた。

が、乳色の、磨硝子の靄を通して灯を見るやうに。監獄の厚い壁を通して、雜音から街の地理を感得するやうに。彼の頭の中に、少年が不可解な光を投げた。

靄の先の光は、月であるか、電燈であるか、又は窓であるか、は解らなかつたが光である事は疑ふ餘地がなかつた。

光を求めて、蟲は飛んだ。

彼は蟲のやり方を取つた。が、人は總て蟲のやり方でやらねばならないと云ふ法はなかつた。外のやり方もあつた、が

彼には、外のやり方が解らなかつた。

「譯の分らねえ小僧たちだよ、奴等は俺たちとは異つた眼を持つてやがるんだよ。無氣味な、末恐しい小僧たちだよ。そのくせ、いやに明けつ放しでゐやがる。全で、良い事でもしてるやうな調子だよ。俺にや、殘念だが解らねえよ。怪我のねえやうにやつて呉れ。」

汽車は走り續けた。

彼は、警官の密集を利用しようとする、本能的な且つ職業的な彼一流の計畫を忘れて、その小僧つ子に、いつか全幅の考へを聴はれてしまつてゐた。

プロレタリアの乳

どこへ行かうか、彼等は思ひ迷つた。

どこへ行くと云ふ當は無かつた。が、今居る處に止まつては居れなかつた。涼しさに、ほつとしてゐると、もういつの間にか、亜鉛屋根や窓硝子が、寒さうに顫へ出して、ガチガチと齒を嚙み鳴らし始めた。

汽車の笛が、解剖用のメスのやうに光るレールの上を傳つて、ズツと遠方から沁みて來るやうになつた。

彼は逞しい腕を持つてゐた。渡航用カバンのやうな分厚の胸を持つてゐた。頑強な體力から湧いて出る、勞働に對する渴望を持つてゐた。

放浪、旅、さすらひ、は美しい夢であつた。それは彼自身だけでの生活の間は、彼をどんなにか教育した。學校で學ぶ事の出來なかつた彼は、一本の木も草もない岩石の中に、鑿"岩機を掘り進んだ。椰子の林の中を流れる洋々たる河に、デツキの錆を落しながら溯航した。八層樓の大建築の屋上で、一本のロープにブラ下りながら、大東京を（視察）した。それ等の生活は、力強く脈打つてゐる彼の心臓の内側に、殺さなければ削り取る事の出來ない、信念を彫り込んだ。

彼の掘り進んだ山腹を流れる水は、四萬キロの發電所となつた。彼の打ち込んだ鋲は、一萬噸の汽船になつた。彼が尻鍬をし、型枠を外した八層樓には、幾百の會社が事務を取つた。彼が運び歸つた綿花では、數千萬の人たちが寒さを防いだ、それを彼は自ら敎へた。それは人々に無くてはならぬものであつた。そして彼は、人人に無くてはならぬものを作るために、波打つ腕を振ひ、鞴のやうに荒々しく、その大きな胸を呼吸することを望んで止まなかつた。

彼の仲間たちは、皆彼と同樣に、その體中の筋肉と、その微細な頭腦の活動による貢獻とを、人々に與へたかつた。

彼等は生産し、與へ續けて來た。

けれども今は、彼等は去らねばならなかつた。

大小の煙突が、煙なく、寒く晩秋の風に吹き曝されてゐた。

彼等の工場は破産し、閉鎖されねばならなかつた。決して、人々にモスリンが行き渡つてしまつたからではなかつた。彼

の愛すべき一人の子供でさへ、未だモスリンにありついてはゐなかつた。

實彈演習のための野砲隊のバラツクのやうに、工場は人氣がなかつた。昨日まで殘飯や下水を漁つてゐた鼠達も、數千の彼の仲間たちと、どこへか引き移らねばならなかつた。

そこには廢墟があつた。擬寶珠の除れたニコライの廢墟、搖れ落ち燒け崩れて、鐵骨だけが殘つた三越の廢墟、それは地震の生んだそれであつた。

が、これは、一二の重役が、爛れ切つた歡樂を追ふために、橫領費消した結果なのであつた。

總ての努力が盡された。忍從があつた。怖しい忍苦であつた。その忍從が個人で試みられたならば、アツシジのフランシスのそれにも增したものであつた。彼等は、老いたる母や、いたいけな子供たちをも、自分と共に飢ゑに堪へしめた。寢ねながら雨に打たれさせた。獅子の餌食となるため、演技場に追ひ込まれた、原始キリスト敎徒たちにも似てゐた。

鬪爭があつた。略奪に對する抗議であつた。罪なくして餓死せしめられる事に對する抗議であつた。

野を橫切り、山を越え、川を涉つて、彼等は進んだ。パンを求めるために、彼等は進んだ。が彼等の行く手には無數の、堅固な障礙物が設けられてゐる。そして、濃い毒ガスが、彼等の目的物を視界から誤魔化してしまつた。

線路は續いてゐた。その鋭い光は、一直線にどこかの外國へでも續いてゐるのではあるまいか、と思はれるほど、淋しく悠久な光を以て續いてゐた。

彼等親子三人は、晩秋の風に嚙まれて淋しく立つてゐる、停車場の待合室にゐた。

彼等の外に、數百人が廣場に溢れてゐた。子供の泣く聲や、大人たちの罵り合ふ聲やが、喧しく構內に響いた。が、その喧騷にも拘らず、群集の上には、秋の空のやうに冷たく澄んだ涙しさが、蔽ひ被さつてゐた。

今、淵は退いてゐた。暗礁は頭を水面から上に出してゐた。けれども、もう直ぐに滿潮が泡を嚙みながら、暗礁を呑み込んでしまふ。彼らはその暗礁の上にゐるのであつた。止つてはゐられなかつた。が、行く事も出來なかつた。

線路は、外國にまでも、國境を越えて續いてゐた。その線路には大きな都會、小さな村落が、繩の大小の結び目のやうに連なつてゐた。

たとひ、どのやうな陰氣な、打ち沈んだ、不景氣であらうとも、その無數の結び目のどこかには、彼等を容れる處があり得はしないだらうか。よしんば、今まで彼等が結んでゐた、その小さい貧しい結び目が斷ち切られた場合であるにしても、その他の大きな結び目には彼等を容れ得る處がないだらうか。

晩秋の風は、霜の氣を明日に含んでゐた。冴えて高い晩秋の空は、雪の輝きを潛ませてゐた。總ては、自然の威嚇の前に、段々緊張し、閉ぢ籠り、凝り固る用意を怠らなかつた。蓑蟲は口を閉ぢた。百舌鳥は蛙や小蟲を木の枝に刺した。蜂は蜜を、蟻は倉庫にクリームを、冬中の用意に貯へ終つた。

だのに、彼等は、たとひ家があつたにしても、その屋根から追はれた。そして行く處は、(どこへなりとも) 勝手であつた。

一九二〇年代から後の、プロレタリアの子供たちは、故郷を持つと云ふ事がなかつた。

彼等の故郷は疾走してゐる汽車の下か、一本の枕木でしかなかつた。

彼は、驛前の廣場や待合室に溢れてゐる、昨日までの「同志」を見た。

彼等と共に縣廳にも押し寄せた。山河を海嘯のやうに押し切つて、××××雪崩れ込んだ。

列車が入つた。

目に見えない絲で固く結びつけられてゐる、驛前の群集は、思ひ思ひに、各々の箱の中へ乘り込んだ。

——汽車が動き出せば、テープは切れるのだ。折角あそこまで訓練されて來た集團運動の組織は、たとひ失はれないまでも、一先づ打ち切れてしまふんだ。——

彼は、三つになる娘を膝の上であやしながら、窓の外を眺めた。

群集は半分に減つてしまつた。古枕木の柵に凭れて、列車に淋しい目を送つてゐる、幾人かの同志があつた。

廣場前の大通りは、明日も明後日も、ポプラの並木が、寒さに顫へ續けるであらう。大通りの向うには、龜の甲のやうに、低い丘がズツと續いてゐた。丘には桑の木がブラシのやうに生えてゐた。

その丘の向うに河があつた。河に沿うて彼等の工場が建つてゐた。

彼等の工場であつた、その工場が彼等を搾り、彼等の仲間の幾百人かを、生きながら鰻のやうに引き裂きもした。そこで數多くの悲劇が生れ、死んだ。

一日も、一時間も早くそれから遁れたい、彼等の工場であつた。が、今では、そこは懷しい彼等の工場であつた。

汽車はプラツトフオームを離れた。

二つの驛で乘り換へた。

そして、今、汽車は一晝夜走つても紛れ道のない、大幹線を走りながら夜に入つた。

夜に入ると共に、急行に變つた。

強制移民、又は追放者である、渡航鞄は、子供の牛乳を買つて來るのを忘れてゐた。

子供が、餘り泣くので、デツキへ出て搖りながら、それを思ひついた。

「駄目だよ。お前牛乳を買はなかつたんだらう。お腹が空いちやつたんだよ。」

彼は、女房へ子供を渡した。女房は子供に乳房を與へた。が、それは乳房を與へたゞけで、乳を與へはしなかつた。

乳房から乳が出ない結果、子供はやけになつて泣き喚いた。

同乘客は顰めつ面をした。

「あんなに子供を泣かすなんて。」と小聲で非難したおかみさんもあつた。

「うるせえなあ。」と、眠りを覺された男が呟いた。

彼は同乘客の迷惑を感じた。よしんば同乘客の迷惑がないにしても、自分の子供を乳のないことのために、そんなにも抉られるやうに泣かせたくはなかつた。

彼は子供に對する表しやうのない深い憐みに捕はれた。乳を買ふ事を忘れるなんて、彼は自分たち夫婦の粗忽さを後悔した。彼は後悔して、自分自身を責めつけて、車掌室へ子供を抱いて行つた。デツキへ出た、だが、それでも子供は泣き續けた。

彼の深い憐れみにも拘らず、子供は益々喚き續けた。足をバタンバタンさせて狂ひ泣いた。憐れみでは、腹が膨れないことは勿論であつた。

「あつちに行つてて下さい。」

乘務車掌が云つた。

「はい、あのう、此次に止る驛までどの位時間がかゝりますか？」

「えゝつと、未だ二時間と十七分かゝりますね。」

車掌は、大福餅位の懷中時計から、時間を引っ張り出した。

どうもありがたう、と云ふべきである事も何も、彼は思ひ浮ばなかつた。二時間と十七分！　その間、子供は泣き續けるんだ。もがき續けるんだ。小さな、軟い體を自分自身で消化しなければならないんだ。

思はず、彼の雙の腕に力が籠つた。急にスキツチでも入れたやうに、子供の叫喚は新に高まつた。彼自身も子供と歩調を合せて喚きたくなつた。足をドタバタさせたかつた。

疾走してゐる汽車が呪はしかつた。いつそ突如！　轉覆して乘客全部が、忌々しい、苦しい、餓じい、寒い、此世の中から綺麗薩張りと、お別れしたらいゝのに、と思はずにはゐられなかつた。でも、まだ走り方が足りなかつた。遲すぎた。速く速く、飛んで行け。子供を引つかゝへた彼は、遊動圓木に撥みでもつけるやうに、身を前後に搖ぶつた。二十本

の導火線に火をつけ終つて、堀鑿から這ひ上らねばならない、馴れない坑夫の焦燥で、彼の頭の中は渦卷いた。

今までゝも、屢々あつた事ではあつたが、彼は、何だつて子供なんぞ產んだんだらう」と云ふ考に打っ衝いた。が、それはアルコールガス爆發のやうに、瞬間的のものであつた。一つ考へに長く留つてはゐられなかつた。後から後から、解決しなければならない。が、どうしても解決することの出來ない問題が、嘔吐のやうに湧いて來るのであつた。

子供は抱かれたまゝ、足をドタ〳〵させ續けた。その軟い眼の緣には、可哀相な三十女に見るやうな、薄暗い隈が生じた。その上に用心深さうな、遠慮した眼が半分開いてゐて、睫毛が疎にハツキリと下眼蓋の方に蔽ひかぶさつてゐた。渴いた喉のやうに眼からは涙の影も光らなかつたが、餓と渴きが燃えてゐた。もう、子供子供した乳の匂ひも、その頰に匂はなかつた。

小さな惡魔のやうに、泣き喚いた。

彼の心のやうに夜は暗かつた。何のためにか彼の氣持は、列車と同じく驀進した。が、汽車は當てがあつたが、彼は何のために急ぐのか、自分でも分らなかつた。

三つになる娘の胃の腑は、熱のある脣のやうに乾いてゐるに違ひないことを、彼は知つてゐた。餓じいであらう。渴くであらう。それは分つてゐる。だが、そんなにやけになつて泣かなくても、そんなに責めるやうに喚かなくてもいゝではないか。

——云ふまでもなく、父や母の手拔かりであつた。手拔かり位では濟まないかも知れない。いや全くそんな事ではない。これがたゞ腹が空いたゞけの事だからいゝけれど、もし疫痢でゝもあつたらどうだらう？　二時間と十七分の間には完全に、手遲れになつてしまつてゐる。見す〳〵死んで行くのを、藻掻き死にゝ、終ひには藻掻くことも出來なくなつて死んで行くのを、默つて見てゐることになるんだ。——

彼は、泣き叫ぶ子供の顏の上に、胴中を締められでもしたやうに、ポトリと涙を落した。

——たゞ、腹が空いたゞけだから、いゝけれど、と俺は思つた。病氣でないからいゝと思つた。病氣でもないのに、丈夫でピン〳〵してゐて、大きくなるために營養を欲しがつてゐるのに、「たゞ腹が空いたゞけの事だからいゝ」と、俺はたとひ一分間でも考へた。なほ惡いではないか。なほ惡い。俺が餓じがつて育つて來たやうに、此子を餓じがらせて育てゝ良いと云ふ法はない。それは解つてゐる。だが、どうすればいゝのだ。——

汽車は大小の結び目を、ひつたくるやうに手繰つて進んだ。

泣き勞れたのか、ひもじさの餘り心身が消耗したのか、哀

れな小さな顔に、陰氣な、淋しい表情を固定させたまゝ、小さな生物は眠りに落ちた。その眠りの間を、發作が二分毎位に起つて、痙攣に似た泣聲を揚げさせた。

彼は、娘をそのまゝ年老いさせたやうな女房に抱かせた。

そして、ホツとして車室を見廻した。同乘客に濟まない氣がした。と、一方では無理やりに、彼等數百の勞働者を、例外なしに「たゞ腹が空いただけの事」の方に追ひ込んだ、牛脂の固まりのやうな、重役の幻像を睨みつけた。そのフエツトの固まりが自分の形になつて、娘の眼に映る！

——俺は子供を飢ゑさせた。——

數ケ月に亙る窮乏と、奮鬪と、緊張とに加へて、列車の動搖と人いきれで、意識にかゝり初めた霧が、再び子供の飢ゑと云ふ風で吹き拂はれた。

——さうだ！　食堂車があつた！——

彼は座席の横に置いてあつた、今は飲み盡して空になつた、(水瓶ビール瓶)を取り上げると、上着の下に隱しもしないで、張子の重役の首でも提げるやうな手つきで引つ摑んだまゝ、車室を突き進んだ。

一緒に乘り込んだ彼の仲間たちも、二つの乘換の間に、振り落されでもしたやうに、數が減つてゐた。

昨日までは、同じ目的を抱いて、手を取つて進んで來た仲間ではあつたが、今では、彼等の共同の目的は、血の氣の通はない一つの抽象に變つてゐた。

新らしい、出來たての一錢銅貨を牛脂で揚げた、そつくりの、彼等の支配人は、今は彼等から姿を隱してしまつた。その呪ふべき、彼等の貯金までも吸ひ盡した、生きた人間は、高い塀の中の植込みに圍まれた、幽邃な座敷に入つてしまつた。そして、その塀際には、請願巡査が「あどけない顔」をして草を拐つてゐた。

しよつちう、揚げたての一錢銅貨の實在に對して、生きた反抗を持つてゐるやうに育つて來た彼等は、その對照が隱れると、どこにでも、時には仲間に對してさへ、心の中を吐きつけ勝になるものである。

が、今は渡航鞄の事について語つてゐるのだ。

彼は食堂車に入らうとした。けれども、もう時間が過ぎてゐたので、食堂車の扉は閉ざされてゐた。

不思議な事には、その扉が開かないことを知ると同時に、撥かれでもしたやうに、彼は元來た方へと、駈け出した。

——ちよつとの間でも、若し俺のゐない間に、線路の中に娘ごと飛び込みはしなかつたか！——

と、彼は感じたからであつた。

——馬鹿な！——

と、彼は、その馬鹿氣た感じに自分自身で嘲笑し、水を打つかけながらも、通路にはみ出した足を踏んづけ、頭を腕で

こづきながら飛んでゐた。

何だつて、そんな不自然な、あり得べからざる豫感が彼を襲つたのであるか。それは全く唐突な、理由のない豫感でなかつたか。寧ろそれは狂的でさへもあつた。

けれども、彼はその狂的な感じを幾度、實際の出來事として經驗しなければならなかつたか。又は、何等の豫感もなく、極めて平氣で暢氣でゐた間に、どんなに怖しい事柄が彼を待伏せしてゐたか。

それ等の怖しい出來事について、彼が、その原因であり得た事は、殆んど無かつた。種は蒔かれないで、出し抜けに生えた。子供が荷馬車の轍の下に這ひ込んでしまつた。そして、ぐちや〳〵になつて拾ひ集められた。

彼は漸く骨を折つて育て上げた、五つになつた男の子を、「馬車の下に這ひ込め」なんて吩咐けて出た事はなかつた。それだのに、晩酌の一合に、子供の寢顔を見る事が出來るのを樂しみに歸つて見ると、女房もゐないのに、子供だけは、屑桶に捨てられた魚の「あら」見たいになつてゐる！　歸つて來た半狂亂の女房を毆りつけて、も一度薪雜棒で毆り足さうとすると、近所の人から、「おかみさんが、向ひの家に酒買ひに行つてる間に、坊やが、荷馬車の後輪に潛り込んだのだ。」

と云はれた。

「それでお前さんを、工場に迎ひに行つたのだが行き違ひになつた」のであつた。

彼は振り上げた薪雜捧を、そのまゝ子供でも抱くやうに、ひしと抱きかゝへて、ポロ〳〵涙を流した事があつた。

そんな時でも、「日が暮れやがる」のであつた。會社の原料を積んだ荷車であつても、何でもかでも、休めば「給料」は取れないのであつた。

も一人の子供は、七つになつてゐたが、彼が工場から歸つて、頰ずりをしてやるとすぐ痙攣を起した。痙攣が濟むと、もう死んでゐた。

「俺にや小供は育たねえ。」

と、思ひ込んでゐたのであつた。そのたゞ一人の殘された子供が、ピン〳〵してゐるのに、「腹が空つた」ために、死ぬほど泣き喚いてゐるのであつた。そして、泣き勞れた擧句、死ぬ時のやうに、時々、發作的な泣聲を揚げるのであつた。

「今度子供を殺したら、手前も一緒に殺しちやうぞ！」

彼は、女房を十分に嚇し込んでおいた。

——だから、だから——

彼は、追つかけられる梨盗坊のやうに、フツ飛んだ。そんな眞夜中に、町中の盗坊なら兎に角、列車の中を駈けると云ふ法はなかつた。蹴飛ばされたり、突き當られたりした乘客達は、もう一晩中眠られないほど、愕かされてしまつた。そ

してぶつ〳〵呟いたり、怒鳴りつけたりした。

勿論、これらの悲慘な出來事が、渡航鞄だけを待つてゐたのではなかつた。渡航鞄よりも、もつと〳〵慘めな目に待ち伏せられてゐた仲間もあつた。

それは避けられない事であつた。何故かなら、此時代では總ての勞働者たちが、必要な時に××××仕組の上を歩いてゐる、豚以外ではなかつたからだ。多くの工業勞働者や農民のうち、一體どれだけの數が、職業病に命を取られないで天壽を完うし得たであらうか。又、その子供たちは、どの位多く若芽の時代に熱湯を打つかけられたか。

渡航鞄は、さう云ふ狀態で列車の最後部まで駈けつけた。女房は子供を抱いて、ユラ〳〵してゐた。列車の震動と、長い間の疲れと、營養不足と、恐らく物心ついて以來、決して十分眠らなかつた處の睡眠不足とで、陽炎のやうにユラユラしてゐた。

彼は、取り敢へず安心した。悲劇は起つてゐなかつたからだつた。だが、悲劇は起つてゐなかつたのだらうか。四五年前別れた、一人の同志がN市にゐる事を、停車場の待合室で思ひ出し、そこへ行く事にした事は、安全確實な企てあつただらうか？

その賴つて行く同志は、蒸溜水のやうに純粹な、おまけに提灯見たいな穩かな男であつた。その男を愕かす事は、どんなに骨を折つても出來なかつた。彼は蓮のやうに泥の中に根を下してゐた。だが同樣に、生活は蓮の葉のやうに水面に危く泛んでゐるのであつた。

防波堤の隅や、石垣の隅や、岩壁の凹んだ部分などに、木屑や、野菜の切れつ端や、その他のあらゆる屑が、波のまゝに吹き寄せられる。勢よくモーターボートやランチが走り過ぎると、塵埃の浮島は一度に壞れてバラ〳〵になる。中にはバラバラになつたゝめに沈んで行く切れつ端しもある。

その藻屑の運命にも似た、渡航鞄であり、女房であり、提灯ではなかつたか。

彼は、女房と並んで腰を下した。

「少しは眠るかい？」

と訊ねようとした時、呻るやうに泣き出した。その聲は、自分の小娘の泣聲とは思へなかつた。單純な泣聲ではなかつた。嚙まれて死に瀕した犬が、微に上げ得る最期の嘆きに似てゐた。未だ三つにしかならないのに、路傍に行き倒れた老人の、喉を鳴すのと同じ響きが、その泣聲に血を混ぜた。

彼は再び、反射的に立ち上つた。

「死ぬのではあるまいか？　病氣ではなしに、餓ゑ死にゝ死ぬのではあるまいか？」

じり〳〵と腹を燒かれ、喉を締め上げられて、これから燃

え上らうとする若い命を、風を與へないで消して終ふやうな、そんな殘酷な眼に合はせる！　生きたまゝ蛇の腹の中で死ぬ蛙、その同じ苦しみを今、彼のいたいけな小娘は味つてゐるのであつた。

それを彼は又、「ぢつとして見て居」なければならないのであつた、「ぢつとして見てゐられる事」ではなかつた。けれども、彼にはどうする事が出來よう、若しそれが可能でさへあるならば、彼は娘の食ふために、彼の指さへ與へたかも知れない。彼は胼胝だらけの掌を眺めた。その眼を子供に移す時には、子供の顏は、濃霧の向うに僅に見える小島のやうに霞んでゐた。

若し、此小娘が、二時間と十七分を待ち切れないで、今此處で、藻掻き死に、狂ひ死にゝ、死んだとしたらどうであらう？　種々な慰さめや、哀悼の言葉や、もう役にも立たぬミルクの贈物などが、乾いた畑に灑ぐ雨のやうに降りかゝるだらう。それよりも「乳も持たずに乘り込んだ」無謀の父母を責めるであらう。「せめて、ビスケットやウエーフアー位でも持つて乘るのが、親の勤めだ」と、云ふであらう。

誰が渡航鞄や女房の心臟の中から、親としての考への餘裕を引き摺り出したか！　又はそれ程逞しい體軀で働き續けた、渡航鞄の中味を奪ひ去つたか！

堪へ難い焦燥は、渡航鞄の體を落ち着かせては置かなかつた。ヒク〳〵と、彼はつゝかれたやうに體を顫はせた。悲しみと、憐憫と、憤りとの三つのプロペラーが、素晴らしい速さで回轉した。

「今、俺たちをこんな目に會はせた重役達は、絹夜具にくるまつて、暖く寢てゐやがるんだ。俺達八百と、その家族二千人とを、餓死の境に叩き込んでおいて、奴等は消化劑と睡眠劑で眠つてゐるんだ。奴等の子供たちは、一人づつ、理想的な乳を持つた乳母に抱かれてゐるんだ。畜生！」

彼は心の中で燃え上る焰の火華で、躍り上らうとする足を、立つことによつて抑へつけた。

「だが、「今は憤つて計りゐる時でない」ことを彼は知つてゐた。「いゝ醫者はどんな時でも、冷靜さを失はない。今は、子供に乳をやらねばならない時だ。」

が、彼はどうして、それを手に入れゝばいゝのか。

彼は、半分夢中で、車掌室へ入つた。そして、そこの腰かけに自分の體を投げつけた。

車掌は、硝子扉を越して客室を見た。客室は混んではゐなかつた。

「向うに行つてゝ呉れませんか。」

車掌が云つた。

「えゝ。」

彼は又、つゝかれたやうに立ち上つた。

「もう、どの位すると次の驛につきますか？」
彼は、ボンヤリ車掌の顔を見ながら訊いた。
「あと、一時間と四十分ですね。だが、どこか工合でも悪いんですか？」
「えゝ」
彼は何氣なくさう云つた。が、ふとわれに歸つて云つた。
「私ぢやないんですが、子供に乳を忘れて來たので、子供がひどく飢じいのです。」
「あ、さうですか。ぢやあ、別段次の驛まで待たなくても食堂車で買つたらいゝでせう。」
「えゝ、行つて見たんですがね、もう寢てゐるんですよ。」
「起きませんか？」
「起きなかつたですよ。」
「ぢやあ、私が起して見ませう。」
車掌は直ぐに立つて、氣輕な歩調で先に立つた。
渡航鞄の廣い胸の中は、感謝の念が入り切れなくて、眼にまでも溢れ出さうになつた。
子供の前を通る時、彼は女房に云つた。
「車掌さんが食堂を起して下さるさうだから、大抵乳が手に入るだらうと思ふよ。」
さうして子供の頭を撫でた。
「あゝ、此お子さんですか。さつき泣いてましたね。腹が空いたんぢや堪りませんよ。可哀相にね。」
車掌も、子供の頭を撫でた。
女房は車掌に、泣くやうな顔で笑つて見せた。
全身が飢ゑたゝめに火傷した子供は頭を撫でられて、再び切るやうに叫びを上げた。

食堂車の扉は、譯なく開いた。それは彼が慌て過ぎてゐたから、通路の扉でなくコツク場の扉を開かうとしたから、開かなかつたのであつた。
「ねえ、君、君、ねえ、ボーイさん。」
車掌はテーブルの上に長くなつて、寢てゐるボーイを搖り起した。
ボーイは、夢の中の人間でも見るやうに眼を開いた。
「牛乳はありませんか？」
車掌が云つた。
「時間外ですから。」
ボーイは、夢の續きのやうに呟いた。
「どうするんですか？」
向う側に寢てゐた、コツクが眼を覺して訊いた。
「赤ん坊が飢ゑてゐるものですから、時間外だとは思ひましたけれど、車掌さんに起して頂いて、濟みませんが、少し分けて頂けないでせうか。」

渡航鞄がコツクに云つた。
「あゝ、あんたの子供さんですかい。」
コツクは、彼の見窄らしい風を見るといきなりテーブルから跳び下りた。
そして、コツク部屋へ入つて行つた。
コツクは、サイダーの空瓶に入つてゐる牛乳を棚から下しながら、思つた。
「車掌なんぞ頼みやがつて、小生意氣な野郎だつたら、百圓一出したつて、一滴だつてやりやしないんだが、あれぢや、車掌まで見兼ねて連れて來たんだよ。きつと。えゝつと、これだけつか無いんだが、やつちやうと、朝コーヒーに入れるのが無くなつちやうぞ。えゝツ、コーヒーに乳が入らなくたつて、飢ゑやしないや。やつちやえ、やつちやえ。」
コツクはもう夜が明けでもしたやうな、晴れ晴れしい顔で、サイダー瓶をブラ下げて出て來た。
「これだけつかありませんよ。コーヒーに入れるだけのやつですからね。だから、マア、これだけでゝも、一時を凌いどいて下さいな。驛に着きや、又取つといて上げますからね。」
「どうも、ありがたう御座いました。これで小供が助かりました。御禮の申し上げやうもありません。」
渡航鞄が云つた。
「どうも有りがたう。叩き起して濟みません。」
車掌が云つた。
「いゝえ、なあにお互様ですよ。貧乏人はお互でさ。」
「で、お金はいくら上げればいゝでせうか？」
渡航鞄が訊ねた。
「お金？　要りませんとも。百圓持つて來たつて、腹の膨れた白い手にや賣りませんよ。「時間外」でさ。時間外にや取引ぢやありませんや。ハ、、、。若しあるんだつたら、や、どうも失禮、又、何かお子さんに菓子でも買つてやつてお呉んなさいな。」
通り雨のやうに、渡航鞄の眼から涙が落ちた。がそれは晴れ晴れしい涙であつた。

——一九二六、一〇、一七——

マドロスと鼠

日本の船舶トン數は、歐洲大戰後引續き、英米兩國に次ぎ世界第三位を占め、その航路は世界の各方面に渉り、到る處に日章旗が飜つてゐる。かくて日本の海運は國際的に優越なる地位をかち得た。

* * *

しかし第三位といふのは、單に數量の比較であつて、これを船そのものゝ素質、即ち、速力、年齡、トン數、機關等に至つてはすこぶるそん色あるのは殘念な事である。

英國の如きは、二十から二十一ノツト二十隻、二十一ノツト以上は三十一隻ある。米國は二十から二十一が四隻、二十一以上も四隻ある。

もしそれ、日本に至つては十二ノツトから十五ノツトがもつとも多く百三十五隻二十ノツトから二十一ノツトが僅に二隻で、それ以上は望んでも一隻もない。この點に於いては、イタリー、オランダ、フランスにも劣つてゐる。

* * *

それ許りなら我慢が出來るとしても、困るのは「古船」の多いことである。二十五年以上のいはゆる老朽船が、四百十一隻、八十四萬七千トンで、五年未滿の新造船は僅に二百二十隻に過ぎない。

地方の村落や、(有田ドラツク)などでは近頃敬老會などと稱へて、老人の慰安會などを組織することは誠に結構な事であるが、船に至つては二十五年以上の船齡に達したものは、到底競爭場裡に立つて優者の地位を占むることは出來ぬ。

今一つはトン數である。一千トン未滿の船は、英國に五千四百五十隻、米國には八百五十二隻、日本には一千九十七隻あるから、一寸驚かさせるが、さうかといつて、一萬五千トンの大型船は、日本には一つもない。英國の如きは、一萬五千トン以上四十九隻、二萬五千トン以上八隻、イタリヤで(さへ)二萬五千トンの船が二隻ある。ドイツで(さへ)「今や」二萬トン以上の遠洋大型船が四隻ある。

* * *

こんな工合で、數量だけ多くても不具者であるから、實に問題にならぬ。

これには種々の理由があるが、要するに安物買ひの錢失ひで、(人命さへも大安賣りで)、三四年前から、一部船主の間に盛んに行はれた、外國の中古船輸入が大なる原因をなしてゐる。

餘り數字にのみ走るが、大正元年より今日に至るまで、船主の外國輸入船は、三百隻、十萬トンを算し、大正十一年より本年七月まで、正味五年間に輸入されたものは、百六十七隻、六十四萬トンの多數を占めてゐる。

その中、二十年以上の(老耄船)は、七十六隻、三十萬五千トン、即ち總輸入船の約四割五分に當つてゐる。

* * *

一體こんな半人足——の老朽船が、ドコからドウいふ理由で輸入されて來たのか。

英國の如きは、最近二ケ年半の間に三百二十五隻、約百十萬トンを賣却したが、その大部分は二十年以上の古船で、しかもその大部分は日本船主が買つた。のだから廢物利用も通り越して、寧ろ滑けいである。

英國では何故、そんなに中古船を賣却するのであるか、それは同國の船舶整理から出發したので、いはゆる、新式なる機關裝置の經濟船に振りかへ、能率を增進して世界海運界の覇者たらんとするのであつて、そのための廢物を讓り受けて覇者と競爭しようと云ふのだから、英國から見れば日本の海運界は赤兒の手を捩るやうなもので、問題にならぬ。

政府もこれには少々困つたと見え、今春、中古船の輸入關稅を引き上げたが、安いものにのみ目のつく日本船主には、そんな事には頓着なく、本年一月から最近(十月二十八日)までに、三十隻、十四萬トンの輸入があつた。

この老朽船が、內地近海から、遠洋方面に「荒れ廻つて」荷物の爭奪で、同志打をやつてゐる。

將來大いに憂慮すべき事である。私に云はしむれば、かん頭一歩を進めて、輸入船の禁止でも斷行せなければ、お互はます〳〵窮境に陷るのみである。

東○汽船會社ロンドン支店長　安井古藏氏談　東京××新聞

ところで、同じ日、その新聞記事をかつきり讀み終つた時、一通の嵩張つた手紙が、投げ込まれた。

それはかうである。

橋本君。どうだい、意外だらう？　かうして出し拔けに、僕の手紙を受け取るなんて。

何しろまる三年以上も音信不通だつたのだからね、今筆をとる段になると、實際一種の感慨に打たれざるを得ないよ。

あの震災の當時、面會を樂しんでN港に入港したのに、君は獄窓に繫留の身で可哀相に、良人故に苦勞する細君と、父

の入獄を知らない頑是ない民雄君とを、本船に迎へた時、「貴下の處には避難民の婦人がお見えになりましたね。」と、船員たちが云つたが、今日はもう、第三回の震災記念日だ。

今までもG町に手紙を出したが、いつも附箋つきで戻つて來た。通信の方法には隨分頭を惱ました。救助信號が打ちたかつた位だ。

「N市の警察に尋ねればよく知つてゐるには相違ないが、主義者の居所を敎へては吳れまい」と思つたりN勞働組合評議會に問合はせるにも、所番地が皆目分らない。そんな譯で延び延びになつてゐた所、どうだ！　君の隨筆「新聞」を發見したんだ。

樺太碇泊中の、腐るやうな退屈さに辛抱がし切れなくなつて文學好きのセーラーから借りた「文藝○○」の七月號に、思はぬ人間を見附けたぢやないか。早速、君が便所の中で鼻摘みな仕事をしてゐた時分の友人、北澤君にこの「アメリカ發見」を報告に及んだ。一方「文藝○○社」に君の住所を問ひ合せたのは云ふまでもないが。その返事の來ない中に、君に關する色々な文字が目につき出した。

中略、

かうして、ひどく骨を折つた擧句手に入れた文藝○○○、「夜の女」の頁をめくつた時、最初の一行、いや、半行も讀まないうちに「オヤツ」と叫んだものだ。長年音信不通の者が、讀者の一人として偶然にも、出し抜けにも、自分を「モデル」にした小說を讀む、この事實の方が、小說よりより以上に小說的ではないか！

そこで僕は、文學水夫に君を紹介せん事を努めた。不幸にして君から受取つた澤山の書信は、震災のため淸物と共に横濱で燒けたけれど、唯一の名殘を止めるものに、一九二〇年十月七日のN新聞、A電機時計株式會社の勞働爭議に關する記事があつた。それは航海術の書物の間に挾まつて、保存されてゐたのだ。で僕はそれを見せた。その結果彼等は、痛快な男として、橋本氏の人物を十分に窺ふことが出來た。と云つた。

「が、然し、こゝに解せぬ謎がある。」

と、彼等の一人が云ひ出した。

「それは、この新聞の記事に依れば、「夫人きし子は、長男良和（一つ）を背負ひ乍らM署へ出頭して差入物をすると共に、高等刑事監視の下に數分間、夫良規氏と對談の後、O町爭議團本部に引揚げた。」云々と云ふので、誠にこの夫にして此妻ありと首肯せしむるも、「文藝○○」七月號の隨筆「新聞」に依れば、

「自分は今戀をしてゐる。三十を過ぎてから若い娘を戀する云々と書いて居るのは如何にも不思議である。と云ふのだ。なるほど、これは尤も千萬だ。これだけ內助の功ある夫人、

しかも二人の子供のある中で、（或は其後又出來たかも知れない。君は子を作るのはうまい！）　他の若い女を戀するとは、けしからん！　と僕も同感だつた。

しかし、それも會つて話して見なければ、事情も分らない。第一、この曠陽館と云ふ下宿に、妻子揃つて起居してゐるかどうか、が旣に疑問なのだ、それで次の横濱、又は芝浦に入港するまで、この戀愛問題に就いての、臆測は保留することに、滿場一致可決した。

さあ、これからは僕の事を喋舌らして吳れ。あれから、君と別れて三年、僕もいろんな事を體驗したよ。

先づ第一に、他船と衝突した。向うの船は沈沒した。船長外一名を「行方不明」たらしめた。當然溺死したには相違ないが、死體が收容出來ない場合は、「行方不明」の文字を使用することになつてゐる。

海事審判は大阪で開かれた。が裁決の結果は僕の勝になり、結局先方は、「沈められ損」の「殺され損」僕は安全地帶（無罪）の殺人犯だ！

その後每年この日を命日として、寺に詣り讀經して貰つてゐるが、此お經の聲は海底の粘土の中の死者には聞えないで僕にだけ聞えるのだ。

然し、殺したゞけでもない。救けもした。日本海で十四日間絕食した、瀕死の漂流者を發見した。それは前記衝突事件の審判の通知を、無線電信で受取つた、かつきり一時間後の出來事だつた。一つの奇蹟ではあるまいか？

しかも、殺したのが二人、助けたのが二人。で、閻魔樣には帳消しだ。

これ等の出來事の後、T丸の御隱居樣を降りて、中風船の今の船に乘り換へた。

此船でも、いろ〳〵經驗した。岩手沖で、大暴風浪の最中に汽機の空轉からシャフトが折れて、スクリユープロペラーが海の底へおつこちて、全つきり中風の婆さん見たいに、自分では働きがとれなくなつてしまつた。

マストも折れよと吹き募る暴風、瀧のやうな雨、山のやうな怒濤、その中に足を拐ぎ去られた蟹見たいなTA丸は、運を「浪」に委せて、盆の中の小豆粒のやうにローリングした。

椅子が跳ね上つて、釘づけのテーブルが、無理に引き拔いた毛髮のやうに、板と一緒にけし飛んだ。ありつたけの抽出しは無政府狀態に亂舞し初めた。鍋や釜はストーヴの上から鰻の上のやうに逃げ出して、ブチ切れたり、海へ逃げ込んだ。が、それ處ではない。我々乘組員の足が、「踊り菌」でも食つたやうに、デツキにつかない。一切は「舞踏病」に罹つた。殘された生命の時間は、何分間であるか？

「今度こそは、いよ〳〵年貢の納め時だ。」と僕は思つた。

これが、遠州や九十九里ケ濱の海岸なら、助からない萬一もないではないが、屏風の如き三陸の海岸で難破したら、その結果はどうだ！　三井の二正丸が難破して、たつた四名の生存者を萬壽丸に拾つて、横濱に歸つた事は、君の記憶に殘つてゐるだらう。あの少し南だからたまらない。

場所が場所なら、時も時だ。鼻をつまんでもわからない、眞夜中の出來事だ。無線電信は間斷なく、

S、　O、　S、

を發信した。附近にも他船はあるが、いづれも、自分自身の運行すら自由でない。たとひTA丸の側迄來て呉れたとしても、手の下しやうはあるまい。

先年、國際汽船のRA丸が、大西洋上で難破した時は、英船ホメリツク號が、その「悲慘なる死に樣を見屆け」て呉れたさうだが、この黑ペイントのやうな暗夜では、「見屆ける」ことすら出來ない。

見よ！　暗黑の空に輝く四條の怪光を！

これTA丸が斷末魔の悲鳴をあげる、S、O、S、（救助信號）によつてアンテナ、ために灼熱して赤光を放つたのだ！

僕は觀念の眼を閉ぢた。

あらゆる手段は盡された。最後の試みが講じられた。

兩大錨は、ありつたけの錨鎖を延した。重量十數トンの錨、その錨鎖が、底なき貧婆の海にブラ下つて、その手を振つて宥恕を乞うた。ウインドラスの齒車は、重味に堪へかねてボロ〳〵と折れた。ブレーキバンドからは發火した。

だが、こんな方法でも三十七名の生靈を救ふ事が出來れば再び錨は捲き上る事が出來なくつてもいゝのだ。

その外に、數個のシーアンカーは船首から投入された。

此上はもはや殘された一つの手段もない。一切のベストは盡された。

海は飽くことのない兇暴さで荒れ狂つた。

僕は船乘りになつてから、死に直面したのはこれで三度目だから珍しくもない。

海は暴れた。が僕は靜に死の豫感に襲はれた。

「翌日の朝、夜の明けるまで生きられるか知ら？」

僕は「死ぬのに一番都合の良い人間」だ。何の未練もない。失ふべき何物も、自分の體以外には持たない。だが、十五を頭に、六人の子供を持つ船長は定めし、死にたくないであらう。その他のセーラーやファヤマン達でも、どんなに多くの切つても切り得ない執着に囚はれてゐるであらう？ツク〳〵僕は船長の横顏を覗いて見たのであつた。

橋本君、船主は安いボロ船を買ふ。その船主は耐震耐火のビルヂングに居る。そして、我々はボロ船の腐つたサイドで「この荒れ狂ふ、怒濤と戰ふ命の外、何物の失ふものゝない」僕である。その僕にしてなほ、捕へ難き、解き難き憂鬱さが

胸を蝕むその時、フト、僕の頭を一つの想念が掠めて過ぎた。

「俺は昨夜ハツチの横で鼠を見たぞ！」

それはかうである。船の沈沒する前には、船内の鼠は居なくなる。と云ふ傳說のあることだ。鼠は不思議に沈沒を豫知する。沈沒する前には必ず陸上に去る、と昔から云ひ傳へられてゐる。

兎にかく、この時僕の氣休めになることは事實であつた。

俄然、風位は北西にかはつた。今迄南東の風浪を受けて、何物をも嚙み碎く齒の形をした陸岸へと吹きつけられてゐた船は、こん度は反對に沖へ沖へと流され始めた。これで、危く二正丸の二の舞を踏まないで濟んだ譯である。

一晝夜の後、軍艦が來、救助船が來、二日の後には、人事不省の船體は釜石港に曳航されて。

次の出來事。

變り果てたる姿で

大榮丸横濱にかへる

甲板もイスもたきつくして
死を待つ船員が天井に遺書
發見したT丸の苦心

「横濱電話」北太平洋で遭難漂流中の第三大榮丸を發見救助した東京運輸のT丸は大榮丸をひいて四日無事横濱港外に到着したが大榮丸は見るも無慙の姿と變つてゐた同船が石炭に缺乏してからデツキの板木からイス、ベツトげんてい等いやしくも燃料となるものはみなたき盡された模樣で船内は大破し運轉士室の天井には赤インクで「人間の力ではこの上出來ない。あとは天命を待つばかり」と記してあつた船内には十數通の遺書が殘されてゐるが何れもジョンソン號に救はれた船長以下船員に手渡すまでは發表しないことになつた船長室に殘された航海日誌は一月十七日横濱を出帆してより、同月二十八日午後四時北太平洋漂流中まで記されてあるが、乘組員は何れも死を覺悟してゐたものであるT丸の船長N氏は語る

吾々は大榮丸捜索のため二月廿三日午後九時横濱を發し風の方向と潮流の關係から大榮丸漂流の場所を推定し三月十一日横濱を去る千五百海里の場所に發見するに至つたが風浪が激しいので近寄ることが出來ず並行のまゝ七日間押流され漸くひき綱を付けたが思はしく聯絡がとれず二十一日に至り漸く完全にひき船をすることが出來たから南方航路をとり十五日目の今日横濱に無事到着した吾々の功を誇るわけではないが大榮丸の如き大船を太平洋上で捜索救助したことは未だ曾て前例のないことである、尙本船の捜索航海日數は四十一日航海マイル數は四千五百マイルに上つた。

此新聞記事は、君も見たであらう。その時の悲慘なる光景を君に見せたかつた。ありとあらゆる木の部分は焚き盡してしまつたのだ。その上食糧の缺乏は犬を殺し、猫を屠り、鼠を狩り、猶、終に俵の藁を食べたと云ふ。殊に哀れを覺えたのは、最後まで眺めたらしい妻子と親しき人の寫眞を、枕頭に釘附してあつた事だ。

遮莫。決死隊として本船を離れた、三隻のボートと十九名の艇員は、何處の地點に海底の藻屑と消えし事か！

下　略

何しろ愉快だ、實に愉快だ。

君は資本家の傀儡に鞍替したと云つて、憤慨したものだ、さう云はれると僕も悲觀せざるを得ないが、しかし、「夜の女」を讀んだ時は遺に、懷しかつた。

兎に角今後便りをして呉れ給へ。

大浦仁平

橋本君

八月二十七日、樺太西岸、北緯、四十九度十分にて。

手紙を受け取つた男は、ひどく打ん殴られでもしたやうに、頭の中で濃い靄が渦を卷いた。

が、段々その靄が薄れて行くにつれて、ハツキリした陰繪が見えた來た。

穴の開いたボロ船に、どつさり勞働者が積み込まれて流れてゐた。

肥え太つた男が、陸から望遠鏡で眺めてゐた。その男の胸の中には大きな舌が「ベロツ」と出てゐた。

——一九二六、一一、七——

生爪を剝ぐ

夏の夜の、拂曉に間もない三時頃であつた。星は空一杯で輝いてゐた。

寢苦しい、麴室のやうなムン〳〵する、プロレタリアの群居街でも、すつかりシーンと眠つてゐた。

その時刻には、誰だつてゐなければならない筈であつた。若し、そんな時分に眠つてゐない者があるなら、それは決して健康な者ではない。又、健康なものでも、健康を失ふに違ひない。

だが、その（時刻）は眠る時刻であつたが、（時代）は健康を失つてゐた。

プロレタリアの群居街からは、ユラ〳〵とプロレタリアの蒸燒きの煙のやうな、見えないほてりが、トタン屋根の上に漂ふてゐた。

そのプロレタリア街の、製材所の切屑見たいなバラツクの一固まりの向ふに、運河があつた。その運河の汚ない濁つた溜水にその向ふの大きな工場の灯が、美しく映つてゐた。

工場では、モーターや、ベルトや、コムベーヤーや、齒車や、旋盤や、等、〻が、近代的な合奏をしてゐた。勞働者が、緊張した態度で部署に縛りつけられてゐた。

吉田はその工場に對してのある策戰で、蒸暑い夜を轉々として考へ惱んでゐた。

蚊帳の中には四つになる彼の長男が、腐つた飯粒見たいに體中から汗を出して、時計の針のやうにグル〳〵廻つて、眠つてゐたかますの乾物のやうに、痩せて固まつた彼の母は、寢苦しいものと見えて、時々溜息をついてゐた。

（一體どうするのが、俺には一番いゝのだらう。）

彼は、暑さにジタバタする小供の寢顏を、薄暗い陰氣な電燈の光に眺めた。

（一番いゝのは、俺が首を吊つてしまふことだ！）（だが此年寄のおふくろは？　三人目の子供を産むために、下の兒を連れて縣病院の施療病室にゐる女房は？　此二人の可愛いゝ男の子と、それから今度生れる赤ん坊とは？　それはどうなるんだ？　どうして生きて行くんだ？　オイ！）

吉田は大きな溜息をついた。兩方の手で拳を固く拵へて、

彼の部厚な胸を毆つた。

（だが、何とも爲方はないさ。俺がよしんば死なゝいにしたとしたらどうだ死んだのと同じことになるぢやないか。いつそのこと……）

「おまい、寢られないのかい？　又早く出かけなけやならないのにねえ。」

おふくろが弱い聲で云つた。「お母さんも眠れないんですか。わしは今までグツスリ眠つたんですよ。腹の具合は少しはいいですか？」

（腹の具合が良からう筈がねえぢやないか、醫者にもかけねえ、藥も飲ませねえ、軟かい滋養分も食べさせない、その代りに子供の守をさせてる！　地獄だ！　自分で看護婦が入用な、垂れ流しの老人に、子供の守をさせる。死ぬまで車を引つ張る馬のやうに、死ぬまで苦勞を背負はせるんだ。子供が七輪の炭火の上に倒れても、やう起さないで泣き出してしまふ老人に、――畜生！　俺は一體どうなればいゝんだ。あ、――明日も早いから――とおふくろは云つてる。明日俺の出かけるのは、工場の前のピケツチングぢやないか！　ふうつ！）

彼は、音のしないやうに髪の毛をひつ掴んだ。そして憎つたらしく、檢束者をでもするやうに、やけに引つ張つた。髪の毛は汗でねば〳〵してゐて、ふて腐れたやうに手にワザワザ捲きついて來た。

――吉田さん、吉田さん。――

暑苦しいために明けつ放した表から、誰かゞ呼んだ。

吉田はハツとした。

（來やがつた。遂々來やがつた。何時だ、三時だな、畜生！寢込みを踏み込みやがつたな。）

彼は、本能的に息を詰めた。そして耳を兎のやうにおつ立てた。

「どなた？」

おふくろが、喘ぐやうに云つたのと、吉田が「しつ」と押し殺すやうな聲で云つたのと同時であつた。

（爲樣がない、おしまひだ。これで片がつくんだ。奴等が一段づゝ位と月給が上つて、俺たちや立ち腐れになるんだ。）

「誰だい？」

彼は、大きな聲で怒鳴つた。

「中村だがね、ちよつと署まで來て貰ひたいんだ。」

――誰だい――と呼んだ吉田の聲が、鋭く耳を衝いたので子供が薄い紙のやうな眠りを破られた。

「父ちやあん！」

子供の食ひ取つてしまひたいやうな、乳色の手が吉田の頸にしがみついた。

「おゝ、いゝ子、いゝ子、泣くんぢやねえ。誰が來たつてど

いつが來たつて、坊を渡すこつちやねえからな。」

彼は、子供を確り抱きしめた。そしてとりたての林檎のやうに張り切つた小さな頰に、ハムマーのやうにキツスを立て續けにぶつゝけた。

M署の高等係中村は、もう、蚊帳の外に腰を下して、扇子をバタ〳〵初めてゐた。

「今時分、何の用事だい？　泥棒ぢやあるめえし、夜中に踏み込まなくたつて、逃げも隱れもしやしねえよ。」

（此儘行つたんぢや困る。家中に二十錢しかない。二十錢では何ともならない。何とか都合しといてからでないといけない。おふくろも子供も乾上つちまふ。さて。）

吉田は、そう考へることによつて、何かのいゝ方法を――今までにもう幾度か最後の手段に出た方がいゝ、と考へたにも拘らず、改めて又、――いゝ方法を、と、それが汗の中にてもあるやうに、汗みどろになつて、全速力で考へ初めた。だが、汗は出たが、いゝ考が浮く筈がなかつた。

「明日でもいゝでしよう、と云つたんだが、どうしても直ぐにつて署長の命令だからね、濟まないが、直ぐに來て貰ひたいんだ。直ぐに歸すからね。」

中村は、かう云ふと、又煽ぎ立てた。

（へ、すぐに歸す！　極り文句を云つてやがらあ。）

「何しろ夜中ぢやしようがないよ。子供を手離せないもんだからな。嬶が病院に行つてるから、一人は俺が見てやらなけやならないんだよ。まあ、朝まで待つて吳れよ。」

子供は、吉田と中村との話を、鋭く聞いてゐた。そして、自分が生れると直ぐの年から、母親の背に縛りつけられて、毎年、警察や、裁判所や、監獄の門を潜つたことを思ひ出した。

「父ちやん、いやだよ。行つちやいやだよう。」

泣き聲と一緒に、訴へるやうな聲で叫んで、その小さな手は、吉田の頸に喰ひ込むやうに力强くからまつた。

人生の、あらゆる不幸、あらゆる悲慘に對して殆んど免疫になつてはゐた吉田であつた。不幸や悲慘の前に無力に首をうなだれる吉田ではなかつた。どんな困難な境遇に立つても客觀的な立場を守つて、的確な判斷と作戰とを誤らなかつた彼ではあつた。彼の心の中にどつしりと腰を下して、彼に明確な針路を示したものは、〇〇主義の理論と、信念とであつた。

（俺だけぢやないんだ！　三千の兄弟たちが、あの光り輝く工場の中の部署についてゐる三千の兄弟たち、あの工場以外のどの工場にも、勞働者街にも溢れてゐる、全プロレタリアの均しく背負つてゐる苦痛なんだ。全てのプロレタリアが此苦痛に負けた時、どうなるんだ！　勝て！　俺一人位はいゝだらう、と云ふ怯懦の中から、全プロレタリアの陣營が總崩れになるんだ。起て！　此子供のためにも！　俺が子供に贈

物にする事の出來さうな唯一の望みは、プロレタリア解放運動の上にかゝつてゐるんだ！）

「あゝ、行きやしないよ。坊やと一緒に行くんだからね。些も心配する事なんかないよ。ね、だから寢ん寢するの、いゝ子だからね」

「吉田君、早く來て呉れないと困るね　待つ……」

中村は口を噤んだ。

「ハハハ、、。誰かゞ待つてるのかい。いゝよ。待つてる方は痺れを切らしても、逃げると云ふ事はないからね。今行くよ。」

「お前、又長くなるのぢやあるまいね。」

病み疲れた、老い衰へた母は、そう訊ねることさへ氣兼ねしてゐたのだが、辛抱し切れなくなつて、囁くやうに言つた。

「大丈夫ですよ。お母さん、直ぐ歸つて來ますよ、坊やを連れて行つて來まさ。」

（大丈夫ですよ、向ふの氣の濟むまで居て來ますよ。氣休めに坊やだけ、向ふまで連れて行つてやりますけれど。）ねと云ふ方が眞實であつた。

勿論、直ぐ歸れる筈のない事は、吉田には分り切つてゐた。劃時代的な二つの階級間の爭鬪が、全市から全〇〇の相互の階級を總動員して相對峙してゐたのだ。それは國際階級戰の一つの見本であつた。

「連れて行つてくれる！　ね、父ちゃん坊やを連れて行つて呉れるの。公園に行かうね。お猿さんを見に行かうね。ね、そしてお芋をやらうね。」

「あゝ、いゝとも、公園に行くんだ。そして公園でおとなしくお猿さんと遊ばうね。」

「公園に行かうね、おしやるしやんとあそばうね。」

子供は、吉田の首に嚙りついたまゝ、おしやるしやんと遊ぶことを夢に見ながら、再び眠つた。

（六時まで待たう。六時までにはきつと何かの情報があるだらう。依田が來るだらう。そうすれば、依田に顚末を知らす事が出來る、その上で行かう、六時にはピケツチングの交替になる時間なんだから、どうしてもそれまでは待たなければならない。）

中村は、「困るなあ困るなあ。」と呟きながら、品物でも値切るやうに、クドクドと吉田を口說いた。

吉田の老い衰へた母は、蝸牛のやうに固くなつて、耳に指で栓をして、息を殺してゐた。

ひどい急坂を上る機關車のやうな、重苦しい骨の折れる時間が經つた。

毎朝、五時か五時半には必ず寄る事になつてゐる依田は、六時になるのに未だ來なかつた。

――依田君。六時まで、三時から君を待つたが、來ないか

ら、僕はM署へ持つて行かれることにする。いづれは君にもお鉢が廻るんだらうが、兎に角警戒を要する。皆やられたんぢや仕方がないからな。それから、こんな事は云へた義理ではないんだが、僕の留守の者たちの事も氣にかゝる。若し、出來ればおふくろや子供の面倒を見てやつて貰ひたい。自重健鬪を祈る。――

吉田は、紙片れに鉛筆で走り書きをして、母に渡した。

「これを依田君に渡して下さい。私はちよつと行つて來ますから。心配しないで下さいね。大丈夫だから。」

老母の眼からは、涙が落ちた。

吉田は胸が痛かつた。おそろしい悲しみと、齒嚙みしたいやうな憤怒とが、一度に彼の腹の底からこみ上げて來た。

が、吉田はすべての感情を押し堪へて、子供を背中に兵兒帶で固く縛りつけて、高等係中村と家を出た。

子供は、早朝の爽やかな空氣の中で、殊に父に負ぶさつてゐると云ふ意識の下に、片言で歌を唄ひながら、手足をピョン〳〵させた。

――一九二六、一一、二六――

死屍を食ふ男

色んな事を知らない方がいゝ。と思はれる事があなた方にもよくあるでしよう。

フト、新聞の「その日の運勢」などに眼がつく。自分が七赤だか八白だか全つ切り知らなければ文句はないが、自分は二黑だと知つてゐれば、旅行や、金談は不可ない、などとあると、構はない、やつつけはするが、どこか心の隅の方にそいつが、粘つこく密着いてゐる。

「あそこの家の屋根からは、毎晩人魂が飛ぶ。見た事があるかい」

さうなると、子供や臆病な男は夜になるとそこを通らない。

此位な事は何でもない。命をとられる程の事ではないから。だが、見たため、知つたために命を落す人が多くある。その一つの話を書いて見ましよう。

その學校は、昔は藩の學校だつた。明治の維新後縣立の中學に變つた。その時分には縣下に二つしか中學がなかつたので、どの中學も素晴らしく大きい校舍と、兵營のやうな寄宿舍とを持つ程膨脹した。

中學は山の中にあつた。運動場は代々木の練兵場ほど廣くて、一方は縣社〇〇〇神社に續いて居り、一方は聖德太子の建立に係ると云はれる國分寺に續いてゐた。そして又一方は湖になつてゐた。毎年一人づつ、その中學の生徒が溺死する慣はしになつてゐた。

その湖の岸の北側には屠殺場があつて、南側には墓地があつた。

學問は靜にしなければいけない。ことの標本ででもあるやうに、學校は靜寂な境に立つてゐた。

おまけに、明治が大正に變らうとする時になると、その中學のある村が、栓を拔いた風呂桶の水のやうに人口が減り初めた。殘つてゐる者は舊藩の士族で、いくらかの恩給を貰つてゐる廢吏ばかりになつた。

何故かなら、その村は、殿樣が追ひ詰められた時に、逃げ込んで無理に拵へた山中の一村であつたから、何にも産業と云ふものが無かつた。

で、中學の存在によつて引き止めやうとしたが、困つた事には中學がその地方十里以内の地域に一度に七つも創立された。

大體今まで中學が少な過ぎたために、縣で立てたのが二つ、その當時、衆議院議員選擧の猛烈な競爭があつたが、一人の立候補が、石炭色の巨萬の金を投じて、殆んどありとあらゆる村に中學を寄附したその數が五つ。

こんな譯で、今まで七人も一つ室にゐた寄宿生が、一度に二人か三人かに減つてしまつた。

その一つの室に、深谷と云ふのと、安岡と呼ばれる卒業期の五年生がゐた。

勿論、室の窓の外は松林であつた。松の稍を越して國分寺の五重の塔が、日の光、月の光に見渡された。

人數に比べて室の數が多過ぎるので、寄宿舍は階上を自習室に宛て、階下を寢室に宛てゝあつた。どちらも二十疊ほど敷ける木造西洋風に造つてあつて、二人では、少々淋しすぎた。が、深谷も安岡も、それを口に出して訴へるのには血氣盛んに過ぎた。

それ處ではない、深谷は出來る事ならば、その室に一人で居たかつた。若し許すならばその中學の寄宿舍全體に、たつた一人で居たかつた。

何かしら、人間嫌ひな、人を避け、一人で祕密を味はうと云ふ氣振りが深谷にあることは、安岡も感じてゐた。

安岡は淋しかつた。何だか心細かつた。がもう一學期半辛抱すれば、華やかな東京に出られるのだからと强ひて獨り慰め、跳舞してゐた。

十月の末であつた。

もう、水の中に入らねば凌げないと云ふ日盛の暑さでもないのに、夕方までグラウンドで練習してゐた野球部の連中が、泥と汗とを洗ひ流し、且つは元氣をも誇るために、例の湖へ出かけて泳いだ。

ところがその中の一人が、うまく水中に潜つて見せたが、うまく水上に浮び上らなかつた。餘り水裡の時間が長いので賞讃の聲、羨望の聲が、恐怖の叫に變つた。

遂に野球のセコチヤンが一人溺死した。

湖は、底もなく澄み亘つた空を映して、魔の色を益々濃くした。

「屠牛所の生血の祟りがあの湖にはあるのだらう。」

一週間位は、その噂で持ち切つてゐた。

セコチヤンは、自分を呑み殺した湖の、蒼黑い湖面を見下す墓地に、永劫に眠つた。白い旗が、ヒラヒラと、彼の生前を思はせる應援旗のやうにはためいた。

安岡は、その事があつて後益々寂しさを感ずるやうになつた。室が廣過ぎた。松が忍び足のやうに鳴つた。國分寺の鐘

が、陰に籠つて聞えて來るやうになつた。

かう云つた風な狀態は、彼を稍々神經衰弱に陷れ、睡眠を妨げる結果に導いた。

彼とベッドを並べて寢る深谷は、その問題についてはいつも口を緘してゐた。彼には全て興味がないやうに見えた。

どちらかと云へば、深谷の方がこんな無氣味な淋しい狀態からは、先に神經衰弱に罹るのが至當である筈だつた。

色の青白い、痞せた、胸の薄い、頭の大きいのと反比例に首筋の小さい、ヒョロヒョロした深谷であつた。その上、何等の事件のない時でさへ彼は、考へ込んで許りゐて、影の薄い印象を人に與へてゐた。だが、彼はベッドに入ると直ぐに眠つた。小さな鼾さへかいて。

安岡は、普段臆病さうに見える深谷が、グウグウ眠るのに腹を立てながら、十一時にもなれば眠りに陷ることが出來た。

セコチヤンが溺死して、一週間目の晩であつた。安岡はガサガサと寢返りを三時間も打ち續けた揚句、眠りかけてゐた。が、未だ完全には眠つてしまはないで、夢の初めか、現の終りかの幻を見てゐると、フト彼の顏の邊りに何か感じた。彼の鋭く尖がつた神經は針でも通されたやうに、彼を冷たい沼の水のやうな現實に立ち返らせた。が、彼は盜棒に忍び込まれた娘のやうに、本能的に息を殺しただけであつた。

やがて、電燈のスイッチがパチッと鳴ると同時に室が明るくなつた。深谷が寢臺から下りてスリッパを履いて、便所に行くらしく出て行つた。

安岡の眼は冴えた。彼は、何を自分の顏の邊に感じたかを考へ初めた。

——人の息だつた。體溫だつた。だが、此室には深谷と自分とだけしか居ない。深谷が俺の寢息を窺ふ譯がない。萬一、深谷が窺つたにした處で、若しさうなら電燈のついた時彼が寢臺の上にゐる筈がない。そしてあんなに大つぴらに、スリッパをバタバタさせて出て行く筈がない。第一、何のために深谷が俺の寢息なんぞ窺ふ必要があるのだ！　俺は神經衰弱をやつてゐるんだ。幻だ。夢だ。錯覺なんだ！——

かう思つて彼は自分自身を納得せて、再び眠りに入らうと努めた。

深谷は直ぐ歸つて來て、電燈を消した。そしてベッドに入ると、間もなく微かな鼾さへ立て初めた。

安岡は自分の頭が變になつてゐる事を感じて、眼を瞑つて息を大くして、頭の中で數を數へ初めた。

一、二、三、四、
五十一、五十二、
四百、四百一、四百二、
千二百十、千二百十一、千二百十二、

彼のやゝ沈靜した頭が、千二百十二を數へ終つた時、再び

彼は顏の邊に、人間の體溫を感じた。が、彼は今度はいきなり冷水を打つかけられたやうに、ゾッとはしたが千二百十三千二百十四と、珠數をつまぐるやうに數へ續けた。そして身動き一つ、瞬毛一本動かさないで眠りを裝つた。

電燈がパッと、彼の瞼を明るく溫めた。

再び彼の體を戰慄がかけ拔け、頭髮に痛さをさへ感じた。

電燈がパッと消えた。

深谷が靜かにドアを開けて出て行つた。

——奴は戀人でも出來たのだらうか？——

安岡は考へた。けれども深谷は決して女の事など考へたり況して戀などする程成熟してゐるやうには見えなかつた。寧ろ彼は發育の不充分な、病身で內氣で、たとひ女の方から云ひ寄られたにしても、嫌惡の感を抱く位な少年であつた。機械體操では、金棒に尻上りも出來ないし、木馬はその半分の處までも屆かない程の弱々しさであつた。

安岡は、次から次へと深谷の事について考へたが、どうしても、彼が戀人を持つてゐるとは考へられなかつた。それなら……盜癖でもあるのだらうか？

だが、深谷は級友中でも有數の資產家の息子であつた。それにしても盜癖は異ふ。いくら不自由をしない家の子でも、盜癖ばかりは不可抗的なものだ。だが、盜癖ならば先づ彼がその難を蒙るべき手近にゐた。且つ近來、學校中で盜難事件は更になかつた。

下痢か何かだらう。

安岡はさう思つて、眠りを求めたが眠りは深谷が連れて出でもしたやうに、その室の空氣から消えてしまつた。

怖らく、二時間、或は三時間も經つてから深谷は、隙間から忍び入る風のやうに、ドアを開けて歸つて來た。

室へ入ると、深谷はワザと足音を高くして、電燈のスヰッチをひねつた。それから寢臺へ潛り込む前に電灯を消した。

安岡は研ぎ出された白刃のやうな神經で、深谷が何か正體を摑む事は出來ないが、凄慘な空氣を纏つて歸つた事を感じた。

——決鬪をするやうな男ぢや、絕對にないのだが、——

安岡は、そんな下らない事に頭を勞らすことが、どんなに明日の課業に影響するかを思つて、再び、一二三四と數へ初めた。が、彼が眠りについたのは、起きなければならない一時間前であつた。

その次の夜であつた。

安岡は前夜の睡眠不足でひどく勞れてゐたので、自習をいい加減に切り上げて早く床に入つた。そして、妙な素振りをする深谷の來る前に眠つちまはうと決心した。

「でなけりや、迚もやり切れない。」

と思つた。だが、さう思へば思ふほど、猶更ら寢つかれな

かつた。室が、そして寄宿舍全體が淋し過ぎた。おまけに、何だか底の知れない泥沼に踏み込みでもしたやうに、深谷の擧動が疑はれ出した。

深谷はカツキリ、就寢ラツパ――その中學は一切をラツパでやつた――が鳴ると同時にコツコツと二階から下りてた。

安岡は全く眠つた風を裝つた。が、眠れもしないのに眠つた風を裝ふことは、全く苦しい事であつた。だが、何かしら彼の心の底で好奇心に似た氣持が、彼にその困難を堪へしめた。

深谷は、昨夜と同じく何事もないやうに、ベツドに入ると五分も經たない中に、輕い鼾をかき始めた。

「今朝はもう出ないのか知ら」と、安岡は失望に似た安堵を感じて、ウトウトした。

と、又、昨夜と同じ人間の體溫を頰の邊に感じた。

「確かに寢息を窺つてるんだ！」

だが、彼は今まで通りと同じ調子の寢息を、非常な努力の下に續けた。

パツと電燈がついた。そのまゝ深谷のスリツパがバタバタと扉の方に動いた。が、深谷は扉の前でそれを開くと、そのまま振り返つて、安岡の方をジーツと瞶めた。その顏の表情は何とも云へない凄いものであつた。死を決した顏！ か、死を宣告された顏！ であつた。

彼は安岡が依然のまゝの寢息で眠りこけてゐるのを見澄すと、今度は風のやうに歸つて來て、スヰツチを捻らないで電球を捻つて灯を消した。

さうして開けた扉から風のやうに出て行つた。

安岡はそれを感じた。直ぐに彼れは靜かに上半身を起して耳を澄ました。

木の葉を亘る微風のやうな深谷の氣配が廊下に感じられた。彼は矢張り靜に立ち上ると深谷の跡を附けた。

廊下に片つ方の眼だけ出すと、深谷が便所の方へ足音もなく馳けて行く後ろ姿が見えた。「ハテナ。矢つ張り下痢かな。」

と思ふうちに、果して深谷は便所に入つた。が安岡は作りつけられたやうに、片つ方の眼だけで便所の入口を見張り續けた。

深谷は便所に入ると、扉を五分許り閉め殘して、その隙間から薄暗い電燈に照らし出された、ガランとした埃だらけの長い廊下を覗いてゐた。

「矢つ張り便所だつたのか。それにしては何だつて人の寢息なんぞ窺いやがるんだらう。妙な奴だ。」

と、安岡が五分間許り見張りに痺れを切らして、ベツドの方へ歸らうとする瞬間、便所の扉が少しづつ動くのを見た。扉は全く音もなく、少しづつ開き初めた。

深谷の姿は扉が殆んど八分目所まで開いたのに見えなかつ

た。全く扉が獨り手に開いたやうだつた。安岡はゾツとした。

と、深谷の姿が風のやうに廊下に飛び出して、矢庭に廊下の窓から校庭に跳び出した。

安岡の體を戰慄がかけ拔けた。が、次の瞬間には、全く深谷の身輕さが傳染してもしたやうに、風のやうに深谷の後を追つた。

深谷は、寄宿舍に屬する松林の間を、忍術使ひででもあるやうに、フワフワと然も早く飛んでゐた。

やがて、代々木の練兵場ほども廣いグラウンドに出た。

これには安岡は困つた。グラウンドには眼を遮る何物もない。曇つてゐて今にも降り出しさうな空ではあつたが、その厚い空の底には月があつた。グラウンドを追つかければ、發見されるのは決り切つた事であつた。

が、風のやうに早い深谷を見失はない爲には、腹匐つてなぞ行けなかつた。で、彼は喘嗟の間に、グラウンドに沿ふて木柵によつて劃られてゐる街道まで腹匐ひになつて進んだ。

街道に出ると、彼は木柵を盾にして、グラウンドの灰色の景色を眺めた。その時にはもう深谷の姿は見えなかつた。彼は茫然として立ち盡した。何故ならいくら風のやうに早い深谷であつても、神通力を持つてゐない限り、そんなに早くグラウンドを通り拔け得る筈がなかつたから。

「奴も腹匐ひになつて、障害物のない處で見張つてやがるんだな。」

安岡は、自分自身にさへ氣取られないやうに、木柵に沿ふて、グラウンドの塵一本さへ、その薄闇の中に見失ふまいとするやうにして進んだ。

やや柵の曲つた邊へ來ると、グラウンドではなく、街道を風のやうに飛んで行く姿が見えた。

その風の姿は、一瀉間前、セコチヤンが溺死した沼の方へと飛んだ。

安岡は、自分が溺死しかけてでもゐるやうな恐怖に囚はれ戰慄を覺えた。が、次の瞬間には無我夢中になつて、フツ飛んだ。

道は沼に沿ふて、蛇のやうに陰鬱にうねつてゐた。その道の上を、生きた人魂のやうに二人は飛んでゐた。

沼の表は、曇つた空を映して腐屍の皮膚のやうに、重苦しく無氣味に映つて見えた。

やがて道は墓地の邊にまで、二人の姿を吹くやうに導いた。墓地の入口まで先頭の人影が來ると、吹き消したやうに消えてしまつた。安岡は同時に路面へ倒れた。

墓地の松林の間には、白い旗や提灯が、捲れもしないでブラツと下つてゐた。新らしいのや中古の卒塔婆などが、長い病人の臨終を思はせるやうに痩せた形相で、立ち並んでゐた。松の茂つた葉と葉との間から、曇つた空が人魂のやうに丸い

空間を覗かせてゐた。

安岡は俯ふやうにして進んだ。彼の眼を若しその時誰かゞ見たなら、その人は屹度飛び上つて叫んだであらう。それほど彼は熱に浮かされたやうな、云はゞ潛水服の頭についてゐるのと同じ眼をしてゐた。

そして、その眼は怖るべき情景を見た。

それは筆紙に表し得ない種類のものであつた。

深谷は、一週間前に溺死したセコチヤンの新佛の廓内にゐた！

彼のどこにそんな力があつたのであらう。野球のチヤンが二人で漸く載つける事が出來た、假の墓石を、深谷のヒヨロヒヨロな手が輕々と持ち上げた。

その石を傍へ取り除けると、彼は垣根の間から、鍬と鋸とを取り出した。

鍬は音を立てないやうに、然し眩るしく、未だ固まり切らない墓土を撥ね返した。

安岡の空な眼はこれを見てゐた。彼はいつの間にか陸から切り離された、流氷の上にゐるやうに感じた。

深谷は何をするのだらう？　そんなにセコチヤンと親密ではなかつた。同性愛などとは思ひも寄らない仲であつた。殆んど一度も口さへ利いた事はなかつた！

軟かい墓土は傍に高く撥ねられた。そして棺の上は段々低くなつた。深谷の腰から下は土の蔭に隱れた。

キー、キー、バリツ、と釘の抜ける音がした。鍬で、棺の蓋をこぢ開けたらしかつた。

深谷の姿は、穴の中に蹋み込んで見えなかつた。

が、鋸が、確かに骨を引いてゐる響が、何一つ物音のない微かな息の響さへ聞えさうな寂寥を、鈍くつんざいて來た。

安岡は、耳だけになつてゐた。

プツツ！　と、鋸の刄が何か柔かいものに打つ衝る音がした。腐屍の臭が、安岡の鼻を鋭く衝いた。

生垣の外から、腹俯ひになつて目を凝らしてゐる安岡の前に、徐に深谷が背を延ばした。

彼は屍骸の腕を持つてゐた。そして周りを見廻した。恰度犬がするやうに少し顎を持ち上げて、高鼻を嗅いだ。

名狀し難い表情が彼の顏を横切つた。と全で、戀人の腕にキツスでもするやうに、屍の腕へ口を持つて行つた。

彼は、うまさうにそれを食ひ初めた。

若し安岡が立つてゐるか、蹋つてゐるかしたら彼は倒れたに違ひなかつた。が、幸にして彼は腹俯つてゐたから、それ以上に倒れる事はなかつた。

が、彼は叫ぶまいとして、いきなり地面に口を押しつけた。土は全でそれが腐屍でもあるやうに、臭氣があるやうに感じた。彼はどうして、寄宿舍に歸つたか自分でも知らなかつ

た。

彼は、口から頰へかけて泥だらけになつて昏々と死のやうに眠つた。

朝、深谷は靜かに安岡の起きるのを待つてゐた。

安岡は十一時頃になつて死のやうな眠りから甦つた。

不思議な事には深谷も、未だ寢室にゐた。

安岡が眼を覺した事を見ると、

「君の缺席屆けは僕が出して置いたよ。安岡君」と、深谷が云つた。

「ありがと。」安岡は終ひまで云へなかつた。

「君は、昨夜、何か見なかつたかい？」と、深谷が聞いた。

「いいや、何も見なかつた。」安岡の語尾は消えた。

「君の口の周りは、全で死屍でも食つたやうに、泥だらけだよ。洗つたらいゝだらう。どうしたんだね。」

深谷が、靜に言つた。

が、その顏には、鬼氣が溢れてゐた。

それつ切り、安岡は病氣になつてしまつた。その五六日後から修學旅行であつた。

深谷は修學旅行に、安岡は故郷に病を養ひに歸つた。

安岡は故郷のあらゆる醫師の立會診斷でも病名が判然しなかつた。臨終の枕頭の親友に彼は云つた。

「僕の病源は僕丈けが知つてゐる。」

かう云つて、切れ〴〵な言葉で彼は屍を食ふのを見た一場を物語つた。そして忌はしい世に別れを告げてしまつた。

その同じ時刻に、安岡が最期の息を吐き出す時に、旅行先で深谷が行方不明になつた。

數日後、深谷の屍骸が汀に打ち上げられてゐた。その死體は、大理石のやうに半透明であつた。

——一九二七・一二・七——

首を賣つた話

北澤さんは、夜、眠つてゐる時以外には、いつでも「いやいや」をしてゐた。

北澤さんは、月給を貰ふ時でも「ありがたう」と、いひながら、「いやいや」をしてゐた。

一日十八時間の、とても煩雑極まる事務をすまして、家へ歸つて六十を過ぎて生れた可愛くて堪まらぬ子供を、膝に抱き上げて、お茶を飲みながらでも「いやいや」をしてゐた。

北澤さんは、もう大分前に六十を通り越した、そして、土方の「帳附け」といふ職業を、裁判所の書記の次に捉へた。それは五、六年前であつた。

北澤さんは、絶えず「いやいや」と、かぶりを振りながら、土方たちや、そのおかみさんたちに、「諸式」——米、味噌、酒、醤油、地下足袋、ゲートル、等、々——を渡すのが役目であつた。

北澤さんは月給四十圓で雇はれてゐるのであつから、日本米五割、舶來米五割で十割になつた和洋折衷米を、純日本米と稱して一升で十錢も利益を取つたところで、別に、自分の懐ろに入るといふ譯ではなかつた。

正札が麗々しく、一圓二十錢也とついてゐる半ズボンを、二圓につけ込んで、土方の勘定の中から差引けば、土方の中にだつて北澤さんよりもつと字の數を澤山知つてゐる者があつたら、正札の方に信頼して、北澤さんの方に不信任を表示することが、絶對にないといふ譯には行かなかつた。

「北澤さん。一圓二十錢のズボンが、二圓とはどんなわけですかい？」

と、難詰の形になつて、北澤さんの八分板の机の上に擴げられることになつた。

「一圓二十錢のズボンが二圓？そんなこたあない。一圓二十錢のものは一圓二十錢、二圓のものは二圓、これは日本中どこへ行つたつて間違ひはないよ。」

「わしもさう思つとつた。だがあんたは、一圓二十錢の正札のブラ下つたズボンから、二圓引いたぢやないかね。」

「うん、さうか。それやお前、手數料といふものだよ。」

北澤さんは、極めて明快に答へた。

「それや無理だよ。北澤さん。一圓二十錢のものに八十錢も口錢をかけるなあ、それや無茶といふもんだ。」

「いや、それや、無理はないさ。さうしなけりや、「おやぢ」が立つて行かないんだから、仕方があるまいぢやないか。」

そこで北澤さんの饒舌が始まるのであつた。

如何に「おやぢ」には費用がかゝるか、本妻とその五人の子供の教育費と、妾宅の費用と、會社や組への交際費、等、等。

「どの位かかると思ふんだ！な、おやぢといふ者は、土方の捨方とはちがふんだぞ。親方になれば世間體といふものがあるぢやからな。いいか、その世間體を上手に保たせて行くのが、わしの役目ぢや、ぢやから、お前がたも、それがいやなら、捨方なんぞせずに、自分が親方になればええのぢや。」

といつた風に、相手の人間が何かいつたとしたところで、そんなことを長々と二時間、かつきり三時間は唾も呑み込まないで、喋舌りまくるのだつた。

その間には、抗議者は、北澤さんが「いやいや」から振り出してでもゐるやうな、その辯舌に噴き出したり、因業な言草に癪に障つたり、極り切つて北澤さんが引つ張り込む淫猥極まる話の中で、ゲラゲラ笑ひ出したりさせられて結局、何が何だか得體の知れない、狐につままれたやうな氣持になつて引き上げるのだつた。

「あの糞爺奴！いつでも話で誤魔化しやがる。」

かういふ風で、みんながみんな北澤さんの手から、諸式を受取る限りにおいては、彼に對して腹に据ゑかねてゐる。けれども、都合の悪いことには北澤さんは、「打ん毆るのには餘り年を取りすぎてゐた」のだ。

殆どすべての土方たちが、本能的な生き方をしてゐる中に、北澤さんだけは、ギブス繃帶で卷かれた足のやうな、硬直した活き方をしてゐた。

だが、北澤さんだつて、よしんば自分が氣がつかないにしたところで、心のどこかの隅では、明るい、笑ひたい、のんびりした、生活がほしいといふ氣は持つてゐた。

だから、一度、ギブス繃帶を解いて、「いやいや」をしないで、心臓が覗き込めるほど大きな口を開いて、乾いた茶褐色の舌でベロベロ、笑ひ出したことがあつた。

親方は、同時に三箇所も五箇所も仕事を請負ふことがあるので、そんな時は、一箇所には本妻を、第二の箇所には妾を、第三の箇所には腹心の子分を代人で置く、といふやうな方法でやつてゐた。

北澤さんは、第二の場所に、お妾さんと一緒に派遣されてゐた。

このお妾さんは、一口でいつてしまへば「神様」であつた。おとなしい、素直な、物の正面ばかり見てゐて、情深くて、

その上無邪氣であつた。

彼女は、お酌から藝者になつた十八の年の時に、親方に落籍されて來たのであつたが、親方の深い愛情にも拘らず土方の社會を覗き込んだその日から、まるで閻魔樣に口止めでもされたやうに、默り込んでしまつた。

彼女は學校は小學校の一年をちようど二學期だけしか學ぶ機會を持たなかつた。

――妾ではあるし、教育はないし、その上大して美しくもないし丈だつて低いし、道を歩くにも、人目を引く必要はあるまい――

とでも考へてゐるやうに、彼女は、青く、細く、萎んで痩せて行つた。

そして自分では、「世間で自分が一番の屑だ」と思ひ込まうとしたし、又さう思ひ込むことに成功してしまつた。だから、誰かが彼女に同情して、

「あんたは可愛想な人だ」

と慰めても、よつぽど煩さく慰められない限りは、自分が果して不仕合せだか、どうだかを考へて見る氣にはなれなかつた。

工事場のトロツコはよく、トンボ――顚覆、脫線――するけれど工事場の北澤さんも、お妾さんも池の中に埋まつた石のやうに、いつも、暗く、沈み込んでゐて、決してトンボしなかつた。

北澤さんが、松の八分板の机を睨み疲れると、「いやいや」の首に鳥打帽を載つけて「帳場廻り」を始める。

その留守に、長屋のおかみさんたちが、諸式を取りに來ると、お妾さんが北澤さんの代理で渡してやるのだつた。

事務所は、北澤さんと、お妾さんとが棲んでゐて、それは田舍の百姓家の蠶室であつた。

雪が、灰色の夕闇と一緒に、寂しく唸つて、肉を取り盡した鷄の骨見たいな、嶮岨な谿谷を暗の中に煙らせた。

事務所では、二三人の稼業人（土方專業の人）と、お妾さんと、その日來合せた旦那、卽ち親方とが大きな圍爐裡を圍んで、酒を呷つてゐた。

北澤さんは、その日の「つけ込み帳」を、飯座別に本帳につけてゐた。

直ぐ足の下は、發電所の取入口であつたが、その上の事務所までは電燈が來てゐなかつた。だから薄つ暗い臺ランプの光の下で、老眼鏡の埃ごしに、北澤さんは仕事をしてゐた。

朝四時から、夜十時までもグズグズ仕事をしてゐたので、北澤さんは乾いた雜巾のやうな氣持になつてゐた。

そこへ、北澤さんが留守の間にお妾さんが出した品物の、分りにくい、片假名だらけの部分が一ページあつた。それにはさすがの北澤さんも、いつも兜を脫いでゐた。

ところが、今、又、非常に困難な謎に打つ衝つた。大抵の場合北澤さんはへこたれないで判斷するのであつたが、これには困つた。

クビ　一つ　イハイ

と書いてあつた。北澤さんは、「いや〳〵」の震幅をいよ〳〵擴げながら、その電文の飜譯にとりかかつた。

首、一つ、位牌。

首、一、つ、位、牌。

首、首、首、首、昊、昊、昊、

どうしても分らなかつた。

「臺灣の生蕃ぢやああるめえし、首を賣る事務所なんてものがあるもんぢやない。途方もねえ話だ。いくら土方で殺傷沙汰が絕えないたつて、位牌の用意までしておく事務所なんてあるもんぢやねえ。出鱈目な話だ。」

北澤さんは考へ續けた。

位牌、位牌、???

この慘澹たる「首一つ位牌」の文字にも拘らず、それを書いたお妾さんと、親方たちは、何事もなかつたやうな顏をして、氣樂さうに酒を呷り續けてゐた。

北澤さんは唸り續けた。酒を飲んでゐる時に、お妾さんに聞くのは、「何だそんなことぐらゐ判斷がつかねえか」と親方にいはれる原なので、さうしたくはなかつた。だがさうしなければこいつだけは分りさうもなかつた。

「姐さん。誰ですかい。今日、首をとりに來たのは？」

「首をとりに來た？どいつだ！そいつは？」

と、親方が叫んだ。

「何だと？首をとりに來た！そいつあ面白え。誰がとりに來たんだ！」

と一人の稼業人が叫んだ。

「誰だ？そいつは？」

も一人のが喚いた。

圍爐裡の回りには、氷のやうな緊張が湧いた。

北澤さんは、首の問題が、大きな衝動を與へたことを、愉快に思つた。「が、少しやりすぎたかな」と思つた。

「誰も首なんかとりに來はしませんよ。北澤さん。何故そんなことを聞くの。」

と、お妾さんが聞いた。

そこで緣側の寒い事務所から離れて、圍爐裡の側へつけ込み帳を持つて行つた。

「ホラ、ここに、あるでせう、クビ一ツイハイとね。こいつがどうしても分らないんでね、どうも、イハイやクビなんか、事務所で賣つたことは、「今までありませんからね。」

火に手をつけるほど近づけながら、北澤さんは、姐さんの青い萎んだ顏を見た。

姐さんは、不似合ひに長い、そのために顔に愁ひを深める睫の奥から、小さい眼を光らせて、帳面をとり上げた。

それを、親方は引つたくつた。

「うん。クビ一ツイハイとしてある。ふん。」

外の稼業人たちも、急いでそれを廻覽した。

「あゝ、これ？これはね、岩井の若い衆が足袋をとりに來たんぢすよ。どれ、あら、まあ！わたし、チョンを一つつけるのを忘れてしまつたんだわ。クの字に一つチョンを忘れたんだわ。」

「なある、なある、なあるほどねえ。」

そこで、皆は揃つて、臓腑を吐き出すほど笑ひ出した。

坑夫の子

發電所の掘鑿は進んだ。今はもう水面下五十尺に及んだ。三臺のポンプは、晝夜間斷なくモーターを燒く程働き續けてゐた。

掘鑿の坑夫は、今や晝夜兼行であつた。

午前五時、午前九時、正午十二時、午後三時、午後六時には、取入口から水路、發電所、堰堤、と、各所から凄じい發破の轟音が起つた。澤庵漬の重石程な、岩石の破片が、數町離れた農家の屋根を拔けて、圍爐裏へ飛び込んだ。

農民は駐在所へ苦情を持ち込んだ。駐在所は會社の事務所に注意した。會社員は組員へ注意した。組員は名義人に注意した。名義人は下請に文句を言つた。

下請は世話役に文句を云つた。世話役が坑夫に、

「もつと調子よくやれよ。八釜しくて仕樣がないや」

「八釜しい奴あ、耳を塞いどけよ」

「さうぢやねえんだ。會社がうるせえんだよ」

「だつたらな。會社の奴に、發破を抑へつける奴を寄越せと、さう云つてくんな。おらにや、ダイナマイトを抑へつけるてな、藝當は打てねえんだからつてな。箆捧奴！　發破と度胸競べなんざ、眞っ平だよ」

こんな譯であつて、――どんな譯があらうとも、發破を抑へつけるなんて譯に行くものではない――岩鼻火藥製造所製の櫻印ダイナマイト、大ダイ六本も詰め込んだ發破は、素晴らしい威力を發揮した。濕れ蓆位被せたつて、そんなものは問題ぢやなかつた。

鷄冠山砲臺を、土臺くるみ、むく〳〵つとでんぐりがへす處の、爆破力を持つたダイナマイトの威力だから、大きくもあらうか！

主として、冬は川が涸れる。川の水が涸れないと、川の中の發電所の仕事はひどくやり難い。いや、殆んど出來ない。一冬で出來上らないと、春、夏、秋を休んで、又その次の冬でないと仕事が出來ない。

一冬で、巨大な穴、數萬キロの發電所の掘鑿をやるのには、ダイナマイトも坑夫も多量に「消費」されねばならなかつた。

午後六時の上り發破の時であつた。

晝過ぎから猛烈な吹雪が襲つて來たので、捲上の人夫や、捨場の人夫や、バラス取り、砂揚げの連中は「五分」で上つてしまつた。

坑夫だつた人間である以上、早仕舞ひにして上りたいのは、他の連中と些も違ひはなかつた。

だが、掘鑿は急がれてゐるのだ。期限までに仕上ると、會社から組には十萬圓、組から親方には三萬圓の賞與が出るのだ。仕上らないと罰金だ。

何しろ、ポンプへ引いてある動力線の電柱が、草見たいに撓む程、風が雪と混つて吹いた。

鼻と云はず口と云はず、出鱈目に雪が吹きつけた。

ブルツ、と手で顏を撫でると、全て凍傷の藥でも塗つたやうに、マシン油がベタ〳〵顏にくつついた。そのマシン油たるや、充分に運轉してゐるジヤツクハムマーの、蝶バルブや、外部の鐵錆を溶け込ませてゐるのであつたから、それは全く、雪と墨と程のよい對照を爲した。

印度人の小作りなのが揃つて、唯灰色に荒れ狂ふスクリーンの中で、鑿岩機を運轉してゐるのであつた。

ジヤツクハムマーも、ライナーも、十臺の飛行機が低空飛行をでも爲てゐるやうに、素晴らしい勢で壓搾空氣を、ヴルブから吹き出した。

コムプレツサーでは、ゲージは九十封度に昇つてゐた。だから、鑿岩機の能率は良かつた。

「おい、早仕舞にしようぢやないか」

秋山と云ふ、ライヤーのハンドルを握つてるのが、小林に云つた。

それは、鑿岩機さへ運轉してゐないで、吹雪さへなければ、對岸までも聞える程の大聲であつた。そして、その小林は、秋山と三尺も離れないで、鑿の尖の太さを較べてゐるのだつた。

「駄目だよ。あのインダラ鍛冶屋は。見ろよ、三尺鑿よりや六尺鑿の方が、先細と來てやがら」

小林は、鑿の事だと思つて、そんな返答をした。

「チヨツ！」

秋山は舌打ちをした。

——奴あ、ハムマを耳ん中に押し込んでやがるんだ、きつと、——さう思つて、秋山は口を禁んだ。

秋山は十年、小林は三十年、坑夫をやつて來た。彼等は、車を廻す二十日鼠であつた。

彼等は根限り驅ける！　すると車が早く廻る。たゞそれ丈けであつた。車から下りて、よく車の組立を見たり「何のために車を廻すか？」を考へる暇がなかつた。

秋山も小林も極く穏かな人間であつた。秋山は子供を六人拵へて、小林は三人拵へて、秋山は稍ずるく、小林は掘り出

した切り株の如く「飛んでもねえ世の中」を渡つてゐた。

「何て、やけに吹きやがるんだ！　畜生」

小林はさう云つて、三尺鑿の先の缺けた奴を放りだした。

秋山は運轉を止めた。

「オイ、もう五尺入つたゞらう」

ガラガラツとハンドルを廻しながら、六尺鑿を抜き出した。

小林は前へ廻つて、鑿を外しながら、

「エツ」と云つた。

「もう五尺は入つたゞらう」

「さうさなあ、入つたかも知れねえな」

「早仕舞にしようぢやないか」

「いゝなあ。ハムマーの連中にさう云はうかなあ。」

「だが、ダイの仕度は出來てるかい？」

「どうだか。見張りで聞いて來らあ」

「いや、構はねえ。お前、機械を片附けといて呉れよ。俺が仕度をして來るから」

「さうかい。」

秋山は見張りへ、小林は鑿を擔いで鍛冶小屋へ、それ〴〵捲上の線に添うて昇つて行つた。何しろ、兎に角火に當らないとやり切れないのであつた。

ライナーの爆音が熄むと、ハムマーの連中も運轉を止めた。

秋山は陸面から八十尺の深さに掘り下げた、彼等自身の掘鑿を這ひ上りながら、腰に痛みを覺えた。が、その痛みは大して彼に氣を揉ませはしなかつた。何故ならば、それはいつでもある事だつたから。

ダイの仕度は出來た。

二十三本の發破が、岩盤の底に詰められて、蕨のやうに導火線が、雪の中から曲つた肩を突き出してゐた。

五人の坑夫、——秋山も小林も混つて——は、各々口にパツトを喞へて、見張からの合圖を待つてゐた。

何十年も、殆んど毎日のやうに、導火線に火を移す彼等であつても、その合圖を待つ時には緊張しない譯には行かなかつた。

「恐ろしいもんだ。俺なんざあ、三十年も銅や岩ばつかり嚙つて來たが、それでも齒が一本も缺けねえ。」

「岩は、俺たちの米のおまんまだ」

と云ふ程、慣れ切つた仕事であつたのに、それでもその一瞬間は、たとひ夏であつても體のどこかに、寒さに似たものを感じるのであつた。

見張りで、ベルをガラン、ガランと振り始めた。吹雪の呻りとベルの音とが、妙に淋しくこんがらかつて、流れて行つた。

ジゴマ帽から、目と口と丈け出した五人の怪物見たいな坑夫たちは、ベルが急調になつて來て、一度中絶するのを、耳

を澄まし、肩を張って待つた。

ベルが段々調子を上げ、全で餘韻がなくなるほど絶頂に達すると、一時途絶えた。

五人の坑夫たちは、尖つたり、凹んだりした岩角を、慌てないで、然し敏捷に導火線に火を移して歩いた。

ブスツ！　シユー、と導火線はバツトの火を受けると、細い煙を上げながら燃えて行つた。その匂は、坑夫たちには懷しいものであつた。その煙は吹雪よりも迅くて、濃かつた。

各々が受持つた五本又は七本の、導火線に點火し終ると、駈足で登山でもするやうに、二方の捲上の線路に添うて、驅け上つた。

必要な掘鑿は、長四方形に川岸に沿うて、水面下六十尺の深さに穴を明ける事であつた。

だから、捲上の線は餘分な土や岩石を掘り取らないやうに、四十五度以上にも峻險に、川上と川下とから穴の中に辷り込んでゐた。そして、それはトロツコの線路以上に廣くは幅を取つてなかつた。

これ等の事は、設計の掘鑿通り以外に、決して會社が金を出しはしない、と云ふ事に起因してゐた。何故かなら會社で必要なのは、一分一厘違はず、スポツとその中へ發電所が嵌りさへすればいゝのだつたから。

川下の方の捲上げ道を登れば、そのまゝ彼等は飯場まで歸る事が出來た。飯場には吹き曝しではあるにしても風呂が湧いてゐた。風呂は晩酌と同じ程、彼等へ魅力を持つてゐた。

川上の方は、掘鑿の岩石を捨てた高臺になつてゐて、たゞ捲上小屋があるに過ぎなかつた。その小屋は蓆一枚だけで葺いてあつた。だから、それはたゞ氣休めである丈けではあつたが、猶、坑夫たちはそこをも避難所に當てねばならなかつた。と云ふのは、そつちに近い方に點火したものは、そつちに駈け登る方が早かつた。

秋山は、ベルの中絶するを待つてゐる間中、十數年來、曾つてない腰の痛みに惱まされてゐた。その時間は二分とはなかつた。が彼れは二時間にも思へた。

秋山は平生から信じてゐた。導火線に火を移す時は、たとひどんな病氣でも、一時遠慮するものだ、と。それは足を打ち貫かれた兵卒が、歩ける譯がないのに歩くのと同じだと思ひ込んでゐた。そして、それは全く、全然同じとは云へないにしても、全然違つてもゐなかつた。

彼はベルの中絶した時に、導火線に完全に火を移し了へはした。

然し、彼が、痛いのは腰だ、と思つてゐたのに、川上の捲上線に傳つて登り始めるのと、カツキリ同時に、その腰の痛みが上の方に上つて來るのを覺えた。

彼は、駈けてゐた積りであつたのに、後から登つて行く小

林に追ひつかれた。

然し、一體、馴れた坑夫は、そんなに逃げるやうに慌てゝ、駈けはしないものだ。慌てゝ石に躓く事などがある事を知つてゐるからだ。

小林は、秋山よりも、もつと熟練工であつた。だから、彼とても特別に急ぐやうな、見つともない事はしはしない。だが、「少し悠くりしすぎる」と思はずにはゐられなかつた。

「おい。もう、半分燃えてるぞ！」

と、小林はすぐ後ろから、秋山へ喚いた。

が、秋山は、云はゞ、彼の痛い所を覗き込んででもゐるやうに、その眼は道を見てはゐなかつた。

吹雪も、捲上線路も、何にも彼は見てゐなかつた。何の事はない、脱線して斜になつた汽罐車が、隋力で二十間も飛んだ、と云つた風な歩きつ振りであつた。

小林が彼と肩を並べようとする刹那、彼は押し潰した疊みコツプのやうに、ペシヤツとそこへ蹋つた。

小林はハツとした。

と、同時に川下の捲上の方を見た。が、そつちは吹雪に遮られて、何物も見えなかつた。よし、見えたにしても、もう皆登り切つて、風呂に急いでゐる筈であつた。

風が、唸つた。雪が眼の中に吹き込んだ。

「オイ、駄目だ。どうした！」

秋山は動かなかつた。

「オイ、もう直ぐだ。もうちよつとだ。我慢しろ！」

秋山は動かなかつた。

突嗟に小林は、秋山を引つ擔いだ。

然し、一人でさへも登り難い道を、一人を負つて駈ける事は、出來ない相談だつた。

彼等が、川上の捲上小屋へ着く前に、第一發が鳴つた。

「ハムマー穴のだ！」

小林は思つた。音がパーンと鳴つたからだ。

ド、ドワーン！

「相鳴りだ。ライナーだな」

二人は、小屋の入口に達してゐた。

ドドーン、ドドーン、ドーン、バラバラ、ドワーン

小林の頭上に、丁度、彼自身の頭と同じ程の太さの、滅茶苦茶に角の多い尖つた、岩片が墜ちて來た。

小林は、秋山を放り出して、頭の鉢を抱へた。

ドーン、バーン、ドドーン！

發破は機關銃のやうに續いて、又は速射砲のやうにチヨツと間を置いて、鳴り續けた。

やがて、發破は鳴り止んだ。

海拔二千尺、山峽を流るゝ川は、吹雪の唸りと聲を合せて、泡を嚙んでゐた。

物の音は、それ丈けであつた。

掘鑿の中は、雪の皮膚を蹴破つて大地がその黒い、岩の大腸を露出してゐた。その上を、悼むやうに、吹雪の色と和して、ダイナマイトの煙が去りやらず、俯ひまはつてゐた。が、やがて、小林と秋山とが倒れてゐる川上の、捲上小屋の方へ、風に送られて、流れて行つた。が上に上ると、それは吹雪と一緒になつて飛んで行つた。

發破の後は、坑夫が一應見廻らねばならぬことになつてゐた。それは「腐る」(不發)のがあると、危險だからであつた。

その見廻りは小林がいつでも引き受けてゐた。が、此場合では小林はその役目を果す事は出來なかつた。

時間は、吹雪の夜そのものゝやうに、冷酷に經つた。餘り歸りが遲くなるので、秋山の長屋でも、小林の長屋でも、チヤンと一緒に食ふ筈になつてゐる、待ち切れない夕食を愈々待ち切れなくなつた、餓鬼たちが騒ぎ出した。

「そんなに云ふんだつたら、帳場に行つてチヤンを連れて來い」

と女房たちが子供に云つた。

小林と秋山の、どつちも十歳になる二人の男の兒が、足袋跣足でかけ出した。

仕事の濟んでしまつた後の工事場は、麗らかな春の日でも、淋しいものだ。それが暗い吹雪の夜は、況して荒凉たる景色であつた。

二人の子供は、コムプレツサー、鍛冶場、變電所、見張り、修繕工場・などを見て歩いたが、その親たちは見當らなかつた。

深い谷底のやうな、掘鑿に四つの小さい眼が注がれた。坑夫の子供ではあつても、その中へは入る事が許されなかつたし、又、許されたとしても、そこがどんなに危險であるかは、子供の心にも浸み込んでゐた。

「穴ん中にやゐないや、捲上小屋にゐるかも知れないよ」

小林の子が、小さな心臓を何物とも知れぬ不安に締めつけられながら言つた。

二つの小さな姿が、川岸傳ひに、川上の捲上小屋に驅けて行くのが、吹雪の灰色の夕闇の中に、影繪のやうに見えた。

二人の子供たちは、今まで、方々の仕事場で、幾つも幾つも、慘死した屍體を見るのに馴れてゐた。物珍らしさうに見てゐたので、殴り飛ばされたりした事もあつた。

けれども、自分の父親が、そんな風にして死ぬものとは思はなかつた。だのに、今、二人の十になる子供は、その父親の首へしがみついて、夕食の席へ連れ歸らうとでもするやうに起さうとして努力してゐた。

が、秋山も小林も、決して、その逞しい足を動かし、その

手を延ばさうとはしなかつた。僅に、滅茶苦茶に涙を流しながら、引き起さうとする子供の力だけ、その冷たい首を上げるだけであつた。

それでも、子供たちは、その小さな心臓がハチ切れるやうに、喘いでゐるのにその屍體を起すことにかかつてゐた。若し、飯場の人たちが、親も子も歸らない事を氣遣つて、探しに來なかつたならば、その親たちと同じ運命になるのであつたほど、執拗に首を擡げる事を續けたであらう。

飯場の血氣な勞働者たちは、すつかり暗くなつた吹雪の中で、屍體の首を無理にでも持ち上げようとする、子供たちを見て、誰も泣いた。

——一九二七、三、三〇——

蹠の話

「そりや、もう萬々私が悪いんでへえ、誰を怨むといふ譯にも參りませんのでして。」

と、蹠の乞食が、拳闘用の手套見たいな足袋――足袋といつた方がいゝのだ。なぜつてその手套は牛の前足に履かせた草鞋と、同じ役目を勤めるからであつた。――を、地面へボコボコ叩きつけて脱ぎながら、私へ話し出した。

私は足が折れてゐたり、眼がつぶれてゐたり、手が折れてゐたりする人を見ると、大抵の場合、それが失はれ、引ん剝がれた現場を想像しないではゐられなかつた。

大きなグレーン。高い鐵骨の建造物。唸つて廻る電動機。滅茶苦茶に張り廻したロープと、その中で宙ブラリンになつて動き廻る大荷物と、ウヰンチとデリツク。そんなものがブヨ〳〵した肉をひき裂く瞬間。そして軀幹に完全にくつゝいて敏活に働いてゐた、その手足が一瞬の後には、完全に彼にさよならを告げて、直その傍へ落つこつてゐる。

一匹の小猿のやうに、私の眼の前に四つん這ひになつてゐる、この蹠の小さな萎んだ姿を眺めて、私はいつもの性癖から、膝から上はこんなにも頑丈な男が、いかに膝から下を、然も兩足を揃へて離ぎ取られたかを、頭の中で見た。

「君は自分を悪い〳〵といふが、君が足をなくしたのは、君自身のせいではないんだらう。機械に削ぎ取られたかベルトに捲き取られたのだらう。それだつたら何もそんなにペコペコあやまらなくつていゝぢやないか。」

私は、この哀れな乞食の蹠が、蹠になつたことについて、自分ばかりを責めてゐるので、實は憤慨した。

乞食をして食つてゐるのである以上、

「抑々現資本主義經濟組織は」つてなことをしやべつて、酒と足を資本主義がチョン切つて、路傍に打つちやらかしたと述べ立てることは、多くの場合、貰ひを少くすることは事實であらう。

だが、人を見ていへ、人を！　と私は内心甚だ不満であつた。

「そりや、旦那」

と蹠がいひ出した。

――旦那！　この言葉位いけ好かねえ言葉があるか！　監房の中から看守にいふのにはふさはしいかも知れない。だが、婆婆に生きてゐながら、旦那！　私はぞつとした。

「そりや旦那、私だつて恨むあてがねえこともねえんで、だが、旦那！　あてがあるにしたところで、相手が悪いんでさ。ね、旦那。」

私はがつかりしてしまつた。奴は蛇のやうに「旦那、旦那」と私に纏りつくのだ。畜生！　ペツと唾を吐いて私は障子を叩きつけたかつた。私の氣配を呑み込むと、彼は慌てゝしやべり出した。

「何しろ、旦那、私が恨むといふ日になると、それがわしの親父、正眞正銘紛ひなしのわしの親父なんですからなあ。えゝ旦那、生みの親を恨むのは都合が悪いもんでがすて。だがね。さうはいふものゝ、わしとても隨分長いこと恨み續けましたて。「怨んだつてしようがない。俺の親父やないか」つてね、旦那。ところで旦那。どうでがせう。怨んでも仕樣がないと思ふと、猶更親父が憎くなるんでがさ。

「ヤイ、碌でなしの人鬼奴！　くたばつちまやがれ。手前のお蔭で、おれは生れもつかねえ片輪になつちまつたぞ。」つてね。ところが旦那、わしが生れもつかねえ片輪になる前に、わつしは矢つ張り親父の子でがしたて。どうにもそこに氣がつくと、何といつてわしの親父をこきおろしていゝやら。だが、わしは恨みましたて。」

私はじつと我慢して承つてゐるわけに行かなくなつた。

「で、どうしろつてんだい。」

私は、眼をむいて怒鳴つた。

「それがねえ、旦那樣。」

今度は、彼は、旦那の下に樣を一つくつつけた。

「わしの親といふのが、矢つ張りその乞食でがしたが、急にくたばつちまつたんでがしてね。田舍道の一軒家でがした。へへへへへ、丁度その、ホラ、あそこに見えるあの森の下の小屋でげすな、あんな風な淋しいところに立つてゐた空家でげした。そこが人通りが少うごわしてな、おまけに三四年前に、矢つ張りわつし等の仲間が、その家で白骨になつて、化けて出るとかいふんで、村の者たちも寄りつかなかつたんでさ。その家でがした。わつしはねえ、旦那。

「俺の足が幽靈の足見てえに消えて失くなつたのは、手前の業からだぞつ！」

と、呪ひ續けてはゐやしたが、それでも朝から貰ひに出かけちや、夜歸つて來て親父を養つてゐやした。もうその時は、旦那、親父は剝げた漆喰のやうに體がボロボロになつてやしてね。背中から息を吹き出してゐやしたて。

わつしが朝這ひ出して行く時にや、親父奴、腐れ丸太見てえに蕨の生へた土間に轉がつてゐるんでがす。わつしが夜、

這つて歸つて來ると、矢つ張り朝のまんまの格好で、そこにジメジメ濡れたまゝ轉がつてゐるんですが。

もうその時分、口なんぞきけやしなかつたんでがすが、わつしが夜、何か一嚙ぢり嚙ぢるものか、一賂め飲むものか持つてつてやりやすと、その、分るんでがすな。詰りその何でがす。旦那。

わつしが、その、どつかの。」

蜃は、じつと私の體を上から下まで一瞥した。私はギクリとした。何をしでかすんだか、何をいひ出すんだか。私はかなはないと思つた。何にしても災難だ。仕方がない最後までつき合はう、と決心した。

「何でがすな、お役所に勤めてゐて」

彼は、私を小役人と見たらしかつた。

「今、靴をギユツギユツと鳴らしながら歸つて來た。どうだらう。あれが、このおれの子だ。と思つてるらしいんでがす、大笑ひでがさあ。手と膝とでボソボソ這ひずり廻つてるわつしから靴の音を聞き出すんでがすからね。ヘツヘツヘヘ。

ところが、それがその親父の眼で分るんでがす。じつと私を見詰てゐるんでがすて。何か口ん中へ押し込みながら、いかにも安心したといふ思ひ入れで、わつしを眺めるんでがす。

その又、官員樣のわつしが借りてる家つてのが、幽靈屋敷の上に、代々の仲間たちが、多中何でも構はない燃やしたもんでがすから、柱と襲屋根の外、何にもなかつたんでがす。で、わつしらの蒲團は綿が固くなると、うまい具合にもぐら奴がやはらかにほぐしてくれるんでがす、柱だつて、旦那。

「これ一本ぐれえ取つたつて眞逆屋根が落つこちることもあるめえ。何しろ屋根だつて隨分輕いやうだから。」ってんで、眞ん中の柱をへし折つて燃やしちまつたらしいんでがす。

全くでがさあ。屋根だつても、旦那急ぎの用の時にや兩手で持ち上る位な薄つぺらな輕いもんでがした。月が見えやした。その代り一尺四角の雨が降つたつて、屋根にさはらないで直かに降つて來まさあ。

そんな調子で、わつしらがこゝへ巢食つた時分は、五本の柱と一枚の壁が、屋根を突つ張つてるだけのものでがした。ところがね、旦那。親父と來た日にや、そこをわつしの別莊だと考へ込んでしまつたんでがすよ。膝つこぶと手とに御覽の通り、ぼろを縛りつけて、わつしが這つて歸つて來ると親父の耳にやたしかにあつしの靴音が聞えたんでがすからなあ、そんな按配で親父は「しあはせ」に暮してゐやしたどうしたつて旦那、しあはせだらうぢやありませんか。奴にや魂つて奴がなかつたんですからね。あつたにしたところで、旦那、どぶ溜り見てえな魂より外にやありやうがありませんや、魂がどぶ溜だとすりやあ、どんな所だつて極樂だらうぢ

やありませんか。ねえ、旦那。眼も人形のやうに開いたつ切りで少しも動きやしませんや、もつとも人形のほど澄んぢやゐやせんや。耳の穴も鼻の穴も、土蜘蛛の穴とまるきり違つた所ああありやせんでがした。耳ん穴ん中に、旦那、一度なんか蟻が巢を食はうとした位でがしたよ。

そんな體ん中に巢を食つてる濁つた魂つてものにや、わつしだつて旦那びつくりしたくれえでがす。が、それでもわつしやあ、まだ親父が憎くなる時がありやした。

「腐れ丸太奴！　なめくじのやうに消えて失せろ！」

とね。といふのが旦那、この腐れ丸太奴がわつしの體を生みつける時に、わつしに靴の代りに梅毒を添へてくれたからでがす。

だがね、旦那。わつしがいつまでも恨むまでもごわせん、親父の魂は、もう生きて行くのに倦き倦きしたと見えて、乾からびたみみずのやうにくたばつちめやしたて。何つてたつて旦那ちよつぴりした水溜りが日でりに會やあ、乾上つちやふにきまつてまさあね。

だが、わつしは、親父の魂の乾上つた時は、あたり前だとは思ひながらも驚きやした。もつともね、親父の魂と來た日にや、そいつが體ん中にあらうが、溝ん中で蠢いてゐやうが、大した相場の違ひもごわせんがね。でがすが、ね、旦那。そんな魂でもある時とない時や、大分違ふもんだと解つたんで驚いたんでがすよ。

わつしの持つて歸つた、丸燒きの蘿蔔薯を半分喉ん中へ送り込んで、後の半分を送り込む間際になつて、親父奴、さつぱり送り込まうとしないんでがす。ハハア、唾が足りねえんだな。薯がパクつき過ぎるんだな。と思つてわつしは、親父の喉から唾の出るのを氣長く待つてゐやした。

ところが、旦那。いつかう唾が湧き出て來さうもないぢやごわせんか、それに、いままでももぐ〳〵させてゐた口も、動かさねえんでがす。おまけに眼の色が心持變つたやうに思ひやした。それから、わつしは又、親父の體の下でいつものやうにもぐら奴が惡戯をやつてやがるな、と思ひやした。といふのは、何となしに、ビリビリツとどこかかう親父の體が動いたやうに、わつしは感じたんでがす。

「ハハア、おやぢ奴、薯を食ふのに唾が足りねえもんだから、體中から搾り出さうと思つて、眼を白黑させてやがるんだな。」

が、旦那、こいつあわつしが間違つてゐやした。おやぢの舌から唾が飛び出す代りに、おやぢの體から魂が飛び出しちまつたんでがした。

あんまり長いこと、親父が薯を呑み込まうとしないのでわつしや親父のロん中へ手を突つ込んで、薯の殘りを引つ張り出してやりやした。これがねえ、旦那。いつもなら、わつし

の指だらうが何だらうが、口ん中へ這入りさへすれや、その粘土みてえな齒ぐきで嚙みつきまさあ。それがその、ちつとしてるんでがした。

すると、旦那。笑つちやいけません、わつしはどうにも我慢がならなくなつて、泣き出しちまつたんでがす。つまり、やつと、親父がくたばつたつてえことが解つた譯なんでがすな。それや、死んだつて死ななくたつて、外の人にや區別がつきやしませんや。現在、このわつしだつて、仲々死んぢやつたつてえことが飲み込めなかつたんでがすからな。

わつしは泣きやした。が、別な妙な氣持がわつしの心ん中に鎌首をもたげやした。

「こりやいけねえ。」

と、わつしは思つたんでがすが、さう思ふとなほ、その妙な氣持がニヤニヤ笑ひ出すんでがした。

「厄介拂ひをしちやつた！」つて元氣でがさあ。ところが、ポロ〳〵涙をこぼしながら、わつしやフイと思ひついたんでがす。

「一體親父はほんとにくたばつたんだらうか。」つてね。旦那。だつて、とてもほんとうにあ思へませんやね。

ピン〳〵、いなご見てえに跳ね廻つてる奴がおつ死んでも、仲々、急にやあ死んぢやつたんだたあ飲み込めませんや。野郎、急に、跳び起きて來て、

「俺が死んだと思ひやがつたな。俺は手前たちの考へたこたあ、一つ殘らずみんな見て來たぞ。」

なんて、息を吹つかへさないだらうか。

丈夫な奴が死んでもそれでさ。ところが親父と來た日にや、死んだよりひどい生き方をしてたんでがすからな。

わつしや思ひ出しやしたがな、親父奴、口のきける一番おしまひの一言でかういひやしたて。

「死んだ方がえゝ、死んだ方がえゝ。」

で、旦那、わつしはこれが親父の遺言たあ氣がつきませんや。だもんだから相槌を打ちやした。

「さうだとも、違えねえ。なまこ奴くたばつた方がよつぽどましだぞ。」

ところがどうでげしよう。何とかわつしの言葉をやりかへしさうなのに、そのまゝ默り込んでゐるんでがす。つまりわつしのいつたのが山崩れ見てえに、親父をへしつぶしたんでがす。で、わつしは、

「だが、生きてりや生きたゞけのこたああるもんだ。」

と、氣休めをいひやしたて。だがねえ旦那。生きてりや生きてるだけのこたあ、ありまさあ。」

私は、どうしても一言、蠱にたづねたくなつた。さつきから、もし私が默つてさへゐればその中に、蠱は張合ひ拔けがして去るであらうと思つてゐたが、更に去りさうな樣子がな

かつた。そこで方向を變へて積極的に迫つ拂はう。こんな先生とダラ〳〵相手になつてゐても取柄はない。と考へたから、

「ほう。君は、「生きてりや生きただけのこたああるもんだ。」と、おやぢさんに「氣休め」をいつたのかい？　で、君もその氣休めで生きてるのかい？」

「いや、旦那、御冗談で。わつしはこれで仲々まだ死に切れませんて。ヘツヘツヘヘ。なぜつたつて旦那。もう死んでも心殘りがないと云ふほど人間並な生き方もしなかつたんでがすからね。だから、旦那、どうでも死ななけやならねえ時は、帳消しだけはしてえと思ふんでがすて。ヘツヘツヘツ。」

この哀れな、膝から下のない乞食も彼をそんな狀態に放棄して置く所の「ある物」に對しては憤りを持つてゐた！

私は、何かもつと深い、この男の生活の目標とでもいふべきものを聞き出したくなつた。

彼の足のやうに、彼の生活は絶望であらうか。それとも、こんな狀態にゐながらまだ、何かの希望を持つてゐるのであらうか。持つてゐるとしたら、それは何であらうか？

「どうも失敬。詰らんことを聞いたものだね。だが、どんな風に世の中のことを考へてゐるね？」

「どんな風つて、旦那。埒もごわせん。御覽の通り、わつしには足がねえもんだから、尻尾も下げねえで猫奴、横柄にわつしの傍を通り越して行きやがるんでがす。

「やい、泥棒猫奴！　いくら畜生でもちつとは遠慮しやがれ。だが手前は足運のいゝ奴だよ。」

まだ親父の死にかけてゐる時分、わつしが袋を背中に背負つてゴツ〳〵這つて歸ると、荷馬車なんぞが又、鼻唄で追ひ拔いて行くんでがす仕方がねえからわつしは草むらの中へ這ひ込んで通りすぎる馬や馬子なんぞを見惚るんでがす。素晴らしいもんでさ。馬の奴あ丈夫な足を四本も持つてまさあ。馬子の奴は又、馬車の上へ載つかつて、兩足を腕で抱へながら鼻唄で歸つて行きやがるんでがす。勿體ねえ話でがさあ。立派な足を持つてゝあるかねえなんて。

わつしや又、のこ〳〵這ひ出しやす。いや手間取るのなんのつて。自動車と馬車と違ふほど、馬車とわつしとが違ひやす。

膝つ瘤から下が、どのぐれえ大事なもんだか、旦那方にやお解りになりやせんて。わつしや首とでも取つかへてやりやさ。

わつちだつて、れつきとした二本のすねのあつたこともあるし、ふくらはぎや、くるぶしや、かかとなんぞちやんと揃つてゝ、好な時に好きな方へドシン〳〵とあるいて行つたことがありやしたつけ。そいつを考へるとそれ、又、親父奴が憎うなるんでがした。

ところが、親父奴、嘘のやうにくたばつちまやがつたんで、

「もうそんなにひどくなつてるんだから、その上くたばらなくつてもいゝのに。」

と、わつしは思ひやしたが、もう間に合ひやせんでげした。

それから、わつしは憎むにも、可愛がるにも相手がなくなつて、がつかりしちやいやした。

「ちやんや。おめえがくたばつたんで、おら、もう憎むものさへねえんだ。おらは、おめえが手近かにゐたから、おめえを憎んだが、おめえだつて、誰か憎んでゐたんだらう。何が一體、俺等をかう不仕合せにするんだか、おら探して見るだよ。ちやんや。迷はずに成佛しろよ。何構ふこたあねえ。迷つて出て構はずとつついてやれよ。」

わつしは、父親の死體の頭ん所へ。柴の枝を一本突つ通して、旅へ出やした。

「で、君はその、死ぬまで親父さんを怨み續けたんだな。すると親父さんは誰を怨んでゐたんだね。」

私は聞いた。

「親父でげすか？ 何でも親父は自分を怨んでゐやしたつけ。そして親戚の奴等を矢つ張り恨んでゐやしたよ。

「おい。俺はお前一人が頼みだ。立派なものになつてくれろよ。お前の親父は昔は立派な商人だつたんだ。商賣にしくじると親戚の奴等まで見向きもしなくなつたんだ。いゝか、おめえは立派に立身して、俺の仇を取つてくれろ。」

かう、わつしによくいつてやしたつけ。で、わつちも、兩足擂つてる時分にやうんと馬力をかけやした。えゝ、ありやしたとも、五人前くれえの時がありやしたぜ。素晴らしいもんでがさあ。

それだけあれや、家が一軒建たうてほど、しこたま積んだ材木車を、二本の足で、外の足や半分も加勢なしで、急な阪を引張り上げたもんでがす。

立ちん坊がうるさくいふと、わつしはいつたもんでがす。

「止しねえ、兄弟。これつぽつちぢやまだ荷が足りねえ、だが、車が小せえから仕方がねえんだ。」

てなことをいつて、小一丁もある阪道を驅け上つたもんでがす。阪の上には水道がありやしてね、わつちは咽喉から尻まで一ぱい詰込んだもんでさ。

この頃でがす。わつちの花盛りといふのは。嬶を貰ふなあ月並だつてんで、片つ端から女つ子と關係をつけやした。からうぶな奴があるかと思ふと、廓の女が首ツたけだ、といふ調子でがした。で、詰り、それから七八年經つ中に、遂々足の奴め、消えうせちまやがつたんでがす。」

「いや、もう澤山。もう君、早く歸らないと日が暮るよ。」

そこで、壁の乞食は、食物と白銅とを袋の中へ入れて背に背負ふと、手にグローブを嵌めて雪解け道を、ゾロ〳〵蟲のやうに這つて行つた。

私は、彼が曲り角へ行くと、後からソーツとつけて見た。曾てN市で會つた壁は、曲り角から向うはマラソン選手のやうに驅けたからだつた。だが、この男は、曲り角から向うをも、蟲のやうに這ひ續けてゐた。

私はいまだに、この壁について、それが何んであるかを批判し切れないでゐる。

苦闘

一

警察署の隣は消防署になつてゐて、火の見櫓からはホースがブラ下つてゐた。

警察の前は大通りで、消防署の横で、電車通りと大きな十字路になつてゐた。

電車通りの裏になつてゐて、警察署前の大通りへ、直角に路次がついてゐた。そこから、警察の門内が見えた。その路次は肥料汲取りや、塵埃集めの以外には、殆んど出入りのない三尺幅位の路で、その幅の半分位は、下水の蓋が續いてゐて、そのまた蓋が所々引つくりかへつたり、壞れたりしてゐた。

山野歳夫は、もう三日前から、その路次の奥で朝早くから夜晩くまで、猫のやうに薄暗がりで眼を光らしてゐた。

その日は薄ら寒かつた。朝から日が射さないだけでなく、時々バラ〳〵と雨が落ちて來た。トタン板の廂には惡い腫物の跡でゞもあるやうな、雨の跡が消えなかつた。

警察の通用門は、電車通りの方へ、洋食屋と雜貨店の間に、一間幅位でついてゐた。

その電車通りの向ふ側の人道には、三日前から廣田とめ子が、絶えず通用門の方に眼を配りながら、二つ位の男の兒を負ひ、六つ位の女の兒の手を引いてブラ〳〵行つたり來たりしてゐた。

彼女は二十五歳位の丈の高い女で、大きい美しい眼を持つてゐた。その眼は美しくはあつたが、淋しい光と、憤とで異樣に光つてゐた。

雨が、時々バラ〳〵と來るので、その日は人出も尠く、從つて人目に立つので、いつもよりはズツと遠くまで行つて、傘を半開きにして、並木に凭つかゝりなどしてゐた。しかしその美しい眼は、警察の通用門から決して離れなかつた。子供は、晝でも暗い裏長屋にゐるよりも、人通りのある、街へ出る事を喜びはしたけれど、二日も三日も、一つ景色、一つ處へ、立つたり、ブラ〳〵歩いたりする丈けで、活動にさへ入らないので、怠屈し切つて、絶えず、ムヅがつてゐた。

彼女は上の子をあやしたり、下の兒に乳を飲ましたりを、街頭でしなければならなかつた。

路次の中に蹲んでゐる山野は、押送馬車が必要でさへあれば一日に幾度でも出るには出るが、然し、大抵は午後になつて一度と、午前に一度出るものだと云ふ事を知つてゐた。

もう、廣田敏夫たちが擧げられてから、その日は三日目の午後であつた。そしてその間に押送馬車は六七回、檢事局へ通つた。然しその中に、廣田たちが入つてゐたとは、どうしても考へられなかつた。

山野は禿げ殘つた後頭の毛を、引つ摑みながら、空を眺めた。

「これで、雪にでもなりやあ、世話あねえや」と彼は考へた。

「廣田たちは五人だ。ところが馬車の箱は四つ切りない。一人はどうしたつて、護送巡査と一緒に、護送臺に立つて行くに相違ない。そんなのは一度も通らない。事に依ると二度に分けて送つたかも知れないな。たが、俺たちの張つてゐることを、まさか氣がついてやしまい。それとも、俺が見落したのかも知れないな。だが、とめちやんまで一緒に見落すこともあるまいて」

人を待つたり見張つたりする場合、誰の心にでも絶えまのない、疑惑の念がうるさくつきまとふものだ。その想念のために、路次の中では山野が、並木道では廣田とめ子が、此三日の間に、瘠せるほど惱んでゐた。

山野の女房のよし子は、ガランとした店の間から通りを眺めてゐた。彼女は七つになる男の子と、生れ立てのホヤ〳〵の乳呑兒とを抱へて、亭主の山野の事を苦に病んでゐた。

山野とよし子とは、どつちも三十よりは四十近くになつてゐて、一日に三遍以上は喧嘩をする習慣になつてゐた。

山野が何かで癇癪を起して、茶碗でも藥罐でも投げ始めると、よし子は早速立ち上つて、碌に入つてもゐないビール箱の空箱の中から、丼、鍋、箸箱、ビールの空瓶、等々を、山野の周圍へ並べ立てるのであつた。それには理由があつた。自分の横つ面を打つ毆られるよりも、丼や鍋の壞れる方がいいからと、も一つは、自分の周圍にガラクタが一杯並んでるのに氣がつくと、山野は投げる事を止めるからであつた。

「何だ、馬鹿にしてやがら。おめえ、そんな戰術を一體、誰に敎はつたんだい。飛んでもねえ話だ。大損害だ」

さう云つて、山野はコソ〳〵土間へ下りて、痛快に叩きつけた丼や、茶碗などを拾ひ始めるのだつた。

二人が、そんなにのべつに喧嘩をするのは、適切な反抗の對照が手近にない事に起因してゐた。

「米が無い」

と、女房が云ふと、山野はいきなり、森永のビスケツトの大罐を、土間に叩きつけた。然し、米櫃の代用をしてゐる、

ビスケツトの空罐は、米を産み出さうと努力もしないで、ガラン、ガランと庭でペシヤンコになる丈けであつた。

ところが、廣田敏夫たちが擧げられてからは、二人は喧嘩を止めてしまつた。第一そんな暇が無かつた。山野は朝から晩まで出かけてゐたし、よし子は根限り狀袋を貼つてゐたからだ。狀袋でも貼らなければ、自分たちは未だ何だとしても、子供たちが乾上らねばならなかつたし、それに、のべつに指を使つてゐる事と、眼を使つてゐる事によつて、彼等の絶望的な生活の穴を覗くことを、暫らくはポンヤリと遠のけて呉れるからであつた。

一ケ月の後をさへ貧しい者は思ひ煩らうものだが、山野にしろ廣田にしろ、彼等はその日を思ひ煩はずには生きて行けなかつた。

――爾等思ひ煩ふなかれ――

と、クリストは云つた。勿論、思ひ煩つたところで、たゞそれ丈けでは餌が湧いて出るものではなかつた。然し又、それだからこそ思ひ煩ひもしなければならなかつた。

今、食ふ事のために、正確に云へば、消化液が、胃壁や腸に對して與へる刺戟のために、生理的に思ひ煩ふ必要のないのは彼等の間では擧げられて官費で食つてゐる、廣田たち五人の同志だけであつた。

よし子は、狀袋から眼をたそがれの街に移した。眼に入る限りの電柱、工場の塀、うどん屋の破目板のどこにも、種々雜多なビラがベタ〳〵と貼りつけられてあつた。縣會議員候補者のや、賣り出しのは、何色かで色刷りにされ、廣田たち五人がそのために檢擧された、勞働爭議の演說會のビラは、ザラ紙に筆でベタ〳〵と書かれ、デパートの樓上で開かれてゐる、西洋畫の展覽會のビラは、ピンで止められて、夕風に飜つてゐた。

朝つから生暖かい風は急に冷えて來た。そして、雨の代りに、時節外れの雪がチラ〳〵飛んで來た。

よし子は、十五年間山野と暮してゐる間に、四度亭主が工場で馘られたのを知つてゐた。そのたびに、何故そんな事になるのかを山野に聞いたが、どうしても飲み込めなかつた。それはその筈であつた。山野自身さへも委しくは解らないからであつた。

新聞紙上に、銀行業者が「重大なる會議を終へて」退出する寫眞が載つてゐたり、大藏大臣がどうだと云つて、大袈裟に書き立てゝはあつたが、そんな事は、餘り、よし子にとつては緣遠い事であつた。まして、そんな事と、自分の亭主の骨だらけの首との間に、何かの連がりがあらう、などとは夢にも思はなかつた。

困るのは、亭主の山野が、いつもの年甲斐もない疳癪から、爭議團なんかに首を出して、廣田たち見たいに捕まりはしな

いか、どうもやりかねない「うちの人は向う見ずだから。」そんな事にでもなれば、別の口を探す事までは出來はしないのだつた。

「毎日々々、口を探すなんて云つて、朝から晩まで家を空けてゐるんだけど、何をしてゐるんだか解つたものぢやない」

と、彼女は思つてゐた。彼女は、體からすつかり力が拔け切つたやうに、暫くポカンとしてゐた。

と、表にドヤ〳〵ツと人の足音がして、急に彼女の家に驅け込んで來た。

見ると、三人の職人風の絆纏着の人たちと、直ぐ傍の交番のお巡りさんとであつた。そして、絆纏着の一人が、水洩りのする氷囊のやうに、濡れてグタ〳〵になつた、辰夫を抱へてゐた。そして、職人の腹がけからは滴が傳つて、半ズボンから地下足袋まで、ズブ濡れであつた。

「お前さんとこの子供だらう、此子は！」

とお巡りさんが云つた。

もうその時は、よしはいきなり辰夫に飛びついて、その額に頰を押しつけて、オイ〳〵泣いてゐた。

辰夫は、死んではゐなかつたけれど、もう泣く事も出來ないと見えて、ゼーゼー喉を鳴らしながら、小さい肩で息をしてゐた。

「駄目だよ、こんな小さな子を一人で遊びに出しちや。もう、すんでの事でトンネルの中へ流れ込む處だつたよ。よく此人たちにお禮を言ひなさい」

とお巡りさんが云つた。

よしは、辰夫の着物を脱がせながら、しつきりなしに涙をこぼしてゐて、口が利けなかつた。

ウ、ウ、ウー、と、泣きじやくりながら出鱈目に頭を下げる丈けであつた。

隣りのお婆さんが入つて來て、いきなりよしを叱り始めた。此お婆さんは、自分は二階の四疊半に閉ぢ籠つて、殘りの三つの室を皆人に貸して、屠屋を情人に持つてゐた。

「何と云ふ、まあ、ほんとに私なんか、子供が一人欲しいと思つて、どんなに骨を折つてるか知れないのに。まあ、お前さんは、七つにもなつた男の子を殺さうなんて！」

巡査は、お婆さんに靜にするやうにと言つて、家の前の群集を追拂つて歸つて行つた。

お婆さんは、巡査と職人たち送りを出して、自分の部屋とよしの家とを、鼠のやうに走り廻りながら、炬燵を辰夫の足の下に入れたり、お粥を拵へたりしながら、全てその動作に晉樂でも添へるやうに、口から出委せによしを叱りつけた。

「お前さんの亭主つたら、どこをブラ〳〵ほつつき歩いてるんだい。御覽、雪が降り出したぢやないか、お彼岸すぎに雪が降るなんてたゞ事ぢや、ありやしないよ。ほんとに辰夫で

も殺したら、誰が何てつたつて、このわたしが承知しないよ。どこへ行つたんだよ。じれつたいね。お前さんのおやぢつたらあいつ奴、頭の毛が禿げたと思つたら、顎の方へ下つたんだよ。稼ぎ人のくせに顎髯なんか生やしてさ。あんなのが存外助平なんだよ。獣目だよ、お前さん、氣をつけなけや」

よしは、兩手で辰夫の肌をしつかり抱いて暖めながら、お婆さんの云ふ事など耳に入れないで、辰夫の小さな顔に血の氣の甦つて來るのを、眼の力で掴り出さうとでもするやうに、瞶めてゐた。

お婆さんは、炬燵を入れてしまふと、今度は乳呑兒を背つて、お粥の下の火を、自棄に團扇で煽いだ。

「どうしたんだらう。ほんとに、うちのおやぢは」

と、よし子は、辰夫の可愛い〻口の中を、手拭で拭きながら言つた。小さい唇の色は紫色になつてゐた。

二

路次の奥に蹋つて、火のやうに一つ所に目を注いでゐる、山野の頭や肩へ雪が落ちて直ぐに溶けた。

破目板には、嚙んで叩きつけた紙に似た霙雪がペタ〳〵くつ〻いた。

愈々、寒さと、首に打つ〻かる雨とに辛抱し切れなくなりかけた時、とめ子が上の兒の手を曳き、雨傘で警察の方へ姿を隱しながら、路次の前へ來て眼で合圖をして引きかへして行つた。

山野は反射的に立ち上つた。胸が慌て〻高鳴りを始めた。死んだ蛙に電氣でも通じたやうに、手足の筋肉がブル〳〵に震へるのを、どうしても抑へ切れなかつた。

「出て來たのかな。それとも送られるのかな」

さう云ふ風な疑問が一粒の霙のやうに、彼の頭を掠めて過ぎた。彼はリボンの千切れさうになつた中折帽を、禿げ頭に載つけると、鍔をグツと引き下げて、眼ばかりギヨロつかせながら、ヅカ〳〵と警察の正門の大通りへ、出て行つた。顎髯は首卷で見事に隱してゐたから、誰だつて眼丈けで彼を發見する事は出來なかつた。

通りへ出ると、電車の停留場の「安全地帶」の上に、廣田とめ子母子の姿を見付けた。

二人は電車を待つ二人の乘客のやうに、顔を平行して、警察の正門の方を瞶めながら、並んで立つてゐた。

「山野さん。食事をして來て下さいな。私が見てますから」

呟くやうに彼女は言つた。

「いや、未だ大丈夫ですよ。それより今日は大抵送られるか、出されるかどつちかだと思ひますよ。もう暫く待つてゐませう」

「獣目よ。今までだつて、警察からそのまゝ歸つた事なんて

ないんですもの」

「然し、……」

山野は言葉が出なかつた。

その時、ガラ〳〵、ワザとそんなに騒々しく鳴しらでもするやうに、鐵の轍の高い響を兩側の商店の硝子窓に打つつけながら、警察の正門から、押送馬車が、痩せた骨だらけの馬に曳かれて出て來た。それは音こそ高かつたが、そんなに早く走りはしなかつた。

山野と、とめ子とは撥かれるやうに、馬車の方へ突き進んだ。

汽車の日蔽窓のやうな、鎧窓の中からは中聲で何かの歌聲が、その隙間から直かに道路の泥濘に落ちた。

馬車の後の臺には、押送巡査の手に綱の一端を握られて、腰縄を打たれた廣田敏夫が立つてゐた。

三日の間に、その髯は疎に延びて、肩の肉が少し落ちたやうに見えた。編笠は撥ね落したと見えて、巡査の手に握られてゐた。

巡査は、廣田の耳の側に口をつけて、何か頻りに口説いてゐるやうに見えた。きつと、編笠を被つて呉れ、と云つてゐたのであらうが、廣田は默つて、ニヤリと笑つたま〻、肩で顎の邊をこすつた。中途半端に延びた髯が痒かつたのであらう。

山野と、妻のとめ子と子供たちが、霙の中に傘もさ〻ないで自分を見送つてゐるのを、廣田は馬車が洋品屋の角にさしかゝつた時に、見附けた。

山野は帽子をとつて、襟首を引つ掴んで、廣田を凝視してゐた。とし子は、涙の溜つた眼で、一刻一刻遠ざかつて行く夫の姿を見詰めてゐた。

廣田は、縛られてゐるために兩方が一尺とは離れない、兩方の手を揃へて、左のポケツトに手を突つ込んだ。そして、その手から、ヒラリと白い紙片が、泥濘に舞ひ落ちた。

山野と、とめ子とは直ぐにそれを見た。

とめ子は、驅け出したために涙が振り落ちた。子供が取り殘されて泣き喚いた。山野は、——後で困つただらう——帽子を泥濘に叩きつけると、彼の鐵で出來でもしたやうな胸を、握り固めた拳固で、力一杯毆つた。と同時に、叩き出されでもしたやうな鋭い叫びが彼の胸から迸つた。

「丈夫で勤めて來い！」

廣田は馬車の上で深くうなづいた。

そして再び、彼は兩方の手をポケツトに突っ込んだ。

赤い撒ビラが、泥濘の上に落ちる迄の間を、赤い霙のやうにヒラ〳〵と舞つた。

押送馬車と知つて、物珍らしさうに囚人の顔を見ながら、その後を追つかけてゐた、酒屋や八百屋の自轉車小僧たちが、

巧みにビラを受けとつた。

とめ子は泥濘に落ちた紙片を砂混りの泥ごと拾つて、大急ぎで開いた。が、それを讀まうともしないで、又、片っ方の掌に握りしめながら、泣き喚く子の方に、後ろ向きに手を出して、遠ざかつて行く夫の姿を瞶めた。

馭者は護送巡査から「急げ」とでも云はれたと見えて、痩馬の尻に滅茶苦茶に鞭を叩きつけた。

とめ子は失神したやうに、夫の姿を見送つてゐた。子供が火のやうに泣き喚くのも、その袖や手をやけに引っ張るのも、通りすがりの人たちが、堰き止められた水のやうに、溜つて物珍らしさうに眺めてゐるのも知らないで、立ち盡してゐた。

彼女は、夫を刑務所へ送るのが初めてではなかつた。だから、彼女は馴れてゐた。だが「馴れ切る」ことの出來る事柄ではなかつた。それは、飢餓に馴れ切る事の出來ないのと同じであつた。

廣田が、突然今度やられる前に、彼女と夫と話した事があつた。

「今度、あんたがやられるやうだつたら、わたしもやられるわ」

と、とめ子が云つた。

「どうしてさ。何をしてやられるんだい」

「演説でも、ビラ撒きでもやるわ」

「それでやられなかつたらどうするんだ」

「やられるまでやるわ」

「そのうちに食へなくなつたら、どうするんだい？」

「さうなりや仕方がないから、ワザと見附かるように萬引きをするわ」

「何を萬引きするんだい」

「子供の食べられるやうなものを」

二人は、默つて涙ぐんだ眼を見合せた。

「子供が可哀想だ！」

と、廣田が云つた。そして、その時、それ以上話が進められなかつた。

馬車が一丁許り走つて、曲り角を曲つてしまつた。

假死の狀態から甦りでもしたやうに、とめ子は自分に歸つた。

霙は彼女の髪、乳呑兒の頭、上の兒の頭に飴湯でもかけたやうに、グチャ〳〵に濡らしてゐた。

送られる夫、殘された妻、それは全く同じ、此地上に起る、現實の二つの事實とは思へなかつた。

パンを求める人間の本能が「罪惡」であらうか！

正しく、それは現在では、プロレタリアートに「罪惡」であると、あらゆる機會に敎へ込まれてはゐないか！

「行かう」

山野が、上の子の手をとつた。

「いやだ、いやだ、かあちやんと行くんだ」

と、とめ子の腕にブラ下がりながら、女の兒が再び喚き始めた。

「サア、かあちやんも行きますよ。ね、行きませうね」

とめ子は、さう云ふと、その小さな手を、今度は痛さの餘り泣き出す程、强く掌中に握り締めて歩き出した。

此不思議な母子が動き出したので、それに好奇の眼を見張つてゐた群衆も、ノロ〳〵と動き出した。

陰鬱な空と、白くもない霙とは、灰色の夕暮を猶更ら濃くした。

人々は、急いで歸らねばならぬ用事も忘れて、口々に何か囁き合ひながら、二丁許りも彼女たちの後を跟いて行つたが、噂が、段々薄らぐやうに、その人々も、三丁、四丁と過る中に、減つてしまつた。

明るい、廣い通りから、暗い、淋しい小路へと、彼女たちは歩いて行つた。

彼女に手を曳かれてゐる、女の兒はその小さい素足も、その下駄も、その着物の裾も、泥濘から引き上げたやうに、どろんこに濡れて、寒さに震へてゐた。

そして、飢と寒さと、休息とを絶えず母親に泣いて訴へた。けれども、彼女は自分の家に歸るまでは、燒芋さへ買つてやる事が出來なかつた。

「兎に角、私のうちまで行きましよう」

山野が、無理に冷靜を裝つた聲で云つた。彼も、さつきから、泣いてゐたのだつた。四十に近い、髯むぢやの男が泣くつて法はなかつた。が、彼は常識に反いて、涙を喉に流し込んでゐた。彼は、憤りの辛い涙を腹一杯に溜めようとでもするやうに、さつきから泣いてゐたのだ。

「えゝ」と、とめ子が云つた。「これ何で書いてあるんでしよう」

「さうでしたね」

山野は、とめ子から廣田の投つた紙片を受けとつた。だが、それは泥濘で黑く霑れた上に、片手で餘り力强く握り締められてあつたので、擴げれば破れる丈けであつた。

「駄目ですよ。迚も今、讀めませんよ。眞っ黑になつてゝ、おまけに擴げたら破れちまひますよ。私んとこへ行つて、バケツにでも浮かして洗つてからでなけりや、迚も讀めやしませんよ」

「えゝ」

とめ子は山野の返事も、ハツキリとは聞けないやうに見えた。

彼女の體の中に流れる血は、一滴一滴が、云ひ表すことの能きない苛ら立たしい、そのくせ摑み處のない、暴風雨の暗

夜の下に流れる黒潮のやうに、渦卷き逆立つてゐた。
それは呪であつた。憎しみであつた。憤であつた。悲しみであつた。いぢらしさであつた。
數千の勞働者の飢ゑた姿。
重役と株主の姿。
演壇で一言をも發する事が出來ないで、拳を振り上げたまま卒倒する爭議團員の姿。
勞働者の老いたる、病める母、その妻。
泣き叫ぶ子供たちの群。
飢ゑた、爭議團員の家族たちの群れ。
それ等の姿が、ハツキリと纏つた一つの形にならないで、流れ生れてる子供のやうな、苦しい、痛い、やるせない姿で、彼女の體軀を狂つたやうに驅け廻つた。
とめ子は兩側の小さな商店を見なかつた。
子供の事も、頭の角を掠めて落ちる一滴の雫であつた。夫の押送された事も、曾て誰かに聞いた他所の出來事のやうであつた。
町の雜音や、店先に光る電燈や、場末の洋食屋から流れ出る油の匂ひや、冷たく頰を掠める時節外れの雫などは、彼女を現實に立ち歸らせはしなかつた。
彼女は、自分の頭に出來た、丁度その腦髓ほどの大きさの腫物を、覗き込んでゐるやうに、眼を、傘の一本の骨に釘付けにしたまゝ、ヨロ〳〵して歩いた。
背中の兒は靜に、無心に眠つてゐた。
手をひかれた子供は、そのブラ〳〵した方の手を、まるで赤餅のやうに凍えさせながら、ありとあらゆる、飲食店の前で彼女がその叫喚を理解したならば、慌てゝ口を閉がずにはゐられない程、怒鳴つたり泣いたりしてゐだつた。そして遂遂、ある巴燒屋の前で、母の手を振り切つて、泥濘の中へ坐り込んでしまつた。
それでも彼女は「何故子供が泥の中へ坐り込んだか」理解し得なかつた。
「いゝ子、ね、いゝ子だからもう少しお歩き」
さう云つたまゝ、彼女は娘の方へ手を「じつ」と、いつまでも延してゐた。
山野は、泣き叫ぶ子供を泥濘の中から起した。背中の上で撥ね廻つたり泣き喚いたりするので、自分も一緒に喚き、跳ね上りたいのを押し堪へながら、しつかり負つて歩かねばならなかつた。
山野も、とめ子も、子供も、一日中泥濘の中を這ひ廻りでもしたやうに眞つ黑く泥で彩られて、異樣な臭氣を發散しながら、山野の家へ着いた。

三

山野の家では、辰夫は生きるとも死ぬるとも見當のつかない狀態に、ブラ下つてゐた。
よし子は、子供があの世へ旅立つのを抱き止めようとでもするやうに、そんなに强く抱けば猶更ら辰夫が息苦しいだらうのに、力一杯抱き締めた。
お婆さんは、赤坊を負つて、表へ出たり裏へ行つたり、辰夫の顏を覗き込んだり、そして出鱈目に叱言を言つたりして、セカ〳〵狹い家を、ガタビシ鳴らしながら歩き廻つてゐた。
醫者は、近くにいくらでもあつたが、それは山野歲夫一家には、素人よりも惡かつた。何故かならば、呼びに行つても「居ない」と云ふに決り切つた事だつたから。
だが、遠い處に一人加藤と云ふ醫者がゐた。此人は勿論來て吳れた、その上、その人自身が迚も貧乏な醫者であつたのだが「子供が死なうと云ふのに、醫者も呼びに行かないオヤジつてものが、世の中にあるかい。あたしなんか、こんな婆さんだけど子供でもあつたら、醫者の首つ玉を、指で摘んで連れて來るのに、じれつたいねえ。なんてまあ、なんて。だからあんな顎髯なんか生やしちやいけないつて云ふんだよ。畜生！ 歸つて來たら、何より先に、あたしあ、あの顎髯を鋏でチョン切つてやるから。いゝかい、聞いてお置き。大體、お前が惡いんだよ。あんな働きのない亭主に、顎髯なんぞ生やさしとく、譯がないぢやないか」
と、婆さんが喋舌りまくつたやうに、まさか「首つ玉を摘んで來る」譯には行かなかつたし、それにその場合、人もなかつた。
山野が、廣田の上の子を負つて入るが早いか、婆さんはいきなり怒鳴りつけた。
「ど、ど、ど、ど、ど、どこへ行つてゐた！ 此碌でなし奴！ 自分の子供を殺しといて、他の子を拾つて來る馬鹿があるか！ 辰夫は泥漬けになつて死にかけてんのに」
だが、婆さんは、山野の後ろに跟いて、赤ん坊を背負つたとめ子が入つた來たので、默つた。
婆さんは、山野も、その跟いて來た女も、さつき泥から拾ひ上げられた辰夫と同じやうに、ビショ〳〵に濡れた、泥んこになつてゐるのに愕いて、
「マア。今日は何て日なんだらう。町中が泥川になりでもしだやうだよ。どいつもこいつも泥だらけだ。どれ、お前さんも、子供が殺したいのかい。何て、今の若い者は、自分の生んだ子を大切にしないんだらうね。仕樣がないよ。あたしや、二人も背負やしないんだよ。まあ、お前さん。早く、卸さないかい、その子を。その子だつて死ぬよ。あゝ、まあ、何て情ない世の中になつたものだらうね」
婆さんは、とめ子のねんねこの帶を解いてやつたり、山野

が卸した女の兒の着物を脱がせたり、辰夫の着換えを女の兒に着せたり、スピードのついたベルト見たいに、そこら中を走り廻つた。

山野は辰夫の紫色の唇を見た。息子を抱いて失神したやうになつてゐる女房を見た。

「俺は、加藤さんに行つて來る！」

とさう叫ぶと、彼は、靴も履かないで驅け出した。

電車は、ラツシュアワーの混雜であつた。勿論、彼が驅けるより、電車の方が速かつたに違ひない。だが、彼は電車を待つ間が堪へ切れなかつた。停留場で必ず止る電車が厭はしかつた。

彼は狂氣のやうに驅けた。

汽車や、電車の前方を雪が積るやうに、彼の顏、胸、足の前に、霙が邪魔でもするやうに打つ衝つた。

心臟も彼にすつかり同情してもしたやうに、當然、胸苦しくなる筈なのに、反つて彼を鞭打つやうに鼓舞した。

「驅けろ！

驅けろ！

子供たちは明日の時代だ。

明日の時代を生かすために、

俺は死ぬまで驅けるんだ！」

とでも言つてゐるやうな姿で、山野は驅けた。その勞働者に不似合だと云はれる顎の無精髯が、颯爽として夕闇に、霙と交錯しながら靡いた。

街行く人々は驚いて彼を打見た。

だが、もう彼は疾風のやうに、十間も向うの夕闇に消えてしまつた。

山野の妻も、廣田の妻も絶えず罵る婆さんも、八釜しく泣き叫ぶ子供たちも、暗い電灯の下に集まつてゐた。

それは、無上に騒々しく八釜しかつた。冷靜の人ならば逆上する程、騒がしかつた。廣田の子は最大の聲で飢を訴へた。寒さに叫んだ。赤ん坊は、とめ子の出ない乳に吸ひついて癇癪を起して、切るやうに泣いた。婆さんは「八釜しい」と云つて「子供たちを、今の者は揃つて粗末にする」と云つて、絶えず喚いた、その婆さんの背中では、山野の赤ん坊が他の子供の泣聲に唆かされて、合唱した。

だのに、誰も、全て、死に神に首筋を摑まれでもしたやうに、寂しく心細く、顫へてゐた。

それは「悲しみの曲」のやうに、直かにその人たちの胸に響いた、絶望はどんなに騒がしい、又賑かな中にあつても、人の心を墓場のやうに淋しくする。

山野の女房も、廣田の女房も、泉のやうに湧き出る涙の顏を見合せて、嗚咽の聲を魂に泌み入るやうに呑み込んだ。

やがて、加藤さんと山野とが歸つた來た。

そして、山野が、少し隙を見て、洗つて火鉢に乾かした、廣田敏夫の祕密の手紙を、皆て見た。

それは、辛うじて讀める次の字が、泥に汚されて現はれた。

「闘はねば、妻子を飢ゑしめる。

闘へば、妻子を飢えしめる。

どちらにしても、俺たちの現在は飢餓なのだ。

僕は、絶望よりも、希望を取る。

光りは、今ではない。だが、光りを得るまでは、絶えず闘ふのだ。

妻子、老母を思へば、胸が痛い。

だが、だからこそ闘ふのだ。

同志よ！　闘へ。最後まで！」

暗い電灯の光の下に、その紙片を、皆は默つて讀めた。

——一九二七、四、七——

闘

天の怒聲

およそ此世の中で、人間をすつかり腐らせて終ふのは、退屈する事だと思ふ。退屈は人間を生きたまゝ腐らせて終ふ。

若し誰かゞ自分で勝手に、此人生と云ふものに退屈したとても、それは決して樂な事ではない。まして、自分ではちつとも、それを望んでゐないのに、無理に退屈させられるとしたら、これはもつと苦しい。それも期限がハツキリしてゐればいい。だが、おそらく「俺のこの退屈は、一九二七年九月から、二九年の三月頃までで濟むだらう」などと云ふ見通しは、むづかしい。

私はある無期徒刑の囚人と、隣り合はせの監房で暮した事がある。

誰でも、監獄の塀の外では、こんな男を見る事は出來まい。勿論、その男にした處で、監獄に入るまでは、娑婆にゐたに違ひないから、その男を知つてゐる、多くの人が居るにはゐるだらう。しかし、それにしても、その男は全然變つてしまつたのだ。

私はその男が口を利いたのを、一年の間に一度も聞かなかつた。云はゞ、前足を縛られた猪のやうに、虱や蚤などをつぶすために、又は一方から一方へ追ひやるために、コンクリートの壁に、彼は體をこすりつけた。

私は、運動の歸りに一度彼の監房を覗き込んだ事がある。その時、彼は監房の隅にうづくまつてゐた。そして、暗闇で光る豹の眼のやうに彼の眼光に、私は射すくめられた。

それは人間の眼ではない。と云つて又、動物の眼でもない。若し、生きた人間に、自然のと些も違はない義眼を二つとも篏め込んだら、それは無氣味に違ひない。

彼の眼は、その義眼がたゞ一つの表情を持つて作られたとでも云ふべきものであつた。何と云ふ執拗な、何と云ふ射透すやうな、深い、鋭い、呪であるだらう。

私は決して役人ではないではないか。私は同じやうに虐げられた彼の隣人ではないか。その上、私は普通の囚人のやうに、他の囚人を輕蔑しやうなどとは、全て思つた事もないではないか、私は氣の毒な男に話しかけやうとさへして覗いたのではないか。

だのに、彼は、呪以外に何の光もない、その純粹な呪の眼で私を見たのだ。

私は、どちらかと云へば無邪氣な、暢氣な、その癖亂暴なそして、憂鬱な、だが氣の置けない囚人だつた。何故つて私の性質がさうである上に、刑期だつて、僅かに十二ケ月だつたから、私の退屈や絶望には契約期間があつたのだ。

だが、私は、彼の眼に打つ衝つてからと云ふもの、言ひ表す事の出來ない感情を胸に射込まれて終つた。

私は、私の監房の扉が嚴重に閉つてゐるかどうかを、絶えず檢して見るやうになつた。そして、それが押しても叩いても開かない事が解ると、私は安心した。

私は扉を檢すと、隣房との厚いコンクリートの壁へ耳を押しつけた。が、どんな場合でも、一つの物音さへも聞きつけることは出來なかつた。たゞ、絶えず眼を監視窓の方に睨み据えながら、豚のやうに、猪のやうに、體を遲鈍にムズムズさせてゐる、彼の氣配を感じる丈けであつた。

私は彼の事を考へるやうになつた。何の犯罪で入つたんだらう、どんな育ちであるだらう、と。だが、獨房ではそんな事を知る由もなかつた。だから、私は彼について知つてゐるたゞ一つの事、その眼の事についてのみ彼を判斷するより外に仕方がなかつた。

それは丁度、憤死でもしさうな程、呪に燃えた瞬間を畫いた繪畫ではあるまいか、彼の死ぬまで續く同じ呪の表情。たつた一つの想念がすつかり化石して彼の上に乘しかかつてゐる。いや、彼の中で生きてゐるものは、たゞその呪丈けではあるまいか！

だが、何を一體彼はそんなにも呪つてゐるのか。呪はねばならないのか。恐らく囚人の心ほど想像し難いものはない。何と云つても一癖ある人間の流れ込んで來る處なのだから。

私は十二ケ月で出られるのだつた。十二ケ月と云へば三百六十五日だ。一日に三度飯を食ふから、千九十五度飯を食べればいい譯だつた。だから一度の食事はもつとも解りよい私の暦だつた。殘り千八十二度、千七十度と、私はあらゆる食事の時間に、子供が幾つ寢るとお正月が來る、と云つて樂しみにして待つやうに、私は食事を待つた。それ丈けが私の唯一の希望であつた。

だが、隣房は一度の食事が何を意味したか、どんな積りで彼は食事をするか、一生涯、たとひ八十まで生きやうとも、その間の彼の生活は監房の中でのみ營まれなければならないのか。彼には希望はなかつた。あるものは彼の現實であつた。

彼はその現實に生きる値打を見出したのだらうか。然し、よしんば、彼が、こんな生活よりは死の方がよい、と思つたにした處で、自殺は脫獄と同樣に至難な業であつた。それに又、よしんばそんな機會があるとしても、彼の心はそんな方

へは働かないやうに、決まり切つてゐたのではあるまいか。

彼は未だ、ほんの人生へ出發を初めた許りの若者のやうに見えた。若し私が判斷した彼の若さが正當であるならば、彼の生活は、苦しみにもあれ、歡びにもあれ、これからなのだ。その綿毛の生へた雛のやうな若者の彼が、五十を越した此私を、全で自分の子供たちが、そこらの惡戯小僧たちを眺めるやうな態度で生活してゐるのだ。

何故かならば、若者がそんなにも默つて、憎々しげに、たとひ監房の中でだつて暮せる譯のものではないから。彼の心の中に、未だ自分は十分に世間の事を知つてはゐない、と思ふならば、彼は、反抗をするか、それが駄目だと悟るならば努めて柔順を裝ふかする筈ではないか。そうでなければ、彼の無期徒刑は、いつまで經つても、減刑に浴する望みがない、のだ。

それに、彼だつて、全でたつた一人で此世の中に首を突き出したと云ふ譯でもあるまい。たとひ、孤兒であるにした處で、彼がそれまで育つて來たについては、何か、きつと彼を育てたものがあるに違ひない。だとすれば彼とても、何かの思ひ出は持つてゐさうなものだ。それとも、その思ひ出も、現在の彼も、またこれから先の彼も、一樣に暗室のやうに眞つ暗なのだらうか。

一坪に足りない監房の中にも、蚊に食はれないための方法や、鼻や耳や手や、膝などが凍傷にかゝらない方法やは、やり方一つで講じられない事はない。だが、そんな事についても、彼が一言も訴へがましい事を云つたのを、私は聞いた事がない。

彼は動物園で生れた象のやうに、永久に鎖に縛られて、その外の世界を見る事、そこに生活する事を思ひ切つたのか、又は忘れたのだらう。

彼と關はりはないが、私が刑期の半分以上を濟ました頃、一つの出來事が起つた。

それは夏の終りで、朝晩は寒く、日中は暑い時候の頃だつた。

掃除夫が私の監房に、食器差入口から何か投り込んで、

「新入の十五房から」

と云つて、行き過ぎた。

見ると、箸を十字架に結へて、それに足を縛つた生きた蠅が無數に、小さな麻糸で括りつけてあるのだ。

蠅は上手に生捕られて、足だけが縛られてゐるので、各々勝手な方向に飛ばうとして、ありつたけの力で羽を動かしてゐた。そのために、十字架の部分の方が少し浮くと思ふと、次には、足の方の部分が少し許り浮くのであつた。此フワフワした、箸と蠅の十字架を見てゐると、覺えず、私は微笑んだ。

新入と云へば、その言葉丈けでも懷しいものである。昨日まで娑婆にゐたかも知れない。多分そうなのだ。すると、私が全く知りもしなかつた半年の間の、社會のあらゆる出來事を彼は知つてゐるのだ。想像や臆測では絶對に知る事の出來ない、社會の實際の出來事を彼は知つてゐるのだ。

然も、その彼が私を知つてゐて、そして蠅の十字架を贈り物にして呉れたのだ！

誰だ、一體、彼は？

それから、私は麻の屑糸で草鞋を作り初めた。畫鋲よりも小さい草鞋を。どんなに私は熱心にそれを作つた事だらう。全で、それを作り上げると同時に放免になりでもするかのやうに。

そして、その草鞋に、私と同居はしてゐるが、決して私を信頼したり、愛したりしてゐるからではない、例の蠅を捕へて、十四五も縛りつけた。そして、その草鞋を染めるための染料として、私は私自身の血を以てした。

と云ふのは、私の指を嚙み切つたり何かするのではなく、私の血を吸つて、だにのやうに圓くなつて壁に止つてゐる蚊を叩きつぶして、その赤黑い血を塗つた。

血を分けた中ではあれど
蚊の憎さ。

と、私に十字架を贈り、私が草鞋を返禮した十五房が、後に私に云つた、その蚊の血で私は、その草鞋をベトベトにした。

その血に染んだ、云はゞ、死屍の河を踏み越えて來たとも思へる、その草鞋を八方に引つ張りながら、蠅は舞ひ上つた。それは、パラシュートがいつまでもフラフラしてゐるのに似てゐた。

開け放つた窓から、澄み切つた晩夏の空へ、自由を求めて私の草鞋が飛び去るならば、と、私は思つた、だらしなくブンブン呻りながら宙に浮いてゐる、草鞋を眺めた。

が、馬鹿野郎！

蠅の奴等は、自由の空を目がけて飛び去る代りに、各々勝手な方に引つ張るものだから、草疲れてしまつて、ノロノロと落つこつて來やがつた。そこには、風呂桶の蓋のやうに熱く蒸された、監房の床板があるのに！

私は、そのいくぢのない蠅の奴等を、ゴワゴワした官給の便紙に包んで、掃夫を通じて十五房に贈つた。

およそ、どんな囚人にだつて、「惡い事を爲た」と思ひ込ませるのは、困難なことである。だが、「詰らない事を爲た」とは思ひ込ませ得る。然し、そのどちらも思ひ込まうとしない囚人もある。そんな部類に十五房は屬してゐた。

青桐の葉が芽を出して、それが大きく繁り榮え、そしてま

た萎み枯れて行くのを、一つ獄窓から眺めるのは、云ひ知れぬ淋しさを覺えるものだ。

不思議なものだ。監房に入つてゐれば、お天氣だらうが雨が降らうが、そんなに氣にしなくてもいいだらうのに、囚人ほど天氣を苦にするものはあるまい。それは、殆んど農民以上であると云つても過ぎはしない。

その朝も、私は淋しい程蒼く澄んだ空を見て、底冷えのする寒さを胸の底に感じながらも、なほ救はれた氣持になつてゐた。

私たちは、運動場に五人づゝ位、共犯關係のない者だけが一度に連れ出された。そして、その囚人たちは、赤褐色の、ジゴマ團が被りでもするやうな、眼丈け出る木綿の帽子を被つて、ゾロゾロ圓い運動場を競馬の馬見たいに歩き廻つてゐた。

その監獄の運動場は、他のと較べてよく出來てゐた。扇子型に煉瓦で圍はれてないで、ただ獄庭に、囚人の頭と同じやうに短く刈り込んだ芝草の上に、眞ん丸く打ち抜きでもしたやうに、踏みつけた跡が赤く禿げてゐた。だから囚人は體や肺など〻一緒に、眼も運動させる事が出來るのだつた。

私は、たとへば蓮一つ立たない、山中の湖面のやうに、淋しいけれども動かない氣持で、他の囚人と共にグルグル廻りながら、眼をアチコチ働かせてゐた。

南の方には、煉瓦造りの自轉車工場があつた。その向ふに港の倉庫に似た長い木造建築が續いてゐた。その建物からはトロツコに積んだ何かの織物が、絶えず運び出されてゐた。

人間には、男と女と以外には減多に中性の人間がゐないやうに、監獄の中にも、看守と囚人以外の、「社會人」――囚人はそう呼び慣はしてゐた――は減多にゐなかつた。

自轉車工場の扉の所に、上を霜降りのアルパカにして、下をセルのズボンか何かで、赤革のキツドらしい靴を履いた、「社會人」が立つてゐるのが、馬鹿にスツキリと洒落て見えて私には珍らしかつた。

南を除いては、三方皆、獄舍の屋根で切られた空以外には見えなかつた。

北側の獄舍、圓い運動場から五間とは離れない處に、私たちの獨居監が二十四の目のやうな窓で覗きながら長く横はつてゐた。

私は、圓く廻るものだから、その各々の方面の景色を交る交る眺めながら、不思議な氣がした。

私の前を歩いてゐる他の囚人は、どれもこれも痩せてゐた。それは丁度植林された杉林を見る感じであつた。入つて來た時は各々肥つてゐたり中肉で居たりするのだが、二ケ月も經つ内には、一樣に同じやうな細さになつてしまふのだ。だから入つて來る時に、胸に病でも持つてゐれば、その人間は運

動場などへは出られなくなるのだ。

そんな病人や、凶暴な囚人の外に、啞や盲人などが、ひどく年老いた人間と一緒に入つてゐる獄舍などもあつた。その獄舍の囚人が入浴に行くのを見るのは、全く一つの見物であつた。啞は奇聲を發し、盲人は杖に縋つて、ノロノロと、一つの長い虫でもあるやうに、浴場の方に動いて行くのだ。

私はその行列を内密で窓によじ登つて眺めながら、そんなにも不敏活な、自分の自由さへ利かない癈疾者たちが、二重に社會から切り離されてゐるのを不審に思つた。彼等は社會に居た處で、此慌しい世の中では、どんな風に生きて行けるだらう。そして、彼等はどんな罪を犯し得たゞらう。然し口の利けない、耳の聞えない啞に、囚人が非常に多かつたと思ふのは事實だ。

私は、それ等の啞や盲人が、どんな罪を犯したかは知らない。そして、よし彼等が罪を犯したとしても、それを憎むべきかどうかも知らない。

全く健康な、全く働き盛りの人間でさへ、監獄の方が暮しいいと云ふ者さへある位だから、不具癈疾者が、牢獄に收容されるのは、別な見方から見らるべきであるか、それも私には分らない。

今では監獄でも、活動寫眞を見せ、蓄音機を聞かせるが、その當時は、そんなものはなかつた。私の言ひたいのは、どんな生活の間でも音樂はある、そして、たとへば、海の上に住む人や、坑の中に住む人や、工場の中、農村の大地の上に各々その生活の感情をしんみり唄ひ出す俗謠がある、と云ふ事だ。それのないのは恐らく啞丈けだ。

私は、一つ處から、も一つの當てもない土地に歩き初めると、ある時は青く萠え出た芝草の堤の上で、ある時は澄み切つた空の下で、狐色に枯れた芝草の上で、仰向きに寢轉びながらよく唄つたものだ。

私は何もない澄み切つた深い空、又は犬のやうな入道のやうな、色々の形を持つた雲を眺めながら、次から次へと、私のあらゆる生活が私に敎へた歌を唄ふのだつた。春であれば大地は私にその汗ばんだ肌の氣を傳へるし、秋ならばどことなく底冷えのする淋しさを私に傳へて、私の生活が氣候と云ふものと、いつでも關連してゐる事を覺らせた。

私の歌は豐富だつた。海でも、隧道でも、發電所でも、都會でも、農村でも、大工の手許の時でも、どこでも生活には唄がついてゐた。

私は、私の人生の初まりから唄ひ出して、私の青年、壯年、そして、もう漸く草疲れて來た現在までの生活を、全半日も草の上で、太陽や雲や、大地と一緒に總ざらひをした。私は、私の歌聲に引き入れられた。覺えず笑ひ出すかと思ふと、涙を知らず〳〵の中に流しながら、その唄を唄つた時代の生活

に、甘いやうな愁ひと共に曳き摺り込まれて、いつまでもいつまでも唄ひ續けた。

——親は二十歳で兒は二十一よ、
どこで勘定が違たやら——

なんかを唄ふ時、私は頭の下に敷いた腕が、全でセツトでも振つてゐるやうに感じた。

——セーラ可愛やホンコン沖で、
ルツクアウトに飛沫飛ぶ——

と唄ふ時、私は大地が海のやうに搖れてゐるのを感じるのだつた。

——シユウシユどころか今日此頃は、
五錢のバツトも吸ひかねる——

その時、私はカンカンハマーで、船のサイドを錆落しじてゐるのであつた。

かうして、私の生活は放浪の時代にも、唄は私を喜ばせ、又、悲しみもさせた。

ところが、囚人の生活は、私からその唄を七ケ月の間奪つてしまつた。これはいろいろな他の條件と共に、私をひどく憂鬱にした。

甘つたれたやうな、寂しさうな、悲しげな、憤つたやうな錆びた聲で唄が唄へるならば、私は監房の中でも、八分通りは婆婆に生きる事が出來る程なのだ。

私はその唄の調子を、胸と、頭とで考へながら、高い塀や建物で切られた、監獄の上ではない、婆婆の上の空を憧がれながら、圓く圓く、歩きまわつてゐた。

私たちの居る監房の窓からは、時々、片目だけで覗いたり一瞬間顔だけを出したり、どうかすると肩から上をすつかり出して、運動してゐる仲間を見る囚人などがあつた。けれども、看守によつては監房の方ばかり向いてゐて、彼が直接監視してゐる囚人の方を向いてゐない看守もあつた。そんな看守は誰からも憎まれた。

丁度その日の看守は、看守の中で最も意地の悪い、そして非常に權柄づくな看守であつた。事の序だから言ふのだが、囚人と云ふものは、おとなしい看守にはよく從ふが、必要以上に眼を尖らしたり、喧むやうな聲を出したり、威張つたりするのを輕蔑するものだ。

何とか云つたつけ、その看守は。名前は忘れたが何しろ、黑眼鏡そのものと云つた風な感じの男だつた。それは官職から當然受ける反抗以上の、彼個人に對する憎惡まで囚人に植ゑつける處の、妙な、損な人間に屬してゐた。

丁度、私が雜居監の側から、工場、自轉車工場の方角を廻つて、我々の獨居監の方に正面を向けた時だつた。

十五房の窓に、上半身を大膽に丸出しにして、私に十字架を與れた彼が覗いた。

私は、ジゴマ帽を少し阿彌陀に被つて、庇を上げてゐたものだから、彼はハツキリ私を認めたらしかつた。

どうだらう。彼は音樂家だつたのだ。いや普通世間では艶歌師と呼んでゐる、私の古い友達だつたのだ。

「何をしてやられたのだらう？」

と、私は眼で問ひたいやうな表情をして、色の白い、上品な彼の顏を懷しく見た。

「十五房！　何を覗く！」

運動看守が、窓を向いて喚いた。

と同時に、私は十五房が慌てゝ引つ込むかと思つたのに、運動看守の聲よりも、もつと大きい聲で歌を唄ひ出すのを聞いた。上半身を依然として窓に現はしたまゝ。

それは、憤りそのものの歌であつた。白刃の刄を傳はるやうに、鋭く彼の聲は獄庭に貫ぬき亘つた。

その歌は六句から成り立つてゐて、私もよく、燃えるやうな私たちの感情が沸騰する時に唄ふ處のそれであつた。

十五房はその美しい、世界の隅々までも透るやうな聲で、第一聯を唄ひ終るまで窓を降りなかつた。

看守は、ブルブル顫へるほど憤つてゐた。

「何と云ふ無茶な、然し痛快な事をやるのだらう。彼奴は！」

と、私は七ケ月目で聞いた歌聲に、極度に昂奮しながら思つた。私の足は全で土を踏んでゐないやうだつた。頭が充血した。緊張が私に來たのだ。

その一聯の句を唄ひ終るのに、一分とはかゝりはしなかつた。けれども私には一時間も聞いた氣がした。一方では心臟が痛くなるほど鼓舞されながら、一方では早く止めてくれればよい、と思ふ程長く感じた。それは、歌なんか唄つた彼に加へられる、懲罰の事が私の氣持を昂奮と同時に重苦しくもさせたからであつた。

たとひ歌を唄はないにしても、そこでは餘程うまくやらないと自分を護る事は困難であつた。そこ程人間を手もなく秘密裏に殺害し得る處は外には無かつた。そこはトルコの王宮の內部よりも、外部からは覗き込み得ないのだ。殊にその中に五年入つてゐる者でも、十年入つてゐる者でも、その中の事を全部知ると事ふ事は、絕對に不可能であつた。その陰鬱な建物、蜂の巢のやうに並んだ小さな監房、どこまでもどこまでも續いてゐるやうな、暗い日の光の射さない廊下。その廊下の外れのどこからとも分らない處から響いて來る悲鳴や呻吟。

ガチヤツ！　と鳴つて扉から出て行つたまゝ永久に歸つて來ない、囚人。マツチの棒見たいになつて病監に擔がれて行く禁錮囚。いつの間にか冷たい屍骸になつてしまつた自殺囚。

そして、それ等の事は、偶然覗き窓から一瞬間丈け、チラリと見ることが出來る丈けなのだ。後は又、時計、のセコぐ

ドを永久に瞶めてゐるやうな、焦れつたい倦怠と、不安の時間が彼——誰でも構はない——を待つてゐるのだ。

そこには、いつでも何か、探り得がたいものが、薄暗がりに潜んでゐる。

勿論、刑期は決定してゐる。だが、人はその刑期に百パーセントの信頼は置けないのだ。いつ病氣に罹るか分らないではないか。監房の生活は健康に良い生活ではないから。それにどんな事が自分の上に降つて來るか分らないのだ。監房には親指の入る位の龜裂が、支那とロシヤとの國境の線見たいに屋根際から床下の方まで續いてゐるのだ。いつ地震が來るか分らないではないか。そして、地震には、今度こそは一堪りもないだらう。よしんば建築は辛うじて倒れないにしても、社會の情勢次第でどうなるか分つたものではないのだ。關東の震災を思ひ起せば足りるだらう。

又、囚人名簿だつて、どんな風に書き誤られてゐないとも限らないのだ。人間の爲る仕事だ。おまけに、たとひそれが風變りな人間であつたにしても、監獄の仕事を興味を持つてやり得ると考へられるだらうか。

若し囚人から憂欝や不安を除き去らうとするならば、齒科醫が齒神經をプラチナの針で拔くやうに、囚人の頭の中から腦味噌を搾り出すより外に仕方がない。

それにしても絕えず不安に押しつけられてゐる事は、どうしても堪へられない事がある。そんな時、囚人は、自分の不安を檢して見たくなる發作に襲はれるのだ。それはチヨツと考へると不自然であるが、然し囚人にはそんな心理が働くのだ。尤も囚人でなくても、誰にでもたとひより悲慘であり、より苦痛であつても、宙ぶらりんな狀態よりも決りのついた狀態の方が、好ましい事ではある。

十五房がそんな破天荒なやり方で、單調を破つたので、私たちは早速運動を切り上げさされた。

私は今でもあり〳〵と思ひ起すのだが、十五房はよくやつてくれた。その運動看守は私とても、全く癪に障つてゐたのだ。彼は不便に出來た瀨戸ものの尿瓶以外の何物でもなかつた。それは胴も尻尾もない頭丈けの蛇見たいな奴だつた。

「早く歩け！」

とそいつは、私たちを怒鳴つた。全で鷄小屋へ鷄でも追ひ込むやうな格好に兩手を擴げながら。

尻の切れた藁草履で芝生から赭土へ、赭土からジメジメ膿でもにじみ出さうな監房の間の叩きの上へ、そして、自分の住居へ當てられてゐる監房へと、私たちは追ひ込まれた。

私たちが各々入房すると、運動看守は十五房へ飛んで行つた。

私たちは監房に入つた。全一日の中に私たちが監房から外へ出得る時間は、その運動の五分か七分か以外にはなかつた。

その短い時間私たちは外に出てゐると、今度監房へ歸つた時決つて表し難い感情に捕はれる。それはホツと安心したやうな、又は殘り惜しいやうな、全く妙なそは〳〵した氣持である。私はよく、運動から歸ると直ぐ、立ち上つて窓から、たつた今まで競馬のやうに、圓形に歩き廻つてゐた單調な獄庭を眺めた。

私が歩き廻つてゐたその同じ獄庭を、嚴重に金棒を張られた窓の中から見る時、それはもう決して前と一つのものではないのであつた。その金棒がまるで幻のベールでもあるかのやうに、獄庭は幻影化されて見えるのであつた。それは子供が自分の玩具を捨てゝ、他の子供の玩具に引かれるのと違ふであらうか。人は自分の手許にあるものは、彼の夢の對照には擇ばないものと見える。

たとへば、私は五十年の間苦しくも、又夢見心地にも、私の理想に向つて生活して來た此本土を、それは全く多くの思ひ出を以て埋められた奇しい繪卷物ではあつたが、それを私は展げて眺めかへさうとはしなかつた。不思議ではないか。私はチベツトや、又は南米のボリビヤの生活ばかり想像してゐたのだ。それは何とはなしに私を引きつけた。よしどんなに私がそれに憧れやうとも、それが私に分る筈がなかつた處から、私が引きつけられ、夢見心地に撫でられたのであるかも知れないが。

まあそんな事は私丈けのロマンチシズムであらう。誰もが同じ處を見るものではない。私の聞いた一人の强盜犯は、七年の刑期を默つて終へて、七年前忍び込んだ時の同じ家へ押入つた。その時小娘がゐたのだが、七年後の彼は同じ小娘がゐるだらうと思つて入つたのだ。ところがその娘はもう年頃になつて養子を迎へてゐた。その養子は都合の惡い事には警察の柔道の先生だつたので、彼は手もなく取り押へられて終つた。そして出獄してから四日目に三度刑務所に舞ひ戻つて來てかう云つたと云ふのだ。

「今度出たらみな殺しにしてやる！」

そして今度出られるのは、十五年先の事なのだ！　そして彼は十五年經つて出たとすれば、彼の考へてゐた通り又候押し込むに相違ないのだ。私にはそんな人間の氣持を考へられない。けれどもそんな人間が現實にあるのだから仕方がない。

私がそんな風な事を考へてゐる時、十五房の方から大きな聲で喚き合ふのが聞えて來た。勿論、十五房と看守とが議論してゐるのだらう。

十五房は永島と呼ばれてゐた。私は社會にゐる時も彼と親密に往來してゐた。彼は涙脆い、氣の柔しい、義の强い男だつた。私には彼のやうな優しい人間がどうして、巡査の佩劍が飴ん棒見たいに曲る程、人を打ん毆つたのか合點が行かな

かつた。彼は職務執行妨害罪と傷害罪とで來てゐた。女のやうに優しい顏や體軀の彼が、そのどこに勇氣を蓄へてゐるかは、私を不思議がらせた。兎に角彼は彼の屬する階級以外のものとは、口を利くのも厭はしく思つてゐるらしかつた。

一度などは、教誨師が彼の監房の扉を開けて、その扉に凭れながら彼を誨してゐた。(そこでは誰でもそうする習慣なのだ。)ところが永島は、

「まあ、そんな門口に立つてゐられては、とつくりお話も承れませんから、むさ苦しい處ではありますが、どうぞお上り下さい。」

と云つたさうだ。で、何氣なく教誨師も釣り込まれて監房の中へ入ると永島はいきなり中からドシーンと、扉を引つ張つて閉めてしまつた。教誨師は悲鳴を擧げて救を求めた。看守が駈けつけた。ところが法衣を纏つた教誨師が扉にしがみついてゐて、扉を開けると同時に叩きの上へ轉がり出てしまつた。永島は平常の教誨師が泛べてゐるやうな表情で端座してゐた。そして言つたそうだ。

「いや何事も對等で話さなくちやね。距てがあつちや物事には仲々諒解がつき憎いものですからね。」と。

勿論、彼は懲罰を食つた。懲罰は彼にはこたへた。それは普通の肉體を持つてゐる者にでもこたへる。その上彼は數度の入獄で肺をひどく痛めてゐたのだ。

「俺はなしくずしに自殺してるのだ。又なしくずしに殺されてもゐるのだよ。」

そんな風に人並より弱い彼が、そして懲罰がどんなものであるか、それが他の者よりもどの位自分によくないか、を知り拔いてゐる永島が、何だつてあんなに氣でも狂つたやうに歌を怒鳴つたのだらう。

私はいつも座る所へ官規通りに坐つて、そして鐵格子越しに頭の中も眼の中も青くなるほど、澄み切つた空を眺めてゐた。

叩きの廊下を草履でポト〳〵歩く、幾つかの足音が私の耳に入つた。きつと永島が呼び出されて、叱られて懲罰を受けるために出て行くのだらうと私は思つた。

小供の世界では叱られゝばけりがつくが、大人の世界と云ふものは、叱られただけではけりがつかない。意地の惡い邪惡な、いつまでも根に持つた、陰險極まる懲罰がある。小供を叱る親は、親の都合で多くの場合小供を叱りつける。大人の場合だつてそうだ。

そして、殊に此一廊では、人間を人間でなくしてしまふ。五年も十年も、たつた一つの事を考へて人間が生きて行く。同じものを食ひ、同じ色を膩め、同じ匂を嗅いで、生きて行く。若し人間がいくらでも大きくなるものとすれば、そこでは監房の型の、何千丁かの豆腐見たいな人間が出來上るだら

う。そんな人間の頭はどこにあるか？　それは豆腐から頭を見付ける人間以外には發見出來ないだらう。同じ型の多くの豆腐たちは、よし形はそうでもあれ、その各々の犯罪の傾向だけの質で固め上げられるのだ。

いつまでも、十五年後でも、同じ家に押し入らうとする强盜、八度監獄に投り込まれても、窓から敢然と歌を唄ふ永島それに又、此私だつて同じだ。

「へん、珍らしくもねえや」

囚人はその最も困難な、苦しい立場に陷られた時でも、默つてそう感じてゐる。ほんとうは彼は不安や恐怖を持つてゐるのだが。その不安や恐怖の度がひどければひどい程、彼は自分でそれと相殺する捨てつ鉢な氣持が必要になつて來るのだ。何故つてどんなに足掻いても、暴れても免れ得ない事だから。

それにしても、無限に長く連なつた錆びた鐵の鎖の、一つの環と同じ獄内の一日は、外の錆びた一日と些も違つた處はないのに、何故永島は、一體何だつてあんなに大きな聲で、全て火のついたやうに怒鳴り出したのだらう。彼れの歌と私に贈つてくれた生きた蠅で飾られた十字架とは、何かの關聯があるだらうか。

然し、私は永島が奇を衒つて歌なんか怒鳴る男ではない、事をよく知つてゐる。それはもう大分前の事であつたが、永島と私とがある事件で、一緒にやられて法廷に立つた事があつた。その時は、皆やられなくても濟んだ位ひ何でもない事件だつたのに、株屋の息子で刺戟を求めるため見たいに、私たちの仲間に入つてゐた若林と云ふ、學校出たての男が、豫審で輪に輪をかけて事件を大きく作り上げてしまつた。詰りある程度の刺戟は彼に必要だつたのだが、未決監になると藥が利きすぎて、彼は自分で求めた刺戟から逃げ出し度くなつたのだつた。それは無理もない事だと私は思ふ。若林にしては見れば若氣の過ちでもあらうし、又道樂としては、軟派な道樂よりは氣も利いてゐるし、それに一寸見には道樂には見えないのだから、尤も、そんな事を道樂半分に、又は道樂の代りにやられたのでは、下積みになつてる仲間たちは堪つたものではない。何と云つても、人間は生きてゐるのであつて、化學の藥品ではないのだから、實驗が間違つたと言つて、壺の中へ捨てられる代物とは、いくら貧乏に馴れてゐても、苦勞に馴れてゐても、自から違はうと云ふものだ。

その若林の、云はゞまあ教室の實驗を、いきなり街頭に持ち出したのが、彼の失敗であつた。彼が又、豫審で無理に事件を大きくしたのも同情出來なくはない。彼にして見れば、詰らない事で引つ張られたと云ふより、大きな事でやられたかつたのだし、又大きく思はせれば、その大きな事件を自白したと云ふので、恩典にも預れやうと云ふのだから、大した

まあ悪意はない譯であつた。

彼はまあそんな無邪氣な氣持ちで、もうすつかり足を洗つて、家に歸つて株の取引きの手傳ひをやつてゐた。彼は故郷から公判廷へ出かけて來た。その事件は大したものでもなかつたので、皆保釋で出てゐたのだ。

檢事の論告があつて、事實調べに入つて晝時分になつたので、裁判長が休憩すると云つて、皆が出かけ初めた。若林は彼自身の辯護士を持つて、そしてその辯護士は反對の方面から辯護すると云ふ事が分つてゐたので、被告も傍聽者も興味を持つてゐた。

ところが、その若林の答辯も彼だけの辯護士の辯論も、聞けないやうな事件が持ち上つた。

と云ふのは、若林が一足先きに出やうとしてゐると、すぐその後から永島が、人を押し分けるやうにして、未だドアの手前で、裁判官や辯護士や、傍聽人なども法廷にウヨウヨしてゐるのに、若林の奇麗に撫でつけたポマードだらけの髪の毛を引つ掴んだのだ。そして蹴飛ばしたのだ。

「犬奴！」

若林は振り向いた。その顏は腐つた青桐の葉のやうな埃つぽい土色であつた。彼は蹴られた腰の邊りに手を當てて、人人の間を判官席の方へ、死に物狂ひに驅け戻つた。

「救けて下さい。私の命を保證して下さい、裁判長！」

と彼は叫んだ。

裁判所の中には異常な空氣が漂ひ初めた。永島は保釋を取り消すと嚇かされた。おまけに「永島たちの前では、一言も口を利けません」と、ブルブル震ひながら、若林が云つたので、裁判は若林だけを分離して進める事になつた。

「殺す積りではなかつたさ。だが右の腕を一本位貰ふ積りではあつたよ」

と、永島はその日、若林が汽車で出發する時刻まで止めて置かれた裁判所の門を出ながら、薄暗の中でその女のやうに白い顏を私に向けながら話した。

彼はそんな風に思ひ切つた事を、ポカツとやる男だつた。

然し見た處では、私たちの仲間中で一番穩かな人間に見えた。

私はそんな風な、彼に關する色々な話を思ひ耽つてゐた。もうやがて夕食にならうと思はれる時であつた。永島の事や夕食の菜の事や、放免後の事などごつちやに頭の中で捻り廻してゐると、私の監房の扉が大袈裟にガチヤツと鳴つた。私はビクツとしてゐる。あんな種類の音を社會で聞き得るものではない。私は耳の傍で一日中赤ん坊に泣き立てられる方を、未だしも辛抱する。殊に今日の運動看守と來た日には、それを知つてゐるのかどうだか、ワザとひどく音のするやうに力一杯叩きつけるのだ。

その看守が扉を開けて立つてゐた。

「オイ。」

と云つて、顎をチョツとしやくつた。出ろと云ふんだとは思つたが、私は腰を半分浮かしたまゝ、

「何ですか」

と訊いた。

「出るんだ。」

と、章魚の吸盤に似た口を開いて、運動看守が云つた。

私は出た。そして監守溜りの一隅の、法廷の粗末な縮圖見たいな調室に入れられた。彼は私の後ろに立つてゐた。正面のドアを開けて、芝居の舞臺見たいに一段高くなつてゐる所へ、部長が出て來た。彼は机の前に立つたまゝ、未だ椅子にも腰を下さないうちから、

「おまへは今日歌を唄ふのを聞かなかつたか」

と訊いた。そして、腰を下した。

「何ですか」

「歌を聞かなかつたか、と云ふんだ。」

波止場の隅に捨てられたワイヤロープを、彼の口髯から聯想して私はゐた。

「長い事もう歌も聞きません。」

「馬鹿！　お前が運動に出てる時、十五房が窓から半身乘り出すやうにして、怒鳴つたぢやないか、あれが聞えなかつたか！。」

「あ、あれですか？」

「あれですか、とは何だ？　聞いただらう。何の歌だつた。」

「あれが歌だつたのですか？　私は又何だらうと思つてゐました。」

「おまへは十五房の唄ふのを聞いただらう。そして半分體を出したのも見ただらう。」

「私は見てゐました。私の家のある方の空を。」

「十五房を見なかつたか。」

「ハイ見ませんでした。」

「歌は聞いただらう。」

「ハイ、」

「どの方面から響いて來た！」

私は部長の顏をちよつと見た。彼はボツボツ安心しかけてゐるやうに見えた。

「私は又、天が叫んだのかと思つてゐました。」

「馬鹿！」

それから口ぎたなく私を罵つた。私は下を向いて低氣壓の去るまで、毒菌に似た赤褐色の囚衣の膝を見詰めてゐた。

「どうしてもお前は、天が怒鳴つたと主張するんだな。記錄に取つてもいいだらうな、」

と、遂々痺れを切らした部長が言つた。

「ハイ、天が叫びました。」

と私は答へた。

私と一緒に運動に出た、他の囚人たちも十五房が唄つたとは云はなかつたと見える。十五房は懲罰を食はなかつた。

それにしても、他の連中は何と答へたのであらう。不思議なものだ。彼等は十五房を知つてはゐなかつたであらうのに彼を不利な立場に置きはしなかつたのだ。

面白い事には、その時の運動看守はそれ以後、段々人間が練れて來たやうに思はれた。彼はかう思つたのではあるまいか。

「囚人に罰を食はさなくても、囚人であるだけで充分罰を食つてゐるのだ。」と。

實際、それはその通りだ。そして又、懲罰を食ふ囚人も隨分多いのだ。

監獄には變つた事件はそう毎々起らない。

私も、此話を此んな變化のない處で打ち切りたくはない、それは變化のある話も稀にはあるのだから。

だが又、こんな變化のない勞役に從ふ囚人もある。それは監獄中の監房や事務所などに使ふ、水道の水を井戸からタンクに押し上げるポンプ番である。

彼は朝から晩までポンプを押してゐる。眞冬でも彼の額からは汗が流れてゐる。彼の傍を通つて運動場に出て行く、私たちを見る彼の眼は、砂糖臼に縛りつけられた牛の眼に似てゐた。私は彼が二年も經つたら、きつと恐水病に罹るに相違ないと思つた。

——一九二七・七・二八——

鼻を覘ふ男

一

春の無風期が來ると、その工業地方では、數百本となく空を衝いて立つ煙突の煙が、直ぐその上に蔽ひかぶさつてゐる、厚い雲の層に抑へつけられた。そして、煙の中の有毒な瓦斯や、微細な鑛物などが、再び地上に降つて來るのであつた。

その眼に見えぬ鑛は、その地方一體の住民を苦しめた。

どんなに、結構な春の夕暮であらうとも、雲があり、風が無ければ、人々は呼吸の苦しさに喘がねばならなかつた。

時候は春であつた。だから、空が開いてゐたり、海から山の方へ風が吹いてゐたりすれば、人々は春を樂しんだ。

しかし、私は、さう云ふ喜ばしい條件の備はつた春の日とてもむしやくしやしてゐた。

學校は、試驗後の春の休暇ではあつたが、私に與へられた休暇は僅かであつた。何故かなら私は教授でもなければ學生でもなく、ただの事務員に過ぎなかつたから。私は事務員兼圖書係りを勤めてゐた。

月俸二十一圓、臨時手當月額金八圓。それが私の全收入であつた。

私は、それまでの生活も貧しかつた。いや、それまでは鐵道管理局で、日給七十錢の臨時雇であつたから、下宿料が十八圓である時代では、今の學校の事務員、職名から云へば「雇」で、二十九圓の收入は、大豆さへ半分入れれば殘りの半分は米を入れて、女房と一人の子供を養ふには、養へた。

然し、年俸二萬二千圓から四千圓までの諸教授と、卒業式の時に東京から來る貴族院議員の本校總裁、男爵の學校設立者などと、尻にパツチの當つたズボンで、大豆色の顏を並べるのは、學生の手前も、私自身の手前も業の湧く話であつた。但し、私の事務室は、學校中のどんな教授室よりも廣かつた。私は、私の事務室の扉へ教授達や助手達と同じく、表札を掲げた。ただ少し許り違ふ事は、私のは表札丈けでなくて、その上に「圖書室」の大きな表札が、壓しかかるやうにぶら下つてゐる事であつた。

私の持つてゐる英雄主義を滿足させるものは、そこには何

一つなかつた。生活と云ひ地位と云ひ、全く慘めな「下司野郎」でしかなかつた。

ある年の正月元日には、私は紋付きの羽織を着てゐないと云ふ理由で、講堂の昇降口から追ひ歸された。

そんな風な事は、私に此職から嫌惡の情ばかりをつつき出させた。

――階級のない社會つてものがあつたら、どんなに人間はのびのびする事だらう――

と、絶えず私は思つてゐた。

家庭では、私はその階級的な關係から逃れ得たか。

私の女房と云ふのが、「世間の評判のために生きてゐる」女だつた。何の事はない質の惡い龍眼肉のやうに、色が黑く、萎びて、コチコチになつてゐた。

隣に體操の先生が住んでゐた。銃劍の達人で少尉と試合をした時、三間向ふに突き飛ばした經歷を持つてゐた。その女房は水の入つた豚の膀胱のやうに膨れてゐて、夫婦ともよく似た電報配達だつた。

私の一人の女の子供は、やがて誕生の日が迫つてゐた。

「お誕生にはどうするの？」

「どうつて、どうするんだい。」

「だつて、どこだつてお誕生日には、お餅を配るんですものの、うちだつて配らないわけに行きやしないわ。」

「配れたら、配つた方がいいね」

すると、女房は幾軒の家に、一升づゝのお餅を配ると、店へ註文すれば幾ら幾ら、家で搗けばいくらいくら、とすつかり豫算を立てた。

「然し、そんな事をする餘裕があるのかい？　貯金でもしてあるのかい？」

と私は聞いた。

「貯金なんかある譯がないぢやないの。自分だつて知つてるくせに。貯金どころか、毎月借金になつて行くのが、あんたには解らないの？　殖えるのは借金ばかり。」

「それぢや、お餅も配れないぢやないか。」

「配れないつたつて、それで濟むの。あんたは子供が可愛くはないのね。」

「そんなこたあない。子供は可愛いい。だが、餅を配つたからつて、それもやれるものならいいんだ、搗かうにも搗くまいにも、金が無けりや何とも爲方がないぢやないか。」

「爲方がないなんて云つてゐられる時ぢやないのよ。借りればいいぢやないの。」

「どこで？」

「どこかで。」

「どこか借りれる處を見付けて來てくれ。さうすれば、一軒當り五升分位づゝ配るから。」

「駄目よ、あんたは。私に金を借りに行くところが、あらう筈がないぢやないの。」

「だからさ。僕にも無いんだ。毎月の生活費が足りないのにそんな臨時な費用まで出る譯が、僕だつてある筈がないぢやないか。」

「だつて、若し、お餅を配りでもしまいものなら、私は井戸の水だつて汲めやしないわ。」

「どうしてさ？」

「どうしてだつて解り切つた事ぢやないの。今朝だつてお隣りの奥さんは、「お宅でもお誕生日に、お餅をお配りになるのでしたら、町にお頼みになるより、小使や給仕に頼んで、うちでお搗きになつた方がよござんすよ。町のはね、一升分つてたつて、一升はありませんのよ。八合位のものですよ。それに水をどつさり使ひますからね。それはもう、お體裁ばかりで全でお豆腐見たいなのですよ。私の家なども、今までズーツと家で搗いて來ましたのよ。」つて、云ふんですもの。だから私、「ぢや、宅でも、うちで搗くやうに申しますわ。」つて云つちやつたんですもの。それだのに、今更ら配らないなんて云ふんだつたら、井戸の水はおろか、顏だつて出せやしないわ。」

私には女房の氣持が充分解つてゐた。

餅は配るべきである！　然し、餅は配るべきであるより以上に、飯は食はるべきであつた。ところが、必要缺くべからざる飯が食へない時代であつた。

米騒動が、各地で起つた。それが下火になると、猛烈な流行性感冒が、全世界を火のついた枯野原のやうに、殘る隈なくその火で燒き捲つた。

五人の子供を持つた、小使の家族はたつた二人だけしか殘らなかつた。女房は、臨月の小供を腹に持つたまゝ、全ではら子を持つた親豚のやうに蒸し燒きになつて、最後に死んだ。

鈴木商店の汽船は、七千噸の胴腹へ米を一杯詰めて、三雙揃つて神戸港を出帆した。そして三日目にその同じ神戸港に入港した時には、米の價が五倍に騰つてゐた。

「だつてお前。小供の食べる牛乳だつて買へない中に、そう世間の體裁ばかり繕つてるわけにも行かないぢやないか。」

「それぢやいいわ。わたしは歸ります。」

女房は、怒髮天を衝いてしまつた。

「そうですか。それぢや、そう云ふ事に致しませうか。」

私は、そう云ひ切ると、いきなりボロ洋服に、ボロ鞄で家を飛び出した。

その頃は出鱈目に雨が降つてゐたので、畑よりも低い高原の道は、溝と共同の役割を勤めてゐた。その泥んこの中を、兵隊のやうに私は突き進んだ。

――何をクヨクヨ。川端柳――

私は、口に出して唄ひながら、その唄の意味とは正反對にクヨクヨ思ひながら、正確な足取りで歩いた。

足取りは正確であつたが、行きつく先は私にも分らなかつた。だつて、どうすればいいんだ？　何とも仕様がないぢやないか。

昂奮してゐた上に、急病人のために醫者を迎へに行きでもするやうに、私は悪い道を小一里も歩いたので、洋服の下ではシヤツが、グショグショに汗になつた。

町に出ると、文房具屋をやつてゐた村田と云ふ友人がゐたので、そこへ私は寄つた。

此男は、云はば海月見たいな男であつた。四角な器にでも、圓い器にでもビシヤツと合ふやうに出來上つてゐた。村田は男であつたが、村田の女房は、村田よりも男性的であつた。

「女かい？　女つてものは人間の母つてえ魔物だよ。」

村田は、彼の女房を批評する事に依つて、女をそんな風に定義してしまつた。その村田から、私は三圓借りた。

「何よりも、餘燼を冷さなきやいかん。一週間許り、伊川の處へでも行つて遊んで來よう。」

さう決心した私は、汽車で二時間許り揺られて、F市で新聞記者をしてゐた、伊川の處へ出かけた。

そんな事は云ふがものはない。私がF市の友人を訪ねやうが訪ねまいが、そんな事はどうだつていいのだ。その友人てのも、單なるやくざ野郎でしかないのだから。

大切な事は、その鋸屑見たいな、パサパサな友人の處から何の慰めも得ないで、歸りの汽車に乘り込んだ、と云ふ事にあるのだ。尤も、それにしたつて、後から考へて見れば、然し、又、何だつて私は、後から考へた事を先に話す必要があるのだらう。チエツ、どうかしてゐる。

二

伊川の家で三日許りブラ〳〵した揚句、私は歸りの切符を買つた。ポケツトに一圓足らずの金が殘つた。辨當代はそれて充分だ。

私は全く、浮かばれない氣持で、プラツトフオームから、昇降臺へ上ると、そこに女が立つてゐた。未だ若いんだ。女ではあるが娘なんだ。女學生なんだ。だが袴ははいてゐなかつた。

そんな事は何でもないのだが、その娘を見ると同時に、今までムシヤクシヤして煮え切らないでゐた頭の中のパン粉が、一度にどつかへ吹き飛ばされたやうに感じた事だ。

不思議な事と云ふものはあるものだ、と私は思ふ。何故つたつて、生れて初めて會つた、それも汽車の昇降臺で會つた

女に、私は抜き差しのならない、何と云へばいいか、何とも云ひやうのない、早い話が、惚れ込んでしまつたのだ。

尤も、それまでだつて、私は隨分惚れつぽい男ではあつた。現に、その時に女の子の一人あつた女房だつて、「嫌ひで堪らないのに貰つた女」ではなかつた。だが、それを惚れたとは云へまい。若し、それが惚れたんだつたら、今度の奴は「戀した」とでも云はうか。何とか外に、うまい言ひ廻しがありさうなものだ。そんな月並な氣持ではなかつたのだ。何しろ、私の目は、凍てついた石ころのやうに、その娘にくつついてしまつた。

娘は、昇降臺の硝子窓から窓外を眺めながら、何か唄つてゐた。

どう見たつて、十七から上ではないらしいのに、三十にもなるおかみさんの着るやうな、じみな着物を着てゐた。それがちつとも不調和でなかつた。

「これだ！」と、私は思つた。

何が「これだ！」か、そんな事は私にも分らなかつた。ただ、「これだ」と思ひこんでしまつた。おまけに、

「此娘と別れたら取り返しがつかない。」

と、何故ともなく感じた。これは又おかしな話だ。未だ、それまでに一度も會つた事のない娘と、「別れる」も、「とり返しがつかない」も、あるべき筈がない。それは理屈に會はない。それだのに、何故だか、私はその「とり返しのつかない」ことをやりはしないかと、自分で自分が解らなくなつて胸騒ぎがし初めた。

非常に困つた事が起つたんだ。だが、會つた以上は仕方がない、それは何の事だ？　それは、詰り私が探してゐた「命」だつたのだ。一口に言へば、私の頭の上に雷が落つこちたのだ。何もかもが、今までと變つてしまつたのだ。猛烈なチブスをやると體質が一變するのと同じく、私と云ふものが、今までと變つてしまつたのだ。

その、刹那にだ。それは全く瞬間の出來事なんだ。全て、たつた今まで正氣で居た人が一瞬の間に狂つてしまふやうにすつかり變つてしまつたのだ。

「そんな馬鹿な、途方もない話があるものか」と、誰でも思ふ。そう思ふ方が普通なのだ。現に此私だつて、私以外の誰かが、そんな風になつてゐるのを見たら、

「それは氣が變になつてゐるんだ、春のせいだ。生温い風が悪いのだ。一時の熱狂に過ぎないのだ。氷嚢で頭を冷した方がいいだらう。」

と云つて意見するに違ひない。

「きつと後で、そいつあ悪い結果に終るからね。」

と、私だつて言はないでは居れない。ところが、その私がさう云ふ狀態になつてしまつた。これが戀だらうか？　これ

が戀ならば……いや、それは何でもいい事だ。

私は、そんな有樣であるのに、此上もなく、さうだ、冷靜ではなかつたかも知れないが、理智的ではあつた。何故かつて、私は計畫を立て初めたからだ。尤も、それはその時には自分にも解つてはゐなかつた。ただ、後になつて考へて見れば、「計畫なしには、あんなにうまく行くものではない。」と、思はれただけのものだ。

どうだらう。私はその時、全く古い、俗物でなければ考へられない考に囚はれてゐた。それが、私を古い、出鱈目な人間として證據立ててゐるんだらう、と恥しくなるんだが、何しろ、

「若し、人間に前世と云ふものがあるんだつたら、俺と此娘とは、その前世で情死して死ぬには死んだが、浪のために、しつかり二人の體を縛つてあつた扱帶が解けて、波のまにまに離れてしまつたんだ。そして、ひよつくり、汽車の昇降臺で出つ會したんだ。」

と云ふ風な事を考へたのだ。

娘は、美人ではないにしても、溫い、靜かな、穩かな、肉感的な、そしていや、やつぱり否む事の出來ない美人だつた。

私は、昇降臺に立ち盡して、迚も玆へ書き盡せない程、滅茶苦茶に澤山な、そして複雜な、お互に矛盾したり、衝突したりする考へを、頭の中でこね廻しながら、彼女から目を離さなかつた。

彼女の唄ふ聲は、全て芳醇な酒の香のやうに、私の耳から直かに腦へ入つて醉はせた。眼は、彼女のシユークリーム見たいな、顏のうまさにうつとりとした。

いやはや、私は生活に喘いでゐた筈だし、その時だつて殆んど絶望的な境涯にありながら、どうだらう、私は、すつかり生活苦の事を忘れてしまつてゐた。自分がどこへ歸らうとしてゐるか、どの位自分つて奴は慘めなんだか、何て癪に障る世の中だらう。と云つた風の事は一切合財、どこかへケシ飛んでしまつてゐた。

今まではその考へばかりで、不景氣にも埋まつてゐた後へ今度は彼女の姿がハツキリと沁み込み、その歌聲で一杯になつてしまつた。彼女は確に「混血兒」だつた。眼がとても大きくて、鼻が高くて、迚も背が高くて、おまけに口だつて大きいんだ、頰はバラ色であつた。もつと私の鼻が敏感だつたから、私は彼女から甘い水蜜桃の匂を嗅いだに違ひなかつた。

それに、マドンナの眼だ！　それが一番私の心を擊つた。その眼だ！

眼は魂の窓だ。幼い子供の目、鳩の目、兎の眼、牛や馬の眼。それは決して、キヨロキヨロしはしない。そんな風な疑のない眼で瞶められると、私のやうなやくざ者でも、知らず

知らずに心が和んで來る。彼女の眼がそれだ。

私が、三尺ばかり離れて、全て質屋の番頭がしでもするやうに、彼女の一切合財を、眼で計つたり、裏がへしたりしてゐるのに、彼女は、牧場の羊が旅人をでも見るやうに、靜に私を見るのだつた。

兎に角、私は一秒も娘から眼を離さなかつた。これが若し私の心の中に餘裕でもある時だつたら、自分できつと恥しくなるに違ひないのだが、そんな事は全て思ひもかけなかつた。燒けつくやうな眼で、チヨツと傍見をしてゐる間に、どこかへ行きはしないだらうか、と、それ許りに氣を取られて瞶めてゐた。

その中に、汽車がトンネルに入つた。

「このトンネルは大分長いのですから、入つた方がいいですよ。」

私は出し抜けに娘に云つた。そして指で車室を指した。

娘は、默つたまゝうなづいて、私の開けた扉から中へ入つた。私も續いた。そして、私は洗面所の處へ凭れかかつて、娘がどこへ腰を下すかを見張つてゐた。

娘はどこかのおかみさんの隣へ腰かけた。それが連れの人であるか、さうでないかは解らなかつた。然し、それが連れであるか無いかによつて、私はその後の生活はどんなにひどく影響される事だらう？　又された事だらう、それはポイントがどつちの線路かにくつついてゐる事によつて、全て違つた方向に汽車が行くのと似てはゐないだらうか。

それは、ポイントの上をガタガタツと通つた刹那に決定されるのだ。だが、その時は未だ運命に大きな開きはない。だが、それは時が經てば經つ程、大きな開きを生むのだ。

おかみさんは、丁度、私の子供位の男の兒を連れてゐた。

娘は、その兒を抱いたり、差し上げたりしてあやしてゐた。よく見ると、どうも連れでは無ささうだつた。然し又、子供がなついてゐたり、おかみさんと親しさうに話してゐたりすると、連れでありさうにも思へた。

「若し連れだつたら！」

私の心臟は、その考へに打つ衝ると、自分でも忌々しい程に、慌て出した。

娘は、時々顏を上げて車室を眺めた。そして私は、そのたんびに、娘の眼を引つ捕まへた。が、餘り私の眼が熱病にでも罹つてゐるやうに熱かつたのだらう、娘は直ぐにその眼を膝の上へ落した。

未だ羽織を着てゐる時候だつたが、然し、車室内はスチームでムンムンと熱かつた。私は内部からと外部からの熱さで堪へられなくなつたので、彼女の側を通つて、又、昇降臺へ出た。

そして、私は娘の出て來るのを待つた。出て來る筈がないではないか！　だのに私は、

「娘はきつと出て來る！」

と信じ込んでしまつた。

「出て來ないでどうするんだ。出て來ないで此儘別れる！そんな事がある筈がない。」

私は、少々寒くなつたので、外套の襟をかき合せて、昇降臺につつ立つて待つてゐた。

私は、勿論、時間と云ふものはどんな時にだつてあるものだと信じてゐる。だが、此刹那位、私の全生涯にとつて、大きな「時間」と云ふものは、無かつたと思つてゐる。それは骰子の目が、丁に出るか半に出るかどちらかなのだ。

「出て來るか、來ないか。」

そのどちらか以外にありやうはないのだ。そのどちらでもない、中途半端な事は絶對にあり得ない。その時に、私は、

「娘はきつと出て來る！」

と決定した。若し、私の此豫感が適中しなかつたならば、私は適中した後の私の生涯と云ふものを想像だも出來なかつたであらう。

私が、此物語を書き綴つてゐる、此慘めな、云はゞ人生の塵埃溜とでも言ひたい、此穴倉のやうな三疊の間で、私が辿つて來た人生に持ち得た唯一の夢、それは現實ではあつたが餘り時間が經ちすぎたのと、餘りその後の生活が陰慘であつたのとで、今はもう夢になつたのだが、此、蛆蟲のやうな生涯を、彩つて呉れた、そして人間の生活が決して絶望的なものではない、どんな時にも、人間には望みと云ふものがあると、此、半分死にかゝつた私に思はせて呉れるのは、その時の、私の豫感の的中と、そして、その娘の計り難い人格の大いさにあつたのだ。

私の生きながら半分腐つた、現在の生活、それは生活だらうか？　と思はれる程な、こんなジメジメした有様のために、私が多分嘘をついてゐるのだらう、と、讀者は思ふかも知れない。

「それは、人生を棒に振つた人間の幻想だ。人生を棒に振つたと思ひ度くないばかりに、あいつはわざと夢を造り上げたのだ。」

と思ふだらう。

さう思はれては、私は死んでも死に切れない。私から、せめて死の間際丈けでも、美しい夢を奪はないで欲しい。たとひ私の云つてる事が、全つ切り嘘だつたにしても、別に毒にならない事なら、默つて聞いて呉れてもよいではないか。まして、私のは嘘ではないのだ。正眞正銘の私の生活記錄なのだ。

だが、あゝ、今は、私の眼が霞んでしまつたやうに、現在

自分自身の生活でありながら、その思ひ出は幻のやうになつたのだ！

然し、どのやうに此物語りが過去の帳の奥に薄らがうともそれは斷じて事實なのだ。私は云ひ譯を爲やうとは思はないが、あらゆる複雜な生活をしてゐる、多くの人物が、一度に數萬人死んだ。と云ふやうな小説を書いても、たとひそれが大地震の災害を書いたのであつても、それの襲ふ一日前までの人たちは、事實だとは信じないであらう。

何故ならば、どんな荒唐無稽な小説よりも、大地震の方が「ありさうもない」事實だからだ。

年を取ると愚痴が多くなる。私は、昔の夢を語つてゐたのだ。

三

娘は、私の豫感通りに昇降臺へ出て來た。そして丁度その時、列車は靜に停車場に入つた。

娘は、驛名の書いてある立札を讀んでゐたが、急に私の方を向いた。

「K驛は未だでしようか？」

と、彼女は私にものを言つたのだ！

「いつ時分、Kに着くでしよう。」

と、重ねて、娘は私に訊いた。

「夕方ですね。或はもつと晩くなるかも知れませんね。」

と、私は答へた。

「私はKの一つ手前で降りますから、私の降りた次の驛でお降りになればよい譯です。」

と私はつけ加へた。

「ありがたう御座いました。」

彼女はさう言つて、車室へ入つた。その時私は、彼女の顔に一種の哀愁の泛んだのを見た。どんなポヘミヤンでも持つてゐる、本能的な寂寥感。それが彼女にあるのを感じた。

私はその刹那まで、未だ何等の具體的な方針を決めてはゐなかつた。然し彼女の顔に一抹の哀愁が漂ひ、又、私が、「私はあなたの下りる一つ手前で降りる」と言つた瞬間から、私は、實に既に方針が決定してゐたのだ。と云ふ事を知つた。

私はひどく後悔し初めた。

——何と云ふ俺は馬鹿者だ！　何だつて俺は、「私の降りた次の驛でお降りになればいいです。」なんて云ふんだ。俺はそう云つて終つた瞬間に「私もあなたと同じ驛に降りるのです」と何故云はなかつたんだらうと思ひ附いたんだ。馬鹿者奴！全て、前の言葉が蓋でもしてゐたやうに、直ぐその後からいい智慧が出るんだ。間に合はない！　馬鹿者奴。たとひ、K驛まで乘り越して、KからTまでの電車賃が足りないとして

も、此時、此際、そんな事にビクビクして、一世一代の寶を取り損ふなんて！　畜生、だから俺はうだつが上らないのだ。取り消せ！——

だがもう遲かつた。彼女は淋しく車室へ入つてしまつた後なのだ。

——然しだ。未だ愈々駄目だと決つた譯でもない。昔から云つてある。「虎穴に入らずんば虎兒を獲ず」と。よし、俺はドミートリー・カラマーゾフ式にやつつけよう。「人間は感情の動物だ。」決して「勘定の動物」ではない。死を賭してやれ。構ふこたあない。大した世の中ぢやない。と云ふのが、大した世の中を自分自身で打ち壞してるからだ、壁が凹むか、自分の頭が壞れるかだ！　やれ。——

然し、全く心細い冒險ではあつた。私は一圓とは持つてゐなかつた。「人間は勘定の動物」ではない。だが、生活も、そして、その生活を豐かにする處の戀愛も、一つとしてこの「勘定」なる「經濟條件」から離れる事が出來ないのだ。そしてその「勘定」がどんなにその當時押し歪められ、且つ不當な「勘定」であつた事だらう。

然し、私は道學者振らうとするのではない。何故ならば、私はその時、子供の誕生日の事も、女房の事も、老いた父の事も、全つ切り考へはしなかつたからだ。

さうだ。正直に言つて終へば、私はその娘の爲なら、自分以外の一切を賣りもし、裏切りもしたであらう。

私は暫くして又車室へ入つた。そして以前と同じく、レンズで紙でも燒くやうに、私は彼女を見守つてゐた。然しもう今度は、私の氣持が落ついてゐた。「頭が凹むか、壁が凹むか」と決心してからは、

「何と云つたつて、此娘は俺の心臟なんだ。心臟のない人間つてものがあるものか。だから此娘は俺に必要なんだ。若し失へば、俺は心臟を失ふのだ。心臟を失つて生きてゐれる譯のものぢやない」

だから私は、その後何の計畫も廻らさうとはしなかつた。必要が解決して呉れる。若し解決しなかつたら、それは俺が心臟を必要としないアミーバだから。と私は思つてゐた。

やがて、汽車は私が下りる筈のT驛へ着いた。ところが、私は下りなかつた。

「ああ、此處がTだな。」

と私は思つた。それ丈けであつた。下りる客は降り、乘る客は乘つてしまつた。そして汽笛が鳴つた。その間も絶えず彼女を燒き盡すやうに、私の魂の光を彼女に射込んでゐた。

彼女は私を見た。そして、その薔薇色の頰を林檎色にしたやうだつた、と私は思つた。

そして、丁度そこへ來た乘務車掌に、私はK驛まで乘り越

しの手續を賴んだ。小さな聲で！

處が、乘務車掌は、おそろしく大つ平に怒鳴るのだつた。私は眞つ赤になつた。そして益々小さな聲で囁くやうに賴んだ。矢つ張りいけなかつた。相變らず車掌は大きな聲で怒鳴るんだ。

尤も、車掌にして見れば、私の耳に口をつけて、「そうつとそうつと」、話す必要があらう筈がなかつた。

彼女は車掌の聲で、明らかに私が乘り越しをしてゐる、と云ふ事を聞いたらしかつた。然し、私の心の中で起つた大きな變化には、氣がつかなかつたと思ふ。全く、私にした處で自分の心の中で大變化が起つた事丈けは解つてゐたが、それはただ變化と云ふ丈けのもので、決して計畫ではなかつた。それ處ではなく、乘り越しの手續きをしてしまつてから、自分で自分に愕いた位だつた。

實際、かう云ふ風な事は、碁や將棋などと違ふ。計畫を立てて、冷靜にやつてのけられる事ではないのだ。

私はその時の事を思ひ起すと、神樣、——尤も生涯にその時一度つ切り役に立つた丈けだが——その神樣のお手引だと思つてゐるし、若し、私がTで降りてしまふか、又は別な方法を採りでもしたら、それこそ私は、破產した高利貸よりも慘めだつたらうと思ふ。

何故つて、その娘か、その後の私の生涯を短い間ではあつたが、燈臺になつたのだから。その戀——戀と云つていいかどうだか、よく私には解らないのだが、——何しろ、それから、私は「人生の價値」と云ふものを知つたのだつた。

それから後、どんなに私は苦しい生活をした事だらう。だが、彼女と一緒である間は、

「あゝ、こんな位なら死んだ方がい。」

と思ふ代りに、

「あゝ、彼女をどうかして幸福にしてやり度い。」

と思ふやうになつた。

生活が惡くなればなる程、私は彼女をその泥土から引き上げねばならない、と押し强い、根氣强い力を得るやうになつた。

それは彼女を愛する事によつて、私を愛してゐたからだらう。

だが、その彼女は？　今はどうしてゐるのだ？

私は又、先走りして、愚痴つぽくなつた。

四

T驛からK驛は一帳場しかなかつた。汽車は海岸に沿ふて走つた。海岸の磯馴松を透して、いつも泡立つて見える、早い流れの海も、黑く眠さうに蔭つてゐた。

どんな時でも、私は小供のやうに汽車の窓から、外を眺め

るのが好きであつたが、今はそれどころでは無かつた。

汽車がK驛に入る前に、K市の刑務所があつた。その高い煉瓦塀の側を通る時、汽車はワザト大きな響を立ててもするやうに、その鐵の足をゴーツと轟かせた。

刑務所の高い塀の反響が、車室を蔽の内部のやうに鳴り亘らせると同時に、私の心臟は再び顫へ初めた。

愈々K市へ來たのだ。骰子が壺から轉がり出るのだ。

窓の外は雨が降つてゐた。春雨であつた。春降るから春雨チヨツ、昔のものは解り切つた事を云つて、うまく情緒を出したものだ。

軈て、K驛へ汽車が着いた。

私たちが、驛で汽車に乘つた時は、そこは風につれて埃が舞ひ上る程天氣が續いてゐたのだが、此處では、街路に波頭が立ちさうなほど、雨水が溢れてゐた。

娘はコルク裏の草履を履いてゐた。

「こゝですよ。」

私は娘にさう云つた。

娘は、おかみさんに挨拶をして、降りた。

私も、彼女の後に從つた。

——彼女は一人旅であつたのだ！——

彼女は、半分ばかり荷物の詰つた、途方もない大型の信玄袋を持つてゐた。

プラツトフオームへ降りると、彼女はその信玄袋を持ち惱んで、片つ方の膝で信玄袋を受けて、上體を倒れる程、反對の方へ傾けて歩いた。

私はそれを見た。そして非常に具合が惡かつたが、——これがお婆さんか、又はもつと小さい女の子か、それとも男であるのだつたら、何でもないのだが、何しろ、私を一驛引き延ばした女なのだから、餘りに不良少年の常套手段めいて、頗る氣が引けたが——

「それを持つて上げませう」

と、私は思ひ切つて娘に云つた。

一體、私は出しや張り屋なのだから、人の荷物を持つ事は珍らしくないのだが、若い女の荷物を持つた事は、それが初めてであつた。いや決して云ひ譯をしてゐるのではない。

「いえ、よござんす。」

と、彼女は答へた。

「構ひません、私が持ちます。」

さう言つて、私はフンだくるやうに、その信玄袋を取つた。何が入つてゐるのか分らなかつたが、信玄袋は重かつた。

「ほら御覽なさい、こんなに重いぢやありませんか。」

と、何だつてそんな事を云つたのだか、自分にも解らないで、さう云ひながら、そいつを引つ擔いで、私は先に立つた。

信玄袋！　こいつは恐ろしく、非近代的な代物である。滅

茶苦茶に頑張つた猿の口をそれは聯想される。スーツケースなんてものとは、全て感じが違ふ。

彼女の着物と對照した場合、その信玄袋は彼女とひどく不調和ではなかつた。然し、カウカサスの處女とでも云つた風な、彼女の顏や體と較べた時、全く信玄袋と云ふ奴は不調和を極めたものであつた。

私の愕いた事は、彼女はそんな事には、全て無頓着だと云ふ事であつた。いやそれ許りではなかつた。彼女は一體、何となく常人とは變つてゐた。彼女の身なりのよくないのは、彼女が貧しい家の娘である事を示してゐた。それはもう一見して疑ふ餘地のない程であつた。ただ、彼女は自分が貧しいと云ふ事を全て氣にかけないでゐるらしかつた。それは、彼女が自分の美貌に確信があつたからだらうか。ところが、彼女は自分の美貌さへも氣にかけてゐないらしかつた。言はゞ彼女は、三つか四つになつた小供の心で、十七か八かの彼女の素晴らしい體軀を、自由に動かせてゐるやうに見えた。

私は、そんな風に感じた。

私たちは、改札口を出た。驛前の廣場は全く字義通りに、眞つ黑な泥海であつた。

二人はそこに並んで立つた。

「こんな泥濘だから、俥でいらつしやるんでしよう。」と、私は聞いた。

「今から兵營へ行つても、もう面會は出來ないでしようね。」と、彼女は私に言つた。

「勿論もう駄目でしようね。ですが、どこの兵營ですか？」

「G町の兵營ですの。」

「G町の？　では此處から一里半もありますよ。それぢやもう、迚も今日は駄目でしようね。」

「それでは、税務所の前の花岡つて家を御存じではありませんか？」

彼女は、少うし淋しさうにした。

「税務所？　税務所はO町にありますが、その花岡さんてのは、私知りませんよ。」

「いいえ、K町通りの税務所ですの。」

「K町通りに税務所なんかありませんよ。そこは七年許り前に燒けて、今はO町にあるのです。私は未だ一二年しか此處にゐないから、以前の税務所がどの邊だつたか、知りませんが、困りましたね。」

若し私が、その時、金を持つてゐたなら、彼女のために俥を雇つて、その花岡と云ふ家を探したに違ひなかつた。ところが、前にも云つたやうに、私は俥賃どころではなかつた。

その時、フト、、私の友人で私と同じ學校の教授を勤めてゐる、工學士がK市の郊外に住んでゐるのを思ひ出した——

あそこで金を借りよう！――と私は決心した。

「失禮ですが、貴女は金をお持ちですか。」と、私は彼女に聞いた。何と云ふ事だ。見ず知らずの、若い女に、然も、私は命がけで惚れてゐるのだ。それだのに私は、そんな事を口に出してしまつた。それは全く、無茶とも云ふものであつた。だが仕方がない。私は言つてしまつたのだ。で、私は續けた。

「實は、私も今持つてゐないものですから、若し、貴女も持つていらつしやらないやうだつたら、私の友人がつい此近郊にゐますから、そこまで御一緒に行つて頂きさへすれば、その花岡さんつて家も探せますし、又、見附からなかつたら、旅館へお泊りになる事も出來ますから。」

私は不安を感じてゐた。此美しい、此可愛いい若い女を信玄袋を背負はせて、暗の泥濘を彷徨させる。それは、此世の中に若い男が居なくなつてからの事だ。あゝ、私は、もう既にその時から、彼女に嫉妬をしてゐたのだ！

「ありがたう御座います。」と娘は云つた。

「一圓ばかりは持つてゐますけれど、實は兵營に姉婿がゐてそこで旅費を借りて、H市まで歸る積りで、昨夜、姉の處を立つて來たんですの。こんな時間に着くとは知りませんし、花岡つて家も直ぐに解ると思つてゐましたものですから。」

彼女は、聞えるか聞えない位に、溜息をついた。

矢つ張りさうだつた。彼女は貧しかつた。彼女は腹が空いてゐたに違ひない、私たちは汽車で何一つ食べなかつたから。彼女は又、辨當を買ふと、電車賃の無くなる事を恐れてゐたに違ひなかつた。

「それぢや、私と一緒に來ませんか、友人の處に行つて見ませう。そこがいけなかつたら、私の家はT町にありますからそこへお出でになつて、明日、兵營にいらつしつた方がいいでしよう。」

さう云つて、私は泥濘へ踏み出さうとしたが、此重い信玄袋を方々ブラ下げて歩く事は、流石に勇氣がなかつた。

そこで、彼女に信玄袋を一時預けにするやうに相談して、その手續きをした。その結果彼女が、塚田きよ子と呼ばれる女である事を知つた。

ゴムの長靴を履いて歩いてゐる人達に混つて、コルク草履で、彼女は平氣で歩いた。

私たちは、電車で友人の家へ行つた。電車から友人の家は十町許り離れた田圃の中にあつた。その田圃の中はひどく道が悪かつた。

水溜りを越す時に、私は、彼女を抱いて越させた。

もう、すつかり夜になつてゐた。

友人の家の門前に彼女に待つて貰つて私は案内を乞ふた。出て來た女中が、

「試驗休み中、御夫婦連れで、溫泉へ御湯治にお出かけになりました。」

と云つた。私は頭を玄能でゞも毆られたやうに感じた。一切が暗くなつた。

門には彼女が待つてゐるのだ。天使のやうに無邪氣な信頼をもつて、何だか得態の知れぬ此私を待つてゐるのだ。

私は、玄關で女中を捕へて、しつゝこく色んな事を根掘り葉掘り聞いてゐた。「御主人は何時何日の何時の汽車で發たれたか、」だの、「奥さんと御一緒か」だの、「留守中何も云ひ置いては行かれなかつたか」「いつ頃お歸りか解らないか」などゝ、くどくどと聞いてゐた。

その癖女中がどんな返事をしたか、それは全で聞いてはゐなかつた。私は腑抜け見たいになつて、ポカンと口を開いて暫く突つ立つて女中を見てゐたが、

「歸られたらどうぞ、よろしく」と言つて、いきなり表へ飛び出した。

門の外には、彼女が、白足袋を眞つ黑く染めながら、淋しく私を待つてゐた。

五

私は、その時自分にもはつきりは解つてゐなかつたが、汽車の間、汽車から降りてこれまでの間に、彼女を得るための具體的手段についてよりも、彼女を失つてはならぬ、と云ふ心配の方が多く頭を占めてゐた。

――俺は彼女なしには、生きてゐられないだらう――と、私は考へ込んでゐた。然し、私がさう考へる事はいゝとしても、彼女の方ではどんな境遇にあるのか、そして、その境遇は、決して私のやうなやくざ野郎と、一緒になどなれないものであつたり、又は、第一彼女が私を好きになれなかつたら、どうするのだ。

第一、私にはもう女房がある。おまけに小供までもある。それに、私と云ふ男は、何處と云つて取柄のある人間ではない。私は特別な才能も持つてゐないのに、此人生に「生き甲斐」を求めやうとしてゐる。私は生き甲斐なんか求めないで古枕木の柵のやうに、他の何千本かと同樣に、默つてじつと風雨に朽ちてゐればいゝのではないか。

私はこの事を、今まで自分に絶えず言つて聞かせて來た。

――ただ俺は生れて來たのだ、だから、ただ俺は生きてゐればよいのだ――

だから、私は、希望も、目的も、理想も、そんなものは考へないで、十錢で買ひ得る品物のうち、一番量が多くて營養のある、何かのお菜を買へばよい。と自分に思ひ込ませやうとしてゐた。私はまたそれに成功したやうに見えた。然し、十錢の金で、量の多い營養に富んだものを選擇すると云ふ、

その心が、私を平安にして置いては呉れなかつた。

——俺はグルーシヤの周りを飛び廻つた、ドミートリー・カラマーゾフなんだ。もつと俺は慘めなドミートリーなんだ——と、私は思ひながら、彼女と再び泥濘の中を電車通りに出た。

私は、最初、彼女を見た事を後悔する。

ドミートリーは自分の父を殺した嫌疑を受けて、シベリヤへ送られたが、私は遂々、彼女、塚田きよ子を、手と云はず足と云はず、頭から、ああ——鼻、思ひ出しても彼女の鼻は良い格好であつた——それまでも、生きながら斬り落してしまはねば、ならぬやうな破目になつた。

それも、詰りは、私が自分自身を知らない事に起因してゐるのだ。私は生きながら此上もなく快い夢を追ふてゐたのだ。ただ私は、快い夢を貪り得るやうに、周圍が準備されてゐない事を知らなかつたのだ。だから、暗み雲に眠らうとした結果は、人の喉を摑み、自分の喉を梁に吊す事以外では、ない事になつてしまつたのだ。だが、それは先の話だ。

私たちは電車を待つた。その間に私の心の中に泛んだ考は、

——こんな美しい娘を、たつた一人で宿屋へ泊めると云ふ事は危險だ！——

電車が切通しのカーブを、鋭いヘツドライトで切り裂きながら、淋しい私たちの立つてゐる停留場へ驀進して來た。

「私はさつき言つたやうに、金を持つてゐませんから、貴女電車賃丈け出しといて呉れませんか。」

と、私は彼女に云つて、先に立つて電車に乘つた。これはもう言語道斷であつた。

何と云ふならず者だらう、私は！

だが、私はこんな言葉を平氣で言つたのではない、と言ふ事は私を辯護する事にはならないだらうか。私とても、彼女から一錢でも借り度く無かつた。こんな重大な機會に、私の無能無力を曝露すると云ふ事は、殆んど決定的に私の計畫を打ち壞す事になるのだつたから。

實際、彼女が、夢を追つてゐないのだつたら、それで一度に愛想を盡かした事だらう。だが、彼女は、此地上で苦痛だけを愛してゐた。彼女はいつでも、自分よりもつと慰れみ得る人間をのみ求めてゐたのだ。だから、私の申し出は、一般にあり得るのと全く反對の効果を彼女の上に齎した。

「あたしもこれ丈けつかないんですの。」

さう云つて、彼女は私に自分の金を財布ぐるみ渡した。

私たちは並んで腰を下した。

誰か知つた者が居やしないか、私は心配して車室を見廻はした。何しろ、學校の先生だとか書記だとか云つた連中位、うるさいものはないのだから。それは全く、針金で出來た智慧の輪見たいなものだ。それ自身ではどうしても解けない謎

なんだ。

幸に、車中には、「困難なる智慧の輪」は存在しなかつた。

T町に着くと、私たちは村田を訪はねばならなかつた。そこは停留所から直ぐだつた。然し、村田に會ふためには、その女房に見付からないやうにしなければならなかつた。

何故つて、村田の女房は、云はゞ、眞ん中に大きな口の開いた四角な土瓶敷き見たいな女だつたから。それが石炭屋の店先にでもあるやうに、ゴテゴテと白粉を塗つた、眞ん中の口で喋舌り出したら最後、私は思ひ出した丈けでもゾツとする。その土瓶敷きたるや、村田の出かける處は、商用だらうが何だらうが、ついて出かけないと承知しない、と云ふ代物であつた。

その女に、私が、自分の女房以外の、若い美しい女と一緒に居る事を發見でもされやうものなら、私はいゝ。だが、村田は必ず咽喉佛を摑み出されるに相違なかつた。

私は、彼女を自分の體で蔽ひかくしながら、村田の店先を離れて通つた。

——しめた！——

村田が店番をしてゐた。

彼女を行き過ぎた店先の町角の暗がりに待つて貰つて、ノツソリ、私は店へ入つた。

「ヤア」

「ヤア」

「チヨツと」

それから私は云つた。

「俺は決心したんだ。その町角にゐる女を失つたら、俺は生きてはゐないんだ。だから今夜泊る宿賃を貸してくれ。」

村田は土間へ下りて、私の耳へ口をつけて云つた。

「どうしたんだ！　その女つてのはどこにゐるんだ。一體誰なんだ。」

私はいきなり彼の手を引つ摑んで、表へ出た。

彼女は、泥濘の中に淋しく、然し此私を頼り切つて佇んでゐた。

「うん、さうか、僕も賛成だ。そこの旅館に行つてゐ給へ、金は何とかするから、そして後で僕も行くからね。」

村田が「賛成した」のだ。

「ぢや、きつと頼むぜ。いゝかい。」

そこで、私たちは、直ぐ突き當りに見える、開店した許りの商人宿へ上つた。

私は二階に上る時に、二人の脱ぎ捨てた履物を見た。足の甲の方までも一面泥にまみれた白足袋と、破れた靴。

——よし、此破れ靴のやうに、今までのジメジメした生活に別れを告げてやれ！

私は心のどこかでさう思ひながら、二階に上つた。

綺麗な八疊の間だつた。その室の窓硝子から、村田の家の前の通りが見渡された。

直ぐにお湯に入つた。

彼女がお湯から歸つて來た時、私は再び彼女の偉大な美に打たれた。白粉をつけたよりも白いその皮膚の下を、純潔な處女の血が、奔流してゐるのが、透して見えるのだつた。それは單なる美ではなかつた。もつと何か外の崇高な言葉で云ひ現はさるべきものであつた。

彼女を見てゐると、

「私を汚らはしい氣持で見る事は、誰にだつて出來ません。」と云つてゐるやうだつた。だから、彼女は、全で私が見ででもあるやうに、私が居ると云ふ事に煩はされずに、振舞ふのであつた。彼女は全く些もオドオドしてゐなかつたし、さうかと云つて、自分を強ひて誇示しやうともしてゐなかつた。極めて自然に平氣でゐるのであつた。だが、それにしても、決して陽氣な、燥いだ氣持でもなければ、又、顏付でもなかつた。と云つて決して沈んでゐるのではなかつた。それは「永劫の處女」であつた。

——しかし、初めての男と一緒なのに、こんなに平氣なのは、或は、或は不良少女ぢやあるまいか？——

私は、呪ふべき此想念を、蹴飛ばした。

——だが、若しかさうではあるまいか、或は、少し足りないのではあるまいか？——

しかし、私は彼女よりも智的な顏を、他に未だ見た事が無かつた。

私たちは食事を濟ますと、——食事中、彼女は決して「食事を恥ぢる」ことはなかつた。彼女の食事の有樣を見てゐる丈けでも、愉快な氣を起させる程、彼女は虛心に食べた。食事が濟むと、私は、これからが重大な仕事である事を知つた。未だ、彼女と私とは、何でもないのだ。

私は、彼女にプラトニツクなラヴをしてゐたのだらうか？一生涯、「神聖」に、兄と妹として丈けの關係で……そんな事が一體出來るだらうか。そんな焦れつたい、ヒステリカルな責任の重い、そのくせ些も役に立たない、そんな極端に馬鹿げた戀愛！　それは、私が、豚のやうに下劣な爲であるからだらうか？　そんな忌はしい事を考へるなんて。だが、それかと云つて、私は彼女から、どんな劣情をも挑發されはしなかつた。

六

私は彼女を得た。そして、今までの私の生活と別れを告げた。

私の生活は經濟的に些も樂にならなかつた。いや、一層苦しくなつた。

何故かならば、私は先妻との間に出來た兒を連れて、彼女と放浪の旅に上つたからであつた。

どこか、此同じ地上に、私見たいな平凡な取るに足りない人間でも、活きて行くに足る丈けの隙間はないものだらうかと、その隙間を見附けに、旅から旅を當て度もなく彷ひ初めた。

その放浪の旅の初めには、學校から貰つた退職の「涙金」が百圓あつた。が、百圓の金は、それを握つた時は迚も大金を摑んだやうな、遽に前途が金貨色に輝き初めたやうな氣持に私たちを引つ張り込んだが、半月の後には蜃氣樓見たいにどこかへ消え失せてしまつた。

然し、私は苦しければ苦しい程焦り出した。どんなに苦しくても、私は乞食と同じやうに落ちぶれた格好をしてゐる彼女を、猶更らひどく可愛がるやうになつた。彼女は、一日中何も食べないことがあつても、未だ無邪氣な、云はゞ間違つて泥濘の中に辷り込みでもした天使のやうな顏をして、私に活きることに匙を投げさせなかつた。その事は、私が虛無的な、絶望的な氣持になり度くてならないのを、防ぎ止めた。

私が、立ちん坊をして、一圓かそこらの金を持つて歸ると、彼女は兒供と一緒に戯れてゐるか、又は縫物をしてゐた。裁縫では彼女は妻い腕前を持つてゐた。

私たちが、流れついたその町の棲居と云ふのは、沼地に鋸屑や塵芥などを埋め立てた、ジメジメした、その上ボコボコした貧民窟であつた。

五十軒長屋と呼ばれてゐて、その五十軒がどれも四疊半一間と三疊と勝手とで出來上つてゐた。

若し誰かゞ、雨洩りを防ぐために、上つたとすると、その五十軒長屋は、日本アルプスを眺めると同じに、ひどい角度で凸凹してゐて、若し雨漏りを防ぎ度ければ、燒いてしまふより外に方法はないと、覺るだけの事であつた。

その上、長屋の中の一家で夫婦喧嘩なり、親子喧嘩なりおつ初めるとなると、その兩側の尠くとも三軒づゝの家族は、一緒に跳び上つたり、落ちたりしない譯には行かなかつた。何故つて、家の土臺は鋸屑であつたから、長屋中が、巨大な汽船のやうに搖れるのを、どうすると云ふ譯にも行かなかつた。

そして、實際、長屋の人々は一つの仕事でもあるやうにのべつに喧嘩をした。

その中で、私たちの一家だけは、隣り近所の人が不思議に思ふ程喧嘩をしなかつた。

喧嘩どころではなく、たまには、彼女はヨレヨレの着物で兒供を背負ひ、私は膝の拔けたオバーオールを着て、動物園や公園などに散歩に出かけさへした。

そこには廣い草原もあれば、腐らない空氣もあれば、澄ん

だ水の泉水さへもあつた。そして、その一つのベンチに腰を卸して、子供が草つ原を歩いたり、轉んだり、這ひ廻るのを時々顔を見合せて淋しい微笑を交しながら、二人で默つて半日位は腰をかけてゐるのであつた。

こんな事は長屋の人々より遙に幸福な、寧ろ子供々々した歡びではあつた。と云ふ事は一面、私たちよりも、もつと長屋の人たちは苦惱のどん底に、滓のやうに溜つてゐたと云ふ事になる。

然し、長屋の人たちよりも、少しだけ幸福だと云ふ事は、決して私たちが、ほんとに幸福だと云ふ事を意味しなかつた。

公園に自動車で來て、草つ原を五分許り驅け廻つて、輕い疲勞を邸宅のソファーに享樂する人々と較べれば、私たち五十軒長屋に蠢く人々は、泥溝の中の一樣に赤いゴカイの一群にしか過ぎなかつた。

その事を私たちが、ハツキリ私たちに思ひ込ませねばならなかつたのは、殘暑の酷しい頃の事であつた。

子供が、何を食べても消化しなくなつた。重湯を食べても葛湯でも、便が固まらねばならない筈のものを食べさせるにも拘らず、些も消化しなくなつた事であつた。

そして一日一日と痩せ細つて行つた。そのくせ、食慾が無いのかと言ふと、何でも食べたがるのだつた。

丁度私はその頃、幸に、日給一圓七十錢で、ある工場に通つて、朝から晩まで鐵板に穴を明ける仕事を得てゐたので、小兒科專門の醫者に見て貰つた。

醫者は「營養不良」だと云つた。

私たちは、子供を助けるためなら、丁度子供が助かつた時に、死んでもいゝ積りで私たちの食物を節約して、醫者の云ふ通りのものを子供に與へた。

が、子供は、その鋭い、深刻な食慾とは反對に吐いたり、下痢したりして、些も自分の生命の生長の方へ消費しやうとはしなかつた。そして、その哀れな臨終には、小さな口に入れてやる氷と一緒に、私たちの指を、赤く血の染むほど食ひついた。

私たちは、せめて私たちの指から流れ出る血が、子供の血になつてその命をとり止める事が出來るならば、私たちの血が出切るのを寧ろ嬉しく思つて、私と彼女とは交る交る、小さな斷末魔の命に指を嚙ませた。

醫者はもう夙くに匙を投げてしまつて、呼びに行つても來て吳れなかつた。玄關先きで「輸血療法でも」と頼んだが、醫者は冷靜に首を振つた。

「もう、行つて見ても駄目だと思ひます。すつかり衰弱してますからね。」

私たちは、藻がき苦しむ小さい生命の前に、その斷末魔の苦惱の中に、與へ得るものは氷と、自分たちの指とより外に

なかつた。それは、小さい命の糧にはならなかつた。

痩せこけた、小さな顔に、眼だけ大きく澄んだ光を殘したまゝ、小さな命は逝つた。

「これが、私たちの戀の報ひだらうか！」

鋭い、裂くやうな聲を揚げて、きよ子は子供の顔の上に泣き伏した。

私たちは、流れるに委せた涙の顔を、お互に小さな顔の上に寄ひ合ふやうに押しつけた。

これが戀の報ひであらうか？　戀の報ひはいつでもかう云ふ結末に落ちつくのだらうか。

きよ子は、彼女のでない先妻の兒を失つてからは、性格が變つてしまつたやうに見えた。彼女の心の中には、子供の死が彼女と私との責任だ、と云ふ想念が畫となく夜となくつきまとつてゐるのだつた。

彼女は、それまで私に見せなかつた、亡兒の體溫表と、食べ物の量と、嘔吐の數などを五分間毎に書き込んだ治療表を、垂れ下つた幕のやうに波打つてゐる壁に貼りつけた。その表の上に亡兒の寫眞を貼り添へた。

私たちは惱んだ。きよ子が自分を責めてゐる氣持が、私の心の底にもあつた。私は自分にも彼女にも云ひ聞かせた。

「おれたちは出來る丈けの事はしたのだ。乳幼兒の死亡率が、貧民窟ではどんなに高いかは、政府の統計にでも證明されてゐるのだ。おれたち丈けの罪ではないんだ。」と。

然し、私たちの頭の中には、飢と、病とにその小さな生命の凡ゆる力を擧げて鬪つた。鋭い、裂くやうな泣き聲が、絶えず風のやうに鳴つてゐた。

きよ子は、私の戀に答へた事を悔ひ初めて來たやうに見えた。

恐ろしい事は、彼女も亦姙娠してゐた事だつた。

何かしら、ひどく彼女は自分の頭の中の詮索を初めたらしかつた。丁度急いでどこかに旅立つ前に、何か探さねばならないと思ひながら、その探さねばならないものを思ひ出せないで、遂々、旅の間中、何とも知れない不安と憂鬱とに壓へつけられると云つた調子であつた。

私は彼女のその有樣をジツと見てはゐられなかつた。

油汗が爪にまで浮きさうな蒸し暑い夕方でも、たつた二人で向ひ合ふと、二人とも子供の棺の中を覗き込んでゞもゐるやうな、寒さに似たおの〳〵きを覺えた。

私には、その上にも一つの苦しみがあつた。それは、きよ子が私から離れはしまいか、と云ふ事だつた。

私は、未だ、汽車を乘り越した時と同じ氣持で、彼女を愛し續けてゐたから、いや此物語が、そんなに慘酷に終りを告げた後の、今でさへも、私は矢つ張り彼女を愛してゐるのだ。

七

私の通つてゐた工場に、全く突然、思ひもかけずストライキが起つた。

ある、初秋の日の朝であつた。千五六百の勞働者がザワザワし初めたと思ふと、

「製鑵場の傍の廣場へ」

と、勞働者の口から口へと傳へられた。

勞働者たちは出入口から、窓から、非常階段から、ありとあらゆる出入口から、鑄物工場と製鑵場との間の空地へ集つた。

私も、蟻の群の中の一匹の蟻のやうに、廣場に押し出された。

それは私自身の力で動いてゐるのではなくて、群集の力と、群集の醸し出す氣持とが、私たちをみんなどこかへ曳きずつて行くのであるやうに思へた。

私は不思議に思つた。昨日までは全つ切り自分の行爲に役立てることを知らなかつたやうに見えた、多くの勞働者が、全く突然、誰が命令するともなく、廣場に集る。

ポール盤、ミーリング、ペレス、などの前についてゐてもその廣場に集つただけの人數はあるのに、そして、それだけの人數は毎日絶へず、工場に働いてゐるのに、その同じ勞働者、同じ人間たちが、廣場に集つた時、一樣に群集が自分たちの力を感じ初める。一人の煽動者が、鑄型の上に飛び上つて、勞働者たちを煽動するのではなくて、群集の持つてゐる何とも云へない逞しい力、避け難い誘惑、昂奮に、一人の勞働者が煽動されて飛び上る！

私は、自分の云ひたい事を喋舌る。が、それは、私丈けが云ひたい事ではなくて、皆が云ひたい事なのだ。

さう云ふ情景が、その時も起つた。

私は、何故ともなく涙をポロポロ落しながら、演說に聞き入つた。

それは、全く突然に起つた事であつたけれど、それが起らねばならぬやうになつたまでの時間は、どんなに長かつたかと云ふ事を私は知つた。

私の工場で、一番の熟練工の、圖體が全て鋼鐵で出來上つてゐるやうな、平島と云ふ男が三番目に、鑄型臺に飛び上つた。

私は、平島が何を云ひ出すか、心配した。と云ふのは、彼が演說をするなど、云ふ事は想像だも出來ない事だつたから。十歲の年に此工場に見習ひで入つてから、二十二年間働き續けて來た彼であつた。講談本以外に讀んだ事のない彼であつた。全て、鑄物の鑄瘤としてのみ存在し、生活してゐるやうな彼であつた。

その彼が、演說しやうと云ふのだ。

彼は、演壇——鑄型——の上で、事務所の方を向いて、誰かゞ見えでもするやうに睨みつけながら、怒鳴つた。

「諸君、俺は！……」

彼は、そう云つて、ハムマーでも叩きつけるやうな手附きで、自分の胸を毆つた。そして自分で自分を毆り倒しでもしたやうに卒倒してしまつた。

ガヤ〳〵騷いでゐた群集が、一度に靜まりかへつた。

二十二年間、彼は默つてゐたのだ。二十二年間の出來事、二十二年間のあらゆる苦しみ、不平、それを、二十二年目に云つて終はうとしたのだ。他の誰の云ふ事も未だ足りない。あんな事もあつたこんな事もあつた。と彼は云ひたかつたのだ。

彼の心の中は、ドロドロに熔けた熔鐵のやうだつた。湧きかへつてゐたのだ。煮えかへつてゐたのだ。

だが、二十二年もの間の苦しみ不幸を、一口に云へるものはない。

然し、彼は、雄辯に語つたのだ。彼は言葉で云ふ代りに、心臟で語つたのだ。

一瞬の、死のやうな靜寂が勞働者たちの心臟を、痛いほど締めつけた。

と、今度は物凄い怒りが沸騰した。

「さうだ、ほんとに俺たちの苦しみを、本氣で云はうとすれば、卒倒するのは當り前だ！」と云ふ事が、誰の心にも解つたのだつた。

勞働者たちは、一人一人の心ではなくて、それだけの群集の大きさの、一人の勞働者のやうに、同じ氣持、同じ憤怒を感じた。

その巨大な人間、勞働者の心は益々燃え上つた。その怒の叫びは工場の窓硝子に響いた。事務所の窓を顫はせた。

そして、やがて、その巨人は歩き出した。全市にその跫音を轟かしながら、その怒號に普段、彼等を侮蔑してゐた搾取者を震へ上らせながら。

私は弱かつた。卑怯であつた。だが、私とても巨人の一部である事を知つた時、私の中で眠つてゐた反抗心が、たてがみを振ひ起した。鬪志が、安全瓣を吹き上げる蒸氣のやうに噴騰した。

巨人の示威運動は、餘りに唐突だつたので官憲は間に合はなかつた。

公園に巨人が着くと、そこで又、血みどろの叫びが上つた。

公園に續く動物園では、巨人の咆吼に、ライオンも虎も、尻尾を卷き込んだ。それはその巨人が癒し難い飢餓に迫られての、悲痛な咆吼だと云ふ事を、動物本能で直感したからしかつた。

全く、その巨人は飢に迫られて、咆吼し、動き初めたのであつた。その巨大な足は何物をも蹂躙して行つた。その巨腕は何でも毆り倒すことが能きた。

その夜、巨人はその寢所を、市區改正のため立退きになつた、大きな洋食屋の板の間に荒蓆を敷いて當てる事にした。

女工たちは、急拵への炊事道具で握り飯を作つた。男工たちは、謄寫版を刷り、ビラを書き、工場から工場へ飛び、荒蓆を敷き掃除をした。

爭議團本部の前には、警官隊が堵列した。どの警官も顎紐を固くかけて、揃つてゲートルを卷いてゐた。

私は、電信柱にビラを貼るために、三人の仲間と本部を出るとそのまゝ、引つ掠はれてしまつた。その時、私は生れて生めて、オートバイのサイドカーに乘つた。

翌る日はドシヤ降りだつた、そのドシヤ降りの中を巨人たちは、私たちの入つてゐる警察へ示威運動に來た。

高い、太い、鳴り響く歌聲が、留置場を震撼した。

私たちはその歌聲に連れて、靜まつてゐた心臟が段々高鳴りを初めるのを覺えた。

かうして、私は洗禮を受けた。きよ子も、爭議團で炊事係に廻つて働き初めた。

それから七年間は、私たち夫婦は撥みのついた動輪のやうに、それと似通つた生活丈けを續けた。

八

然し、幾度も家を空けて、監獄に暮すと云ふ事は、決して自然な事ではなかつた。それは私にとつては忌々しい、堪へ切れない、鬱陶しい期間であつた。きよ子にとつても同樣に焦れつたい癪に障る事だつた。

それに、私たちはプラトニツクなラヴをした間柄ではないので、その間の微妙な問題も、娑婆に殘つてゐるきよ子としては、大きな煩悶の一つに違ひなかつた。

勿論、入らないで濟むならと、幾度も方法を考へたが、そんな便利な方法でやる運動と云ふものは、あり得る筈がなかつた。まるで輕井澤邊のトンネルでも潜るやうに、一寸明るくなるかと思ふと、直ぐに又暗くなると云つた風な生活が、私たちの上に續いた。

その中でも震災當時の獄中生活は、きよ子をすつかり面食はせた。

あの時は、私たちのやうな立場にあるものは、誰でも異常に緊張した。

私は仲間たちと監獄の中に閉ぢ込められてから、娑婆の事はよく分らなかつたが、中よりも外の方が、ひどかつた樣だ。

きよ子は丁度その日午前中から私に會ひに來てゐた、幾つかの獄舍が、波に乘つた船のやうに搖れ、沈沒する船見たいに、各々の監房の窓から囚人たちが殘らず顏を出して、怒號するのを見たのだつた。

そして、私たちに會つて夕方歸らうとすると、危くて自家へ歸れなかつた。彼女は私と二人前の迫害を受けねばならなかつた。

九月の夕闇の中を、叩き落された熊蜂の巢のやうな、鋭い針を含んだ中を、彼女は——二人の子の手を曳いて歩かねばならない母としての——きよ子は、その夜から虚無的な氣持に囚はれてしまつたらしいのだ。

「いつ死ぬか解らない。」

かう思ふ事が、單純な彼女の頭に正直に、大きく強く根を下してしまつたのだ。その上生活は、大地震と言つた風な天災とは關係なく、ひどく惡くなつてゐた。

十二月の末、私は耳や鼻や手に凍傷の黑いカサブタを土產に、朝早く娑婆に出た。出ると直ぐ食當りのしないために、差入屋で生豆腐を食べた。そして五十軒長屋へ歸つて來た。きよ子は二人の子供と一緒に寢てゐた。そして「米がないのよ。」と、私を見るといきなり言つた。

出ると直ぐ座布團程のビフテキを食へる、と想像し期待してゐた私の幻は、一度にケシ飛んでしまつた。

その上、私の入つてゐる間に、私たちの後を受けて活動したKと、きよ子とが、月のある晩、雷燈を消して巫山戲てゐたと、母が私に言つた。

が、私はKときよ子とを信じて、母を信じなかつた。

も一度、私は次の年の春、又候、刑務所へ入つた。

典獄が言つた。

「もう來るなと云つたのに、又來たか。」

で、私は答へた。

「願書を出して來た譯でもねえ。」

一年勤めて出た時は、女房子の行衞は皆目分らなかつた。前のKとは違ふSと云ふ同志と、どこかへ行つたと云ふ噂だつた。

私は、それでも未だきよ子を愛してゐた。

そこで私は、血眼になつてSと、きよ子とを探した。見附けたが最後、私はきよ子の、あのいい格好の鼻をチヨン切らうと決心した。鼻さへなけりや、大抵の者なら寄りつきやしないだらうから。そして、私は、きよ子の、鼻がなくても愛して行く積りだ。そして、KとSとの二人の奴は、殺さうかそれとも、腕を叩つ斬らうか、又は矢つ張り鼻を削ぎ落さうか、どれが最も効果的だらうか、と考へた。

そして、さう云ふ熱病につかれたやうな、不健康極まる

狀態の時に、運惡く、Sときよ子が二人の子供を連れて歩いてるのを、私に見附かつたのだ。で、私は、いきなり酒屋へ入つてビールを一本買つて、彼等が人通りの少ない路地に入るまで、酒屋の店から見張つてゐた。

彼等が路地に曲ると、いきなり驅けて行つた。

「オイ、S、！」と私は言つた。

Sはハツとして振り向いた。その顏が確かにSだと分つた時には、その顏の二つの眼の上に、私のビール瓶が力一杯叩きつけられた。

Sは倒れた。私はSを毆り續けた。

私は馬鹿な事をしたものだ。又十年懲役に行かねばならなかつた。遂々、Sは死んでしまつたのだ。

私は、もうスツカリ老ひぼれた。

昔の事を思出すと、夢だか現實だか、サツパリ分らない。それにしても、子供や、きよ子は未だ生きてゐるのだらうか。そして、今、きよ子に會つたら、矢つ張り鼻を覘ふんだらうか。

自分でも分らない。が、兎に角樂な世の中ぢやない。

無風帶を行く船

「おめえはどうも、一人前のセーラーにやなれさうもねえぜ。」

と、ボースンが橋本にいつた。

何故ボースンが、水夫見習である彼をとつつかまへてそんなことをいひ出したか。水夫見習である以上は、彼が一人前の水夫になりたがつてゐることはあたり前ではないか、だから彼は氣を惡くした。

「どうしてね、ボースン。」

「おめえは口の利き方といふものを知らんし、第一、人の機嫌を取ることを知らん。」

「ボースン、あたしやそれが下手だつてことを知つてるから、船乘りにならうと思つたんで、たいこ持になるんなら陸の方が便利でさね。」

「うん、そりやさうだ。だがさうばかりもいへねえぜ。おめえは年が若いから物事をかんたんに考へたがるが、な、そんなものぢやねえ世の中は。」

橋本は考へた。——待てよ。何かおれは失敗つたかな、ビールは持つて來たし、卵燒きはうまく燒いてあるし、風呂にはもう此野郎は入つて出て來たんだし、不足のものはねえはずだがな。——

「そんならボースン、どうすればボースンの氣が濟むかね。」

「さうさなあ、一口でいやあ、第一、俺にそんなぞんざいな口を利かねえやうにしな。」

「どういふ風にやるかね。」

「助からねえなあ、おめえは、どういふ風にやるかねつていふ代りに、どういふ風にしませうか、たあいへねえのかい。」

「急にやいへねえ、だんだん覺えるやうにしよう。」

「もういゝ、あつちへ行け。明日はこの部屋のデツキをもつと綺麗にしとけ。」

「冗談ぢやねえ。木だよ、これは。木が絹見てえに綺麗になるかね。手で揉むつて譯に行きやしねえ。」

「チエツ、助からねえぜお前にや。ストーン磨り（砥石磨き）をやればいゝぢやねえか。」

「駄目だよボースン、船が古いから手荒くやれや、下から鐵

デツキが出らあね。それでもいゝかね。」
「もういゝ。あつちへ行け、飛んでもねえ野郎だ。」
「さうかね。」
橋本はボースンの部屋を出た。
マドロスたちは、フオツクスル（船首樓）のオーニン（帆布製日蔽）の下で熱帶の日を避けつゝ夕食をしてゐた。甲板部は右舷、機關部は左舷で。
橋本はフオツクスルへ昇つて、セーラーたちの食ひ散らかした皿や碗を、いけぞんざいに引つ掴んで、バケツの中に放り込んだ。
「オイ橋本。」
機關部の見習の福島と呼ばれる、河獺のやうにはしつこい、のが呼んだ。
「何だい。」
さう答へて彼はサイドレールに凭れて、彼を手招きした福島の方へ行つた。
「おめえはこの船に辛抱出來るかい橋本。」
「出來ても出來ねえでも海ん中に飛び込むわけには行かねえ。」
「さうぢやねえさ。この航海がすんで濱に歸つた時の事さ。」
「まだ考へてゐねえや。」
「俺はもう止めだ。こんなおめえインダラ船のコロッパスにでもなりや、おしめえだからな。」
「エンヂンは暑いだらうなあ。」
暑い處の騷ぎではなかつた。明日がクリスマスといふ十二月の二十四日に、マドロスたちは洗濯物のやうに油汗を出してゐた。殊に罐前の暑熱は殺人的であつた。
「カルカツタ航路の機關部員になるなんて、俺あ全くどぢを踏んぢやつたよ。」
福島はさういつて、橋本の肩を掴んだ。
「オイ、今夜カステラを燒かねえかい。」
「ウン、燒いてもええ。けれどクルシマス（彼はクルシマスと發音した）の菓子を、ともでくれるちゆうとつたぞ、ボースンが。」
「へへね。此の船の船長はクリスチヤンかい。」
「何だかよく分らねえ。」
その時、ウアツチから上つて來たコオターマスターの「テーコロ」と仇名をつけられたのが怒鳴つた。
「オーイ、甲板部のボーイ長！、コツク部屋へ行つて黑砂糖を貰つて來い。くれないといつたらコツクの頭を切つて持つて來い。」
「黑砂糖を何にするんだね。」
橋本はテーコロの方へ行きながら訊いた。
「何でもいゝや。さういへばいゝんだ。」

「どのくれえ貰ふかね。」
「此皿へ半分。飯のお菜にするんだ。」
「あゝ、さうか。」
彼は皿を持つて降りて行つた。
「チヨツ！、爲樣のねえボケだな、あいつは。「あゝさうか」つていやがる。なつてねえや。おい、山田、あいつにブローンをかついで踊らせようか。」
「ほひつもほもひろひはあ。」
鼻の拔け落ちた山田が「おもひよろい」聲で答へた。
「あん畜生、圖體はでつかいが全くの馬鹿だなあ。」
「ふん、まつはくのばはだあ、はひつは。」
山田の言葉は初手のものには通譯がないと意味が通じなかつた。それは風の風が何かの穴を吹くのに似てゐた。
彼は「國辱」を一人で背負つて、すつかり悄氣てゐた。彼は外國の女に貰つた毒のために、その鼻を吹き落とした。それ以後外國の女は彼の對象にならなかつた。彼は一等セーラーであつた。彼よりも後からのセーラーがどん〳〵コーターマスターになるのに、彼だけは大尉で行き止まる軍人のやうに、一等セーラーで行き詰つた。なぜかといふと、鼻のない人間が船長の前で、「船の鼻」を自由自在に向けるのは不適當だと船長が考へたからであつた。
彼がルツクアウトで怒鳴るのには、誰もが噴き出しながら同情した。全く何を喚いてゐるのだか、彼以外のものには解らなかつた。「スターボート、バウ」といふはずの處を彼は「フハーホーホ、ハフ」と發音した。
「鼻といふものは、その穴が重要なものであつて、決してその突起部分が重要なのではない」と、山田にいつて聞かせたつて、山田は慰められなかつた。
山田は鏡を極度に憎んだ。全て鏡があるために彼の鼻が落ちでもしたやうに。
彼は、彼の受取る一切の勞銀を横濱にゐる彼の情婦の許へ送金した。彼の情婦は彼の鼻が未だ眞面目に坐つてゐる時からのK樓の馴染の遊女であつた。彼女だけが彼を受け入れて呉れた。
彼は横濱へ入港する時丈け生き甲斐を感じた。たゞ一つ、彼女に會ふ時に最も困難を感じるのは、その家の入口の正面にある大きな姿見であつた。全く、どの遊廓のどの家にも正面に大きな姿見を立てゝ置くのは、惡い皮肉だ。「その位の事はちと考へるがいい。」鼻の有無にのみ關する事ではない。
「何を爲てやがるんだ。ボーイ長奴。」
テーコロは、箸で茶碗を叩きながら怒鳴つた。
船は印度洋の、リノリユームのやうにベトベトした、漣一つない風の上を辷つてゐた。山田は、鼻の突起部分が、汗に對してどんなに重要な役目を持つてゐるか、を誰にも話しはし

なかつたが、心ひそかに痛感してゐた。

張りつめた風呂敷の上に石を置いたのと同じく、船の周圍の水平線は高く天とくつついてゐた。一時間十二マイルで走つてゐるのであつたが、波を見なければ走つてゐるとは思はれなかつた。

テーコロは到頭痺れを切らして、コツク部屋へ、ボーイ長を打ん殴る決心をして下りて行つた。

ボーイ長は飛んでもない事をやつてゐた。

「黒砂糖をくれなかつたら、コツクの頭を斬つて持つて來い」と、テーコロはいつたのだつた。

そこでボーイ長はコツク部屋に入つた。

「コツクさん。黒砂糖をくれと。」

「何にするんだい。」

病院で使ふ油紙のやうな顔のコツクは聞いた。

「お菜にするんだつてさ。」

「そんなもなねえよ。自分で貰ひに來いつてさういへよ。」

コツク部屋は蒸汽と、ストーヴとの熱で窒息しさうなほど暑かつた。その上、船の料理場特有の臭氣が肺臓の内部までを臭くした。さういふ條件の下では、人間は病的になり勝ちなものだ。忍耐力が失くなる。もの〻判斷が常識から跳び越してしまふ。殊に、マドロスは自然から虐げられてゐる。

「それでも」と、ボーイ長はいつた。

「黒砂糖をくれなかつたら、コツクの首を斬つて持つて來い、といつたぜ。」

「馬鹿野郎！」

コツクは怒鳴ると同時に、橋本を、持つてゐたフライパンで横つ面を力一杯殴りつけた。フライパンの柄は曲つた。フライパンの中に入つてゐた布巾は壁にぐつしやとくつゝいた。

ボーイ長は、あまりひどくやられたので、ヨタ〳〵としてちよつと横を向いた。悪いことには、甲板部見習、橋本は頭は少々鋭さを缺いてゐたが、身體は全て悍馬見たいだつた。身長が五尺九寸位、體重二十三貫それてゐて筋ばかりなのだから、何のことはない、「力」の固まり見たいであつた。

ボーイ長は悪意があつた譯ではないが、も一つ殴り足されるのは嫌だつたのでコツクを突いた。ところが彼は脊が高いので、コツクの額にピツト見たいな拳骨が打ち當つた。

コツクはひつくりかへつた。が、人間はひつくりかへる時、兩方の手が反射的に何かを支へるやうに働くものだ。コツクもその方則に從つて欠伸をする時のやうに後ろの方に手を擴げて倒れた。

その後ろには、焼けたストーヴの鐵板があつた。ジリツと、ビフテキを最初載つけた時に出るのと、全く同じ音がした。次の瞬間には、コツクは兩手を眞上に「萬歳」でも叫ぶ時

見たいに振り上げて、それを滅茶滅茶に振り廻した。手が支へ得なかつたゝめに、彼はストーヴの火口の直ぐ前に尻餅をついた。

「チヨ——ツ、あちいいい。」

橋本は事件が妙な方に向いて進行したので呆氣にとられてゐた。

そこへテーコロが、

「ボケなす奴！、何を愚圖々々してやがんだい。黒砂糖はどうしたんだい。」

と、怒鳴りながら首を突っ込んだ。ところがそこには、母親に置いてけぼりにされた子供が、道端に坐り込んで兩手を擧げて泣き叫んでゐるやうなコツクの姿があつた。

「どうしたんだい？」

彼はさういつてコツクの振り廻してゐる手を引っ摑んだ。そして立たせやうとした。途端に彼はびつくりした。

「アイチ、、、、アイチ、、、。」

と切るやうにコツクが叫んだからであつた。

「おどかしやがるなあ、どうしたつてんだい。一體。」

「どうもかうもあるかい、手を火傷したんだい。」

コツクはやうやく立ち上つて、柄杓を握らうとした。

「いけねえ、いけねえ。おい、ボーイ長、馬見たいに立つてないで、丼に醬油を空けろ！　馬鹿野郎、底抜けの馬鹿野郎だよ、手前は。」

ボーイ長は、醬油を丼に空けながらいつた。

「お前が殴るからだよ。俺あ殴られるのは氣に向かねえからね。」

コツクは、丼へ落ちる醬油に掌を浸けながら、體を震はせた。

「畜生！、齒の痛えのと、火傷のいてえのは我慢がならねえ。」

「どうしたてんだい一體。」

「どうしたも糞もあるかい。手前が悪いんだ。首を切つて來い」なんて抜かしやがるからだ。おゝ、いてえ。」

「それでどうしたんだい。ワツハツハ、ワツハツハ。」

「畜生！、笑ひ事かい。チエツ、忌々しい野郎だ。馬鹿！は馬鹿のやうに話をしろよ。こいつあ何だつて眞正面から受け取つちやうんだからな。笑ふ奴があるか。」

「熱いかね、コツクさん。」

橋本が同情した口調でいつた。

「馬鹿！、熱いんぢやねや痛いんだ、此大馬鹿野郎。熱いぐれえのもんぢやねえんだぞ。」

「わしもそうや。ここんとこが。」

ボーイ長の顴骨の處は、大福餅位のたん瘤が出來てゐた。そしてそのてつぺんに乾葡萄ほどの太さで、肉が切れて血が固まつてゐた。

「喧嘩両成敗だ。爲様がねえさ。」
テーコロがいつた。
「ボケなす奴！　掌を燒いちやつたんだ。仕事が出來ねえぢやねえか。」
「ライスコツクがやるさ。」
「チヨツ！、俺も永いことコツクをやつてるが、掌のビフテキなんか始めてのお仕舞だ。ゴツデム！」
「チヨイ〳〵やるさ。黒砂糖なんか惜むからだよ。氣前よくやりや何でもねえんだ。それほど儉約したつて、司厨司にはなれつこあるめえよ。」
「うるせえや、喋舌るな。口を利くな、口を。何も聞き度かねえや。黒砂糖がほしけりやその棚ん中にあらあ、りん的奴！持つて失せやがれ。おい、ボーイ長、今度は味噌だ。味噌を油で練るんだ。」
「ヘツトかね。」
ボーイ長は裁判官の前の白痴の犯罪者見たいに、頗る緊張しない格好でつゝ立つてゐた。
「ヘツト？、馬鹿野郎。胡麻の油だ。あゝいてえ。」
「ヘツ！、プン〳〵憤つてやがらあ。」
テーコロは皿へ黒砂糖を、思ひつ切り山盛りに入れて、さういひながら出て行つた。
コツクは、ありとあらゆる言葉で、口を極めて罵つた。そして、一行づゝ「あいてえあいてえ。」をつけ加へた。
「馬鹿野郎。天に借金が無えからたつて、いけぞんざいに長くなりやがつて、人間にや魂つてものが、……いてえなあ畜生、大切なものだつてことを、些つと考へろ。考へろ。分つたかフランテン奴。さあ塗るんだ。そいつを。いてえなあ、フーツ。」
橋本はコツクの両方の掌に、味噌性の軟膏を塗つた。
「火傷の藥にはこれがいゝかね。」
「うん。とてもよく利くんだ。いてえなあ畜生。フーツ。」
コツクは味噌をソーツと塗らせながら、掌に息を吹つかけた。
「コツクさんは、デツキを綺麗にする藥を知つてるかね。」
橋本が訊いた。
「ベラ棒奴、デツキどころかい。」
コツクは顔の右の方全體を縮め、左の方を延ばして、獨特なやり方で顔を顰めながらいつた。
「だが、何だつてデツキを綺麗になんぞするんだい。」
「いやね、ボースンが綺麗にしろといふもんだからね。」
コツクは考へた。――ようしこの野郎、敵をとつてやるぞ、見てやがれ。手前の手も燒いてくれるから。――
「いやにビリつきやがる。チヨツ。うん、それやなあ、何だ、その苛性ソーダをウンと利かして、デツキを拭けばいゝんだ。

うん、水でドロドロに溶かしてな、そいつをウエスにふんだんにふくませて、いてえ、そいつでデツキを擦るんだ。さうすれやお前、デツキが一皮剝けらあな。わけはねえ、わけは。」
「そんな藥が船にあるかね。」
「あるさ。ストキ（倉庫番）にさういやいくらでもくれらあ。」
「さうかね、もう行つてもいゝかね。」
「行け、失せろ。そこら邊をまご〳〵するな。もう澤山だい。あゝいてえ。飛んでもねえ野郎だ。出來損ない奴！」
橋本はその罵詈を、何か重い袋でも脊負つたやうに曲がつた肩に受けながら、コツク部屋を出た。
コンデンサーの水をサイドから瀧のやうに吐きながら、一時間十二マイルで走る六千噸の汽船は、客觀的には力學的な「美」以外の何物でもなかつた。もしそれを陸からでも眺めるならば、何人をも異境に憧れしめないでは置かないであらう。又、マドロスたちも次に着く港の風景や、人間の生活に心をときめかせながら待ちあぐねるのだ。
全く、どんなに多くの變つた、珍らしい風景や、人間の生活や、歴史などが、行く先々に両手を擴げて彼等を待つてゐたことだらう。足の裏ほども固いマドロスたちの手を、優しく握りかへして呉れる處の女さへ、到る處にゐるのだ。
尺に餘る飛魚が船のヘツドに追つかけられて、一丁も飛んだ。切りたての鉛の色に似た海の上を。そして全く海水は鉛のやうに重いのだつた。
やがてカルカツタに入れば、タバーンを頭に卷いた六尺豐かの印度人が、二人向ひ合つてウオーフの石疊の上で話してゐるし、殘りの人々は燒けつく石の上に、直かに腰を下しては、眩しく出入港する世界各國からの巨船を、靜かに眺めてゐるのだ。英國人はヘルメツトを被つて、大股にウオーフを歩き廻りながら、必要な時に指圖をするのだ。
熱帶の夜は、鉛のやうに重い海面に、ベタ〳〵とくつゝくやうに下りて來た。それは夕立を催しながら降らない東京の夕方よりも暑かつた。スコールはもう大分前に過ぎてしまつた。ボーイ長がコツクに横つ面をやられた時分に。
夏の夜は寢苦しい。雨戸を開け放してゐてさへ。日本の夏よりも暑い印度洋の無風帶の中を、六つの窓――直徑二尺位の圓い窓――の中で、箱の中の鮭のやうに眠るといふ事は、樂なことではなかつた。
ボーイ長が眠る前に、水夫たちや舵夫たちの枕元の水瓶――それはウヰスキーの空瓶であつた――に汲んでおいた水は、夜中までには夢中に飲み乾されてしまつた。その水瓶はホンコンから段々數を増すのみであつた。デツキに眠れば幾分は涼しかつた。だが、マラリヤは最も怖れられてゐた。
そしてその暑い夜を、火夫や油差たちは、火口に赤く、焦熱地獄の鬼のやうに照らし出されて働き續けねばならなかつ

た。

マドロスたちは假死の狀態から甦りでもしたやうに、鈍い頭と身體とで朝を迎へる。素敵滅法界に早い朝を。

水夫たちはワシデツキをやりに出かける。その留守にボーイ長はボースンの室から、大工、舵夫、水夫室のワシデツキをやつて、朝食の準備を終らねばならなかつた。

それはこの上もなく敏捷な勞働者にとつてさへ、樂に捗る仕事ではなかつた。ところが橋本は最も敏捷でない勞働者に屬してゐた。彼には省略法がなかつた。「要領のよさ」がなかつた。

翌る朝、彼はボースンの部屋の床板に濃厚な苛性曹達の液をバケツから直かに打ち撒いた。

彼はデツキが白く乾上るのを泥靴で汚してはならないので、扉の外から一生懸命に藥の利くのを待つてゐた。彼はコツクから教へられた「ウエスにつけてよく擦る」のは忘れて藥の名だけを覺えてゐたのだつた。だから彼は手を腐らかすのは免れた。も一つ、食事の準備も忘れて頗る熱心に、その實何も考へないで、デツキを穴の明くほど擦めてゐた。

だがボースンの室の床板は白く乾上る代りに、黑くジメジメして來て何かドロ〳〵した感じを帶び初めて來た。それは人が蛞蝓の皮膚から受けるのと同じ、無氣味な粘さであつた。

そこへボースンがワシデツキでズブ濡れになつた仕事着を、着かへに歸つて來た。

「何をボンヤリ人の部屋を覗き込んでるんだい。」

と、突き飛ばすやうにして、彼の室に跳び込んだ。

「ワシデツキをやつてゐるのだがね。」

と、橋本がいひ切らないうちに、ボースンは辷つた。そしてドシンと後頭部をデツキへ叩きつけた。

船の犬「カイン」

私たちの船に一匹の犬がゐた。雌犬であつた。船長が連れて來たのだ。

船長はその犬に「カイン」と名をつけた。「カイン」とは何の意味であるか、水火夫たちには解らなかつた。多分何かの訛ではあるまいか。

カインは、船員の半舷からは愛されて半舷からは憎まれた。カインは誰にでも慕つてまとひついた。カインは人間の階級と云ふものを知らなかつたのだ。ところが、船長から見込の悪いものや、給料が昇り損ねた者などは、カインに當つた。

耳の素晴らしく長い、裂長の眼の、毛並の艶が迚もよくて、白い顏を特に目立たせるための女の入れほくろほど、効果的な斑が白の地に茶色に染め出されてゐた。何と言つても、彼女が別嬪で、魅力に滿ちてゐることは、誰にも異存が無かつた。

殊に汽船の上だから、泥や何かに汚れることは絶對にないし、食物は船長の命令に從つて、コツクが腕によりをかけたビフテキの殘りを與へるし、カインのベツドは船長室からブリツヂへの昇降口になつてゐるマツトの上なのだ。そのマツトにはカインの脫毛以外には、一つの塵でさへもつけて置くことは出來ないのであつた。

カインの幼年時代が思春期に移る時分には、彼女は全く驚くべき美しい女になつた。

「いい女になつたなあ、おめえは。」

と、西澤が言つた。水夫たちはブリツヂから見えないメインデツキの、石炭庫の出入口の陰に集つて晝食後の休みをカインとふざけてゐた。

「氣をつけろよ、カイン。西澤は危ねえんだぞ。」

大工が言つた。水夫たちは笑つた。

船は佐渡と本土との間を拔けて、北海道の小樽に歸航中であつた。右舷に日本海沿岸の陸地がセンチメンタルに眺められた。

「箆棒奴！　俺なんざ叶はぬ戀よ。なあカイン。」

西澤はかう言つて、カインと顏を並べてその長い耳へ彼の

頬をこすりつけた。

「止せよ。船長にでも見附からうもんなら、いきなりお拂箱だぜ。」

「嫉かなくてもいいでせう、と言つてやらあね。」

「馬鹿だなあ、お前は。道ならぬ戀だぞ。」

「船長にでも言へよ。」

「全くおめえは助平だよ。人間の常識を飛び越してらあ。」

「常識なんてものを背負はされるやうな、そんな悪い事をしたこたあねえや。」

「チョツ、畜生の淺間しさだ。」

大工と小倉と西澤とがヘラズロの叩き合ひつこをやつてゐた。

仙臺は眼を輝かして、カインを瞋めてゐた。

船の上には陸よりも早く秋の淋しさが襲つて來る。暖い港から寒い港へ向けて航行する時は、殊更らにそれが甚しい。陸のやうに待つてゐるのではなくて、飛び込んで行くからだ。

「インダラカイン！」

仙臺はそう鋭く呟くと、いきなりカインを蹴飛ばした。

カインは悲鳴を擧げて、上甲板へ驅け昇つた。

「チョツ！　仙臺の野郎、本氣で嫉いてやがるんだぜ。」

西澤が吐き出すやうに言つた。

「癪にさわらあ！」仙臺はカインの驅け昇つて逃げたタラップからブリツヂの方を、眼で追ひながら言つた。

「オイ三上、駄目だぞ。おめえはボースンと共犯ぢやねえか。直江津で下船されなかつたのが目付けもんだつたんだぜ。カインなんか蹴つ飛ばさうもんなら、小樽で思ひ知らされるぞ。」

小倉が言つた。全くその通りであつた。三上はボースンを下船させるために、二度までもサンパンを押したのだつた。そして、その罪科！はボースンと共同で行つた事なのだ。然し總ての人間が同じやうな神經や、考へ方を持つてはゐない。三上（仙臺）には三上獨得の考へ方があつたのだ。そして三上のやうな飛び離れた考へ方と云ふものは、常人に想像の出來るものではないのだ。

號鐘が鳴つた。午後の作業開始の合圖が鳴つた。水夫たちは起つた。そしておもてから來た三等運轉士に、舷縁の錆落しと、ペン塗りとを命じられた。で水夫達は「おもて」へペン罐を取りに行きかけた。

その時、船は急に方向を變へ初めた。船尾の水脈が曲り初めた。

當番である筈の一等運轉士が、ブリツヂから降りて來てサードに何か言つた。

「カインが海へ落つこつたんだ。みんな見張りだ！　懸賞付

きだぞ！　最初に見付けた奴に十圓だ。」

サードが怒鳴つた。

「よし來た。」

一番先に叫んだのが仙臺だつた。と同時に彼は驅け出して、倉庫からロープを出すと直ぐに前檣に登つた。全て猿だつた。彼は頭の働きの代りに筋骨の働きを神樣から授かつてゐた。その點では船中で誰も仙臺にはかなはなかつた。彼はカインを蹴飛ばしたのは自分だつたと云ふことを、多分もう忘れてしまつたのだらう。或は「十圓だ！」と宣言されると同時に、その方へあらゆる思考力が流れ出してしまつたのだらう。

小倉が當番の舵手と交替してブリツヂに上つた時には、仙臺はマストのテツペンに登つて、一本松の上にとまつた山鳩のやうに、キヨロ〳〵海面を見廻してゐた。船が方向を變へたゝめに追手になつた北風は、三上の止まつてゐる邊に煙を吐きつけた。

小倉は舵輪を操りながら、仙臺が眼を擦つたり唾をしてゐるのを見た。そして危く笑ひ出しさうになるのを抑へつけた。

船長は非番なのにブリツヂで、小作りな仁王のやうな相格で、仙臺と同じやうに「望遠鏡」でキヨロ〳〵してゐた。だから、船長がカインの溺れる姿の代りに小倉の笑顔でも見やうものなら「事だ！」と小倉は考へた。

波田はボートデツキへ上つて、ブリツヂから見えない陰に獨りで長くなつてゐた。彼はカインがどうして海の中へ轉げ込んだか、と云ふ事から考へて、犬の種類、犬の境遇にまで考へ進んだ。そして彼は「犬の境遇について」考へをひつかけてしまつたために、現實のカインの溺死については、頭をも眼をも働かさうとしなかつた。

「カインは尠くとも俺たちよりは幸福だ。カインは捜索される！　だが俺たちは？」

波田は考へ續けた。「愛玩されるものは大抵の場合必要なものよりも大切にされるものだ。錆びた古い何々の守の短刀は俺のメスよりや價が高いんだ。畜生！　だが俺たちにや凄い程お代りが待つてらあ。」

彼は、山國の人力車や荷車の心棒に縛りつけられた犬を思ひ出した。それは長い舌をピストン・ロツドのやうに急速度に、一拍に開け放つた口から出し入れして、全で主人の足に食ひつかうとでもするやうに足掻くのだ。だが頸には綱があり、その綱には重い荷がかゝつてゐる。どんな努力も、主人に追ひつかせやうとはしないので、時々、キヤイン、キヤインと悲鳴を擧げて、車の下から這ひ出やうとする。が、兩側には車輪が廻つてゐる！　兩側には車輪が廻つてゐる！　廻つてる車輪の中に首を突つ込むか！　足掻きながら引つ張る

か！　後退りでもやるか。鞭がある。棍棒がある。

彼はデツキの木理を數へながら、そして體はじつとしてゐながら、何とも言ひ表すことの出來ない「急がしさ」を感じた。全て自分が、坂道を驅け上る俥に縛りつけられた犬ででもあるやうな焦立たしさと、憤とを覺えた。

彼はデツキのチーク材から眼を上げると、ボートを越えて、マストのテツペンで忙しさうに首を振つてゐる仙臺を見た。

「助からねえなあ、あいつにかかつちや。」

彼は呟くと、サイドから外に首丈け出して、腹匍ひになりながら波を瞶めた。

船は一時間餘り引き返した。一時間十節の速力で。

一時間、七輪の炭を熾し續けると、木炭がいくら要るか、そんなものぢやないんだ。飛行船にでも聞いて見るがいい。

――カインは幸なる哉！――　いや船長は幸なるかな！――

波は波田の眼の下で、グルグル廻つた。彼は自分の眼が廻つてるやうに感じた。

突然マストの上に「ひつかかつてゐた」三上が怒鳴つた。

「右舷（スターボート）、船首（バオウ）。」

船長は傳令機（テレグラフ）のハンドルを、スローに入れた。船脚は少しづゝ遲くなつた。

仙臺の肉眼は船長の双眼鏡よりも遠くを見たのだ。塵ほどの小さいものを右舷に見ると、彼は「十圓」を棒に振るか振らないの境目と許りに、命がけの大聲で怒鳴つたのだつた。

やがてテレグラフがストツプに置かれ、エンヂンは停止した。そして傳馬が卸された。

それはのんきな情景であつた。船は日本海にポカンと泛んでゐる。直ぐに荷役にとりかかるのではない。何かの修理をするのでもない。輕い疲れを休めるスポーツマンのやうに、それは手を拱いて浮んでゐればいいのであつた。生産に關はりのない一時間であつた。セーラーたちはそんな時間を航海中に、一度だつて持つた事はなかつた。それは何かのお祭りのやうであつた。船長の氣持とは關係なく、彼等はのんびりしてゐた。搾られる事のない時間は本能的に彼等を解放したのだつた。

カインは懸命に泳いでゐた。

三千噸の汽船が彼から一浬の處に高く浮んでゐるのに、彼女は船とは反對の方に一生懸命に泳いでゐた。然し、三上と小倉とが押す傳馬は、彼女に追ひつくのに世話はなかつた。二時間も泳いでゐたのが不思議な位だつた。だから彼女は辛うじて浮いてゐる程度で泳いでゐるに過ぎなかつた。

小倉が、カインの頸輪を摑んで引き上げると、彼女はチヨツと首を振ふやうにした。けれども、どの犬でもが水から上

るとよくやるやうに、四本の足がフラフラするほどに水を撥ねはしなかつた。ぐつたり頸を舟板の上に垂れて、齒を食ひ縛つて人事不省？に陷つてしまつた。

カインが傳馬に引き上げられたのを見ると、船長は汽笛（ホイツスル）の綱を引つ張つた。それは「カイン。しつかりしろ！」と怒鳴るやうに、ボ、ボ――と鳴つた。

傳馬が本船につくと、ラダーからボーイがカインを受け取つて驅け昇つた。

汽罐室の入口に船長が待つてゐた。

船は動き初めた。傳馬は釣り上げられた。

汽罐室の上では、カインを溫めると同時に乾かしてやる事が出來た。

ボーイが銀盆の上にウイスキーと葡萄酒の瓶とを並べて持つて來た。

船長はそれを等分に割つてカインの口へ流し入れた。

ボーイがそれを持つて歸る途中で、仙臺はうまく彼を捕へた。

「一杯、一杯！　たつた一杯。」

ボーイが「駄目だ！」と言つた時には、仙臺はウヰスキーの瓶を取つて、ハウスと汽罐室との間の狹い路次見たいな處に驅け込んでゐた。

「馬鹿野郎！　ラツパ飲みなんかしやがつて。」

と、ボーイが怒鳴つた。

「馬鹿野郎」と鸚鵡がへしに仙臺が云つた。「命の親ぢやねえか！」

「よこせ！」

ボーイが受け取つたウヰスキーの瓶には、二滴つ切り殘つてはゐなかつた。

「ゴツデム！」

ボーイは呪ひを浴せながらケビンへ入つた。仙臺はニヤツとして、二つの鐵板で出來た路次から出た。その時は彼はもういい氣持になつてゐた。下級海員たちは船内で、航行中酒の氣にありつく譯には行かなかつた。よし持ち込む事が許されても、蓄へて置くだけの量を仕入れる金を持ち合さなかつた。よし、その金を持ち合せてゐたにしても、「船などに幸福がある筈がない」のだ。だから船でチビリ〳〵やる代りに、彼等は上陸したら最後であつた。一航海はおろか二航海分も五航海分も、飲んで〳〵飲み溜めるのだつた。だが、當人は飲み溜めた積りでも、由來アルコール分は吸收が早いものだ。だから彼等のアルコールに對する抵抗力は非常に弱くなつてゐるのだ。

仙臺はいい氣持になつた。

海はやがて枯れる前の、秋の芝草のやうな青いうねりの上を、十節の速力を取りかへして辷つた。

海が芝草であるならば、全く蟲の聲が聞えたに違ひない。波がサイドにチヨロチヨロと鳴いた。波の鳴くのは、秋の蟲よりも淋しい。秋の蟲は急に氣を換へて憤り出しはしないが、波は急に齒を剝いて咆えるからだ。その前の氣まぐれな愛撫なのだ。

カインは甦つた。アルコールがひどく利いたのに違ひない。彼女は眞つ先に嗅覺を取り戻した。そして聽覺と視力とを同時に恢復した。

船長はしやがんで、カインのその長いビロードの布に似た耳を翻して、丹念に兩方とも檢査してゐた。

「耳に水が入らなかつたので助かつたんだなあ。」

と船長が云つた。

「へえ、耳に入ると駄目なんですかねえ、へえ。」

と司厨が云つた。

カインはそれを聞いてゐた。そして彼女の耳を擽る感觸に甘へた心持になつて、船長の手首を呟めやうとして頭を傾けた。

「ほゝう、元氣が出たぞ。」

その時、カインは船長の手首を呟めた。そして、ずつと稚い時にしたやうに、輕い齒跡のつく位に嚙みついた。

「ふん、いよいよ大丈夫だ。よし、よし。ほら立つて見ろ、歩けるかい。」

そう言つて船長はカインを立たせた。カインは立つた。そして船長へ體をこすりつけた。船長はポケットからハンケチを出して、カインの口の中を拭いてやつた。

カインはおとなしくされるまゝにして、腰を卸した。

「あゝそうか、矢つ張り草疲れたんだな。よく二時間も泳いでゐたもんだなあ。よく泳いだ、よく助かつた。だが、もうあんなことをしちやいかんぞ、いいか、もう海ん中は懲り懲りだらうな。」

般長は船中の誰とよりも親しい口調で、愛情を籠めてカインと語るのだつた。

ボーイにカインの體を湯で洗はせ、タオルで拭はせてから、彼はカインを船長室に連れて入つた。

「垂れ流しにするんぢやないよ。いいかい。」

そう獨言つてドアを閉ぢて、ケビンへ出て來た。

「小倉、三上を呼んで來い。」

「ハイ。」

小倉がおもてへ入ると、仙臺はカインの上前をはねたウヰスキーでいい氣持になつて、休みの日の朝のやうにグツスリ、彼の巣の中で眠りこけてゐた。

船長の前に出た仙臺は、白兎のやうに赤い目をして、しけを食つたマスト見たいにフラフラしてゐた。

「三上か。ボースンにさう言つとくからな、給料の時に十圓渡すやうにつて。御苦勞。」

と、船長が言つた。

「へえ。」

仙臺は頭を下げた。その途端に彼は「頭なし」である事を思ひ出して、揉みくちやにした塵紙のやうな顏付きをした。

「キヤプテン、現金で貰ひたいので。」

「どうしてだ。船には現金はないんだ。」

「へえ、ボースンはさつぴきますので。」

「さつ引く？　何をさつ引くのだ？」

小倉は、三上の代りにハラハラした。——馬鹿野郎！　下手あ言ふと元も子も無くしちやうぞ。と——

「へえ、頭なしなんで。」（「頭なし」とは「下り」のこと。給料を前借してゐて貰ひ分のない事を云ふ。）

「あ、さうか、よし、さつ引かないやうに現金で渡すやうに言つといてやる。アツハツハハハ。」

船長は御機嫌が良かつた。

小倉はほつとした。ケビンを出ると仙臺の肩をこづいて言つた。

「止せよ。船長にあんなこと言ふなあ。」

「構ふか。」

「だが、今日の船長の「お天氣」のよさはどうだ。人間一人助けたつて、あんなにお天氣がいいこたあねえや。」

仙臺は、これも「お天氣」よくフラ〳〵とおもてへ歸つて行つた。

船では一人のセーラーよりも、一つのジン、ブロック（鐵製滑車）。一人の火夫よりも、一つのドンキー、ボイラー（副汽罐）の方が、大切にされるのだ。

カインは救はれた。船長の愛は益々カインに加はつた。若しカインが非常の死を遂げなかつたならば、カインにとつて不幸であつたに違ひない。と云ふのは、犬は人間よりも早く年をとるからだ。毛の色艶も惡くなるだらうし、漆器の廢物に似て方々皮膚が剝ぎ出しになるだらうし、顏の表情にしたところで、そういつまでも愛嬌があるものでもないし、そのくせ昔日と變りなく船長にじやれつくとすれば、船長は蹴飛ばすに違ひない。

その冬のある日だつた。

船は引つくりかへる決心をつけてゐるやうだつた。風も、怒濤も、それから雪も、海の上から船を追つ拂ふ覺悟を決めてゐるやうに見えた。

滅茶苦茶だつた。どこか船内の一つのリベットでも弛めば、「それでよし」であつた。一切が片がつくのだ。全く、セーラーの中に一人でも哲學者がゐるのだつたら、片をつけたに違ひない。何のためにそうまで骨を折つて「もつと搾られ

たいのだ！」と考へたであらう。だが、いや違ふ、そんな時にそんな事を考へるものではない。

しけは夜に入つてその威力を益して來た。

「どの位暴化られるもんだか、お前たち人間は知らねえだらう」

と、海は風雪と一緒になつて喚いた。船のあらゆる部分は悲鳴を擧げた。

「未だくたばらねえか、此野郎！」

と、暴風の一塊が叫びながら船に打つつかると、ボートがデツキから吹き千切られて飛んだ。

卒倒する時に人が兩手を差し上げてゆらゆらするのと同じやうに、マストが兩手をフラフラさせた。そして上部の木の部分が浪の血潮を浴びながら拐ぎ取られた。

ボートが連なんか何とも感じないのと同じく、怒濤は船を馬鹿にした。その荒々しい足どりで大跨にデツキを乘り越して行つた。デツキではハツチまでも波に蔽はれて、ウオツシ、ボートから未だ半分も出切らない中に、次の波は再びブルワークを躍り越えて踏み込んで來た。

若し此時、私たちの船を誰かゞ外から見たならば、海の中に四角なハウス丈けが浮んでゐると思つたに違ひない。ハウス以外の部分は絶えず波の下に埋められてゐたのだ。

汽笛は絶え間なく泣いた。力なく咽び泣いた。絶え間なく泣いたので、今はもう泣く丈けの元氣もなく、僅かに咽び泣くのだつた。何故つて蒸汽が上らないのだ。

大工は直江津の失敗をとりかへすために、——そんな時にまで職業意識が働くものだ——波の合間を覘つてはデツキの上を見て廻つた。ハムマーを唯一の味方と頼みながら。

水火夫たちは、中央のサロンデツキに集まつてゐた。おもてとの間のデツキは激浪に洗はれるので交通途絶の狀態であつた。それは月島の橋が落ちて東京から切り離されたのより、もつと甚しい光景であつた。

そして、此船は何と云ふ船だ！

發電機もなければ、無線電信もないのだ、三千噸の圖體をしてゐながら。おまけに貨物をしこたま頬張るために、支柱さへも儉約して、ダンブルは風船の内部見たいなのだ。おまけに戰事中の好景氣時代に大急ぎで造られたものだから、推進機軸には出來すぎた大根のやうに「す」が、空いてゐるのだ。その上、團扇のやうに圓つこい船だ。ボイラーは古物で間に合はせてあるのだ。パイプは動脈硬化症にかかつてゐるのだ。平時でもあれほどチョイ〳〵吹くではないか。

食糧品は五日分丈けしか積んではゐないのだ。豐富なのは石炭丈けだ。戰地へ送るための石炭が船中に、セーラー達の床の下にまで詰め込まれてあるんだ。

無線電信でもあれば、SOSを、アンテナから火を吹くほど打つことも出來る。發電機でもあれば發火信號も出來る。そして兎に角く仄暗い電灯の下に、お互の顔丈けでも眺めてゐられる。

たゞ一つ心強いのは、船の鐵板が新らしい事だつた。造船所が誤間化してさへゐなければ！

海の向ふのヨーロツパの天地に、軍隊が死にもの狂ひで晝夜强行軍するやうに、暴化まで徹夜で强行軍した。

船員達は内心は緊張のため熱く、然し體は防寒設備のないサロンデツキで凍える程寒く夜を明した。ファンネルの廻りや汽罐室の上は少數の幸福者が占領してゐた。

「しぶとい暴化だ」

誰かゞ、小さく呟いた。大きな聲で言つて暴化に聞かれてもしては大變だと云つた風に。

人間と云ふものは恐ろしいものだ。暴化は少しも靜まらないのに、一晩中暴化と抵抗してゐる中に、いくらか風ぎ初めたやうに感じ初める。馴れるのだ！　初めは、海が非常に身近に迫つた事を感じる。デツキまで波に蔽はれるからだ。全く海の中にゐるのだ！　ほらデツキに打ち上げた。又乘り越した、と。だが、デツキにまで波が來ない時、彼等は海の中にゐる事を感じないやうに、終ひにはデツキが波に占領されてしまつた事に馴れて來るのだ。

「未だ船は壞れない。助かるかも知れないぞ。」

私たちは、船がどんなに辛抱强く波と闘つたか、そして我慢して持ちこたへたかを知つてゐるのだ。

ヘシ折られたマスト、引き千切られたワイヤロープ、粉々に吹つ飛んだボートの跡、それ等のものに目をやる時、全身傷つきながらもなほ勇敢に闘つてゐる、同志に對すると同じ感激を覺える。

そして、彼女は未だ闘ひ續けてゐるのだ。

「そら、又打ち込んだ。よく倦きないで暴化やがるんだなあ。」

「いやんなつちやうなあ。」

これがふだんであれば「いやならさつさと陸へ上るさ」と、混ぜつかへすのであるが、こんな場合には誰もそんなことを言ひはしない。

誰でもの心の中に悔に似た愁ひが潜んでゐるのだ。マドロスの多くはマドロスを選ぶ動機を、大抵は彼の若き日の夢に持つてゐるのだ。私たちの船でも、殆んどすべてがさうであつた。

小倉と西澤はアメリカに行かう、と思つて乘つたのだつた。彼等は德川時代やもつと以前の日本を眺めたマルコ・ポロのやうに、アメリカを想像したのだ。そこには黃金の甍が軒を連ねてゐる。アスファルトの代りに黃金の舗道がある。川の小石はみな金だ！　そこでは極樂のやうに誰もが、樂し

く働いてゐる。そして彼等はサンフランシスコに入港するのだ。そして見たのだ。ピストルを持つて彼等を看視する巡査を。波止場をウロつく失業者の群を。機械に片足を食ひ取られて街頭に投げ出された彼等の仲間を！　そして、そこでは彼等は上陸する代りに、船室に閉ぢ込められて外から錠を下される。恰度囚人のやうに。

波田はビクトリアドツクの職工になる積りであつた。が彼はビクトリアドツクのある英國に行く代りに、日本の近海を、船の圍りの鱶のやうにウロ〳〵してゐるのだ。

三上は、ただもう「洋服を着て働きたい」ばつかりに、汽船乘りになつたのだつた。

暴化の初まりや最中には、彼等はそんな事を思ひ出しはしない。だが人間が晩年になると兎角く愚痴つぽく昔を振りかへるやうに、暴化の盛りが過ぎる頃になると、船のり以前がそうつと彼等の心の中に忍び込む。そして西澤は「紡績會社がどんなに惠まれた働き場所であるか」について話り初めるのだ。彼はたゞ仲間を羨しがらせるやうにだけ話す。決してそこで、「危く熱湯をかぶつてうで章魚見たいになりかけた女工」の話や、「機械にスツカリ髪を持つて行かれた彼の戀人」の話はしないのだ。

だから、事情さへ惠まれるならば、

「俺も一つ紡績へ入らなきゃ」と仙臺を思ひ込ませてしまうた程だつた。

怒濤はその頂上にあつた。頂上にあると云ふ事はこれから風ぎになると云ふのと同じであつた。だが未だ海面を削ふ程の低い雲が、粉雪を混へてマストにひつかかつた。殘つたステーが鋭い悲鳴を擧げた。

夜が少しづゝ明けかけた。しかし多の上に暴風雪の拂曉なので、それは明けると云ふよりも暮れて終ふ時の陰慘な明りに似てゐた。

エンジンは浪に胴腹を叩かれないためと、風位から船首を奪はれないためとに、スローで運轉してゐた。又、たとひ出來たにしても此暴化にフルスピードを出す亂暴な船長も居ないだらう。そんなことをすればプロペラーが空氣と波とを半分づゝ叩いて、一葉位落してしまふことになるのだ。

ところが、先にも言つたやうに、人はいろいろな事に馴れる習性を持つてゐる。そしてわが船長とても人間以外のものではなかつた。彼は夜が明けた事を知つた。そして夜が明け初めると云ふ事を、少し異常に緊張しすぎたゝめに、暴化が風ぎ初めたと錯覺した。

彼はエンジンにフルスピードを命じた。

丁度此時、大工は波の合間を覗つて、デツキでハツチカバーの檢査をやつてゐた。

その時は、船が波の阪を上る處であつた。だからスクリューはうまく利いた。で速力がかゝりかけたのだつた。次の瞬間に、船は波の下り坂にかゝつたドドツドツと辷り下りて、そして波の間に頭を突つ込んだ。と同時に船はかぶりを振つた。いやいやをしたのだ。左舷から波をたらふく飲んで、右舷から直ぐに吐き出した。

大工は、きつと何か怒鳴つたのだらう。が、それは聞えなかつた。たゞ、めちや〳〵にハムマーを振り廻すのが、デツキの上を流れてゐる間だけは、拂曉の仄明りの中にも見えた。次の瞬間には、もう大工はデツキの上にはゐなかつた。

デツキが波を吐き出すと、大工が浚はれた後では、白い泡波がヂヤブ〳〵と立つた。

「あつ！」

と、船長は叫んだ。そしてテレグラフをストツプに入れた。然し二重に遲かつた。スクリユーはプロペラーを一つ落してゐた。ゴツトン、ゴツトン、ギグ、ギグ、と妙な不愉快極まる震動が、一人殘らずのマドロスの頭に響き初めた。

そして、大工は右舷から吐き出されると、體全體で泳いだ。船は相かはらずかぶりを振つて進んでゐた。

エンヂンが止つて、舵を廻したために、船は風位から横に流された。で動搖がひどくなつた。そのためにその次の怒濤は右舷から力一杯デツキへ叩き込んだ。

その怒濤の中に大工がゐた。波頭の上に鰹の群が手にとるやうに見えるやうに、大工は波に乘つて再びわが船に打ち込まれた。

そしてその波は四番のウヰンチに打つ衝つて碎けた。

大工はウインチの中に、寸法を合せて拵らへられた機械の一部のやうに、グシヤツと嵌り込んだ。

けれどもそれは直ぐには發見されなかつた。直ぐに發見されたにしても、命が助かつただらうとは思へなかつた。けれども、たとひそう云ふ珍らしい例が曾てどの船かで有つたにしても、その例を直ぐに思ひ浮ぶものではなかつた。

大工が浚はれたので、ヴヰが投げられた。がそのヴヰは大工の所在を示しはしなかつた。マドロスたちはそのヴヰの所在を眺め出さうと努力した。

船は救助不可能と見て、風位に船首を立て直さうと、その二枚の廢疾に近いプロペラーで足掻き出した。

ヴヰは既に遠く離れた。そして波頭と區別がなくなつてしまつた。

汽笛が悲しく唸つた。「俺も草疲れた。」とでも言ふやうに。

その間にも鋭い波が、船首を立ち直す間に三四度後部甲板に打ち上げた。

何かいびつな器物に入れられた海月のやうに、大工はウインチの各部にへばりついた。

それは慘たらしい死骸ではあつた。が汚ない死骸ではなかつた。海水は此上もない豐富さで傷口を洗ひ、血も流し去つた。折れて突き出た骨は波の泡と同じ色であつたために目立たなかつた。

雪は壯豪さを感じる程やみくもには降つてゐなかつた。泣きつかれた小供の涙に似て小熄みになつた。そしてその涙の下に大工は、どうしても大工とは思へない姿に變つて散ばつてゐた。

「ボースンと一緒に下船されてりや、命だけは助かつただらうに。」と、誰も口には出さなかつたが、心の中では感じてゐた。全く、ボースンが下船を命じられた事が些も「助かつた」事にはならないにしても、大工が直江津で一緒に下ろされてゐれば、今、ここで浚はれはしなかつたのだ。

「助かつた！　M丸を先月下りた許りだぜ俺は！××岬沖で座礁しちやとても助からん。どれ見せろ！」

かう言つて、新聞を奪ひ合ふやうにして讀むマドロスの顏には、悅びと悲しみとがチヤンポンに漂ふ。彼は助かつた。だが先月迄一つ釜の飯を食ひ、共に働いて來た彼の仲間たちが、小さな活字に代つてそこへ表れるのだ。その一つ一つの活字と、彼はどんなに多くの思ひ出を生活して來た事か。

そして今、わがM丸はその小さな活字金の坩堝の中を、びつこを曳き〳〵歩いてゐるのだ。そのびつこは捲らなく頭に應へた。急にヘシ折れた足を曳きずるやうな、不快な痛さが全船のマドロスの胸を締めつけた。

私は本船が新造船であると云つた。新造船がプロペラーを折るなんて、と私を責めるかも知れない。だが、私が無理に折つた譯ではない。プロペラーどころか、次の航海にはスクルーシヤフトを折つたのだ。靖國神社の銅の鳥居程もあらうと思はれるスクルーシヤフトを！　だが、それは次の航海の事だ。

それにしても大工は可哀想だつた。彼はよくハムマーを振つたり、板を削つたりしながら唄つてゐた。

——泣くな嘆くな、三月にや歸る、
　おそて四月の櫻時、
　四月に歸らにや五月にや歸る、
　五月に歸らにや六月にや歸る、

彼はいつまでもその歌を續けるのであつた。六月、七月、八月、到頭十二月から正月まで持つて行つた。そして終ひに投げ出すやうに結ぶのだつた。

——それでも歸らなきや鱶の腹よ——

大工は鱶の腹に入る事は免れたが、ウインチの下で格好が惡くなつてゐた。未だ誰も彼を見附け出さうとはしなかつた。

船は捨てつぱちになつた。

「どうにでもなれ。」と言ふやうに、ノロノロと進んだ。

「碌なこたあねえや、こんなインダラ船はブチ壞して、地金で賣つた方が氣が利いてらあ。」

とマドロス共は考へた。

が、冗談ぢやない。船舶好況時代に於けるわがM丸が、わが大日本帝國の「富」に貢献する處は實に、實に偉大なるものがあつたのだ。たとへその「富」が、わが仲間たちマドロス共に全で關係がなかつたにしても。

「やけにギクシヤクしやがるなあ。」

と波田が言つた。

「まるで仙台が横根を踏み出した時見たいだ。」

と西澤が言つた。

「ううん」と、仙台が獨得の唸り聲を出しながら答へた。「手前の骨がらみの歩きつ振りとそつくりだあ。」

暴化はだんだん風いで來た。

セーラーたちは、大工を浚はれたり、プロペラーを折られたりしたので、すつかり鬱陶しくなつてゐたが、海の風ぐにつれて心に餘裕が生じて來た。そして折れたプロペラーを修理するために、ドツクに入ると云ふ事實の前に、明るさを見た。

怒濤がデツキを洗ふ事が少なくなつた。

船はどの位の深さの處を間誤ついてゐるか知るために、デイーブ、シー、レッドを入れる事になつた。

セコンドオフィサーの、吸殼の溜つた灰皿に似た顏がブリッヂから怒鳴つた。

「スタンバイ、ディープ、シー、レッド（測深機）を入れるんだ！」

セーラーたちの腰は重かつた。彼等はノロノロと立ち上つた。そしてプープ、デッキ（船尾樓）の方へ行かうとした時、タラップの降り口で西澤が何か叫んだ。

そして、タラップを一跳びに飛んだ。彼は四番のウインチの處で、頭から蓋ひかぶさつた蓆でもはねのけるやうな風に、兩手を上に振り上げた。

「大工だ！」

大工の仕事着の切れつ端が、ウインチのバルヴに引つかかつてゐた。肢體は散らかつてゐて、拾ひ集めても形をなしさうもなかつた。何故だか右の手だけが胴體とくつついて、ウインチとハッチとの間に、岩と岩との間の磯巾着見たいに、固く嵌り込んでゐた。

セーラーたちは、急に冬が來た事に氣づきでもしたやうに更めて寒さを感じた。そしてデッキに作りつけられたベンチ

レーターのやうにつつ立てゐた。
セコンドがタラップの上から下りながら怒鳴つた。
「おい、そんなとこにレツドはないぞ。」
「レツドどころか、ぼけなす奴。」
と波田が呟いて、セコンドが殺しでもしたかのやうに、憎憎しく彼を睨んだ。
「大工が打ち上げられて死んでゐます。」
西澤が言つた。
「何？」
「だ、だ、大工だ。」
と仙台が言つた。
セコンドも見た。
「船長にさう言つて來い。西澤。」
「ハイ。」
西澤はタラツプを驅け上つた。
マドロスたちはひどく氣がふさいだ。たつたさつきまで一緒に怒濤と闘つて來た、一人の勇敢な同志。それが浪に浚はれた事に氣を腐らしてゐたのに、又、舞ひ戻つて來てゐたのだ。それもこんな格好になつて。
「海の中にたつた一人で流れるのは淋しい。」と、大工の屍骸が云つてるやうだつた。
そして首が千切れてゐるのに、右の手だけが胴體にくつついてゐるのは、「俺はこの手で活きて來たのだ。」とでも言ふためのやうだつた。
鐵デツキの上は凍つてゐた。死骸が寒さうに感じられた。マドロスたちの足は感覺がない程、デツキに溫かさを吸ひとられた。そして寒さは、足から腰、首すじへと急に走り拔けた。
誰も口を利かうとしないのがなほ惡かつた。死のやうな沈默！　そうださう云ふ言葉があつた。その通りだつた。
寒さと闘ふために、兩足をガタガタ足踏みしなければならないのに、彼等はぢつと立つてゐた。余り足が痛くなるとそうつと足を擧げた。その時バリツと凍りついたものの離れる鋭い音がした。マドロス共はその音の方に揃つて振り向いた。
「音をさせるな！」と眼で言つた。
彼等はどうにも、大工のその變つた死に方を、自分の身に持つて來て較べない譯に行かなかつた。大工だからいい、と思ひ込める譯のものではない。
いろいろな傳說がデツキの上にはある。それは怪しいありさうもない話が多い。彼等は冬の荒天の下にストーヴの側で、夏の晴れ亘つた太陽をさける日蔽（オーニング）の下で語り合ふ。それには暗憺たる事實もあれば、噴き出さないではゐられない話もあつた。

今は新らしい傳說の一つが、彼等の前に現實の姿で、デツキの上に凍りついてゐるのだ。激浪に浚はれた大工が、再び船に歸つて來た話。それが彼等の前に生の肉の姿で散らばつてゐるではないか。
今までは嫉妬交りに疳にさへ〳〵聞いてゐた、彼の美聲に惚れ込んだ戀女房の話も、マドロス共の胸をついた。
フアンネルから吹いて來る煙の臭ひが、忌はしい火葬場の聯想を伴つて彼等の鼻から忍び込んだ。
「水葬にするんだらうか？」
それは余りに慘酷な氣がした。折角粉々になつてまでも、船を慕つて歸つて來たものを。又、此冷たい、斬るやうな、果てしもない海の中に拋り込む！
そんな事が出來るだらうか。
そして、此、私たちの眼の前にある大工が云つてゐたではないか。
「大工は割合に樂で、仕事が奇麗だからいいが、水葬の棺を作る時丈けは全く厭だ！」と。その彼が、今度はバラバラになつて棺の中へ、冷たく入らねばならないのだらうか。
船長が來た。彼も威嚴を押し賣りするやうな表情は持つてゐなかつた。彼がそんな表情を捨てたのを、私たちは初めて見た。
船長は言つた。
「わが××丸の大工、勅使河原芳通はその職務に殉じた。哀悼に堪へない。今は故人の靈を厚く葬ふのみだ。諸君（セーラーたちをさう呼んだので、セーラーたちはびつくりした）は、故人の死體を拾つて、謹しんで弔意を表するやうに。」
その時突然、妙な事が持ち上つた。
船長が弔辭を述べてゐる後ろの方にカインが姿を現はした。そしてスチームパイプのカバーの下に、クンクン云ひながら手を突つ込んで引つ搔いてゐたが、何かを引つ張り出した。それは千切れた大工の左の腕であつた。彼女はそれを咥へた。全て射止めた兎でも咥へたと云つた風に。そして誇らしげな顏付きで尻尾を振りまくつた。
セーラーたちはゾツとした。自分の腕を咥へられたやうに。
「アツ、畜生！」
仙台が鋭く叫んだ。
カインは腕を咥へたまゝ、勝ち誇つたやうにデツキの上を遁げ廻つた。セーラーたちは憤怒に燃えて追つかけた。「船長の犬もくそもあるか」と思つたのだ。
船長はカインカインと呼んだ。
カインはデツキの上を自由に跳びはねながら、セーラーたちの手の間を潛つて、船長の處へ驅けて來た。
「馬鹿！」

船長は怒鳴つてカインの頭を叩いた。
カインは褒められる代りに毆られたので、消氣て尻尾を挾んで、船長の足の下に蹲まつた。
波田が力一杯カインを蹴飛ばした。
カインは三尺許り跳ね飛んだ。
「波田、何をする！」
船長が叫んだ。
「何もくそもあるか、蹴殺してやる！」
さう叫びながら彼は狂つたやうに再びカインに飛びついた。
「こらつ！」
船長が叫んだ。そして波田の腕を捕まへた。
「馬鹿、相手は畜生ぢやないか。」
「うるせえつ」
波田は船長の握つてゐる腕を、體ぐるみ、ぐつと引いた。
デツキが凍つてゐたので、船長は辷つて轉んだ。
カインは動物の本能から危險を直感して、タラツプを驅け昇つて、ケビンの方へ消えてしまつた。
船はビツコを曳き曳き進んだ。船全體が大工のやうな運命にならないとは、未だ保証の出來ない天候であつた。

——一九二七、一〇、一二——

作者註　これは「海に生くる人々」中の人物と事件とに關聯があるのです。

火夫の顔と水夫の足

1

私は海へ、また行かうと思つてゐる。
船には乘れないだらうと思ふ。お客でなら乘れなくはないが、お客で乘るのなんかは厭だ。だから、港の町に往く積りである。
何と云つても港の町ではマドロスに澤山會ふ事が出來る。マドロスは私の仲間ではないか。仲間を離れることは氣持を豐かにするものではない。
間の抜けた處のない人間は、私は余り好きではない。間が抜けてゐると云ふ事は美德だと思ふ。だから、間が抜けてしまつた白痴は誰からも憎まれはしない。
白痴ほど間は抜けてゐないが、それどころか仲々賢こいのだが、矢つ張りどこか間抜けなところがある、と云つた風な人間を私たちはどこにでも發見出來るが、殊にマドロスにはそんな種類の人間が多い。
勿論、世の中が世智辛いから、人間だつて世智辛くなるのはあたり前だが、それにしても、ピシヤツと枠に嵌つた人間など〻云ふものは、寬ぎが無くて窮屈ではないか。
マドロスは、生活の大半を海の上で暮して終ふものだから、どんなに賢こい人間でも、海に影響されて間が抜けてゐる。
「取り返しのつかない事をして終つた。」
と、彼は三十年も船に乘つて〻、愈々お拂ひ箱になる時に氣附く。そして陸に上つてから種々と生活の方法を考へる。だが海の上で働いた智慧は陸の上では通りが悪い。それは恰度水上飛行機が陸上に着陸するのに都合が悪いのと似てゐる。
だから、船では數十人の荒くれたマドロス共を、小つぴどく怒鳴りつけながら指圖して來た、火夫長（ナンバン）や水夫長（ボーズン）などでも、陸に上つて孫の守をしたり、近所の人たちに慾得ずくでは出來ない念の入つた部厚のスエーターを編んでやつたりして、出來のいい息子の厄介になつてゐるなどは、頗る運のいい方なのだ。

彼等はどうしても船乘りの習慣が拔け切れない。四疊半の部屋で內秘話をしてゐるのに、デツキの上で風が吹き千切つて行く時や、エンヂンの轟音の前で話す時にやつたと、殆んど同じ調子で怒鳴るのだ。だから內秘話は道を越した向ひのおかみさんまでが直ぐに飲み込んでしまふ。だが、誰も彼を輕蔑しやうとはしない。最も親愛なる尊敬の念さへ感じるのだ。

そんな風に惡氣のない、そして陸に棲むためには指の間に家鴨のやうに膜が張つてゐて歩きにくい、と云つた風な老いたるマドロスが、デツキの代りに泥濘の路を行き惱むのを見るのは、淋しい情景である。況して、海の上で老い衰へて終つたと云ふのではなく、未だ若いのだが、ウインチに足を切られた水夫だとか、蒸汽に顏を吹かれた火夫だとかは、慘めなものだ。

私は何だつて彼がそんなにも怖ろしい形相に變つたか、について讀者諸氏に訴へたいと思ふ。そして、それから彼がどんなに、「此世の中が不如意のものであるか、」を、殆んど絕望的に信じ込んで終つたかについても。

彼——恐らく私が此處に彼の本名を名乘つたにしても、彼の迷惑になることはあるまいと思ふ。彼は「もう二度と君にも會ふ事はあるまいよ。僕はポーランドか食人種の居る島かに行く積りだ。あそこならバナナやマンゴがふんだんにあるし、此醜い顏を嫌つて門前拂ひを食はせる工場もないのだからね」と、私の家に二晩泊つて三日目の朝、私に別れを告げて、その永久の旅に出發する時、私の手を皺くちやになるほど握り締めながら言つたのだつた。

私は勿論、彼をそんな處へ殺しにやりたくは無かつた。さうだ、彼は福田民夫と云ふのだつた。

「ねえ福田、君は幸福ではないさ。それは誰よりも僕が認めるよ。だがね、死刑執行人にだつて不幸があるんだよ。知つてるかい。」

と、私は彼の顏を見ないやうに、眼を下駄箱になつてゐる石油箱の方へ向けながら、臺所で言つた。

「それはあるだらうね。」

と、彼は靴を履いてしまつて、振り向きながら言つた。

「だが、僕は死刑を執行した事はないよ。」

「いや、さうだ。僕の言はうとしたのはね、さうぢやないのだよ。それや無論、死刑執行人には君がさうなる以上に理由があると君は言ふのだらう。だがねえ君、それがまるであべこべな理由からなんだよ。」

私は福田と永久に別れるなんて事は、迚も忍びない事であつた。だから、も一度彼に靴を脫がせて、せめて私が彼を扶養し得ないまでも、もう一晩丈けは氣の毒な彼と夜を徹して語り明かしたかつた。そこで、私はだらだらと話を初めやう

として、玄關代用の臺所の板の間に坐り込んだ。

「何があべこべの理由だね。その話はもう止さうよ。僕の便を借りる船は今日の午後出帆だから。」

「しかしねえ福田、午後なら未だ隨分時間があるぢやないか。も一度上つて僕の話を聞いて吳れないか。」

「何かね、そんなにその死刑執行人の話つてのは、僕に關係があるのかね。」

「僕はあると思ふんだけれどね、君が聞いた後でどう考へるかそれは分らないけれど。」

私も福田も知つてゐた。こんな會話が何の役にも立たない事を。兎に角二人の間にはそんなにも急に、さよならをしたくないと云ふ感情があつたのだ。だが、三日二晩の間に私たちが別れてから後の、あらゆる經驗や思想の變轉などが語り盡されてしまつたのだ。だから今二人は話をしてはゐるが、感じる事は話題以外の何かであつた。

それは辛うじて見得る、太洋上で行き違ふ二艘の汽船の、無線電信技師がお互同志に電文の上以外の懷しさを、その眼から感じるのと同じであつた。

「君はもうどうしても日本にゐるのが厭なのかい。」

そんな事を私が訊ねるのが第一間違つてゐた。それはもうすつかり私が知り悉してゐた事柄ではないか。

「まあ、いやだね。」

と福田が答へた。

「よしんば僕が留まつてゐたいにしたところで、留まりようがないぢやないか。」

「しかし、まあ、もう一度上れよ。寒い。いくら暑い處に行くにしても、日本から風邪を引いて行くには當らないからね。」

彼は私の言葉で、初めて寒さを覺えたらしく、オーバーの襟に首を埋めた。

「もう、それでは二三時間話して行かうかなあ。」

そして、彼は叉靴を脫いで上つた。

私たちは、ビール箱の中へいきなり灰を入れた、亂暴で、捨てつ鉢な火鉢を間に挾んで坐つた。

福田は私に持つて來て吳れたマドロスパイプに、ゴールデン、バーヅ、アイ（刻煙草）を詰めて、火口に小さな炭火を載つけながら言つた。

「寒い日本よか、熱い南洋の方が住みいいぜ。君も行かないか。」

福田も私が船に乘れない體である事は知つてゐたのだ。だが、福田にしても私にしてもへまばかり踏んでゐる。どうも人間と云ふものは、いやマドロスなどは、惡口をつき合ひながら親密の情を表すことに馴れてはゐても、眞正面から親密の情を表すことには馴れてゐないのだ。何だか空々しくつて

間が悪いものだ。

福田は私の無二の親友だつた。彼と私とは五年も同じ船で働いてゐたのだ。だのに、私は彼が一年振りに私を訪ねて呉れた時に、彼を思ひ出すことが出來なかつた。

私が下船される時には、彼は内秘で涙を流して私を送つて呉れた。そして、堺に歸り損ねた鳩見たいに間誤ついてゐる私を、彼の幸福な家庭に泊めて呉れたのだつた。その時は丁度今とはあべこべに、彼が幸福で私が不幸であつた。

彼は世帯を持つて二ヶ月目だつた。

女房はスペイン人に似た容貌を持つた、大柄な美人だつた。

「畜生、掘り出しものをしやがつた！」

私は自分が馘首されて、頗る景氣のよくないのも忘れて、陸の風呂に浸りながら彼の裸の背中をピシヤリとやつたものだ。

彼は默つて幸福さうに笑ひながら、丹念に掌を輕石で擦つてゐた。

その時分は、彼も女房に劣らない男らしい男だつた。まあ、アントワープでもマルセイユでも、金がさうするのではなくて、ほんとに女に持てると云ふ顔であつた。

私は顔を問題にする女については、どうしても呪を壓へる譯には行かない。それは福田の問題からであつた。福田のやうな善良な人間がさうザラにあるか！　彼は親切そのもののやうな人間だつた。彼は間抜けの正直者だつた。

「お前は別嬪だよ。」と言ふ代りに、彼は「お前だつてとぢ蓋位の價打はあらあね。」と言つた。

「お前は間抜けだよ。尤もその間抜けが俺にしつくりしてるのだがね。」と言つた。

それを、一々クリーム入りのチョコレート見たいに、甘つたるい言葉で喋舌るなんて藝當は、余り生活に苦勞のない人間に委せて置いていいことだ。とても、マドロス共にやれる事ではない。氣恥かしいや。

「で何かい。どうしておめえはあの女を手に入れたのかい。」

風呂に入つてると不思議な事には聲がよく出るものだ。その上、私はマドロスだものだから、陸の人には怒鳴つてると思へるほど、大きな聲で私は彼の背中に話しかけた。

「止せよ。極りが悪いぢやないか。」

私は笑ひ出してしまつた。奴は耳から頸の方へ眞つ赤になつてやがるのだ。

「極りが悪いつて柄かい。」

私は又喚くやうな聲で呟いた。お湯に入つてゐる町の人たちは、此無遠慮な私のお喋舌りに、私と彼とを交る々々眺めながらニヤニヤした。

今度は私が赤くなつた。極りが悪かつたのだ。

その福田が一年後の今、私を訪ねた時、私はすつかり彼を見損つてしまつた。

彼の顔は船のサイドのやうに眞つ黑く燒けて、處々地膚の錆が出てゐるやうな引き吊りが出來てゐた。

2

私は茶の間で冷飯をかつ込んでゐた。茶の間と私は言つたが、私の棲んでゐる家は四疊半の茶の間が一つと、一坪の玄關兼臺所とがあるつ切りであつた。だが、それにしてもその家は私の借家であつた。その證據にはよしんば郵便が來ないにしても、チヤンと私の名札が、蒲鉾板に筆太に書いてブラ下げてあるではないか。

その上、疊一疊に足らない船の巣よりか遙に廣くもあるし、暴化を食つても頭の上から水瓶が、顔に向つてメリケンを入れると云ふやうなこともない。又私がいくら長くつたつて、洗張りのシンシ針のやうに、頭と足とで寢箱の兩端を突つ張らねばならぬと云ふ程のこともない。

若し私が、永らく陸に棲んでゐるのだつたら不足を言ひ出すに決つてゐるのだつたが、その頃は船で片つ方の足をチョン切られて上つて、そんなに間もない頃の事だつたから、舶來のでない國産米を、たとへ冷飯の茶漬であらうとも食つて、一本丈けの足ではあるにしても、そいつを印度の王樣のやうに長々と延ばして寢そべれることは、やゝ暫く私から熾烈な闘爭目標を蔽ひ得たのだつた。

私が三杯目の茶漬の二口目を頰張つて、それを飲み込まうとして、箸は澤庵を挾んでゐる時、

「オイ、ゐるかい。」

それが福田の聲だつたのだ。私は慌てゝ飲み込んだゝめ、三分の一位は飯が口の中に殘つてゐたが、いきなり勝手兼玄關の戸を開けて、

「ゐるとも、ゐるとも。」

と怒鳴つた。ところが飯粒がその聲と一緒に吹き飛んだ。そして福田の顔に飛びついた。福田は手で顔を拂つた。

聲は全く福田であつたが、顔は人間の顔とは思へなかつた。

腕か足の火傷の瘢痕にしても、決して見良いものではない。それが顔から首へかけて一面なのだ。それは丁度、私がウインチに食ひ取られた右の大腿骨の斷面と、すつかり同じ顔付をしてゐた。私が自分で見てさへ憤と淋しさと嫌惡とを感じないではゐられないところの、その傷口と！

「解るかね。福田だよ俺は。」

「上れよ。何だつてぐず〳〵してるんだい。」

二本の手と一本の足とで上手に跳ねながら、私は茶の間へ歸つた。

一寸此處で話の順序として、どうして私が片足を切りとられ、福田が顔を吹かれたかについて説明させて貰はう。でないと讀者諸氏に分らない丈けでなく、私の記憶にまで錯誤が起らないとは限らないから。

實は一年前、彼の新婚の家庭に厄介になつて後、私は別な人間の名儀で辛うじて、他の船に乘り込む事が出來た。乘り組んで三ケ月目に、ウインチが凍りついてしまはないやうに、耐寒空運轉をやるために、クラツチを空轉に入れやうとしてゐたのだ。此クラツチが私の怨の的だ。いや、こんな腐れウインチを誰が此船にとつつけやがつたんだ。ええつくそ！　一體どいつだ！　此造船所長は。

私は最初大ハマーでやつた。それから玄能を持つて來た。金挺でこぢた。一分でも動けば私の仕事には見込みが立つのだが、クラツチ奴、全つ切り動かないのだ。

——畜生！　クラツチに見せかけて、その實、シヤフトのまゝ鑄上げたんぢやねえかな。ハンドルなんかくつつけやがつて。——

それは全でクラツチの摸型である程、クラツチに似てゐた。けれども實物とは違つてゐた。

——打ち壞しちまへ。構ふこたあねえ——

そこで私は、玄能でもつてハンドルを一つ、力一杯に見舞つた。ハンドルの野郎、いやな格好に歪みやがつた。そして、クラツチが一分程動いた。

——なほ悪いや。これで眞物と來てやがらあ。ざまあ見やがれ——

で、も一つ私は食はせた。今度は動かなかつた。で、上官が兵隊にするやうに、私はハンドルの兩面を「往復やつた。」全く、今から考へてもあのクラツチ位骨を折らせた奴はない。何のこたあない飼殺しの玄關番見たいにくつついてゐたものだ。

やうやくクラツチが離れて、ウインチが空轉し初めたので、私は油をやつた。その時、船の動搖とデツキの凍つてゐたのと、一番悪いことには腹が空いて目が眩んでゐたので、辷つて轉んだ。私の足は齒車に食ひ取られた。食ひ取られた分は膝までであつたが、——それにしても骨が折れるあの妙な音と、痛さとを健康な神經で感じなければならないのは、後で私が痛さから解放された時言つたやうに、「いや、全く骨の折れる話さ。」であつた。——それを完全に治療するために、腐りの來ないやうに、大腿骨から切つてしまつた。

それでもう私は、たとひ雇入れ停止になつてゐないにしても、再びマドロスになる事は不可能になつた。

私が右足を食ひ取られるのと前後して、福田は硬化症に罹つた動脈見たいな、スチームパイプに吹かれたのだつた。福田は五ケ月病院で天井許り眺めながら、煩悶し續けたの

だつた。

「ウン、二ケ月許りは毎日に女房はやつて來たさ。だが終ひの二ケ月は一度も來なかつたよ。いいさ。誰だつてこんな顔を見るのは氣持よくないからね。」

と、最初の夜福田は私に言つた。

「然し、それや君の罪ぢやないからね。」

と私が言ふと、彼は答へた。

「うん。だが仕方はないさ。よしんば女房が俺に同情してゐたにした處で、同情丈けでは飯が食へないんだからな。心中でもするかね。そいつは俺が不贊成なんだ。俺は食人種の居る島に行つて、人間が人間を啖ふ最も原始的な方法を見やうと決心したんだ。こんな狡猾なやり方で人を食ふ方法は、もう卒業した積りなんだ。」

この調子で、私は、彼とお互の身の上の事を愚痴をこぼしたり、拳骨を振り上げて憤つたりして、三日二晩語り通したのだつた。

だが、語り明すことは何等の光明をも、私たちに與へはしなかつた。たとへば、私は封筒の表書きを千五百枚書かないと、お茶漬さへも食べられないのだつた。ケチな事を言ひ度くはないのだが、封筒は向ふ持ちでも、筆と墨とはこつち持ちなのだ。いや、今は私の愚痴を並べ立てる時ではない。

福田にしたつて、人間と生れたからには、地上で人間らしい生活の一つかけでも、送りたいに違ひない。又、極めて短い間ではあつたが送つたのだ。私を羨しがらせるやうな生活を。

だが今になつて見れば、癪であらう。ある筈だ。

そして、今、私たちは二時間かせいぜい三時間しか時間を持つてゐないのだ。一生涯一緒に生活しても、恐らく喋舌り盡せはしない程の多くの事柄を、二三時間で喋舌れる譯のものではない。

たとへば監獄に入つてゐる夫と、婆婆にゐる女房とが面接所で話すのを聞いて見るがいい。まつたく用談以外の頓珍漢なことを言つてゐる。そして時間が來てガチヤツと扉が下りる。女房は監獄の門を出ながら、夫は又もとの監房に坐りながら、じり〳〵地團駄を踏みながら、必要な事柄については何も話さなかつた事に氣付くのだ。

福田と私とは、ぼんやりと向ひ合つて坐つてゐた。何か必要な話題、今後一生お互に再び會へないであらう最後の言葉を、二人共一生懸命に考へてゐた。

「それで、その、何かい、死刑執行人の不幸な話つてのは？」

と福田が一分間も惜しいと云つた調子で聞いた。

私は慌てゝしまつた。そんな話は何でもないのだ。たゞ、その日澤庵の包みの新聞紙に書いてあつた記事を思ひ出したまゝ、言つたに過ぎなかつたのだ。

「いや、マリノスキーがね。女房のマレンガから離婚訴訟を起されたのさ。」
「そのマリノスキーと云ふのを知つてるのかい。」
「あゝ、新聞で見たんだがね。ポーランドの死刑執行人なんだつてさ。」
「何だつてまた、離婚訴訟なんか起したんだね。職業を隱して結婚でもしたのかい。」
「ううん。あべこべなんだよ。」
「なにがあべこべなんだい。」
「つまりね。その……なんだつけなあ。ちよつと待てよ、どつかそこらにあるかも知れないから。」
そこで私は、その新聞記事が非常に重大な書類であるやうに思ひ込んで、ガラクタの一杯入つてゐる押し入れを引つくりかへし初めた。
「いいよ。いいよ。そんなに探さなくたつて。」
と、福田が言つたが、私はそれどころではなかつた。若し、それを見附け得ないならば「永久に一切がお終ひだ」と云ふ氣がしたのだ。それは何かひどく泡を食つたお婆さんが、たとへば急に一人娘を嫁にやつたお婆さんが、娘が新婚旅行に出發した後で、味噌汁の中に一度だけ味噌を入れた積りで、三度も入れたために汁がドロドロになつて、全で味噌煮になつてしまつたとか、又は、ビール瓶を片附けるのに、どうしても栓を探し出す「義務」を感じて、「疊まで引つくりかへした、」とか云ふのと似てゐた。
私は滅茶々々にそこら中を引つかき廻した。けれども、片足なのと、無暗に氣が急いてゐるために、すつかり疲れてしまつた。
「困つたなあ。あれが無くつちや。」
と、私は腐つた疊の上にへたばりながら呟いた。
「そんなもの何も、些も困る事なんかありやしないぢやないか。それよりも、もつと大切な話を爲ようよ。」
福田は、私が餘り慌てるので、その引つ吊つた顔を、もつと引つ吊りながら私をたしなめた。
「あ、あ、あつた。あつた。」
と私は釋放された寃罪囚のやうに喜んで怒鳴つた。
「いいかい。かうなんだ。讀むぜ。
——ポーランド大統領訴へらる——つてんだ。——ワルソー發帝通特信——だ。
——ポーランド大統領が死刑囚を特赦するに、頻々と大統領の特權を行使するので、我等の結婚生活の平和を脅威すると、死刑執行人ジヤー・マリノスキーが法廷に訴へ出た事件がある。一方マリノスキーの妻マレンガが家庭を維持するに相當の家經費を給與されぬを理由に離婚訴訟を起した。マリノスキーは法廷でこの罪は皆大統領にあるとて訴へて曰く

「若し死刑囚がもつと斬首されたればもつと收入があつたであらうし、從つて女房を維持し得たであらう。且又女房が私を捨てるなんて考は大統領が死刑囚を特赦する特權を現在の如く頻りに行使せねば、起さずに濟んだであらう。しかるに事實は反對である。それがため我々は衣食に窮してゐる。」何か他に職が探せぬかと裁判官が訊問したら彼曰く、「出來ません私は政府の雇人であります。命ぜらるゝ事は私は實行せねばなりません。」と、裁判官はこゝに於てマレンガの訴訟を却下し死刑執行が繁多になるまで待てと忠告した。——と云ふんだ。どうだい。」
と、ホツとしながら私は讀み終つた。
「そいつは面白いなあ。だが、それと俺たちとの間に何か關係があるとても考へるのかい。」
「いや。」と、私はどぎまぎしながら言つた。「ポーランドでは、死刑執行までが單價請負らしいからね。」
「うん。さう云やさうだなあ。何だつて月給にしないんだかなあ。」
そして、私たちは最後の一分までも、その馬鹿氣た記事について、笑つたり憤つたりしながら、「ポーランドの馬鹿々々しさ」について語り合つた。
愈々、最後が來た。
彼は私の手を二十分も握つてゐた。私も握つてゐた。
「俺はね。」
と彼は言つた。
「行ければポーランドに行かうと思ふよ。」
それが私たちの會つた最後であつた。未だポーランドからも、ボルネオやスマトラからも、彼からの便りがない。
彼は日本にゐるのではあるまいか。私は港の町に棲んで、彼や彼の仲間たちと暮さうと思つてゐる。
——一九二七、一一、一三——

電燈の油

川向ふには三軒の飯場が、貧民窟の塵箱見たいに三つ並んで立つてゐた。

その少し川上には、取入口の見張り小屋と、社宅が四軒、浴室が一軒建つてゐた。

氷の白い縁取りをした、青いリボンの様な冷たい川が、桃園發電所の方へ溯つてゐた。そして川上へのリボンは、堰堤と吊橋とで區切られてゐた。堰堤の眞下の川原では、蟻かなんぞの様に勞働者達が一所に固つたり、ぽつん〳〵と一人づつ距離をおいて行列をしたり、散兵線を敷いた様に踞つたりしてゐた。

珍らしく晴れた日であつた。海拔三千餘尺の澄明な空であつた。寒氣は嚴しかつた。

それらの景色は、彼が今立つてゐる白樺の根元から見ると、何だか、この世の中がくよ〳〵しなくたつても渡れさうな、さう世智辛いものではない様に思はれた。橋本は、白樺にもたれながら考へてゐた。

――こんな所に來さへしなければいゝのだ。何だつて人間は、こんな所に來るんだ。自分で態々、登りつめた鰻の様にこんな山の中へ、登つて來るからこそ、あの蟻の様な人間共は、死ぬよりも惡い苦しみをするのだ。見ろ！　凡ての物事は運ぶ通りに運んでゐるではないか。ほら、十臺のポンプはパイプ一杯に水を吐いてゐる。仲間達は、打ち缺けたガラスの様な、痛い水の中に腰まで入つてゐる。石を抱へ上げてゐるぢやないか。ポンプの下では、まるで、地球の中心を掘り當て様とでもする様に、シヤベルや、ジョレンや鶴嘴で、かん〳〵に氷つた砂や、玉石を起してゐるではないか。

ざまあ見やがれ！てめえ達は、自分では砂を掘つてゐる心算でゐるが、ほんたうは墓穴を掘つてゐるではないか。一體！てめえ達は、何の爲に生きてゐるのだ。生れたから生きてゐるとでも云ふのか。人間の體のありとあらゆる部分をどの位虐使出來るかを、自分で自らに試してゐるとでもいふのか。

俺は嫌だ。だから、「この寒中に尖つたガラスのやうな水の中に入らない」と俺は言つたんだ。するとどうだ。中山の野郎、お前は何しに此處へ來たのかと吐しやがつた。

「俺か、俺は飯を食ふために來たのだ。」

「飯を食ふためには働かなくちあならねえ。」

「働いてゐるぢあねえか。白熊見たいに、寒中の水の中に飛び込むのが、たつた一つの働きか。」

「誰も入らないと來たら、堰堤の根堀りが出來るか。」

「てめえなんざ、酒ばかり呷りやがつて、一滴の水も體につけねえで、棍棒をぶら下げて立つてゐりあ、それで飯が食へるから、寒中の水がどの位冷てえかが分らねえんだ。」

中山はいきなり橋本の頭を目蒐けて棍棒で毆りつけた。橋本は、飛び下つた。そして長柄のスパナで、中山の棍棒を叩き落した。と、中山は彼が何時も愛藏してゐるメスを拔いた。鬪爭は、百四五十の勞働者にいゝ見物であつた。中山は傷害前科七犯を有する狂暴な男であつた。

彼は、彼が指揮する勞働者達は、絶對に彼に服從することを要求してゐた。服從しなければ、棍棒とドスが彼にあつた。だが、正月の元日に、仕事をすることすら亂暴であるのに、水の中へ腰きり入つて、石を抱へ上げるといふことが、どんなに癪に障ることであるか。しかも、その賃銀は、一圓廿錢ぽつきりなんだ。その凡ての同じ苦しみを、橋本の仲間達百數十の勞働者達は嘗めてゐるのだ。そしてその凡ての勞働者を凍死させる目的でもあるかの様に、豚の様に川の中に追込む其奴が中山なのだ。

昨日、アメリカの或る財團の派遣員を案内した、電力會社の社長一行の高級自動車が、七臺も俺達の頭の上の街路を、川上の桃園發電所の方へ疾驅して行つた。俺達は、その借金の抵當なのだ。中山だつて、あの自動車の中の連中から見れば、まだ尻尾の取れないお玉杓子と同じぢあねえか。

だのに、このお玉杓子奴は、メスを振つて俺に斬つてかゝる。

橋本は、憤怒で胸が煮え返つた。彼が振り上げ打ち下すスパナは、中山と同時に、中山の頭の中に働いてゐる非道な株主や重役の、搾取に對して向けられたものであつた。

さう言へば、中山の酒肥りしたテカ〳〵の面は、社長の顏に似てる様にさえ見へた。橋本の敵は、中山一人だけではなかつた。中山を通じて、勞働者全體に覆ひ被さつてゐる、白くして嫋やかで優しい手であるが、しかも最も慘虐な搾取の手に向つて打ち下す一擊であつた。

中山は、わざと、半分笑ひながら、又は笑つた様に見せかけ様と努力しながら、メスを腹の前に、橋本の方へ向けて握り締めながら言つた。

「やくざ野郎！　てめえ等の様な青二才に、こみやられる様な、中山と思ふか。來るなら、覺悟を決めて掛れ。でなけりや、そいつを捨てろ！　命が欲しけりや、今のうちに謝つた方が得だぜ。」

中山の言葉が、終ひの二言位を言ひ切らない中に、橋本の最初のスパナの一撃が、中山の肩に當つた。

グスッ！　といふ樣な音がした。同時に、橋本の左の頰には、地獄を覗く穴でもあるかの樣な、肉の窓が開いた。鮮血が、氷の上に飛んだ。橋本の第二撃は中山の頭に當つた。中山は、滿員席の後ろに立つてゐる、活動寫眞の見物の樣に爪立ちをした。そして、橋本の心臟を覗つて只一突といふ恰好をしながら氷つた地面によろ〳〵と倒れた。

橋本の打撃は、中山の背中に向つて、機械的に續けられた。彼の敵は、斃れた。だが彼の與へた憎怒と復讐に燃へた打撃は、中山を撃つのではなくて、彼の上へ上へと、そゝり立つてゐる搾取の白い手を毆るのであつた。

今は、橋本は斷然、この呪はれた工事場を切上げねばならなかつた。橋本は、女房や子供や老婆を持つてゐる（長屋持ち）勞働者であつた。

白樺の、幹にもたれてゐた彼は、靜まり返つて何等の物音もなく、水の中で働いてゐる彼の仲間達を見下した。

「さよなら！　お前達は何時までも、川の石と力比べをしてゐるつもりかい。お前達の堀つた、トンネルのやうにお前達の生活は暗いのかい。さよなら。」

自然の風物は、この上もなく淸かつた。空氣は澄み切つてゐた。川は全くどんなリボンよりも綺麗だつた。大地の肌の上には、落葉が眞綿布團の樣に、深々とかぶさつてゐた。

彼は深い落葉を踏んで麓の方へ下つて行つた。

彼は、自分の長屋へ歸るといふ氣持の出た刹那に、その意志とは反對に、家とあべこべの方へ歩き出した。昨日、彼の家で起つた出來事が、彼が家へ歸らうといふ考へと、反對の方へ彼を誘つた。

彼は、も一人誰かを、いや、もう五人も、いや一切、人間の不幸の上に、生活の土臺を置いてゐるものを、力一杯ぶん毆つてやり度くなつた。

昨日の晝食時間の事だつた。彼は、疊にすれば四疊半位の、彼の長屋へ飯を食ひに歸つた。その部屋は、出入口の他には、窓といふものはなかつた。隅の方には、床板を張らない一隅があつて、そこで丸太ん棒が燻つてゐた。アンペラを敷いた床板の上には、橋本の母が、鼻持ちのならぬ惡臭を放つ分泌物で、襁褓と、部屋中の空氣を、煙の樣に充滿させてゐた。讃謨の燒ける匂ひ所ではなかつた。彼の妻は、過勞と絕望のために、神經病を起して、人事不省で寢てゐた。その病氣は、全く奇妙な病氣であつた。どこへでも、彼女の氣の向いた時、引つくり返つてしまふのであつた。そして、跳動が、天井からぶら下つた煤の糸見たいに、ビリ〳〵と搖れる

だけのものであつた。

呼吸は、口へ耳を持つて行かなければ、してゐるかゐないかが、分らなかつた。三度目の發作の時に、橋本は、假病だと思つて、女房の横つ面をぶん毆つた。だが女房は、ぐつと横を向いただけで、瞳孔を開けた儘、首をぐらつかせたに過ぎなかつた。

そして、最も惡いことには、昨日は、その二人の寢てゐる所へ、彼の二人の子供のうち、三つになる上の子が、圍爐裏の中へ轉げ込んだ。子供の右の手は、燃えさしの木の一本の樣に、燒け爛れた。惡臭と同じ樣に、泣聲は部屋一杯に鳴り轟ろいた。老母は、聞へる耳と、見る目は持つてゐたが、起ち上る足の力を持つてゐなかつた。子供の母は、大きな目を開いてはゐるが、その瞳孔には、何の姿も入らなかつた。

隣りの長屋の、內儀さんが、子供を圍爐裏から撮み上げた。

子供は、撚ぢ切れる樣な叫びを上げながら、母の隣りへ寢かされた。內儀さんは、橋本を迎へる爲に、帳場の方へ駈け出した。そこへ橋本が、歸つて來た。

「嘉坊が、嘉坊が、火傷したんだよ。」

「甚くかえ？」

「右の手一杯だよ。外側がペロッと燒け剝けてゐるんだよ。」

彼は全速力で、彼自身が火傷でもした樣に、長屋に飛込んだ。

そこには、彼の母が、依然、鼻持ちのならない惡臭を放ちながら横はつてゐた。彼の妻が、依然、瀕死の狀態で横はつてゐた。

女房の傍では、彼の長男が、汽船のホイッスル（汽笛）の樣に、口を開けて泣き喚いてゐた。二つになる次男が、兄貴の泣いてゐるのを、面白さうに覗き込んだり、一緒になつて泣き喚いたりしてゐた。

橋本は、じつと立つてゐた。彼の頭の中は、女房の眼と同じく、何物をも受けつけない樣に見へた。

彼は、ふうーと肺臟一杯の溜息をしながら、アンペラの上へ坐り込んでしまつた。

「早く醫者に連れて行かんか！」

と、內儀さんが後ろから怒鳴つた。

——地獄——

橋本は呟いてゐた。

「早く連れて行かんと死んでしまふぞ！」

と、誰かが喚いた。

——醫者か、醫者もいゝだらうなあ——

と、彼は鈍く感じただけで、ひどい瓦斯でも立罩めた樣な、薄い視線で、部屋中の、暗黑な慘たらしい情景を眺めてゐた。

長男の泣聲は、鋭い鋼鐵の針金の樣に、耳から、彼の腦髓を突き射した。惡臭は、鼻にメリケンを入れた。それは頭に

こたへた。

——死——

そのためには、仲間だらうが、社長だらうが、何奴でも構はない、手近な奴に打つつかつて、ダイナマイトの様に破裂したかつた。

——死んだ方が、さつぱりする——

醫者は、峻險な道三里の向ふにあつた。峻險な道三里、それは負つてでも行かれる。だが、醫者の診察費、往診料、藥價それは峻險なる道千里の向ふにあつた。その道は、杜絶された道であつた。

こんな狀態の下で、人間は、何を生活の目標にするのだらうか？　中山にしろ、その他多くの勞働者達が、自分自身を自分の家族達を、自然と、機械と、過勞と、酷使と、食糧の欠乏と不良と、絶へず死の淵へ追ひやられる、この慘澹たる不幸、それは何を意味するだらうか？

事實は、橋本のどんな者へにも拘らず、彼の前に陰慘に擴げられてゐた。母の命も、妻の命も、又子供の命も、出來るだけの事をしなければならないのであつた。

橋本は、死人に等しい妻の傍へ寢てゐる、子供の所へ行つた、そして自分の傷口でも見る様に、子供の傷を見た。子供は、身悶へして泣いた。

「あいた——い。いたいよう——。」

と泣き喚いた。

彼は、犬がする様に、子供の、赤身の出た火傷の上を、嘗めてやつた。傷跡一杯に、唾液をべと〳〵に舐めつけた。

味噌や、胡麻油や、醬油などが、火傷に利くことを彼は知つてゐた。だが、そのどれもひどい痛みを伴ふものであることを自身の體驗から知つてゐた。

子供、子供の命は、その親が與へたものではないか。自分の與へた命を、育て上げることは、親の唯一の喜びではないか。その喜びをさへ、橋本は持つことが出來なかつた。

犬がする様な、猫がする様な、原始的な治療法しか、自分の子供に與へ得ないのが、橋本の現在の姿であつた。

橋本は、子供の傷跡に、唾液と共に、埃の交つた涙をさへ附け加へねばならなかつた。

手も足も出ない！　全く手も足も出ないのが橋本の姿であつた。

この工事は、D電力株式會社の二萬五千キロの發電所の取入口、堰堤修繕工事であつた。

そこでは、橋本のうけた苦しみと、同じ様な苦しみ、同じ様な嘆き、それが半年の間に三十回以上も起つた。

そこでは、苦しみに堪へることだけが生活であつた。

炭坑や、トンネル工事では、多くの勞働者達が生埋になる。

橋本や、その他の勞働者達も、生埋の狀態と變つたところがあるだらうか？

これらの悲慘な事實に對して、讀者は作者を責めるかも知れない。

「何故それならば、作者はその勞働者達を團結させないのだ。」

その苦情が正當であることを作者は認める。それが正當であるからこそ、自分はこの文章を書くのだ。

よし、この文章が、芽出度し〳〵に終らないからと言つて、作者を責める者があるならば、それは現在の無産大衆の一般的狀勢を知らなさ過ぎるといふものだ。屋外自由勞働者に對しては、オルガナイザーの活動が足りないことを自分は認める。

しかし萌芽はある。

橋本は、川上を向いて、益々高くなる山の方の街道を鈍く歩いて行つた。譬へ生きた者の心臓を挽肉器にかけるとしても、橋本の様な苦しみは、なかつたかも知れない。

橋本は考へた。

——俺は、家へ歸るのが眞實ではないだらうか。俺は家へ歸るそして今までの多くの仲間がやつた様に、阿母と女房と二人の子供を締め殺して終ふ。そして俺も首を縊る。なし崩しに死ぬよりも、自分で殺したり死んだりする方が始末をつけたといふことになるではないか？

だが、そんな始末をつける必要があるのだらうか？　成程、それで俺の身邊は始末がつくだらう。それと同じやり口で俺の周圍の身邊の始末もつくだらう。

勞働者達が、自分で絞首臺の臺を蹴飛ばす様に、どん底まで行つて自分の始末をつける。それなら、一切、萬事は、文句なしに片がつくのだ。

だが、俺は別のやり方をする！　俺達が搾取されることは、俺達の責任ではないのだ。

俺は所を換へて、仇を討たなくちあならない。

彼は、一昨日、七臺の高級自動車がドライヴした、その同じ道を川上に向つて歩いて行つた。

彼の歩いてゐる、この川の沿岸、それにはD電力株式會社の數十の電力發電所がある。

その發電所の數千の、勞働者の、赤い心臓の、赤い光が東京や、大阪や、名古屋や、その他の大都市の、或ひはホテルに、舞踊場に、活動寫眞のスクリーンに、大ブルジョアの玄關に食堂に、煌々と輝いてゐる。

この電燈の光は、或はこの電力は、その燃へ盛る呪の眼を益々大きく睜る！　終にはブルヂョアジーを燒け溶す程にも強くなる。橋本のその後の生活は、それを證明してゐるのであるが、それは次の物語に屬する。

鴨獵

室蘭の港は、馬蹄形に、綠の木立に高く覆れて、その下に薄黑く街が這つてゐた。

港の水は、まるで燐光でも放つ樣に銀色に光つてゐた。無數の鱈や鯖の子が游いでゐた。その鱗に日が當つて銀色に光るのだつた。

高架棧橋の西側に、M丸が横着けになつてゐた。M丸から遙か西にW製鋼場の大煙突が黑煙を吐いてゐた。

W製鋼場の沖は、ひどい遠淺であつた。色々な水鳥が、銀の一ひらにありつく爲に、ヨツトのやうに捷しこく游いだり水の上をすれ〳〵に、輕快な低空飛行をやつたりしてゐた。

その、多くの水鳥の中に、鴨のやうに平つたい嘴でなく、尖つた嘴をもつた一種の鴨がゐた。

その鴨は、どういふ譯でだか、嘴が尖つてゐる代りでもあるまいが、飛ぶ力を持つてゐなかつた。

その代りに、潛航艇のやうに長い間、水の中を潛り歩くことが出來た。

M丸では、積込の中途なので、特別な休暇で、オールハン上陸してゐた。

當番のセコンドメイトはブリツヂで、まるで、マニラの煙草でもふかす樣に、紫色の港の空氣を吸つてゐた。

灰皿に似た彼の顏にも、中春の海の爽かな風は、柔かいキツスを送つた。

セコンドは、ブリツヂからW製鋼場の煙突を見てゐたが、その眼を段々と間近に、自分の船のサイドまで持つて來た。

そこに嘴の尖つた鴨に似た、水鳥がゐた。

この意地惡の、吸殼だらけの灰皿に似たセコンドメートにも、意地惡を拔きにした惡戲心が起るといふことを、科め立てるには當るまい。

どんな人間にでも、無邪氣な惡戲をしたがる一瞬間位はあつていゝものだ。

彼は、彼自身獨特の妙な藝術的感情から、銀色の海の上を綠色のサンパンで、蒼黑い鳥を追つかけるのは、

「こいつは詩的だ。」

と考へた。

「おうい小倉！」

セコンドメートはタラツプの上へ首を出して呶鳴つた。

「おうい。」

チヤアトルームから、小倉が、首を突出しながら答へた。

「誰かセイラーはゐないか。」

「見て來ませうか。」

「見て來ゝ。」

小倉は表へ駈けて行つた。小倉はフオツクスルへ跳び込んだ。

誰もゐなかつた。

「スタンバイ！　誰もゐねえか。ゴツデム！　オールハン行つちめえがつた！」

小倉は、ブリツヂへ歸つた。

「セキメーツ。誰もゐませんよ。」

「棧橋の下でも覗いて見ろ。誰かゐるかも知れない。」

「オーライ。」

彼はタラツプを飛降りて棧橋へ出た。

棧橋の柱を傳つて、猿の樣に逆さまにぶら下りながら、柱の横桁の上を一廻り見渡した。

「おうい。M丸のヘイカチ！　誰もゐねえか！」

「何だい。笑はせあがらあ。ヘイカチだつて。儲け事でもあるのかい。」

柱の陰から、網とバケツを持つた、波田が横桁を傳つて出て來た。

「セキメーツが呼んでるぜ。」

「糞でも喰へ。今日は休みだい。大つ平な休みだよ、今日は。」

「何だか知らねえが、灰皿奴、御機嫌の好ささうな顏付だつたぜ。」

「俺を相手に一杯飲みてえとでもいふのかい。ヘツ。いんだらセキ奴。舌でも出す奴かい、彼奴が。」

「分らねえさ。人間には氣紛れつていふものがあるからな。」

「ヘツ。たまな休みだつて、ゴウシヨウして、ショートタイムにもありつけあしねえ。糞つ垂れ奴。なまこの酢の物と、グリスであげた貝のフライでも食はうと思つてほら見ろ。こんなに取つたぜ。」

バケツの中には、拳大の貝と、海鼠とが、八分目程入つてゐた。

「うへえ——。馬に喰せる位採りあがつたな。そんな海鼠なんか食へるかい。」

「なあに、おめえは知らねえからさ。海鼠には榮養があるぜ。いんだらコツクの、豆粕見たいな料理の献立よりや、この方が、ふんだんに榮養があらあ。ヴイタミンAを含んでゐる。貝にも、カルシユウム分がある。仙臺が買つて歸る、地酒の一升も呑んで、海鼠食つて寢るさ。グニヤ〳〵に。」

二人は棧橋の柱にしがみついて棧橋の上へあがつた。
「セキメーツ！　波田がゐましたよ。」
「ほほう。」セキメーツは言つた。「そいつは獲物だ。」
「何だねセキメーツ。」
「波田おめえはサンパンが漕げるかい？」
「そりやうめえもんさ。濱ぢあ、ランチも歩けねえ樣な、サンパン止めの暴化の中あ、大威張りで漕いだもんでさあ。」
「さうか。それぢあ一つ、酒一升賭けにして、どの位スピードが出るか、鳥と競漕して見ようぢあねえか。」
「ようがすとも。」
何しろ、波田と來た日には、手足の生へたエンヂン見たいに巖丈な奴なのだ。
タラップを下りて、セキメーツと波田は、M丸積載のサンパン（綠丸）に乘込んだ。
灰皿奴、舳に立つた。波田は、輙の樣に櫓を撓らせながら押した。
海の風は、赤ん坊の頰へ、頰擦りでもする樣に、快よく海面を撫でた。
空の蒼さと、海の蒼さと、それを鏤める陸の象眼と、サンパンの跡を引く、牛乳の樣な水泡と、それらのものは、一切が五月の綠の香氣に包まれた。
セキメーツは、舳に立つて、右の手と左の手を、氣でも狂つた樣に兩方にふりながら、
「右だ、右だ、右だ。もつともつと、もつと。早くやらねえか、早く、おう左だ、左だ。駄目だなあ。ゴースタン、ゴースタン、サンパンの底を潜つてうしろへ拔けやがつた、畜生！」
「駄目だなあセキメーツ。お前さんの手見たいに、さうサンパンはふり廻せるもんぢあねえぜ。何處だね、いつたい？」
「う、あいつだ〳〵、あの鴨だよ。あいつを追駈け樣つて譯さ。」
「ぢよ、ぢよ、冗談ぢやねえや。いくら鴨を追駈けて見たつて、苦しくなりや舞上らあね、馬鹿々々しい。櫓を六挺立つたつて、水上飛行機見たいに舞上る譯にはゆかねえよ。おらあ止めだい。」
「ううん、ありあ鴨ぢあねえんだよ。ガモつてんだよ。鴨は舞上るかも知れないが、ガモは飛べねえんだよ。嘴が尖つてゐる代りにあ飛べねえのさ。」
「ほんとかねセキメーツ。」
「ほんとだとも。あの嘴の尖つたカモは北海道だけにしかゐないんだ。」
波田は、腰にぶら下げた油だらけのタオルで、うらめしさうにガモの行方を眺めた。まだ半信半疑であつた。
ところが、高架棧橋の鼻を曲つて、向ふ側についてゐるJ

丸、K丸との積載サンパンがこちらへ廻つて來るのが見へた。
「おい波田。馬力かけろよ。J丸とK丸の奴等が、獲物を嗅ぎつけたぜ。あいつらに鼻をあかされちあ堪らねえ、最初見つけたのは俺だからな。」
「ようし。こうなりや、こつちのもんだ。セキメーツ。あんた傍を押しなさい。あのガモの野郎、あいつ等の鼻をあかして、ぶん捕つて見せよう。」
目的ははつきりした。波田は、ふり廻す鞭の樣に櫓を撓らせて押しまくつた。
J丸とK丸のサンパンは、波田等の乘つてゐるサンパンが、犬が自分の尻尾でも追かける樣に、ぐる〳〵廻つたり、又あべこべの方に大骨折りで曲げたりするのを見て、笑つた。
「奴等あ、木の芽立で、氣でも狂つたんぢあねえかな。サンパンでダンスしてやがらあ。」
その中二杯のサンパンはM丸のサンパンに近づいて來た。
「おうい、どうしたんだい。氣紛れなことをするなよ、氣紛れなことを。」
三ばいのサンパンは段々距離が近くなつた。そして他の二はいのサンパンも、M丸のサンパンが何だつて氣狂ひの樣にダンスしてゐるか、その理由がはつきり呑み込めた。
J丸の、サードメーツが、傍について、これ又ガモを追駈け始めた。K丸も同じく目的物を見出した。
M丸の、灰皿にしても、波田にしても、競爭者が二はい出たので、それに負けまいとして、一生懸命だつた。他の二はいも、妙な愛鄕心に似た氣持から、又は彼等の、賭博心理にも似た氣持から、汗みどろになつてサンパンを押した。
ガモこそ迷惑であつた。今までは一ばいの四つの目と、二本の櫓と、それだけを胡麻化せばよかつたが、今度敵軍は、十二の眼と、六本の櫓に增へた。
しかし、高架棧橋からW製鋼場までの海面の廣さ、それは横には卅町位だつたが、室蘭灣から、アメリカの對岸までは、無茶苦茶に長い縱幅であつた。
ガモは、灣口を拔け出すに限ると考へたらしかつた。
三ばいのサンパンは、期せずして、W製鋼場の遠淺の方へ追詰める策戰に一致した。
ガモと、三ばいのサンパンとは、舷々相廢する肉薄戰を演じた。
ガモが船緣の、一間位のところに頭を上げると、掉で、力一ぱい毆りつけた。
だが、サンパンは一直線な航路を取つてゐなかつた上に、漕手の皷動の亂調も手傳つて、ガモの頭に命中しなかつた。
見てゐると、ガモは、當惑さうな目付で、何だつて自分をこんなに敵にする、巨大な動物が、急に出て來たんだらうと

まぢ〳〵とマドロス達を眺めた。

そして、溜息でもする樣に、首をかしげて、すぐ又海の中へ潜り込んだ。

「おうい、駄目だ〳〵。廻らんか打つつけるぞ！」

「止せやい。あぶねえぢやねえか。サンパンぶち壞しちやうぞ、おい。」

こう喚き合ひながら、各々のサンパンが危ふくぶつつかりさうになりながら、急轉廻をやつて辛うじて免れた。

とにかく、結局においてガモは段々と淺瀨に行かざるを得ない運命になつた。ガモがコースを室蘭灣口に向けると、期せずしてサンパンは共同戰線を張つた。

ガモが水へ潜ると、室蘭灣口の方を、掉でばち〳〵叩いたり櫓を櫓臍から外して、ぐる〳〵廻したりした。

ガモの水の中へ潜る時間は、だん〳〵長くなつた。一度などは、三ばいのサンパンの底を潜つて一町も灣口へ首を出した。この時には皆がつかりした。

「セキメーツ。駄目だぜこりあ。あんな所へ行つちめえやがつた。」

セキメーツは、メリケンで脫船でもされた時の樣な顏をして、いま〳〵しがつてゐた。

「畜生！　こうなれあ意地でも捕つてやる。」

さう言つて、灰皿の掃除でもする樣に彼の顏を拭いた。

二時間の餘も、恐らく三時間も、三ばいのサンパンは、室蘭灣中を駈けづり廻つた。

小倉は、M丸のブリツヂから、三ばいのサンパンが、水蜘蛛見たいに、滅茶苦茶に、コースを換へながら這ひ廻るのを見て、笑つてゐた。

「ふだんあれだけ搾られてゐるのに、未だ搾られ足りねえと見える。あれ程草臥れてゐるのに、もつと草臥れたいと見える。馬鹿奴。」

しかし、無邪氣な情景ではあつた。

風は柔らかだつた。オレゴンパインが、洗ひ立ての髮の樣に、對岸の海岸線を、深い綠で覆つてゐた。

鷗が、ガモの代りに、サンパンを馬鹿にする樣に、低く、自由に飛廻つてゐた。

サンパンの漕手達は、ガモと比例して疲れた。そしてガモは次第に、淺瀨の方へと追やられた。

ガモは餌をうるために銀色の海の水に浮いてゐたのだつたが、今は餌にされないために、逃廻らねばならなかつたので、すつかり腹が空いた。

人間共も亦腹が空いた。

その中に、船の櫓が、砂に閊へる樣になつた。

まだ、砂濱までは、一町も距離があつた。高架棧橋は、づ

つと遠のいて、本船も小さく見へた。

「セキメーツ。もう櫓が閊へらあ。」

「櫓が閊へる？」

波田は、掉を取つて、砂の上へ突き立てて見た。

掉が水に浸る部分は、波田の、腰の邊までゞあつた。

「しようがねえなあ。腰つきりあつちや、水の中あ、駈けめぐられやしねえ。腹が空いちやつた。駄目だなあ、もう。」

「まて〳〵。掉で、水を滅茶苦茶にひつぱたけ。そうすれやお前、奴あ益々淺瀨に行かあね。その時に、船を力一杯押しといて、膝切り位の所で、ガモの野郎を、とつちめ樣ぢあねえか。」

支那の芝居見たいに、三ばいのサンパンのマドロス達は、ガア〳〵、ワア〳〵喚き立てながら、ありとあらゆる掉で水をバチヤ〳〵叩いた。

ガモは、なるべく騷音のする所から遠くへ逃げるために長いこと潜つてゐたが、十五間も向ふの方へ頭を上げた。

その頭は、沖の方を懷しさうな眼を以て眺めた。そして、その沖合には、三ばいのサンパンがゐるために、益々淺くなるのを心配しながらも、海岸の方へ向つて逃げた。

又、五間も海岸近くで哀れなガモは頭を上げた。

「そら押せ！　波田。」

他の二はいのサンパンも鴨を中心として、同一圓周位の所で、「そら押せ」と叫鳴つてゐるのが聞へた。

人間の肉に打込む刄の樣に、力强い打壕か、櫓によつて、波に與へられた。

この打擊が、五六度續くと、サンパンは陸の方へ、ぐつと近づいた。

そして、もう櫓が利かなかつた。

ガモは、五六間先の、波の上へ頭を上げてゐた。カモから陸岸の間は、三四十間きりなかつた。

波田は、櫓を船に引上げると、いきなり、菜つ葉を脫いで、素裸になつて、五月の冷たい海へ飛込んだ。

水はふくらはぎまでしかなかつた。

もう駈けるのは自由であつた。

彼は、右手に掉を持ちながら、外洋の方へ出ないやうに、波はばち〳〵叩いた。

櫓が閊へると、サンパンが困る樣に、餘り淺くなると、ガモも足が閊へるので困つた。

そこでガモは必死になつた。足が閊へるところまで來ると、

「俺は命も何も入らない。俺を自由に泳がして吳れ。」

とでも言ふ樣に、魚形水電見たいに一直線に、外洋を向けて潜行した。

他のサンパンも、縱橫無盡に、裸で飛廻る陸戰隊を送り出

した。

ジヤブ〳〵駈廻り、ビシヤ〳〵叩くので、海の水は白く泡立つた。

そのために、裸で活動してゐる人間には、ガモの姿を見失ふことが多かつた。

サンパンに殘つてゐる監視員共は、船板を叩きながらどなつた。

「おうい。棧橋寄りに逃げたぞ。製鋼場側だ〳〵。」

そこで三人の、裸體の選手共は、三人の監視員共の指令に從つて、鵜の鳥の樣に縱横に駈け廻つた。

愈々、ガモは追ひつめられた。

波田の一間前に、首を上げた。

「もう好い加減、勘辨してくれ。」

といふ樣な目付をしながら、チラと波田の顏を見ると、刹那に、又潛り込んだ。

波田は本能的に、水の中へ身を投げ伏した。

兩手は砂を摑んだ。

「失敗つた」彼は呶鳴つた。

が、膝のところに、柔かいものを、踏ん付けてゐた。

彼は、反射的に、その、柔かいものを摑んだ。

そして彼は、目や鼻が鹽水だらけなのにも拘らず、それを拭きもしないで、右の手に獲物を高く揭げて、

「捕つた。萬歳！」

と呶鳴つた。

「萬歳！」とチーフが傳馬の上から呶鳴つた。

波田は、獲物に、心からの愛情を捧げて、頰づりをした。

それはまるで、長い間會はなかつた、親友に會つた時と似通つた氣持であつた。

ガモは、波田に頰を押しつけられて、その頸ではなく、兩の翼を、柔かに抱へられてゐるのに、無邪氣な、目を睜つてゐた。

波田は、その目にキツスした。

それは、何等の惡氣から來たところのキツスでもなかつた。

生きてる時のまゝの形の、丸燒の七面鳥。なるべく原形を壞さない樣にと料理された所の豚のはらゝご。

さういふものに對する食慾からのキツスではなかつた。

彼は、ほんたうに、心の底から、この無邪氣な、ガモに對して、好意を感じた。

しかし、「捕らなければよかつた」とは思はなかつた。まだ、それだけの心の餘裕が出來てゐなかつた。

自分に何等の敵意のない自分をちつとも毒々しい意圖を以て見ない、自分を搾ることをしない、自分よりも弱い、さういふ弱い生物と一緒にゐることは、彼の心を和ませた。

サンパンに上つた。

ブリキの樣に冷たくなつた皮膚を、油だらけのタオルでごし〳〵擦つて、彼の榮つ葉を着た。

「セキメーツ。逃がさん樣に抱へておいて下さいよ。さうーと羽を持つといて下さい。頸を締めちゃ駄目ですよ。」

さう言ひながら、彼は仕事着を着終ると、セキメーツの抱いてゐるガモを受取つて、船板の上を歩かせて見た。

「逃げるんぢあないぞ。ほら、歩いて見な。これから俺とお友達になるんだからなあ。」

波田は兩方の掌を擴げて、ガモに障らない樣にしながら、歩かして見た。

ガモは、もう逃げる氣力もない程に、衰へ切つた足で、二足三足歩いたが、そのまゝ立止ると、首を撚じ曲げて、波田の方をぢつと見た。「可愛いもんですね。無邪氣なもんですねえ。可愛想に、びく〳〵しなくてもいゝよ。大切にしてやるからな。」

セキメーツは、舳に坐つて大事に、ガモを抱へてゐた。

波田は、サンパンを押して、高架棧橋の方へ歸りかけた。

「おうい。片足は俺の方へ寄越せよ。」

「おうい。胸の肉は俺の方へ寄越せよ。」

同じくサンパンを押しながら、J丸とK丸のマドロス達が呶鳴つた。

「馬鹿野郎！　殺すんぢあねえんだぞ。食ふために捕つたんぢあねえや、馬鹿！　船で飼つとくんだあい。」

波田は、左の手を櫓から離して、頭上に高くさし上げて、勝誇つた樣に叫んだ。

サンパンをタラツプに着けると、波田はがた〳〵震へながら、表へ飛込んだ。

「寒いのなんのつて。骨まで冷やしちやつた。さあ、一升飲んで、ガモでも抱いて寢るとするか。」

寢箱から、世界地圖の樣な、色とり〴〵に染まつた仕事着を引張り出しながら、ストーヴの前で重ね着をした。

小倉が、ワツチから下りて來た。

「どうしたい。水蜘蛛見たいに、ぐる〳〵這ひ廻りあがつて。おまけに素裸で、海の水を引搔き廻しあがつて。」

「何言つてやがるんだい。ガモを捕つたんだぞ。ガモを。素晴らしいもんだ。ガンほどもあるガモを捕つたんだ。犬よりも可愛いぞ。犬の樣に尾をぶん〳〵振廻しあしねえ。よたよたと振廻すんだぜ。まるでお前、娘の樣に尻をふるんだぜ。そりあ可愛いもんさ。目がいゝんだ目が。張のある目でね。こつちの目から向ふの目まで透けて見えらあね。何を、しかし食ふんだらうなあ。彼奴は。生魚ばかり食ふと問題だぞ。よし海鼠を喰はしてやらう。貝などは屹度御馳走だぜ。貝などは一寸食ふ譯にあ行かねえからなあ。殼があらあ、貝つて

奴あ由來うめえもんだからな。さうだ、貝だ。」

さうどなりながら彼は飛出した。

彼は、タラツプを駈上ると、メスロンボーイに聞いた。

「セキメーツはゐるかい？」

「セキメーツは、今上つちやつたよ。」

「上つた！　ガモは？」

「ガモたあ何だい？」

「鳥だよ。」

「それが、どうしたつてんだい。」

「ええ糞！　どうしたもねえもんだ！　ガモはどうしたんだよ。ちよ、ちよつとセキメーツの室を開けて呉れ。」

「どうするんだい？」

「ガモを取つてくるからよ。」

二人はセキメーツの室の方へ行つた。

セキメーツの室には、サードメートが、煙草をふかしながら、新聞を讀んでゐた。

「サードメーツ。セキメーツは上りましたか。ガモは何處にあります。」

「セキメーツは、ガモを持つて上つたよ。」

「ガモを持つて！」

「うん。」

「ガモを、ど、どうするつて言つてゐました？」

「そいつは聞かなかつた。聞かなかつたが、多分登別へでも行つて、船長と鴨鍋でもやるんだらうよ。」

「ゴツデム！　灰皿奴！」

彼は、叩きのめされた樣な氣持になつて、事實急に空腹と、疲勞とを激しく感じて、よろ〳〵しながら表へ歸つた。

彼は表へ歸ると、馬鈴薯のフライと、澤庵の切つ端で、飯を食つた。

「小倉、俺に五兩ばかり貸してくれよ。むしやくしやして、しようがねえや。」

「お前が馬鹿だからよ。人間は鳥の樣に正直ぢあねえんだぜ。殊に人を使つたり搾つたりする人間はな。鳥の樣に正直な人間のことを馬鹿だといふんだ。その馬鹿がお前なのさ。鳥見たいに、とつちめられてゐやあがる癖に。」

「俺あ惡氣でやつたんぢあねえんだ。何がなし俺は捕りたかつたんだ。こんなこと知つてりや誰が捕るもんか、鳥に濟まねえ、あのガモに濟まねえ。」

「一切萬事がそのやり口なんだよ。メーツなんてもなあ。仕事をさせるためにあ、煽て上げらあね。仕事の結果は、すつかり彼奴等のものさ。」

波田は、登別まで追駈けて行きたかつた。

だが、年柄年中、頭なしの彼には、どうしようもなかつた。

彼は、ボイラーの樣なその胸に、憤怒の蒸氣を、ぐらぐらと煮え立たせた。

セーフチーバルブを開けなければ、何とも方圖がつかなかつた。

泣く樣にして賴んで、小倉から二圓借りて、彼は上陸した。

上陸する時に、彼が晝間採つた、バケツの中の海鼠と貝を海の中へ投り込んだ。

メチルアルコールの、多分に混つた、强烈な安ブランに、へべれけに彼は醉拂つた。

ぐでん〳〵になつて船に歸つて來たが、彼の頭の中の惱には、消し切れない、憤怒が渦卷いてゐた。

翌日は出帆日であつた。

船長とセキメーツとは、棧橋までは、昨夜の思ひ出話に、げら〳〵笑つたり、目をすがめては卑猥な話をして來たが、タラツプに最初の足を踏みかけると、船長は、ジンブロツクの樣な顏になりセキメーツは灰皿になつた。

彼等の姿が、棧橋に見へると、フオツクスルで待構へてゐた波田は、サロンデツキへ飛んで行つた。

「セキメーツ！　ガモはどうしたんです。」

「ガモかい？　御馳走樣。あれあお前、うめえんだぜ。」

「喰ひやがつたな、この野郎！」

彼は、帽子をデツキへ叩きつけた。

「どうしてやるか、畜生！　覺へてあがれ！」

「まあ、さう怒るな。分るようにしてやるからなあ。さあ、スタンバイだ。ガモよれや甘いものを食はしてやらあな。」

船長はブリツヂで、ホイツスルの綱を引いた。

ボウ——と出帆の汽笛が港中に鳴り響いた。

それだけの理由で、ストライキをするといふ譯にはゆかなかつた。

波田は、ハンマーを、セキメーツの、才槌頭に、ぽかつと篏め込みたい衝動を抑へながら、フオツクスルへ駈け戻つた。

船は銀鱗の間を縫ひながら、戀人の息の樣な、五月の甘い空氣の中を、だん〳〵速力を增して進んだ。

M丸に於けるストライキの、極めて小さな、土臺の一部になつた所の一つのエピソードである。

——一九二八、三、八——

海に生くる人々

一

室蘭港が奥深く廣く入り込んだ、その太平洋への灣口に、大黒島が栓をしてゐる。雪は北海道の全土を蔽ふて地面から、雲までの厚さで横に降りまくつた。

汽船萬壽丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横濱へと進んだ。船は今大黒島をかはらうとしてゐる。その島の彼方には大きな浪が打つてゐる。萬壽丸はデツキまで沈んだその船體を、太平洋の怒濤の中へこわごわ覗けて見た。そして思ひ切つて、乘り出したのであつた。彼女がその臨月の體で走れる限りの速力が、ブリツヂからエンヂンへ命じられた。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつた。

萬壽丸甲板部の水夫達は、デツキに打ち上げる、ダイナマイトのやうな威力を持つた波浪の飛沫と戰つて、甲板を洗つてゐた。ホースの尖端からは、沸騰點に近い熱湯が迸り出たが、それがデツキを五尺流れるうちには凍るのであつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやつた。

萬壽丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて走つた。雪は船と陸とをヴエールを以て遮つた。悲壯な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危難の前に裸體となつて、地下數千尺で掘られた石炭は、數萬の炭坑勞働者を踏み臺にして地上に上つて來た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危險に、その全身を船體と共に曝露しつゝある、船員の勞働に依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの掃除をしてゐた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、氣むづかしやであつた。そして、一體彼は何か仕事をしてゐるのか、どうか疑はしいほど、勞働が嫌ひな性のやうに見えた。彼の職務は倉庫番であつた。

ランプ部屋はブリツヂに向ひ合つて、水夫室と火夫室との間に、みじめに、小さく拵へられてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭きながら、水夫達が、デツキを船除してゐるのを見てゐた。彼は此頃ボースンにも、一等運轉士にも見込みが悪いことを知つてゐた。「ストキ（倉庫番）にもワシデツキの時には手傳つて貰はなきやならん。一萬噸も八千噸もある船とは異ふんだからな。」と、いつか水夫達全部が揃つて飯を食つてる時にボースンに云はれたことがあつた。

「ふん、ストキとは倉庫番てことだ。倉庫番は倉庫の番さへしてりや、それで澤山だらう」と、彼は答へた。

——それ以來、どうも、俺は水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、淋しさうに、ストキは考へた。

二

船のエンヂンはフルスピードをかけてゐたが、風と浪とで速力が全て出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつても未だ津輕海峽沖を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかへさうかとの相談も行はれたが、それは實行されるには至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん〳〵猛烈になつて來るに連れて、その作業も平常とは趣を異にし初めた。船體は保險マーク以上に沈んでゐるので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも殘らずデツキへと打ち上げた。そしてデツキは一面の海になつてしまつた。拯ひ込む水は仲々小さな排水口からは急には出て行かなかつた。デツキには、ハツチの上を通るやうに、ライフライン（命綱）が張られた。いつデツキを通らうと試みても、そこは外海と何等異る處はないからであつた。

浪はその山と山との間に船を挾んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘツドから胴體へ進む時、次の山の部分がヘツドに打ち衝る。鐵製のわが萬壽丸も、この苦悶には堪へかねて、斷末魔の叫びを擧げる。ミリミリ、ドタンーとうなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中で空ら回りをする。推進器は、飛行機のプロペラーのやうに空中で廻轉する。兇暴なその船の太さほどの猛獸のやうに吠える。特別裝置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカツプからランプが踊り出る、舵器は非常にその效力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空轉の危險から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方向から轉換しないやうにのみ總ての努力を盡してゐた。

機關室の方も汽罐室の方も、非常な困難があつた。油差しは、動搖のために、機械と機械との狹い部分に入り込むのに、神祕的な注意を拂つた。火夫はその汽罐の前で、ショベルを持つて、よろけまいとして骨を折つた。

汽罐室の員上のコツク場では、コツクが、いつも一度で炊

く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同樣な方法にして猶、汁物は作るわけには行かなかつた。

コロッパス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭中を糟だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。

水夫等は、デツキを洗ふ波浪からダンブル内への浸水を護るために、ハツチカバー（船艙の蔽ひ）や、それを押へた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危險な作業であつた。そして此危險な作業なしには、此の船全體が危險から免れ得る方法がなかつた。恰も意地の惡い馬が馴れぬ乘手にするやうに、船體は猛烈にその背を振つた。そしてその毎に柄杓が水を掬ふやうに、デツキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、固くなつて操作に非常な困難と遲滯とを招いた。然し夫は成し遂げなければならない仕事であつた。ハツチが水を飲むと云ふことは、文句なしに、簡單明瞭に、船體の沈沒を意味するものであつた。五人の水夫とボースンとストキと、大工との八人が總動員で、此仕事を遂げた。

彼等はその體が、そのまゝ凍るやうな風の下に、メスのやうに光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、餘り動かない部分をカンカンに凍らせた。

船體の危險と、船體と共にする自分自身の危險と、そして、覿面に自分の凍えんとする肉體に對する危險とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱へ出させたほどの目覺しい、超人間的な活動を、水夫達に與へた。そして、船首のハツチ二つは完全にその防備が出來上つた。

未だ二つのハツチが船尾の方に殘つてゐた。そして、時間は今夕食に迫つてゐた。水夫たちは、飢えを感じた。けれども、海も飢を感じて、わが萬壽丸を呑まうとしてゐるのであつた。

船は絶えず藻掻き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決鬪するやうに打ち合つた。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て鬪爭した。

三

船を一廓として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戰つてゐる時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、此時以上に癪に障り、心細くなり、哀れに氣の滅入ることはなかつた。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意とにも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、眞つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にパツと明るく照らす樣に、此困難な勞働の間に、感ずる處の彼等の地位は、全くハツキリした貧銀勞働者の正體であつた。然し、

それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかつた。

水夫等は、船首の方を濟まして、船尾のハツチへ行くために、サロンデツキに上つた時であつた。ブリツヂにゐたコーターマスターの小倉が、何か分らぬことを、體中で怒鳴りながら、物凄い勢ひでブリツヂから飛び下りて來て、サロンデツキを艙の方へかけて行つて、そのタラツプをまた飛び下りた。

セイラーたちは、ビクリとした。のみならず、コツク場のコツクやボーイや交替で休んでゐた機關長や、ブリツヂの上の船長やは、全部が小倉の飛んでつた行衛を見守つた。

小倉は、船尾へ驅けつけた。そこには、ブリツヂから操るステイームギーア（蒸汽舵機）の鎖と、そのカバーとの間に、わざとのやうに、水夫見習が、右半身をうつ伏しに滑り込ませてゐたのであつた。

小倉は、水夫見習が藥に出るやうにと思つたのであつたが、然し舵器は同位に船首を保つために、一刻も放擲しては置けなかつた。

そこへ水夫等は全部かけつけた。あるものは、カバーの金板をバーで動かさうと試みた。此間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此處を洗つた。

水夫全體の力と小倉との力は水夫見習を、鎖とカバーの間から引つ張り出すことが能きた。けれども見習は、引きずり上げられた溺死體のやうにだらりとして、眼ばかり宙につつてゐた。彼は直ちに、水夫二人に擔がれて、最も震動と、轟音との甚しい船首の、彼の南京虫だらけの巣へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であつた。が同時に最大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着でゞもあるやうに、それは凍りついてゐたのである。ついて來た藤原は、その腰のメスを拔いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寢間着が、上にかけられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫暗色の打撲傷が出來てゐた。そして左足の拇指が碎けてゐた。

ストーブがないために、水夫等は甚しく寒かつた。見習は、傷と、凍のために、若し此のまゝにして置くならば、必ず始末は早くつくと云ふことを皆知つてゐた。そこでついて來たストキと、水夫二人は、各水夫の巣から、ありつたけの毛布を集めて、それをかけてやつた。

そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハツチのカバー作業に驅けて行つた。

船尾のハツチは船首のそれと同樣の危險と困難さをもつて、作業された。手の屆きさうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引つかゝつてそれを拔いてゞも行くかのやうに、はげしくマストを搖ぶつた。水平線

は、頭上遥に昇るかと思ふと、足下深く沈んだ。(船の動揺は、同時に水平線を動かすものだ)ボーイ長(水夫見習を云ふ)の運命は、全甲板勞働者の現在のすぐ背後に鱶のやうに迫つてゐるのであつた。

船尾部分のハツチは此上もなく嚴密に密閉された。そして、次のは、機關室と、その上部に在る士官室、サロンデツキとの蔭になつてゐたゝめに、以前の三つに比較べて、作業は樂であつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び「おもて」(船首部分)へ歸つて行つた。

ランプ部屋へ入る前に、彼は先づ水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛さに堪へかねて、「お母様、おとうさん」と、兩親を叫び求めては、泣いてゐた。そしては、暫く息を詰めて、死のやうな沈默の中へ落ちて行くのだつた。藤原は、ボーイ長の寢床の端板に凭れかゝつて、ボーイ長の顏を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一つの窓も開けられてゐない水夫室は、出入口から星の夜のやうな光が辛うじて這ひ込み得たゞけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に當り、光の方を背にしてゐたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から蠟燭をとつて、ボーイ長の枕下に立てた。彼は白ペンキのやうに青ざめて、そしてくらげのやうに衰へてゐた。

未だ、チーフメートは、何等の手當もしには來なかつた。

彼は、ボーイ長を慰さめた。そして直ぐにチーフメートが「膏藥」を持つて、のろ〳〵來やがるだらう、奴等には、勞働者よりも、プロツクの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがいい、皆がついてるからと云つて、ランプ部屋へ支度に行つた。

萬壽丸は尻屋岬燈臺沖にかゝつた。暴化は其勢を少しも收めなかつた。

水夫等は、ボートやサンパンを吹き飛ばされないやうに、それを、より一層殆んど、吹き出し度い位に、頑丈に、これでは沈没した時に決して間に合はないと、證據立てられるほど、それほど頑丈に、くど〳〵とデツキや煙突にまで、綱を引つ張つた。そして、此の仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動揺と、風と、おまけに「てすり」がないので、海へ落ちると云ふ危險を伴つた。ボートデツキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねてゐた。水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向に潜り込んだり、ボートの外側——そこはデツキ板一枚の巾しかなくて、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートに摑つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて、海の方へ體を傾けたりした。

ボースンは、直ぐ前のブリツヂから、船長が作業を見てゐたゝめに、その禿げた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、

怒鳴つたり、焦つたりした。

四

陰鬱な薄暗がりが、海上に這ひ出たゝめに、右舷に尻屋岬の燈臺が感傷的に瞬き初めた。荒れに荒れる海上に、燈臺の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。此海の上は、今にも我々の命を奪はうとする程暴れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで搖れ轉ぶ。そこには火もなく、灯さへもない。だのに、あそこには、燈臺が光る。その燈臺は、確りと地上に立つてゐて、そこには家族がある。團欒がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢があるだらう。鐵瓶がかゝつてるだらう。正月の用意の餅が搗けてあるだらう。子供がそれをねだつてゐるであらう。「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ボン〳〵いた〳〵ですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだらう。そうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頰にキツスするだらう。そうして、夫と顏を見合せて微笑むだらう。そうして、「明日は又隨分澤山鳥が落ちてることでしようね。こんなにしけるんだもの、鳥だつて船だつて敵ひませんわね」と、云つて、火鉢から鐵瓶を卸して、茶でも入れるだらう。そして、子供に隱して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて「坊やはいい子ね、サ、お菓子」と云つて突し拔けに子供にそれを與へるだらう。

だのに、俺達は、凍えるやうな風と、メスのやうな浪と、雪のやうに冷たい資本家や、氷のやうに冷酷な船長の下で、勞働をしてゐるんだ。俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。

殊に家持ちの下級船員はそうであつた。彼等はそうでなくてさへも、その家庭に堪らなく曳きつけられてゐるのに、暴化のときには、その心持は長い刑を言ひ渡された囚人が、その家族のことを身も心も痞せ碎けるやうに戀ひ慕ひ、氣遣ふのと異なる處がなかつた。全く、今では、兩舷から、鯨油を流してさへゐる位であつたから。鯨油を流すことは、暴化も甚しくならないとやらないことであつた。

尻屋の燈臺はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、闇は、波と波との谷間から煙のやうに忍び出しては白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされてゐた。

舵手の小倉は、船首を風位から變へないやうに、そのあらゆる努力を傾注してゐた。彼の眼はコムパスと、船の行方とを、機械的に注視してゐた。

と、本船の前左舷遥かな沖合に、一艘の汽船が見えた。「あ、汽船が!」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメートも誰もがブリツヂの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。

此少し前から、ボートデツキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事してゐた、水夫の波田芳夫と云ふのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めてゐたのであつた。

ブリツヂでは望遠鏡があるために、其汽船は救助信號を揭げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。

ブリツヂからは、直ちにエンヂンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけやうと云ふのであつた。

全乘組員は難破船が見えること、その救助に向ふことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はボートデツキへスタンバイした。

わが勇敢な、然も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のやうな、萬壽丸は、その臨月の體で、目的の難破船に、僅に船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグーツと傾いた。そして見る見る中に、その舵が向いても居ないに拘らず、グン〳〵その頭を振り初めた。そして、同時に物凄い怒濤が、船首、船尾の全部を呑まうとするやうに打ち上げて來た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。本船は極めて短い五分とかゝらぬ間に、殆んどコースを半回轉しやうとしたのであつた。

難破船の稍近くへ近づくことは能きたが、本船はその船首を非常な努力の下に從前通りの位置に返してしまつた。

難破船を救ふと云ふことは、本船を一緒に沈める計畫になると云ふので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども哀れな兄弟たちの乘り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る樣になつた。われ〳〵は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。

波田は、サンパンの下から這ひ出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、摑み處を同時に得ながら見入つてゐた。狂犬の口を蔽ふ泡のやうな怖ろしい波浪と、此夕暗とに、あの船は呑まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈沒に際會した時の事を思ひ浮べては、その難破船に射込むやうな眼を投げてゐた。

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え殘りの煙草程の煙も出てゐなかつた。汽罐に浸入したのはもうずつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧橋に流れかゝつたぼろ裂れのやうに帆布が、まとひついてゐた。汽罐に浸入してから、どこかのカバーでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かに、デツキの上でバタ〳〵と、その切れつ端が洗濯したおしめのやうに振れてゐた。

それにしても船員は、ブリツヂにも、マストにも、デツキにも、どこにも見えなかつた。津輕海峽を越す時に命を捨て

て、ボートでゞも本船を捨てたのであつたのかも知れない。又は、その各々の室に凍えた體を、動搖のまゝに、お互に打つ衝け合つたり、追つかけ合つたりして、樂しみのなかつた生前の勞働者の運命を呪ひ悲しんでゐるのかも知れない。然し、この暴化はそれほど長く續いた譯でもなかつた。本船出帆の前日が其の最高潮であつたのだから未だ二晝夜しか經つてゐない。船員は、或は、一室に集つて、別れのための最後の貧しい食事でもしてゐるのかも知れない。

「あゝ、俺は二度まで沈沒船に乘つてゐた。一度は胴つ腹を乘り切られ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀨戸内海で、一度は春の末、一度は眞夏であつた。そして、そのどちらの時も救はれた。けれども、北海道の冬の海では迚も助りつこはあるまい。俺は、瀨戸内で沈められた時に、海の中に飛び込みざま「助けてくれ」と怒鳴つた悲鳴を今でも思ひ出せる。その叫びを擧げる刹那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それ等のものが、一度に總勘定でもするやうに頭に浮んで來た。そして、「十八では未だ死ぬのに、二年早すぎる」と、俺は思つた。何で二年早すぎたのか自分でも分らない。けれどもハツキリ自分は二年早すぎると思つた。おゝ！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆俺と同じ感じを、抱いて死んだことだらう。死ぬるのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分は此頃考へるやうになつたが、全く、どの位多くの人が二年宛早く死んで行くことだらう。それにしても、此船長は何と云ふ冷酷、殘忍な奴だらう。僅か四哩や五哩より離れてゐないのに、その最後を見屆けやうともしないとは。自分の悦樂のためには此船長は俺達の生命を、いつでも鱶の前に投げてやるだらうに。俺は、あの沈沒船に代つてでも、又、此船員たちのためにも、船長と闘ふ時が必ず來ると信ずる」と、波田は考へに耽つた。

難破船は益々近づいた。日は暮れたけれども、未だ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近附くことが能きるのであつた。が、わが、勇敢な萬壽丸は船員全體の希望にも拘らず、船長の一言によつて、冷やかに姉妹の死を見捨てゝ去ることになつた。そして、本船には、救助不能の信號が揚げられた。相手へ知らすためのでなく、乘組船員を胡麻化し、同時に海事日誌を胡麻化すための。

實際、此時暴化は段々風いで來たのであつた。船員は一時間前の勇敢なる船長の行動を不審に思ふのであつた。

その可愛い小柄な船は四十五度以上五十度近く傾いて、今にもそのまゝ、沈み行きさうに見えた。そして人はどこにも見えなかつた。甲板の上は見事に掃除されて、その掃除手の怒濤は、僅に甲板の隅に凍りついて殘つてゐるのみであつた。マストのカンバス(帆布)は、ハツチの上部カバーであつた。それは全く淋しい姿であつた。火のない船であつた。人の居